

裁縫新書 下卷

特 116

11



始



持116
11



渡邊女學校編纂

渡邊裁縫新書

下卷



渡邊女學校出版部



渡邊裁縫新書

緒言

世上一般から通俗的の裁縫書を出版せられたいと、屢要求があつたのであるが、教科書参考書の編纂のため、多忙を重ねて居たので、遂々これに應ずることが出来なかつた、然るに今回本校の新築落成を記念する意味に於て、愈本書を發行する事に成つたのである。

従つて本書は、何人でも一讀して分るやうに、文章も平易にし、圖も澤山入れ、尺度も普通に使ひ慣れた鯨尺を用ひて、裁縫學校に入つて、學習することを得ざる人々や、家庭に在つて自習したい

人々にも適するやうに、丁寧懇切に編述したものである。本書に依つて、聊でも世を益する事が出来たならば、編者の幸ひとする所である。

大正十五年十二月六日

編者 識す

渡邊裁縫新書(下卷)

目次

本裁ち女綿入羽織	一頁
本裁ち男綿入羽織	三
本裁ち男袷羽織	三
本裁ち女袷羽織	三
中裁ち及び小裁ち	三
三つ身綿入羽織	四
小裁ち一つ身袖無し羽織	四
單羽織に就いて	五
本裁ち男單羽織	五
半纏類	六
鯉口袷半纏(一名もぢり)	六
印半纏	六

子守半纏	九一
半コート	一〇五
女袴	一一四
裁ち方各種	一三〇
渡邊式改良袴	一三四
男袴	一四一
各種袴の裁ち方	一六三
中裁ち男袴	一七二
小裁ち男袴	一七九
大人襠無し袴	一八三
帯	一九三
女帯	一九三
丸帯	二〇九
鏡帯	二一一
改良帯	二二三

男帯(袷角帯)	二一八
縫ひ仕立て	二二三
夜着蒲團類	二三四
蒲團	二六六
夜着	二七二
蚊張	二八八
足袋	二九三
シャツ	二九五
十四五歳用のシャツの裁ち方	二六三
五六歳用シャツの裁ち方	二七三
半袖シャツ	二七五
婦人シャツ	二七八
ズボン下	二八一
本裁ち紐付きズボン下	二八三
十二三歳用紐付きズボン下	二八五
	二八九

三四歳用紐付きズボン下	二九一
本裁ち腰廻り付きズボン下	二九二
本裁ち膀上股引仕立てズボン下	二九九
十二三歳用股引き仕立てズボン下	三〇〇
股引	三〇四
裕股引	三〇七
單股引	三一一
十三四歳用股引	三二六
半股引	三二七
大人男猿脰	三二九
婦人用下穿き	三三一
割烹服	三三六
大人西洋前掛	三三一
子供西洋前掛	三三五
三四歳用小兒用前掛(男女共通の型)	三三五

六七歳女兒用劍形西洋前掛	三三九
--------------	-----

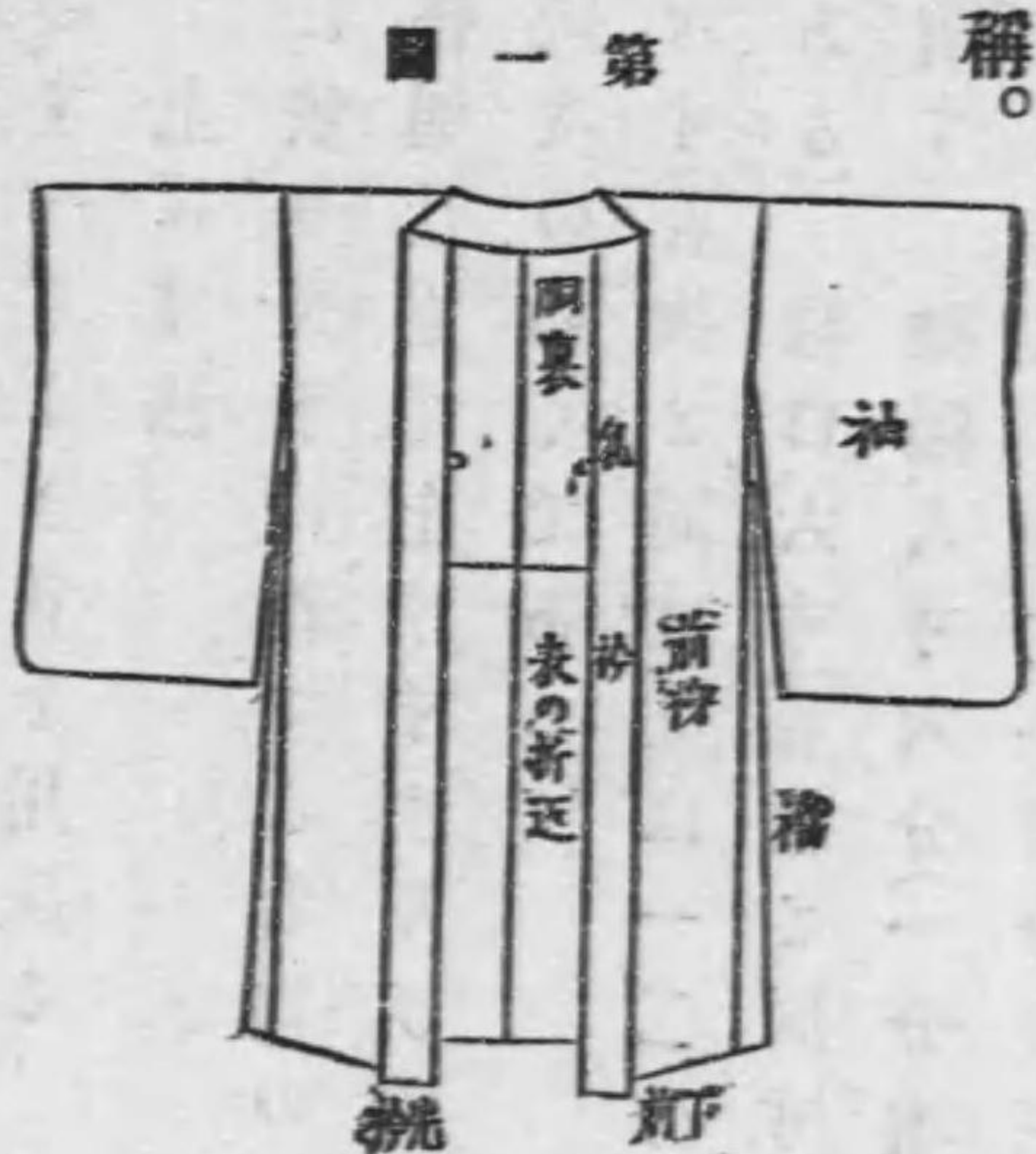
下巻 目次終

渡邊裁縫新書 (下巻)

渡邊女學校出版部編纂

本裁ち女綿入羽織

各部の名稱。



第一圖

地質。

表地 〓 木綿、メリンス、銘仙、

紬、斜子、糸織、縮緬、羽

二重、御召等。

裏地 〓 木綿(新モス、瓦斯甲

斐絹、更紗等)メリン

ス、甲斐絹、八つ橋、羽

二重、綸子、襦珍、平絹

本裁ち女綿入羽織

等のすべりよき者を用ひる。

普通仕立て上げ寸法。

各着用者に依り、又下に着する着物の地質によつて、多少の差異はあるが、普通仕立て上げ寸法、及び着物の寸法に基きて、増減するここ、大體次の如くである。

袖丈、一尺六寸(着物と同寸、又は一二分増す、又品によりて短くするここもある) 袖口、六寸(着物と同寸) 袖付け、六寸一分(一分より二三分増す) 袖幅、八寸六分(一分増す縮緬類の如きは二三分増す) 身丈、二尺六寸(着丈の四分の三に一寸増す、但し時の流行に、各人の好みによりて一定せず) 身八つ口、二寸五分(五分減ずる) 後幅、七寸五分(同寸)、前幅、四寸七分、前下り、一寸、衿肩明き、二寸五分内外、二二分増す) 乳下り、八寸五分内外(但し肩山よりこす) 襟幅、上三分より四分、下一寸七分より一寸八分 衿幅、

一寸七分より一寸八分(襟の下の幅に同じ) 衿、一尺六寸五分(同寸) くりこし、三分。

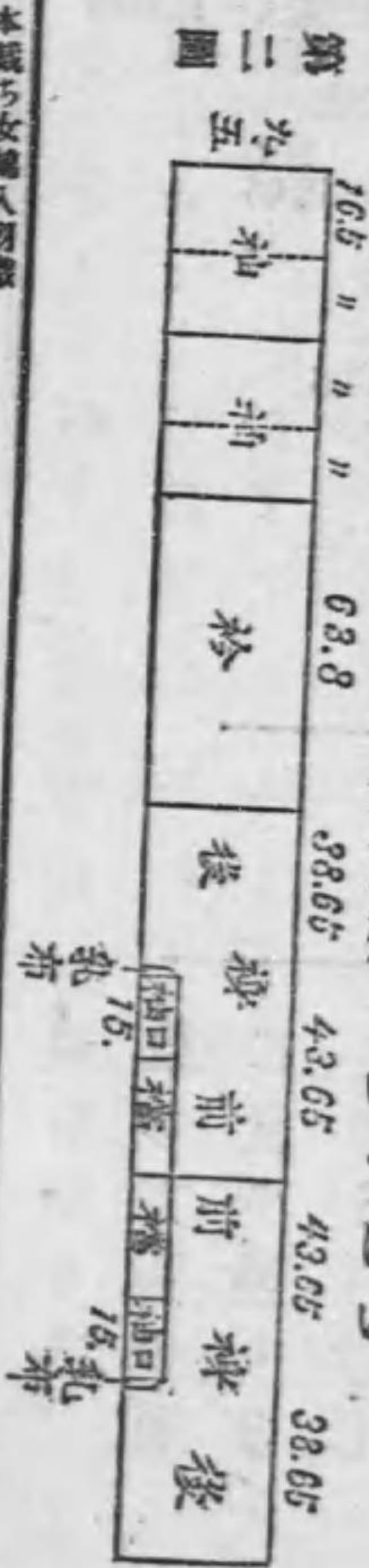
裁ち方積り方。

常幅二丈九尺四寸四分の布を以て、本裁ち女綿入羽織表の裁ち方積り方。

裁ち切り寸法。

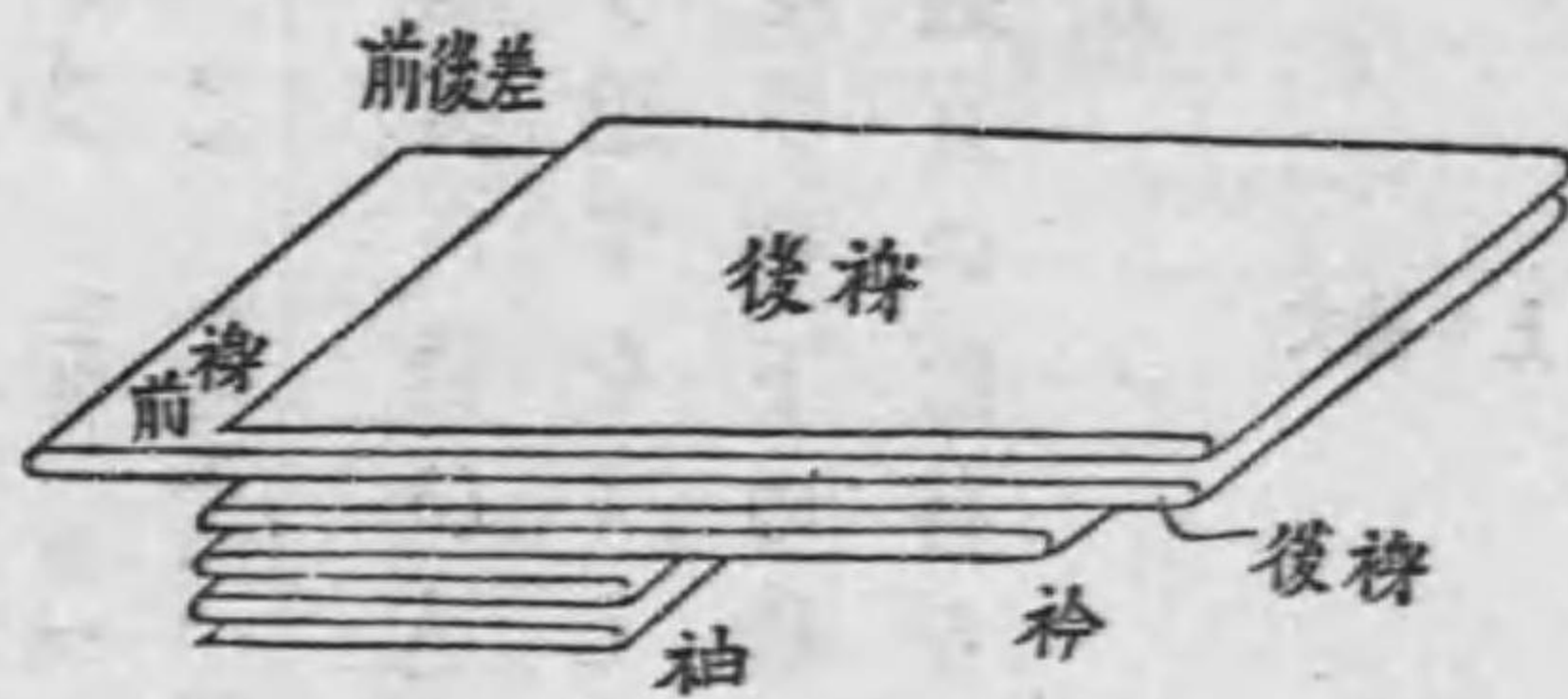
袖丈、一尺六寸五分 衿丈、六尺三寸八分 後身丈、三尺八寸六分五厘 前身丈、四尺三寸六分五厘 衿肩明き、二寸七分(内二寸一分真直に裁ち六分の丸み) 袖口布幅、二寸七分、丈一尺五寸 一布、丈四分 襟布幅、二寸七分、丈残りいつばい。

本裁ち女綿入羽織



袖丈を四枚、衿丈の二分の一を二枚折り、次に残りを二つに折り、輪の方を前後の差だけ先に出して丈を折る。

第五圖



袖丈を四枚、衿丈の二分の一を二枚折り、次に後丈一枚、前丈二枚、後丈一枚と折る。

第六圖



積り方算式 $\frac{\text{出来上り}}{\text{袖丈}} \times 8 + \frac{\text{出来上り}}{\text{身丈}} \times 10 + \text{總縫代} - \text{表用布} = \text{裏用布}$

布 裏用布 - 袖丈 $\times 4 = \text{胴裏用布}$

同算式 $16 \times 8 + 26 \times 10 + 29.8 - 294.4 = 123.4$

$123.4 - 16.5 \times 4 = 57.4$

總縫代の積り方

袖下 4.5 を八倍したもの

胴接を 4.5 を八倍したもの

同裏布の裁ち方積り方。

積り方公式 $\{\text{用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{前後差})\} \div 4 = \text{後丈}$

後丈 + 前後の差 = 前丈 (身丈 + 三衿縫代 + 衿肩明

+ 綫越 $\times 2 + \text{前下} + \text{衿先縫代}) \times 2 = \text{衿丈}$

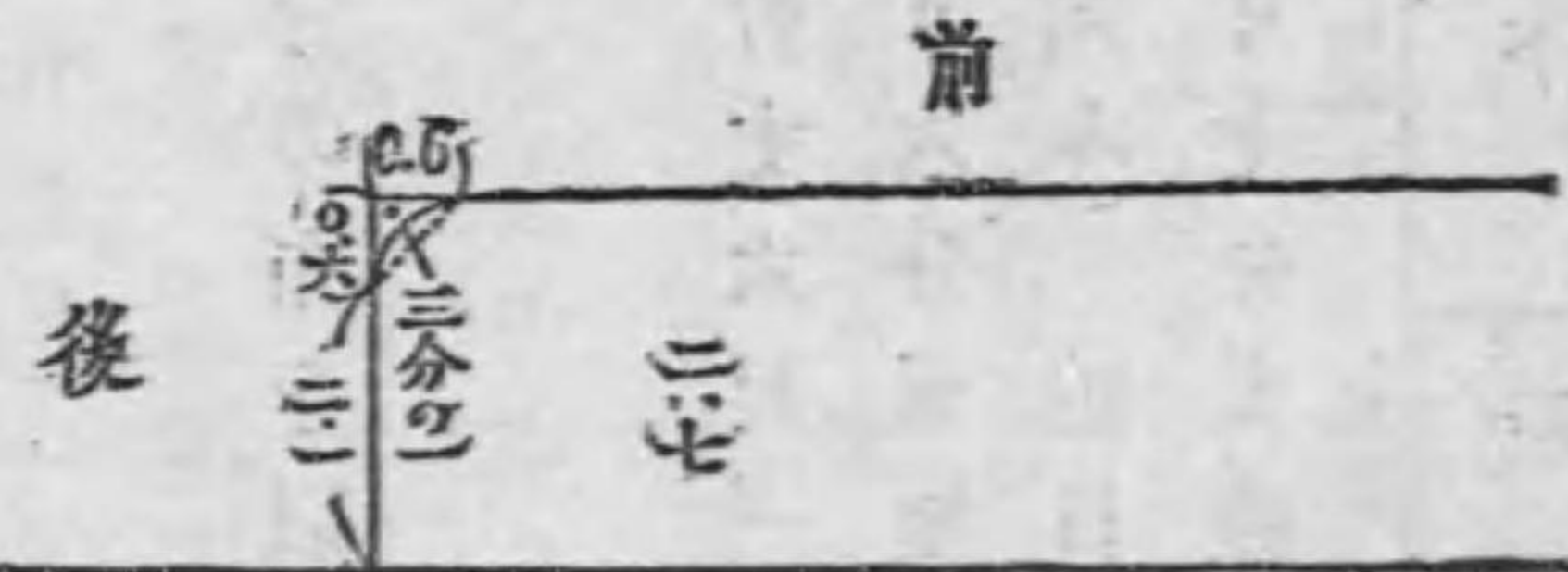
同算式 $\{294.4 - (16.5 \times 4 + 63.8 + 5 \times 2)\} \div 4 = 38.65$ (後丈)

$38.65 + 5 = 43.65$ (前丈)

$(26 + 3 + 2.5 + 3 \times 2 + 1 + 1.5) \times 2 = 63.8$

衿肩の縫り方

第三圖



裁ち切り方。裁ち方圖の順に従ひ、誤りなきやう注意して裁ち切る。又一法として、折り積りし稱して、下圖の如く折り疊みて、裁ち切る方法もある。

第四圖



袖 11.8
 前下 7.6
 三つ袖 2.4

袖廻2.5 三つ袖縫ひ代.3 繰越の二倍の.6 出来上前下1.
 {袖先縫代1.5を加へて二倍したもの
 出来上前下1 縫ひ代.3 繰越の二倍の.6を加へて四倍したもの
 三つ袖 .3を八倍したるもの 合計 29.8

注意 胴裏に縫ひ込みの餘裕ある時は、後裨に縫ひ込み置き、次に繰り越すをよこにする。
 胴接ぎ及び袖下の縫ひ代は、最小限を見積つたもの故、實際の場合には、適宜の餘裕を加へる方がよい。
 標附け方。

1. 山
2. 袖丈(上り袖丈+.1)
3. 袖口
4. 袖附

1. 袖口布を中表に二枚合せて圖の如く裏袖の上に重ねる。
2. 袖口布の山。
3. 袖口布の丈。
4. 袖口布の幅。
5. 袖口明。
6. 袖の山。

7. 袖丈
 8. 袖附
- 袖口下の方にて0.05振りの方にて0.1表袖丈よりつめる

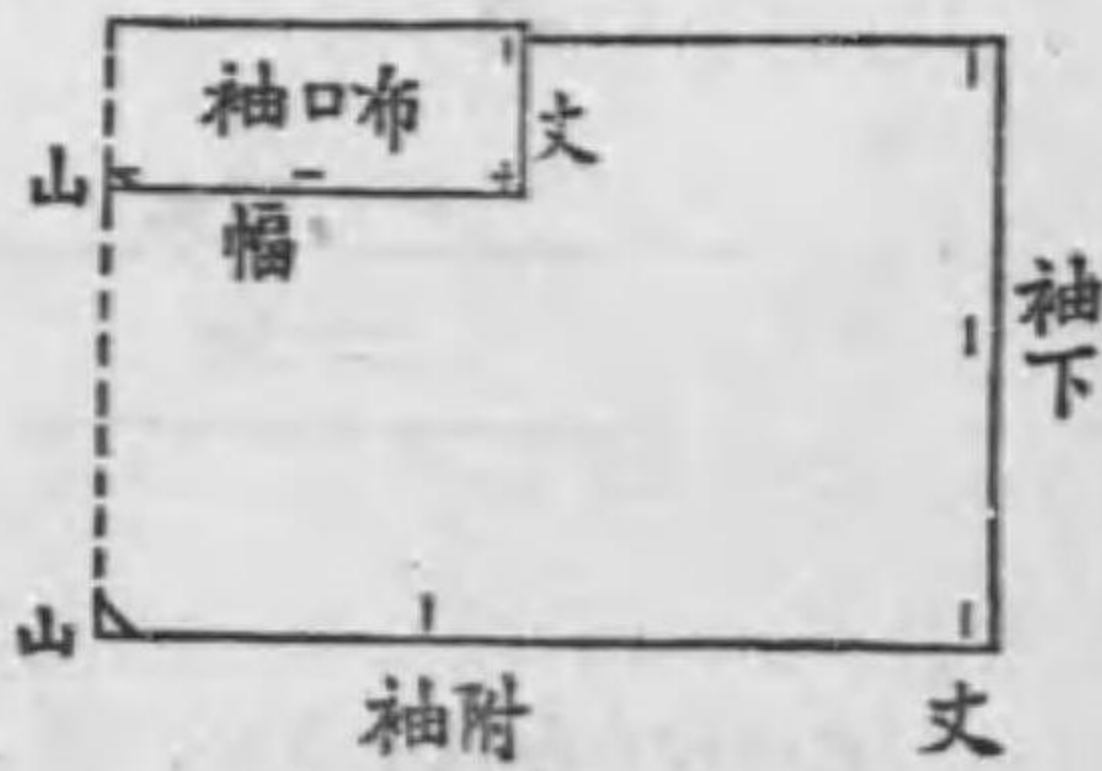
第七圖 表袖

中表に二枚重ねて、丈を二つに折る。



第八圖 裏袖

裏袖より袖口布を0.05出す。

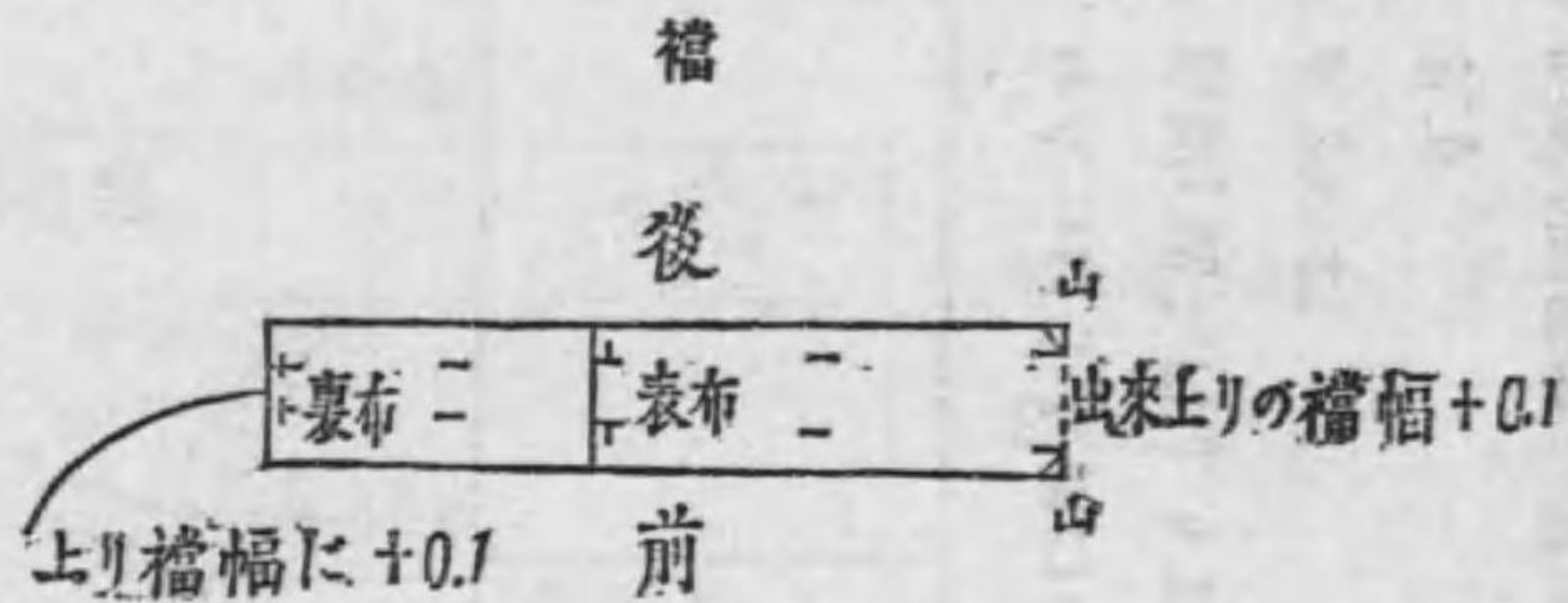


第九圖
 中表に二枚合せ、胴裏を重ね、丈を定めて折り返し、肩山、胴接の所を縫ぢる(但し待針にてとまるものは縫ぢるに及ばぬ)。



本裁ち女輸入羽織

第十二圖



1. 襷の上の方に裏布を二枚重ね、次に表の折り返る分を折り返して裏布と重ねて、丈標をする

2. 山(裾口)

3. 後襷附

裾口は襷布の中央より、上り襷幅の二分の一に、きせの五厘を加へたものをはかる

上の方は前襷の方より三分をはかり、残り幅を二分して、其点より、上部の出来上り幅の二分の一に、きせの五厘を加へてはかる(後襷より前襷の方が三分多くまがる)

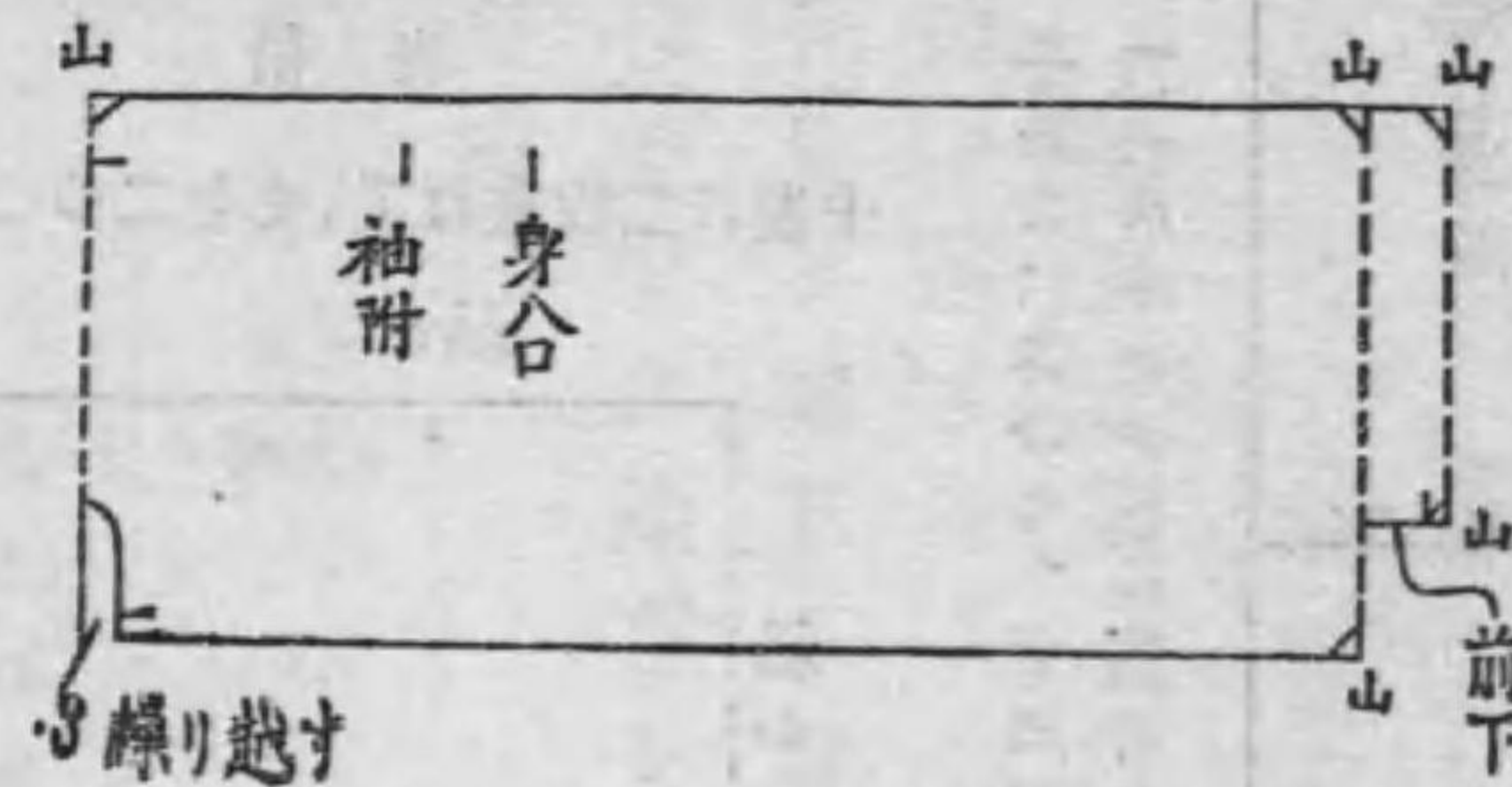
4. 前襷附

後襷幅をはかりし点より、襷幅を上下共、出来上り襷幅の二分の一に、きせの五厘を加へたものをはかり、前襷附の標をして、其處で、丈の寸法をはかる

5. 襷の胴接

第十圖

前襷の上に後襷を折り返す



1. 山(肩山及び裾山)

2. 袖附

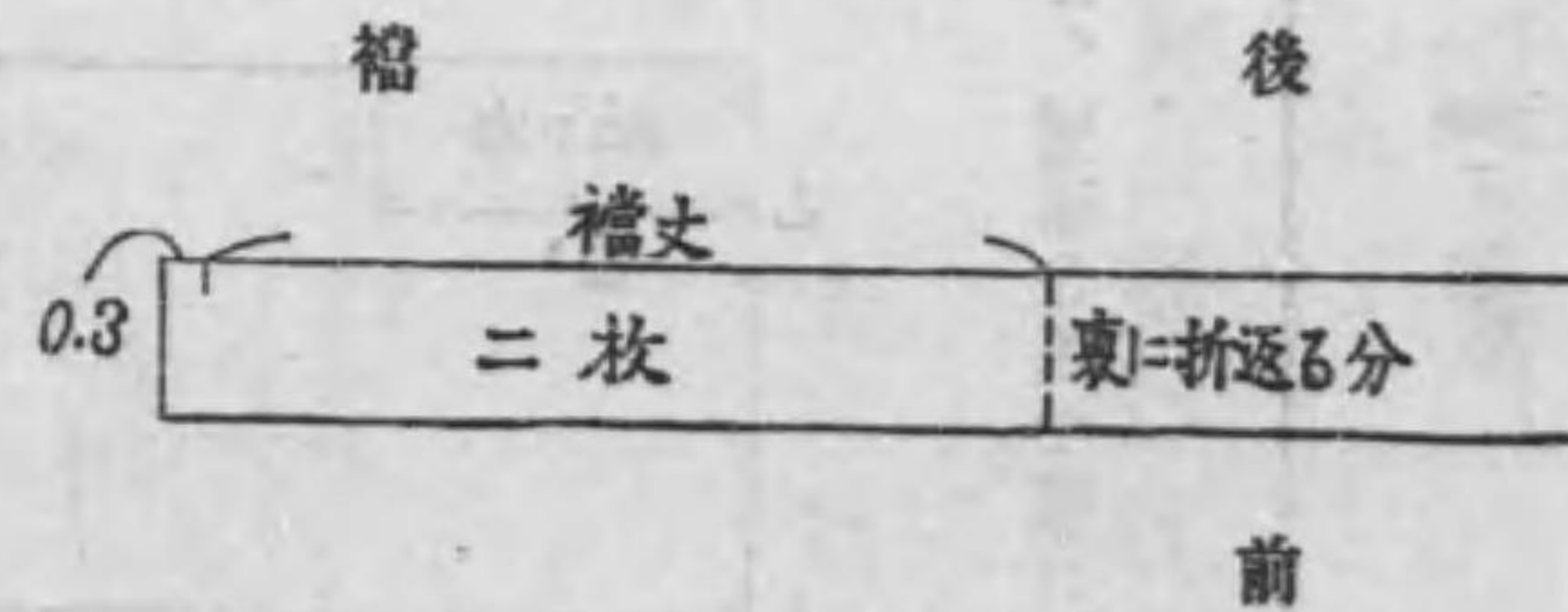
3. 身入つ口

4. 身入つ口より、裾山までの寸法をはかる(襷丈)

5. 前下

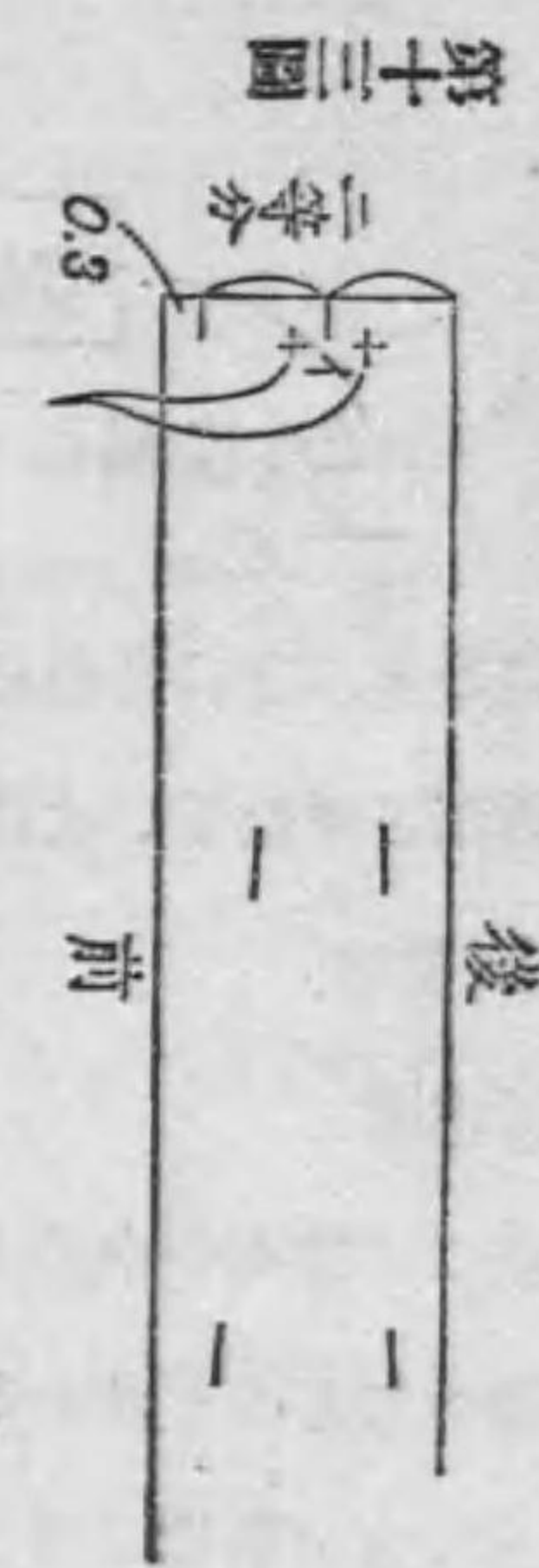
6. 背の縫代、及び肩幅(上り肩幅+0.1)

第十一圖



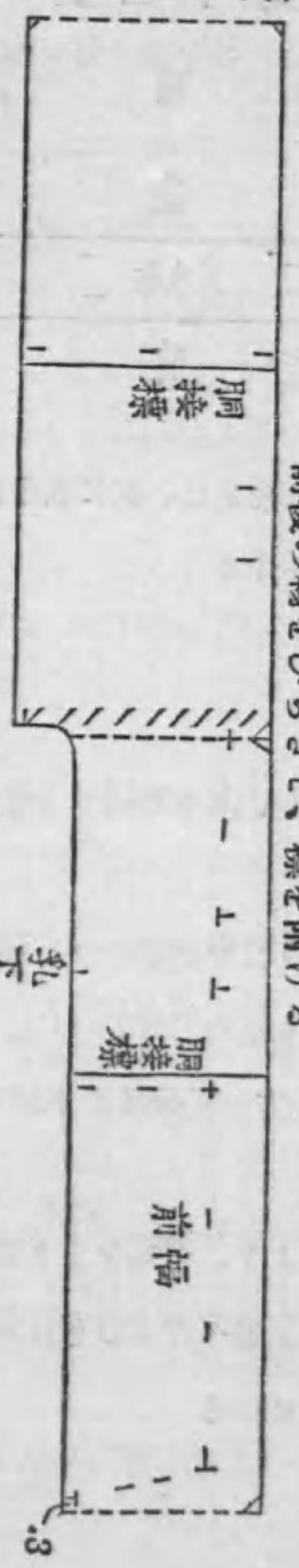
丈のゆるみたる方を、前にする

襟の上部の標の付け方



(1)より襟上部出来上り幅の二分の一にきせの五厘を加へて上下に取る

第十三圖



1. 身八つ口より裾口の方々に(前襟丈に $+ .1 + .05$)にはかる
2. 前幅(裁ち目より五寸)及び前袖附の斜
3. 前下の斜
4. 乳下
5. 胸接(胸接標を付ける際、厚紙類を挟みて、表に標のうつらざる様、注意する)

第十四圖

襟の折り方

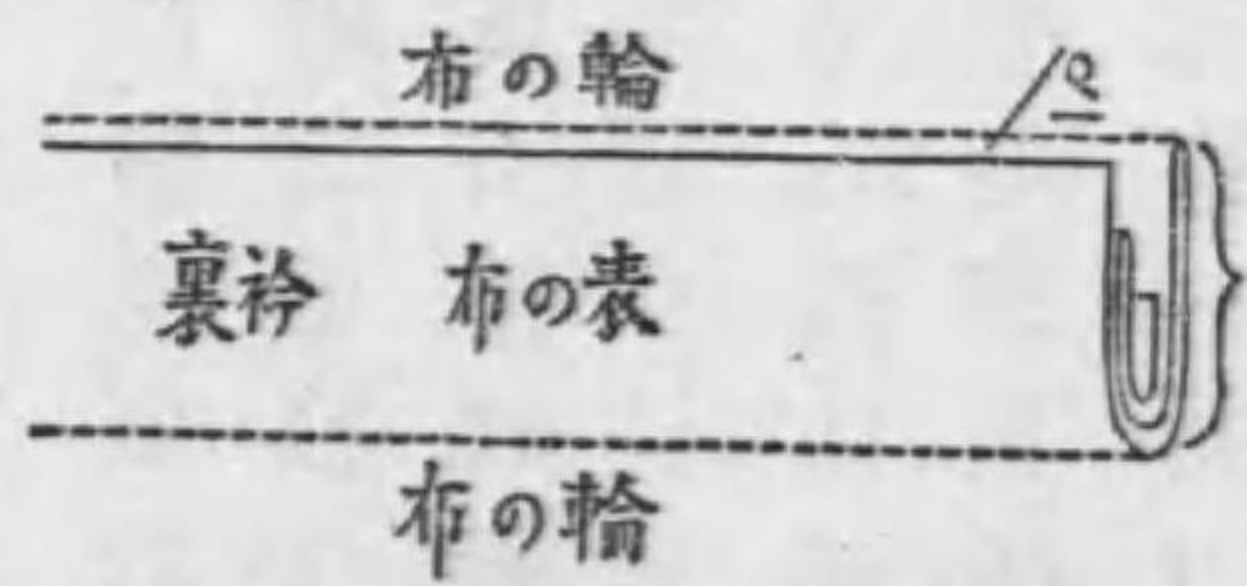
第十五圖 布の輪



布の輪幅の二倍に五分を加へる

1. 出来上り襟幅の二倍に、襟附、襟折の縫代筋代の、0.5を加へた寸法を、耳の方よりはかりて標を付け、其所より裏に折り返す
2. 耳の所より五分五厘ひかへて内側に折り返す

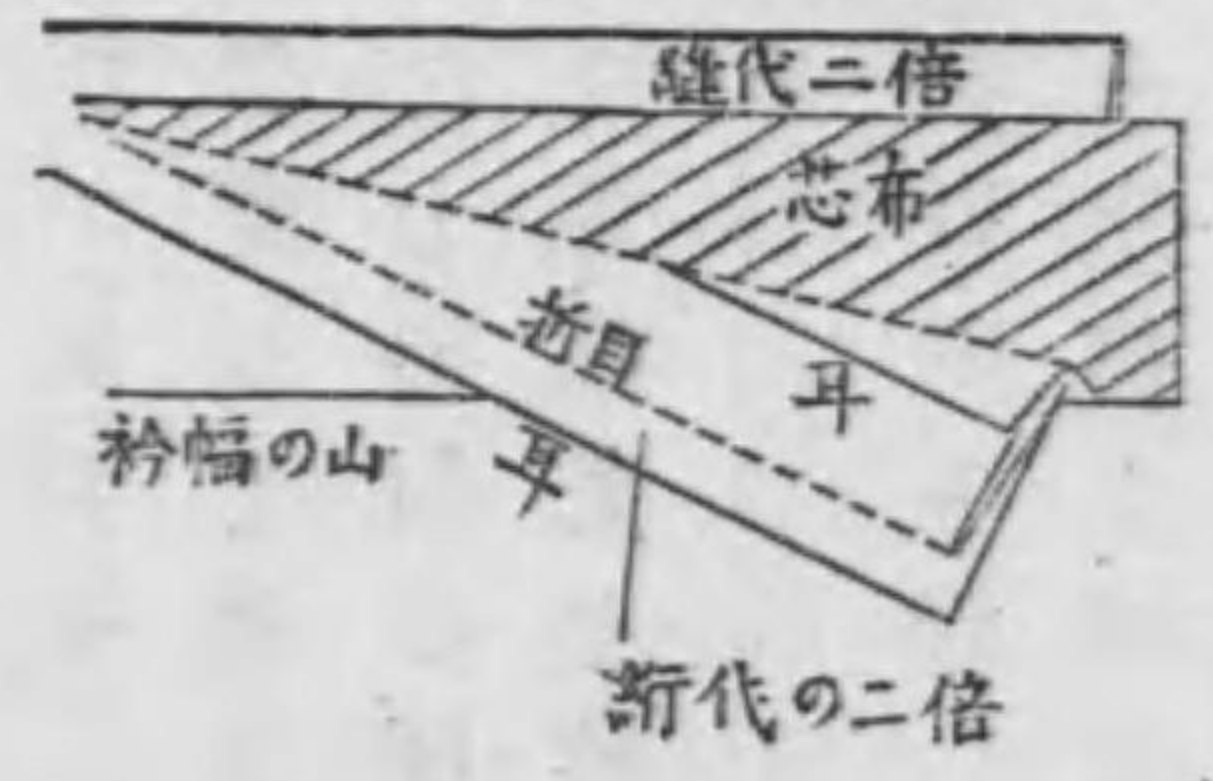
第十六圖



出来上り襟幅より3廣いもの

3. 表襟になる方(最初幅の二倍に五分を加へて、裏に折り返した輪の方)より、裏襟になる方を(耳の方)一分ひかへて二つに折る

第十七圖



襟心は、内襟の幅より五厘せまく裁ち切り、内襟に包みて縫ち附ける
襟幅より五厘せまく裁ち切りて、襟附のきせの山まで入れる事もある

縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 表袖。中表にして標通りに、振りの方から縫ひ始めて袖口下を縫ひ、袖口明きの標の處にて抄ひごめをなし、袖幅の標を出來上り袖幅より、一分廣く附け、折りを附けて、袖丸を拵へ表返して、襷掛けをかける。

(ロ) 裏袖。袖口布を掛け、袖下及び袖口下を縫ふ(袖口下の縫ひ代は四分)袖幅の標を、袖附けより下は表より一分狭く、袖山では表と同じに附け、袖丸を拵へ折りを附ける。

(ハ) 振り入つ。表裏の袖幅の標を合せ、表を手前にして袖附けの標から五厘程、袖下の方へよりたる所から縫ひ始め、終りの方も、同じく袖附け標より五厘程手前にてごめ(裏を釣り加減にして縫ふ)裏袖の方に、幅一寸位の綿をゆるく當て、縫

ひ目のきわに綴ち附け、表返して、襷掛けをかける(前巻長着綿入参照)。

(二) 裄。

(イ) 胴接ぎ。前後の胴接ぎをなし、胴裏の方に折りを返し、襷掛けを掛ける(背を縫つて、幅標をしてから、胴接ぎをしてよい)。

(ロ) 背縫ひ。表及び裏の背を縫ひ、後幅、肩幅の標を、出來上りより一分廣く附け、着物と同じに折りを附ける。

(ハ) 前下り。表は標通りに、裏は標を二分縫ひ込み、衿附けの所の三分の標から、前幅の標まで縫ひ、裏裄の方に折りを返し、針目五六分にして、隠し襷掛けを掛ける。

(前下りの縫ひ上りにて、表が一分裏に返る)。

(ニ) 襠。襠の表裏を接ぎ合せ、裏布の方に折りを附け、胴接ぎと同じに、襷掛けを掛ける。

後裨と、後襠との、裾山を合せ、身八つ口と、襠丈との、標を合せ
後裨の方を見て、後襠を付け、裨の方に折りを付ける。

前襠も、後襠と同様に付け、折りは、同じく裨の方に返す(前下
りの縫ひこみは、縫ひ付けずに置く)。

(ホ) 身八つ口。表裨の表の外になる様にして、表裏の裨を重ね、
襠の上の方を、一分きせのかゝる様にして縫ひ、裏裨の方に
綿を綴ち付ける。

後裨の裏表にて、襠を挟みて四つごめをなし、其糸にて標よ
り五厘縫ひ込みの方によりたる所を、袖付け標まで縫ひ、裏
裨の方に、振り八つと同じに綿を綴ち付け、表返して懸けを
掛ける。

前の身八つ口も、後と同様に縫ふ。

(ヘ) 袖付け。表袖の山と、裨の肩山とを合せて、待ち針をさし、四

つ留めをして、裨の山を一分五厘折り出して、表袖を付け、袖
の方に折りを付ける。

裏袖は、袖の方を一分五厘折り出し、裨を伸ばして縫ひ、裨の
方に折りを返す(身八つ口の縫ひ方、袖の付け方等前巻袷及
び綿入れもの参照)。

(三) 綿の入れ方。

(イ) 裨の裏を出だし、後裨の表と裏との間に、前裨を畳み込む。

(ロ) 表の後裨を伸ばし、其上全體に眞綿を引く。

綿は、裾口の方に二三寸出して、肩の方に伸ばし、残りは、肩の
方に出し置く。

(ハ) 身八つ口の留まりの處より、袖口の方に向つて、綿を切る(第
一圖参照)。

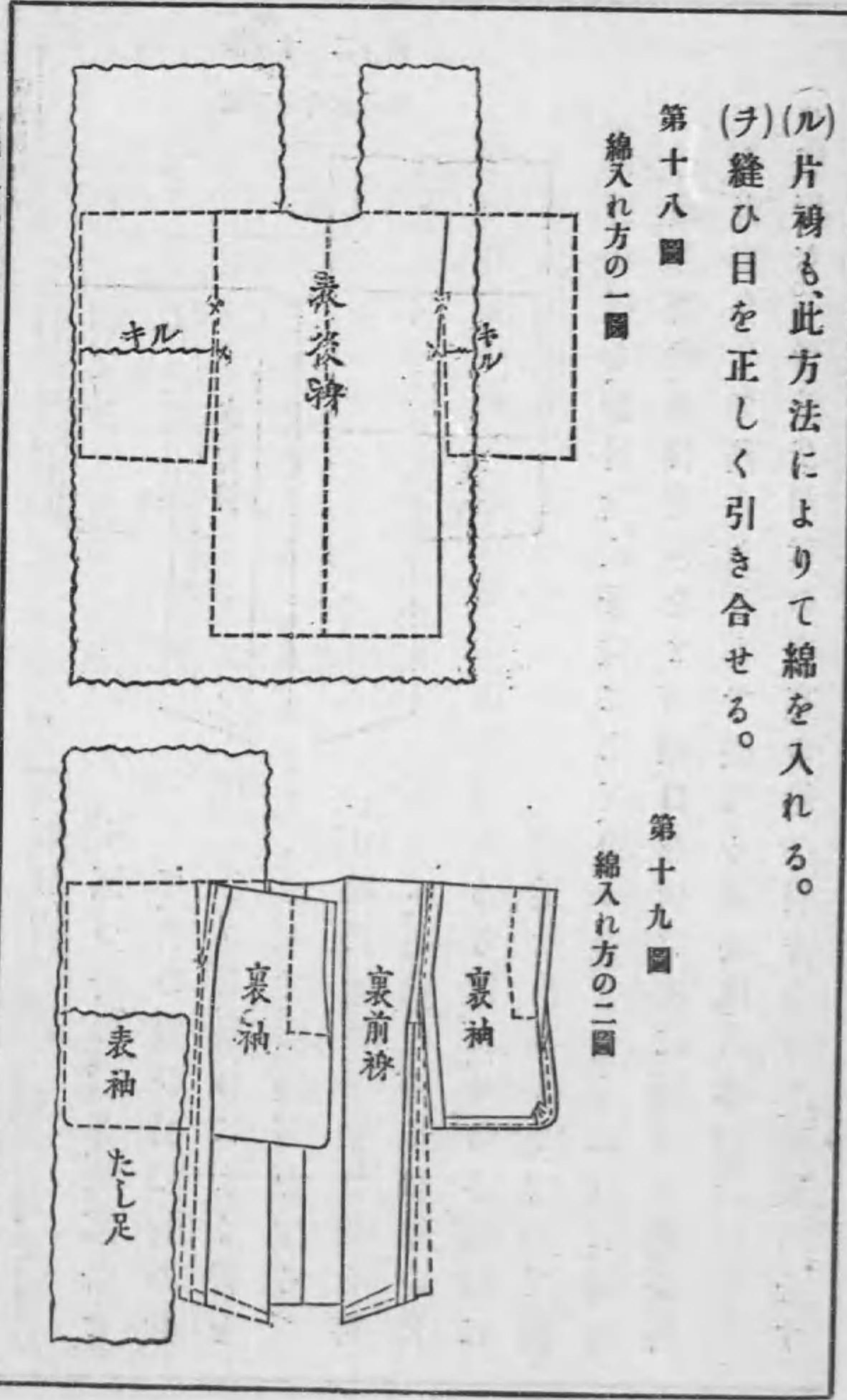
(ニ) 肩山より出でたる綿を、袷肩明きの所にて切る(第一圖参照)

- (ホ) 裾口の先にて、居る綿を、身丈より少し長く折り返し、肩及び脇に出でたる綿を、全部前裾の方に折り込み、其上に眞綿を引く。
- (ヘ) 肩より手を入れ、左右裾附けの裾口の所にて、綿及び縫ひ目を持ちて引き返し、裏前裾を上にして、平らに置く。
- (ト) 肩山に折り込みたる綿を伸ばす。
- (チ) 裏袖を開き、第二圖の如く足し綿をして、其上に眞綿を引く。
- (リ) 裏袖を綿の上ののせ、眞綿を引き、足し綿及び肩山の綿を、第三圖の如く折り返し、其上に眞綿を引く。
- (ヌ) 前裾にも眞綿を引き、脇より出でたる綿を、前裾の上にて平らに置き、(第三圖参照)其上に眞綿を引き、袖口、袂、振りこも返せるだけ返し置き、袖をなるべく小さく折りて返し、次に裾口を引き返す。

(ル) 片裾も、此方法によりて綿を入れる。
 (ヲ) 縫ひ目を正しく引き合せる。

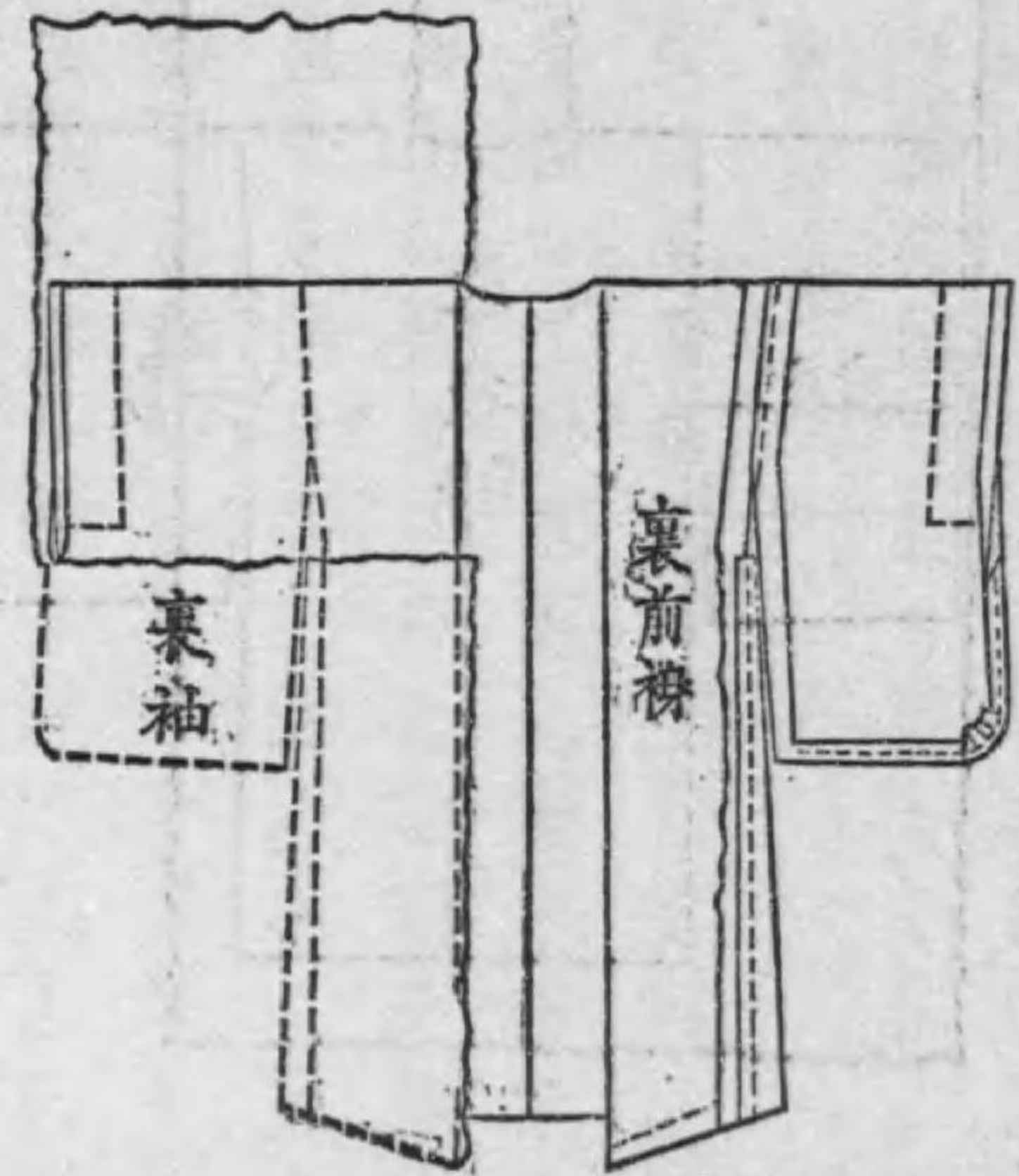
第十八圖 綿入れ方の一圖

第十九圖 綿入れ方の二圖



本裁ち女綿入羽織

第二十圖
綿入れ方の三圖



(四) 衿け方。

(イ) 三つ衿の所を、表裏合せて、背の縫ひ目に待ち針をさし、裾口によく綿を含めて、假綴ちをする。

(ロ) 袖口衿け。袖口綿を拵へ、裏袖布の袖口綿を含める所に、ゆるみ加減に乗せ、出衤をさだめて裏

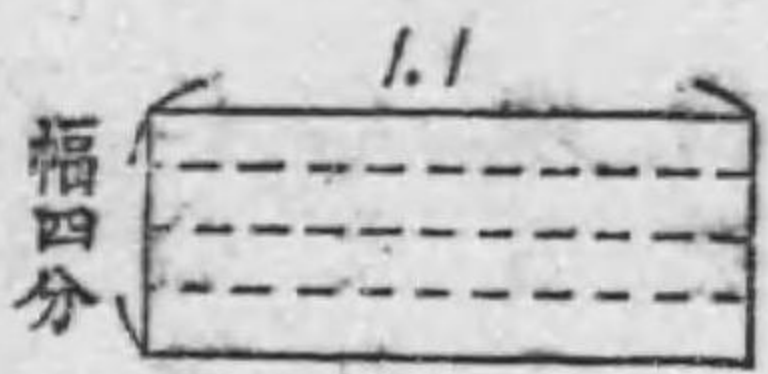
に折り返し、針目七八分位にして、糸の引きつらぬ様に衤綿を綴ち付け、袖口明きをこめ、袖口を衿け、次に袖下の縫ひ目を表裏合せて袂のさきまで綴ちる(前卷綿入参照)。
(ハ) 豎綴ち。背及び前襟の表裏の縫ひ目を合せて、豎綴ちをする。

る(いづれも、裾口より綴ちる)。

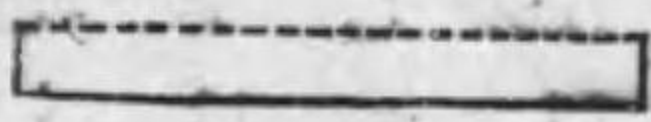
(ニ) 前假綴ち。前襟の、衿を附ける所の綿を薄くして、乳付けより下は、裏衤の幅を少しゆるみ加減にして、前下りの所より、衿肩明きを廻りて、全體に假綴ちをする。

(ホ) 乳付け。幅四分、丈一寸一分位の布を用ひて、圖の如く乳を拵へ、前襟の裏の、標の所に、四五針通して、しつかりと、縫ひ附ける。

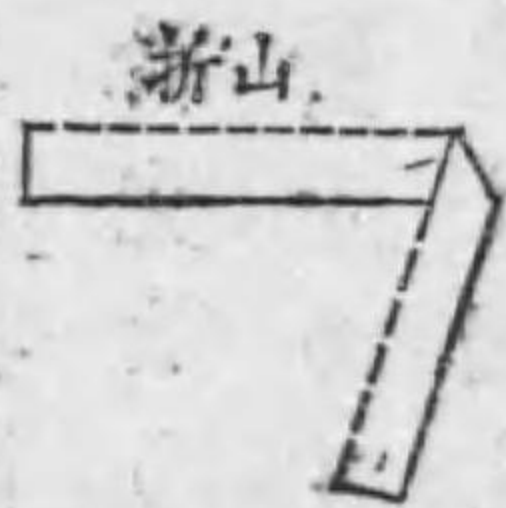
第二十一圖
(1)



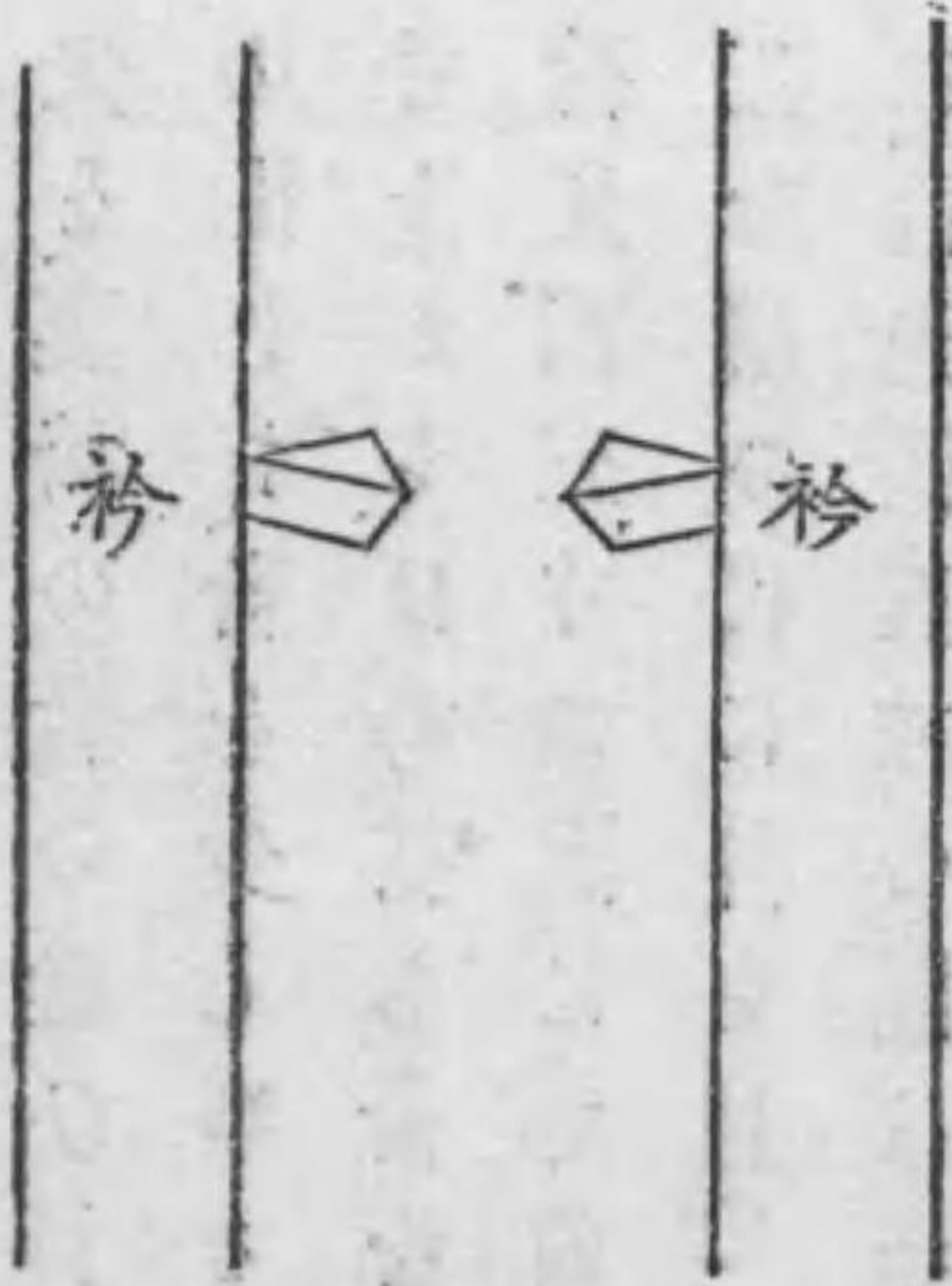
第二十二圖
(2)



第二十三圖
(3)



第二十四圖
乳の附け方(女物)

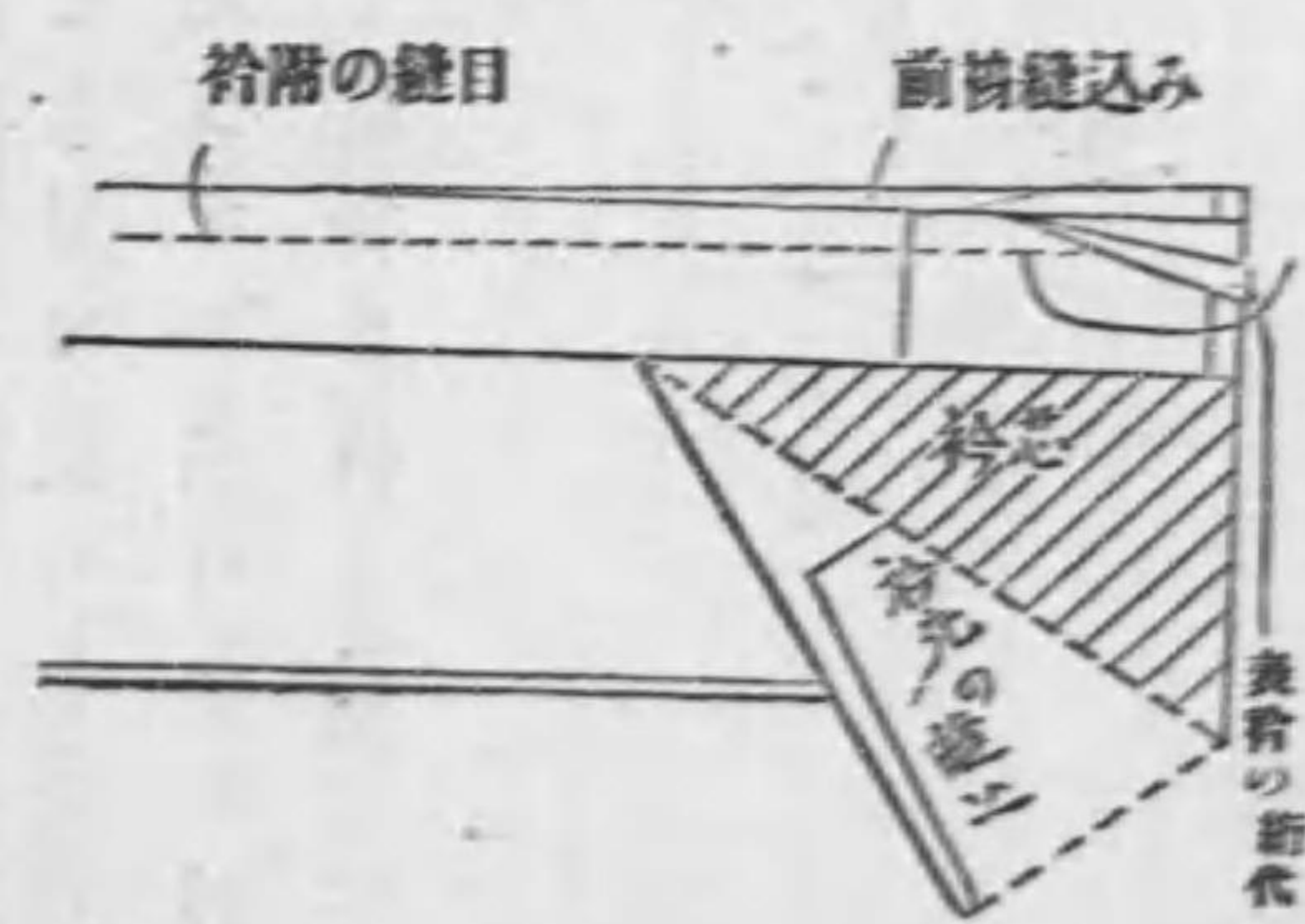


(へ) 衿付け。表衿になる方の衿丈の中央を、裏衿の背の縫ひ目に合せ、衿肩廻しの所より、乳付け迄の間にて、衿を少しゆるく、それより下は、平に衿先より四五寸上からは、心持ち衿をゆるみめにして、待ち針をさす(但し衿先四五寸の間にて前襟を一分縫ひ込む、其他は襟も衿も二分縫ひ代に衿を見て、左前の裾口から縫ひ始め(地厚の者は、衿先四五寸の間は返し縫ひ)、乳付けの所は、返し縫ひにして、よくこめ、衿肩廻りは小針に、背縫ひでは、一針返して縫ひ、次に右前も同じ仕方で縫ひ、一分のきせをかける。

(ト) 衿先の縫ひ方。衿を中表に衿幅の山より二つに折り、表衿の方二枚(表衿一枚と、表衿の縫ひ込み一枚)と裏衿一枚と三枚にて衿先を縫ふ(衿先より一分五厘縫ひ込みの方によりたる所を、衿幅の山は一針縫ひ残り、衿付けの方は、表の方は

きせの山、即輪より三分の所と、裏衿の方は、衿け山、即耳より二分五厘の所とを合せて縫ふ。
衿先の縫ひ込みを、正しく表衿の方に折り、衿付けの縫ひ目のきわに、緩ちつける。
衿幅の縫ひ込みの布を、衿先の縫ひ込みの上、に折り返し、其中に衿芯を入れ、て(少しゆるき加減)五寸おき位に、緩ち付け表に返す(圖参照)。

第二十五圖



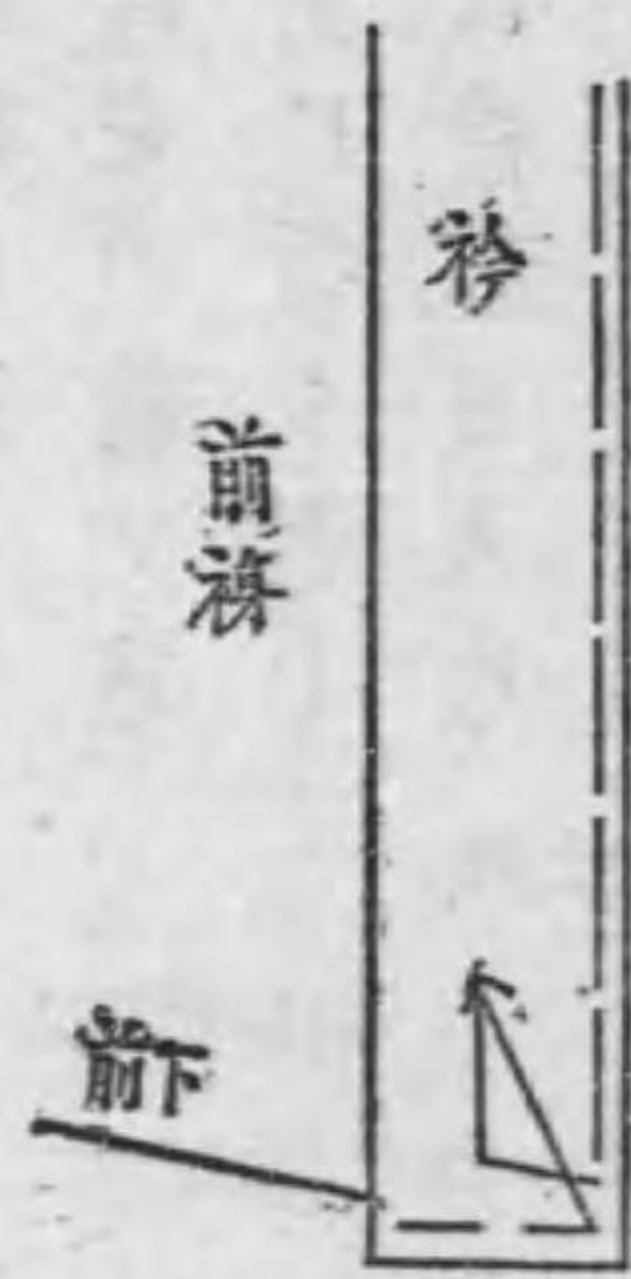
衿先の縫ひ込みを衿附の縫目のわきに緩ちつけた所

(チ) 衿衿け方。
三つ衿の所は極こまかく、縫ひ目の見えぬ様に、其他は二三分の針目に衿ける。

(リ) 衿の襷け。

衿附けの縫ひ目(前襟)に五厘の被せをかけ、衿の方を見て、衿の折り目より二分程入つて平熨けをかける(圖参照)但し衿先より乳の少し上までは、衿と衿とにかけ、それより上は、衿のみにかける。

第二十六圖



(又)仕上げ。

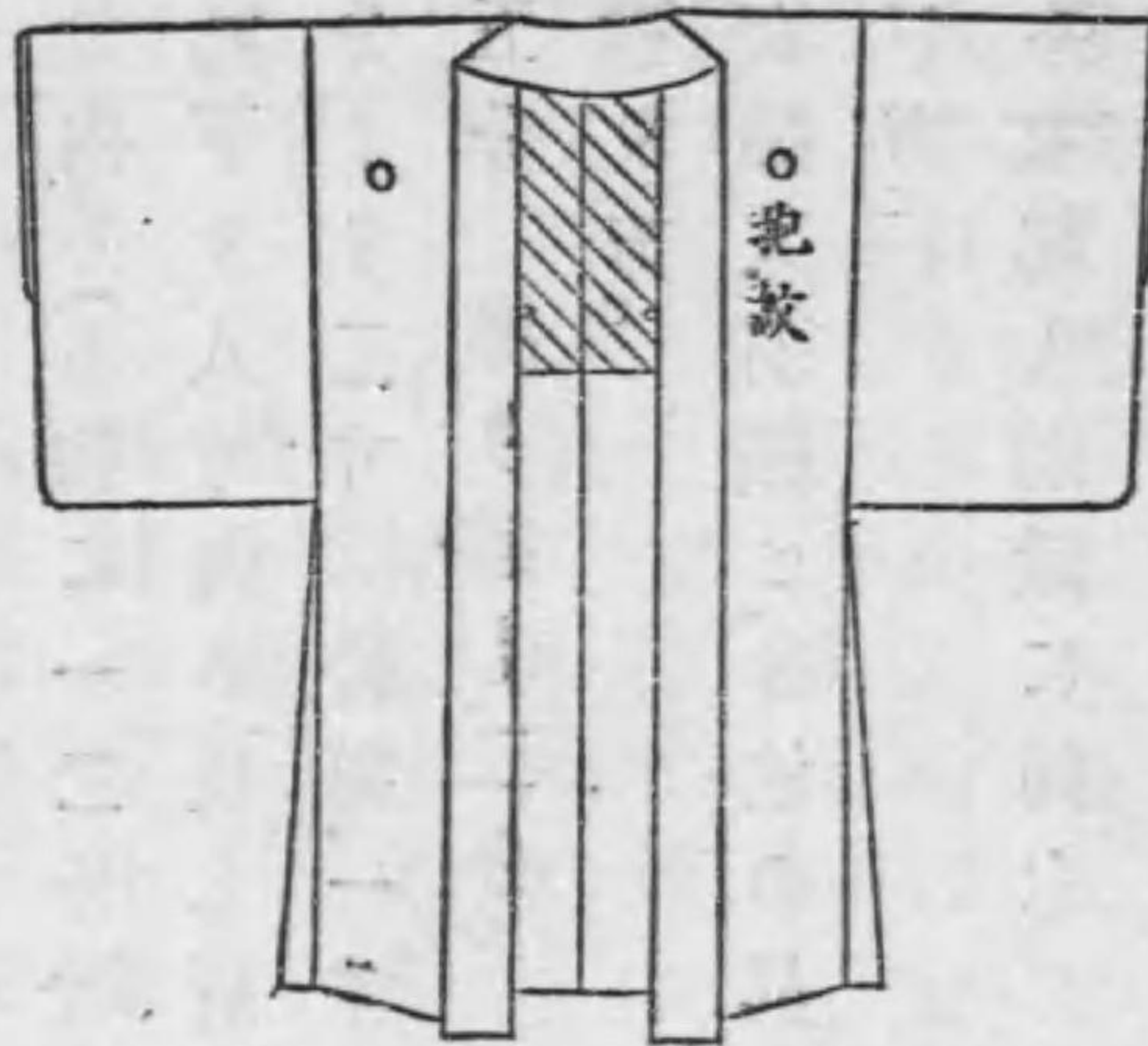
本裁ち男綿入羽織

各部の名稱。

本裁ち女綿入羽織と同様。

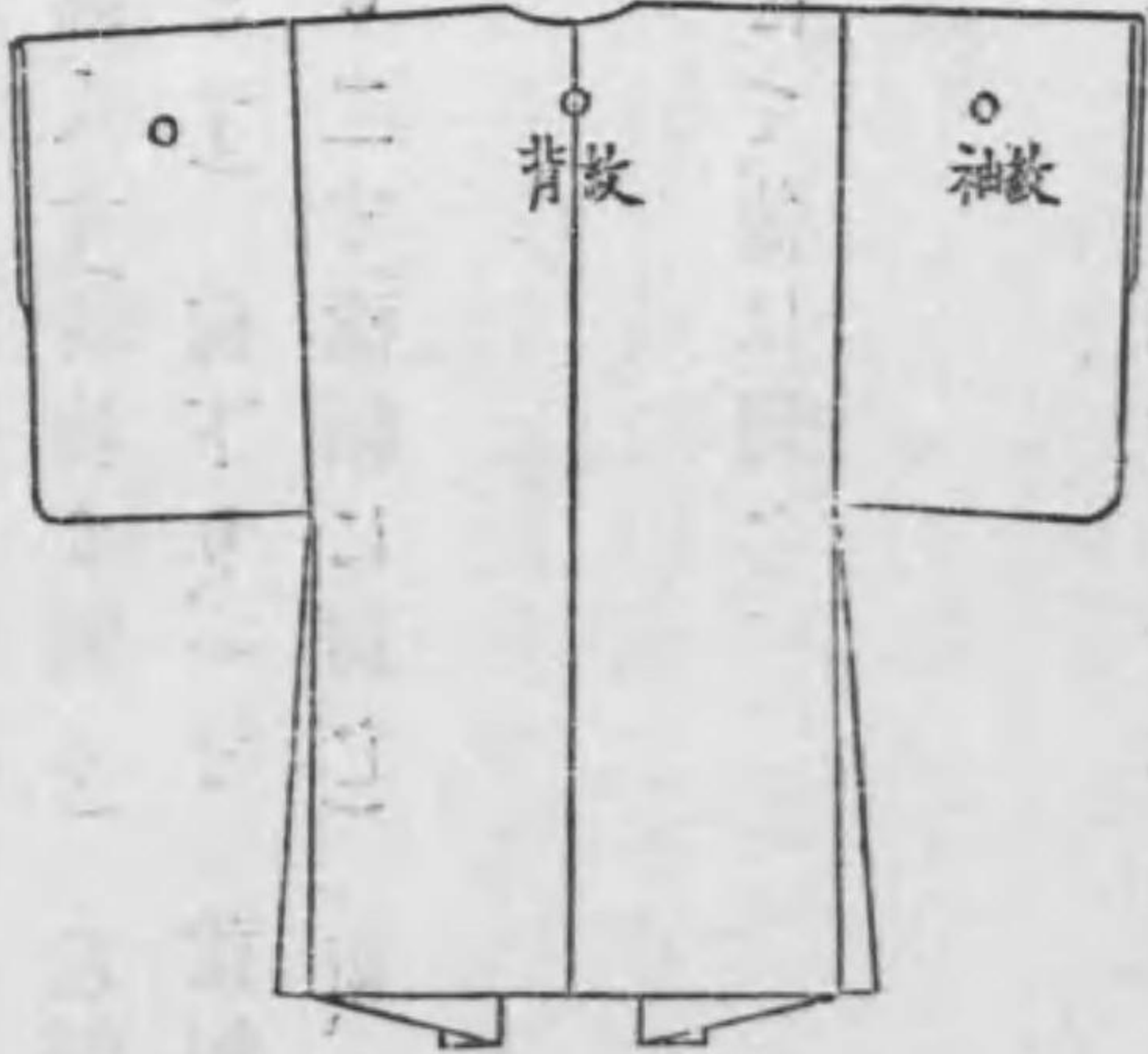
第二十七圖

前



第二十八圖

後



地質。大體本裁ち女羽織に同じ、但し縮緬類の如きは、男物には、ふさはしからぬ故用ひられぬ。普通仕立て上げ寸法。

袖丈 一尺四寸二分(着物に一二分増す) 袖口、七寸五分上り八寸(着物と同寸) 袖付け、袖丈を全體附ける 袖幅、八寸九分より九寸一分(着物に一分増す) 身丈、二尺七寸五分(着丈の凡そ四分の三)但し時の流行と、各人の好みによりて一定せず 衿肩明き、二寸四分内外(着物に一二分増す) 後幅、八寸(着物と同寸) 前幅、五寸 乳下り、八寸内外(但し肩山よりとす) 前下り、一寸 襦幅、一寸九分より二寸 衿幅、一寸九分より二寸(襦幅に同じ) 術、一尺七寸五分 繰り越し、二分。

裁ち方積り方。

本裁ち女綿入羽織と、寸法の異なるのみにて、他は同じ。

標の附け方。

概本裁ち女綿入羽織に同じ。

袖。 袖丈全部が袖付けとなる故に、袖丈標、即袖付けである。

第二十九圖

後襦



前襦

本裁ち男綿入羽織

振り八つ口がないから、裏袖の標附けで、袖附けの方で、殊更に寸法を多く詰める必要はない。

襦。 身八つ口なきのみ、他は女物に同じ。

襦。 圖の如く標附けをする、上部があかないの寸法が違ふばかりで、割り合ひは、同じである。

衿の折り方。 衿幅の上り寸法が異なるのみにて、本裁ち女綿入羽織に同じ。

縫ひ方。

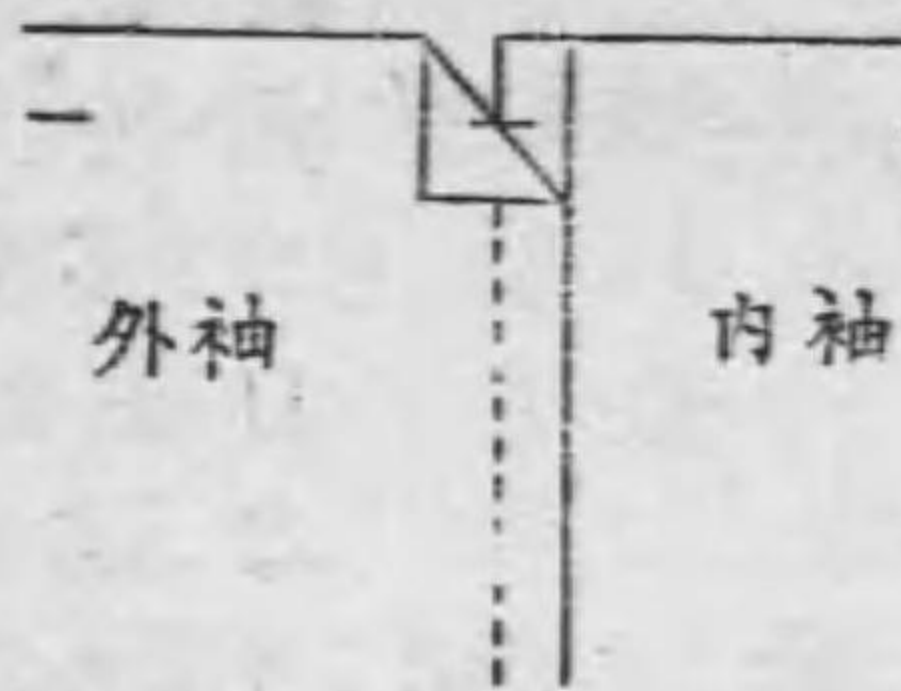
袖附けの外、總べて女綿入羽織に同じ。

表袖附け。 表の袖山と、襦の肩山との標を合せ、丈を揃へて待ち針をうち、襦丈の終りにて、袖から針を出し、襦のきせの山二枚を、浅く抄ひて、又表袖に返り、かたく結び、其糸にて袖を附ける(襦

のの山で一分五厘折り出し、始め終りは極細く縫ふ事、前巻の着物に同じ。

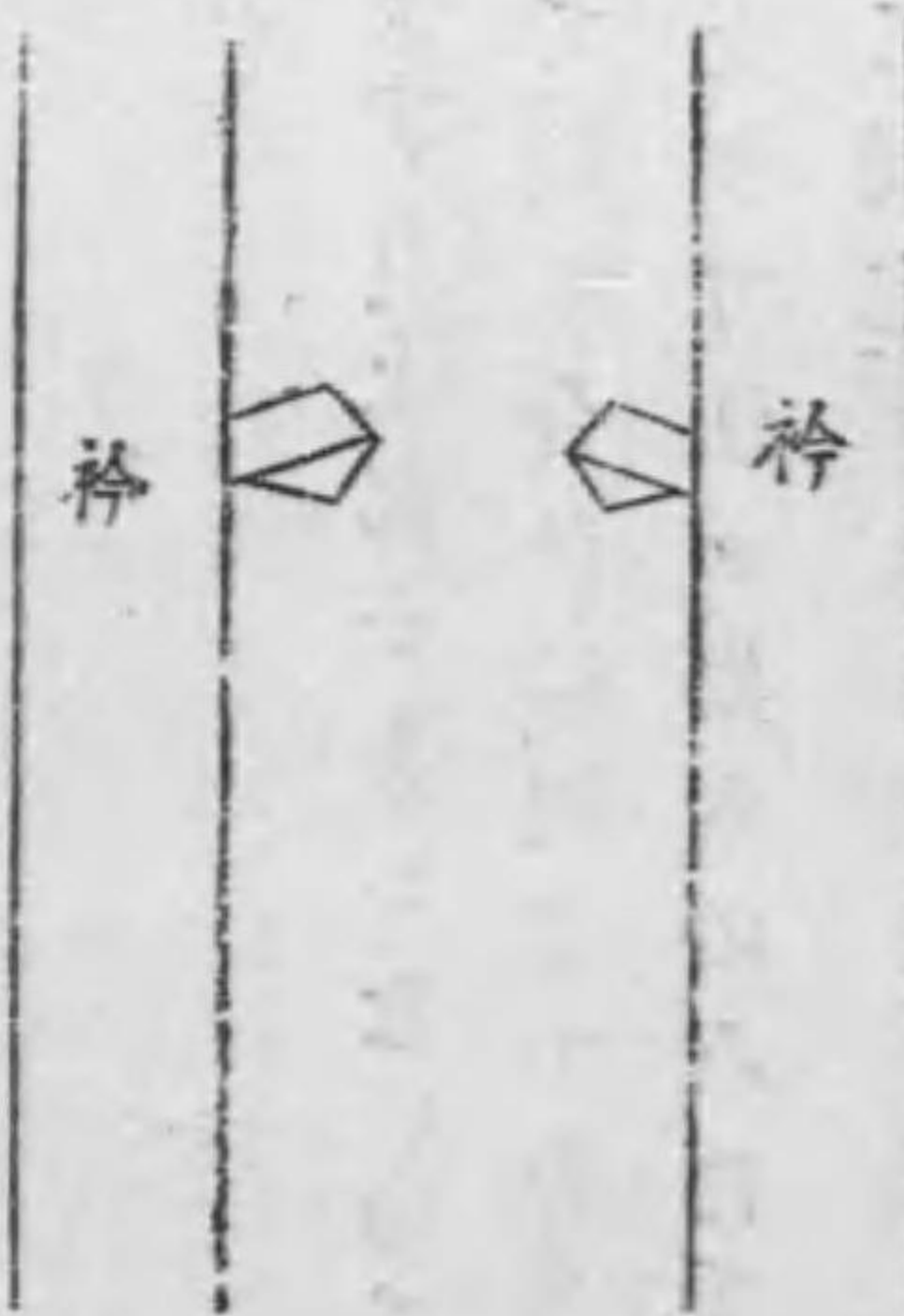
裏袖付け。裏袖は、袖下を縫ふ時、袖幅標まで縫ひ置き、外袖の方を三角に折りて、表と同様にして、袖の方より針を出し、襷の方は、きせの山より、少し内側を抄ひて、こめ襷も袖も開いて縫ひ、襷の方に折りを附ける。

第三十圖
裏袖の袖下の折り方



乳付けは、女物と反対に上から下にむけて重ねる。

第三十一圖
乳の付け方(男物)



本裁ち男袴羽織

普通仕立て上げ寸法、裁ち方、積り方等、本裁ち男綿入羽織に同じ。標付け方。

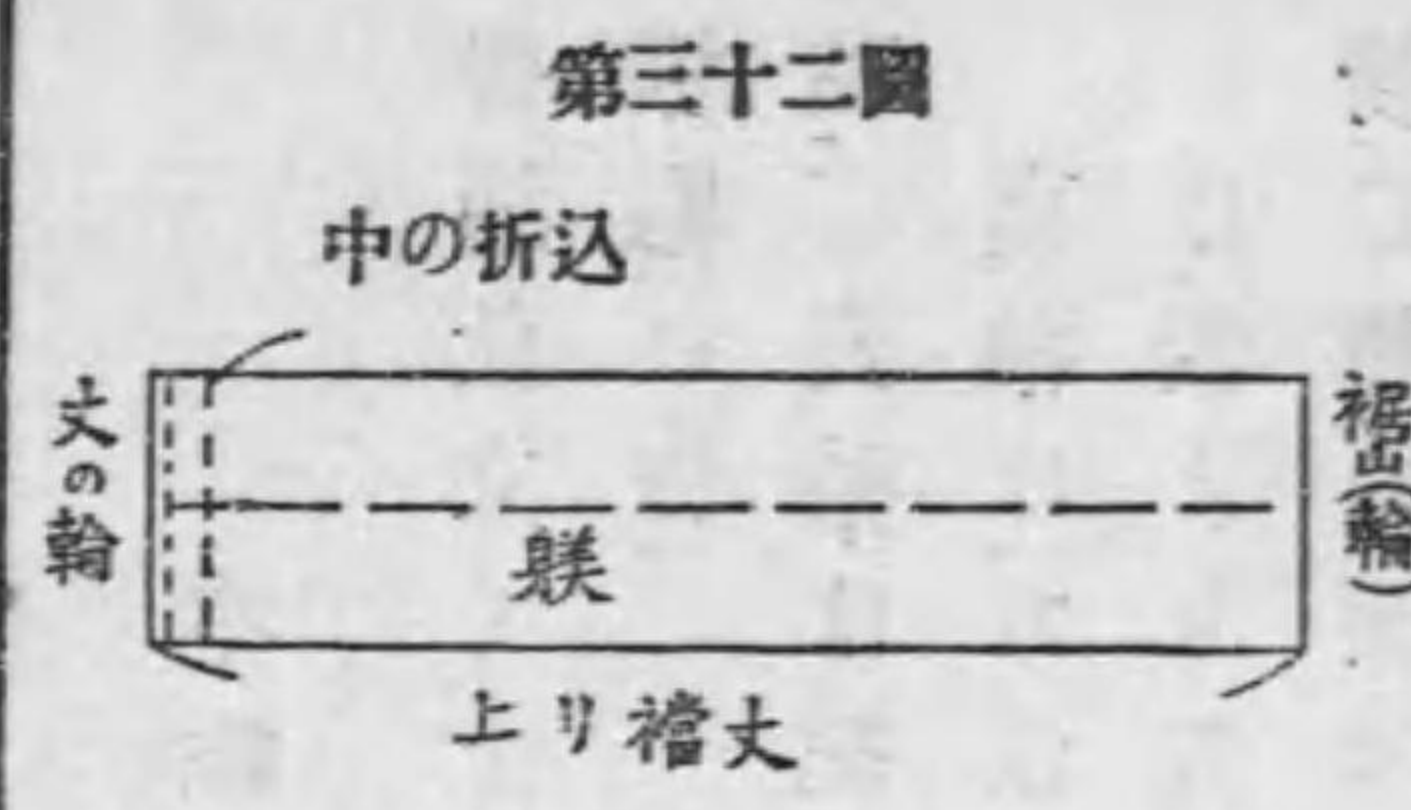
袖。表袖は、綿入羽織に同じ。

裏袖は、寸法を、袖口明きの方では、表と同寸にし、袖付けの方では、表より五厘つめる、標の付け方は綿入羽織と同様。

裨。標の付け方は、綿入羽織と同様なるも、前下りの表の返る分が、袴羽織は五厘なる故、前襷の襷付けの寸法を、前襷の丈より、きせの五厘と、表の裏に返る分の五厘と、都合一分長くして標を附ける。

襷。丈標と胴接ぎの標とをして、裏布を接ぎ合せ、表を外にして、丈標を裏の方に折り込み、戻けにておさへ、襷布の幅の中央も、同じ

く、裏平らにして、綴ち附ける。標の附け方は、綿入と同様。

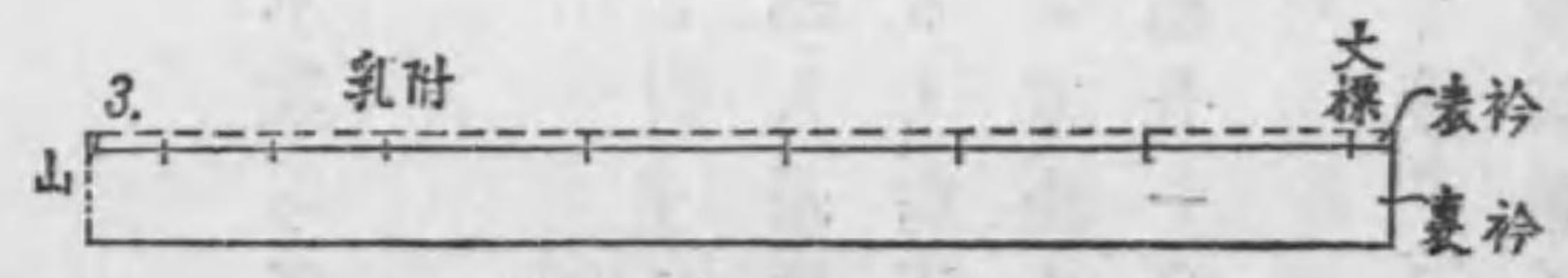


衿は、本裁ち綿入羽織と同様に折り、圖の如く、裏表の衿附の所に、合ひ標を附ける。

第三十三圖

衿の合標の附け方

襷につく方



衿幅の山になる方

1. 丈を二つに折る
2. 幅を二つに折る
3. 衿肩明3
4. 乳附、それより下は、4-5目位につける

縫ひ方。

- (イ) 袖。裏袖に袖口布を掛け、表裏合せて袖口を縫ひ、五厘のきせをかけて、表の方に折り、袖幅の標を附ける。
- (ロ) 胴接ぎ。前後の胴接ぎを、綿入羽織の如くする。
- (ハ) 前下り。表は標通りに、裏は標を一分縫ひ込みて、綿入羽織と同様に縫ひ、折りを附け、表返して、表を裏に五厘ふかせて、一束に躰けをかける。
- (ニ) 背縫ひ。中表に左右の後襷を重ね、衿肩を右に、表を手前にして、四つ縫ひにする。胴接ぎの縫ひ目にて、一針返し、裾口は一寸位別々に縫ふ、尙裾口に、布或は綿を入れる時は、二三寸の間別々に縫ふ、いづれも背を四つ縫ひにする、前に縫ひ置く、後幅、肩幅の標を附ける。
- (ホ) 後襷附け。後襷にて、後襷をはさみ、襷の裾口の裏の方から裾

山に針を出し、其針を後襟の裾山の裏に出し、一針返してよく
 ごめ、襷の釣り合ひを見て四つ縫ひになし、襷丈の終りで抄ひ
 ごめをなし、折りを附けて表返す(裾口に綿或は布を入れる時
 は裾口を二三寸別々に縫ふ)。

(へ) 前假綴ち。前襟の端、即衿附けの所を裏表合せて、表の幅を、稍
 張り加減にして、麩けにて、假綴ちをする(綿入に同じ)。

(ト) 乳附け。綿入羽織と同様に附ける。

(チ) 衿附け。表衿になる方の、衿丈の中央を、裏襟の背縫ひに合せ、本
 裁ち、女綿入羽織と同様に、衿と、襟との、釣り合ひをとりて、待ち
 針をさし、前襟を狭く畳み、これを表裏の衿にて包み、衿の合ひ
 標を合せ、衿先より縫ひ始め(縫ひ目のち、れぬ様、針をぬく)、乳
 附けの所にては、針を返してよくごめ、三つ衿の所は、裏衿にな
 る方(耳の方)を、一枚残し置いて縫ひ、前と同様にして、右前の衿

先まで縫ひ、平鍔を掛け、衿先を縫ひ(衿先は、綿入羽織と同じく
 表衿の方は、一分のきせの山と裏衿の方は、同じく五厘のきせ
 の山とを合せて、一分五厘のきせになる様に縫ふ)、縫ひ込みは
 表衿の方に返し、衿附けの縫ひ目のきわに綴ち附け、衿幅の縫
 ひ込みの布を其上に折り返し、その中に衿芯を入れて、綴ち附
 け、衿の縫ひ目は、表衿の方に返し、衿先を少し中に返し置いて、
 三つ衿の所より引き返し、次に其所を縮け、折り目をよく整へ
 て、麩けを掛ける、此の仕方を、鐵砲附け、又は袋附けといふ(衿の
 縫ひ代は表裏とも二分にする)。

(リ) 袖附け。表袖と表襟との山を合せ、袖の方の、袖丈の標より五
 厘入りたる所と、襟の袖附け標とを合せ、表袖を附ける、但し袖
 附けの始め終りは、共に一針縫ひ残す、襟を折り附けにして、折
 りは袖の方に返す。

裏袖と裏裨との山を合せ、前袖附けを五寸程残して、裏袖を附ける(但し袖の方、袖丈標より五厘入りたる所と、裨の袖附け標とを合せる事及び、袖附け留まりを一針縫ひ残す事は、表袖附けに同じ)綿入羽織の如く、袖も、裨も開いて附け、裨の方に折りを返す(袖下は、綿入羽織の外袖の方を折りたる様に、前後とも折る)。

(又)袖口下縫ひ。袖口留まりで、四つ留めをなし、袖形の所まで四つ縫ひにする(袖口の四つ留め、袷長着に同じ)。

(ル)七つ留め。袖附け留まりを、七枚とも糸ごめをして袖下を縫ひ袖形を拵へ、表の方へ折りを返す。

七つ留めの針の掛け方は、裏の前裨一枚だけ残して、左右共に袖口を左に持ち、袖附け留まりにて、布の重なり順に、七枚を抄ひて留める。

留め方順序。

左袖。

(1)裏前袖(2)裏後裨(3)裏後袖(4)表後裨(5)表後袖(6)表前袖(7)表前裨(裏袖は、綿入羽織の如く、前後とも折る)。

右袖の場合は、此反對の順序となる。

(チ)前襠附け。前裨の表裏にて、前襠を挟み、裾口をこめ、裾口より四つ縫ひにし、表に折りを附けて引き返し、袖附けの縫ひ残してある所を拵ける。

(ワ)袖に躰けを掛ける。
(カ)仕上げ。

注意、絹布の場合には、袖形及び裾口に、真綿を少しく入れる。裾口は、真綿の代りに、別布を入れてもよい。

裏布幅、狭く拵の出来ぬ場合には、裏袖の口明きになる方に、共

布或は別布を足したる後、袖丈及び袖口布掛けの標をする。別の仕立て方。

袖。袖口を表裏合せ、四つ留めをして、袖口下から、袖下を縫ひ、袖幅標の三寸程手前から、表裏別々に、表の方は幅の端まで、裏の方は袖幅まで縫ふ。

裄。背縫ひ、後襟付け、衿付け等は、前の仕立て方に同じ。

前襟付け。前裄にて、後裄をくるみて、前襟を付ける。

袖付け。表袖、綿入に同じ。

裏袖。裄の袖付けと、袖丈とを合せて、四五寸目位に、合ひ標を付け、袖付けのこめは、綿入と同じにこめ、合ひ標を合せて、前後とも縫へるだけ縫ひ、前の方を少しあけおき、其所から返し、あきたる處は、細かく紵ける。

尙衿は袋付けにせず、綿入の如く付けてもよい、その時は襟を前

後共付けて、表袖、裏袖を付け(此時は合ひ標を付けるに及ばぬ)、次に前裄を綴ちて衿を付ける。

本裁ち女衿羽織

普通仕立て上げ寸法、裁ち方積り方、標付け方等、總べて本裁ち女綿入羽織に同じ。

但し、前下りの標、衿の合ひ標の付け方は、男衿羽織に同じ。

(一) 袖。

(イ) 裏袖に袖口布を掛け、表裏の袖口を縫ひ合せ、五厘のきせを掛け、表袖の方に折る。

(ロ) 袖口留まりに四つ留めをなし、袖口下を四つ縫ひにして、袖形を縫ひ、袖下もつゞけて縫ひ、袖幅の二三寸手前の所にて

一針返してごめ、それより先は、表裏別々に縫ひ、袖幅の標を、
付け、表袖の方に折りを返し(袖下の、表裏別々に縫つた所は
裏袖は裏の方に折る)袖形を拵へる。

(ハ)裏袖幅を少しく詰め、表袖を見て振り入つを縫ひ合せ(裏袖
を少しつり加減にする)裏袖の方に折りを返し、表返して、熨
けを掛ける。

別の袖の縫ひ方。

(イ)袖口掛け、袖口合せ、袖口の四つ留め、前に同じ。

(ロ)袖下を、袖形の所まで四つ縫ひにする。

(ハ)袖幅の標を付けて振り入つを縫ひ、裏袖の方に折りを返す。

(ニ)袖下を四つ縫ひにして袖形を拵へ、表袖の方に折りを返し、
引き返して、熨けを掛ける。

以上袖の縫ひ方は、女衿と同様なれば、前巻の女衿を参照せられ

たい。
(ニ)襦。

(イ)胴接ぎ、背縫ひ、前下り、前假綴ち、衿付け等は、男衿羽織に同
じ。

乳の付け方は、女綿入羽織に同じ。

(ロ)後襦付け及び、後身入つ口縫ひ。後襦にて後襦を拵みて、男衿
羽織の如く、襦丈の終りまで縫ひ、こゝにてよく糸ごめをな
し、其糸にて身入つ口を縫ふ(身入つ口は、女衿の如く、襦の終
りの糸ごめをした所より、五厘縫ひこみの方によりたる所
で、一針返して縫ひ始め、袖付け標の所の、やはり五厘縫ひ込
みの方によりたる所まで縫ひ、抄ひごめをして表返す)。

注意 裾口に、真綿、或は布を入れる場合には、背縫ひ、後襦附
けごも、二三寸の間、表裏別々に縫ふ事、男衿羽織に同じ。

(ハ) 前襠付け、及び前裨八つ口縫ひ。前裨の表裏にて、前襠を挟みて、裾口より襠丈の終りまで、四つ縫ひになし、こゝにて糸ごめをして、其糸で續けて前身八つ口を縫ふ事、後襠付けに同じ。

(ニ) 袖付け、表袖の付け方。女綿入羽織に同じ。

裏袖は、前袖付け留めの上にて縫ひ残し(縫ひ合せの出来る所まで縫ふ)、折りは裨の方に返し、縫ひ残したる所より引き返し、此所を細かに絞ける。

(ホ) 仕上げ。

前の男袴羽織の時と同様、衿を袋縫ひにせぬ事もある、其時は、裏袖を全部縫ひ付ける。

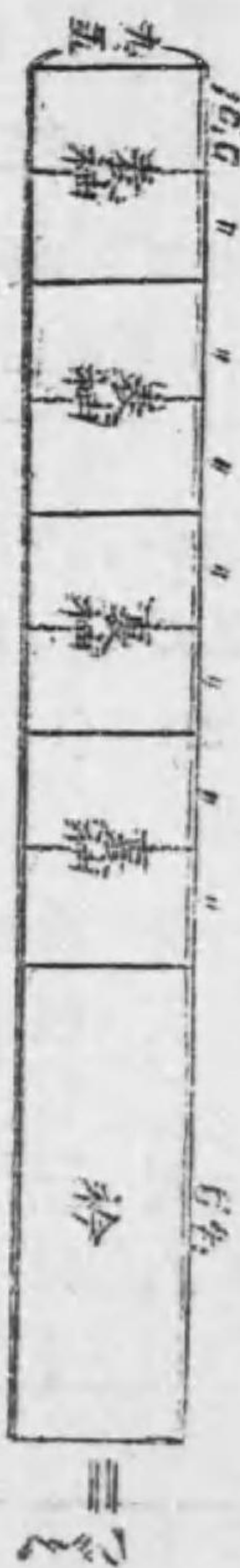
中幅、大幅、無双羽織の裁ち方積り方。

常幅の布を以て、本裁ち女無双羽織の裁ち方積り方。

仕立て上げ寸法。

袖丈、一尺六寸 身丈、二尺六寸 繰り越し五分 前下り一寸。

第三十四圖



第三十五圖



積り方公式 (上り身丈+三衿縫代+繰越×2+衿肩廻及ユルミ+前下+衿先縫代)×2=衿丈

裁切袖丈×8+裁切衿丈+(上り身丈+三衿縫代+繰越)×8+(前下+縫代)×4=

総用布

同算式 上り袖丈縫代 (16×.5)×8+(26+.3+.5×2+衿肩廻及ユルミ+前下り衿先縫代)×2+(26+.3+繰越.5)×8+(1+.3)×4=415.6

積り方公式 (用布-袖丈×4-前後差)÷2=後丈

後丈+前後差=前丈

同算式

{145 - (16. + 5) × 4 - 5} ÷ 2 = 37. 37 + 5 = 42

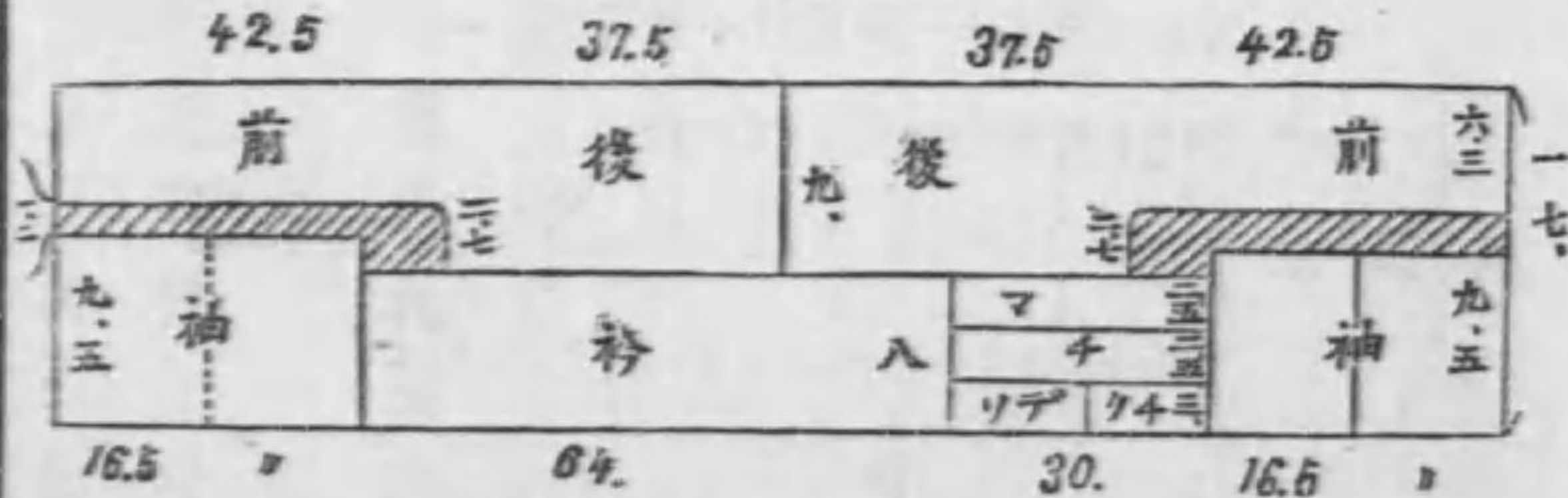
上身丈 三袴紐代 袴肩廻及ユルミ 繰越 前下 袴先紐代 袴丈
(26. + 3 + 2.7 + 3 × 2 + 1. + 1.) × 2 = 63.2

注意 袖丈の四倍が袴丈より長き時は、以上の如き積り方とし、
若し袴丈の方が長き時は、次の如くする。

(用布-袴丈-前後差)÷2=後丈

幅一尺七寸
丈一丈六尺
の布を以て、
本裁ち女羽
織の裁ち方
積り方。
仕立て上げ
寸法。
袖丈一尺六
寸身丈二尺

第三十八圖



積り方公式 (用布-前後差×2)÷4=後丈 後丈+前後差=前丈

(上り身丈+三袴紐代+袴肩廻及ユルミ+繰越×2+

前下+袴先紐代)×2=袴丈

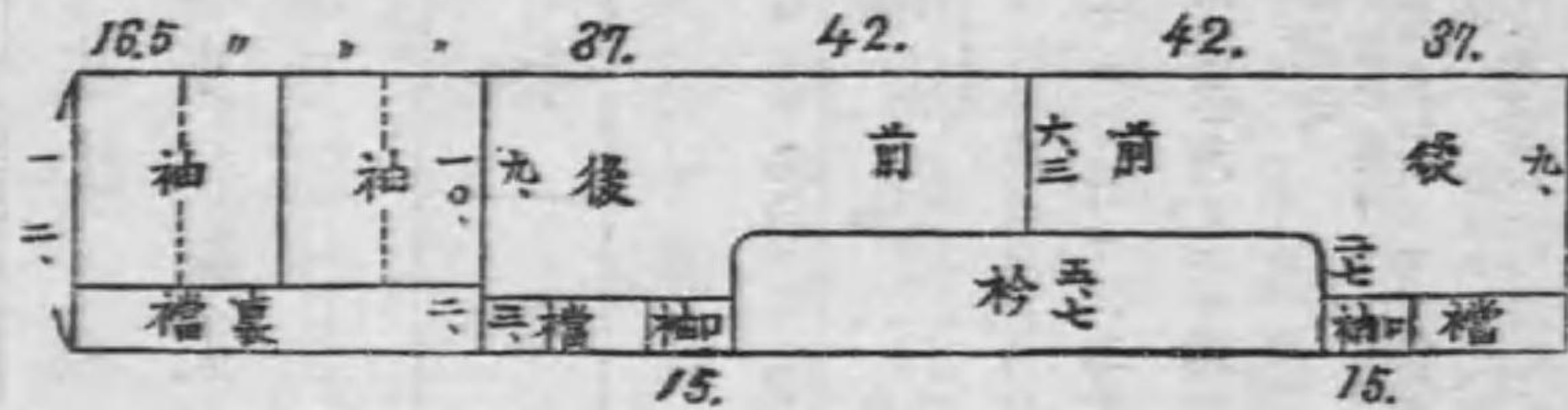
同算式

(160. - 5. × 2) ÷ 4 = 37.5 37.5 + 5. = 42.5

上身丈 三袴紐代 袴肩廻及ユルミ 繰越 前下 袴先紐代 袴丈
(26. + 3 + 2.7 + 3 × 2 + 1 + 1) × 2 = 63.2

幅一尺
二寸、丈
二丈二
尺四寸
の布を
以て、
裁ち女
袴の織
表の裁
ち方。
りち方
積り方。

第三十六圖



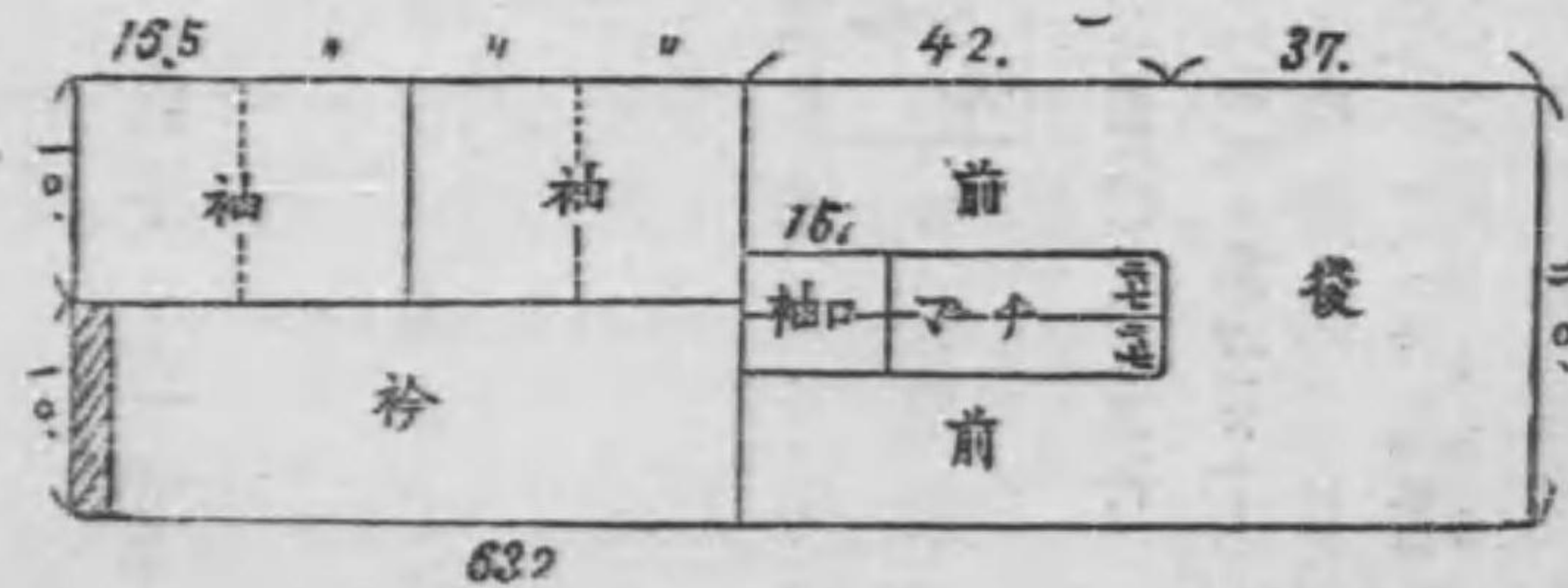
積り方公式 (總尺-(袖丈×4+前後差×2))÷4=後丈

後丈+前後差=前丈

同算式 (224 - (16.5 × 4 + 5 × 2)) ÷ 4 = 37 37 + 5 = 42

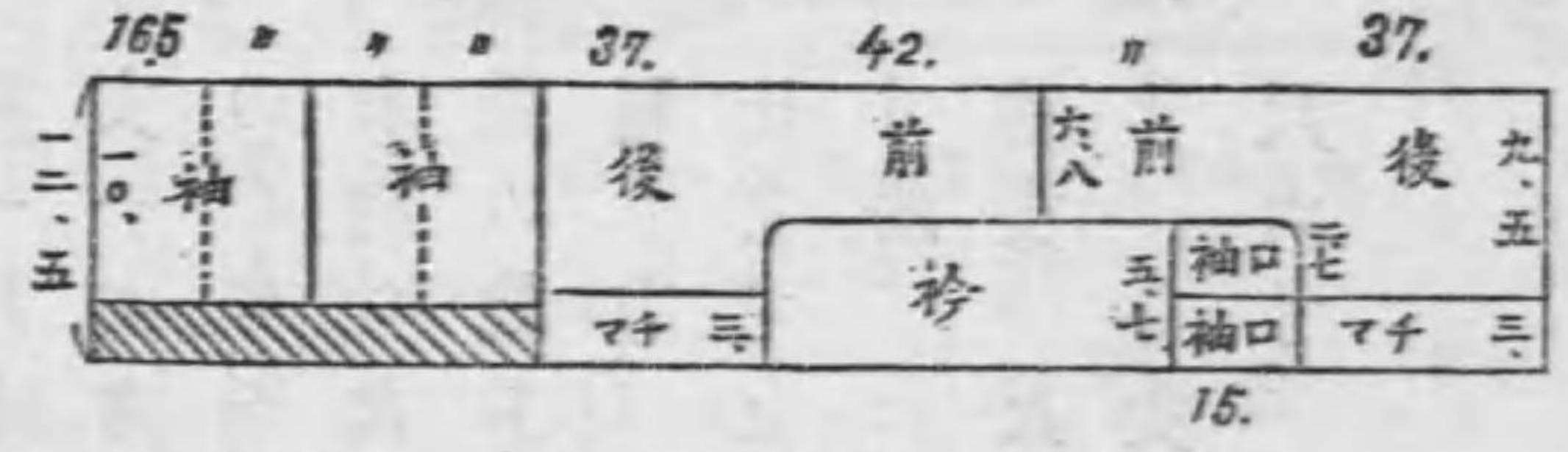
幅二尺、丈一丈
四尺五寸の布
を以て、本裁ち
羽織の裁ち方
積り方。
仕立て上げ寸
法。
袖丈一尺六寸
繰越し三分
身丈二尺六
寸前下り一

第三十七圖



幅一尺二寸五分、丈二丈二尺四寸の布を以て、本裁ち羽織の裁ち方積り方。
仕立て上げ寸法。
袖丈、一尺六寸
身丈、二尺六寸
前下り一寸
繰り越し三分。

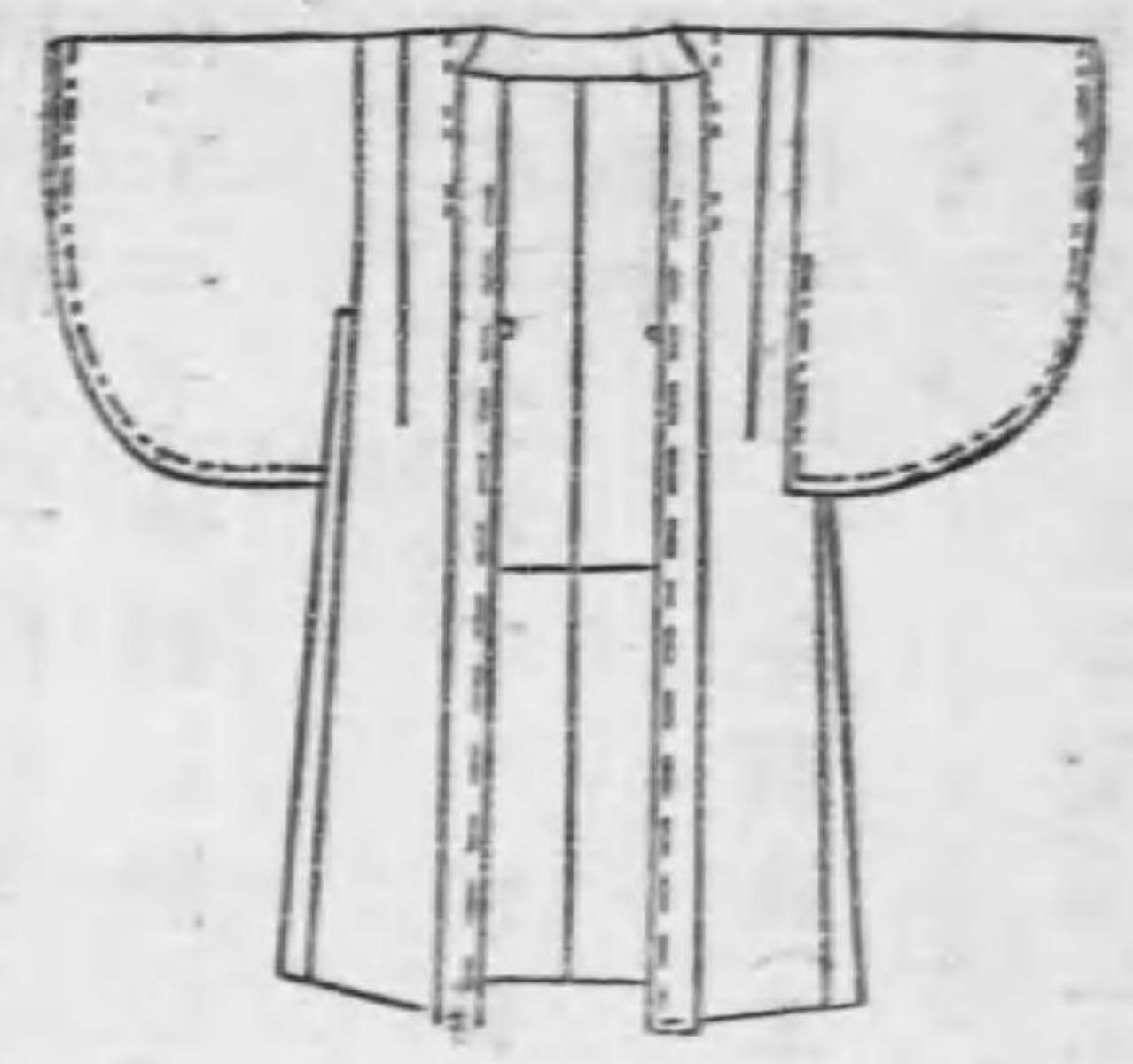
第三十九圖



積り方公式 (用布-袖丈×4-前後差×2)÷4=後丈
 後丈+前後差=前丈
 (上り身丈+三衿縫代+衿肩廻及ユルミ+前下繰越×2+衿先の縫代)×2=衿丈
 同算式 $(224.-16,5 \times 4 - 5 \times 2) \div 4 = 37$ (後丈) $37 + 5 = 42$ (前丈)
 $(26 + .3 + 2.7 + .3 \times 2 + 1 + 1) \times 2 = 63.2$ (衿丈)

中裁ち及び小裁ち
 中裁ち(四つ身)。

第四十圖 前



第四十一圖 後



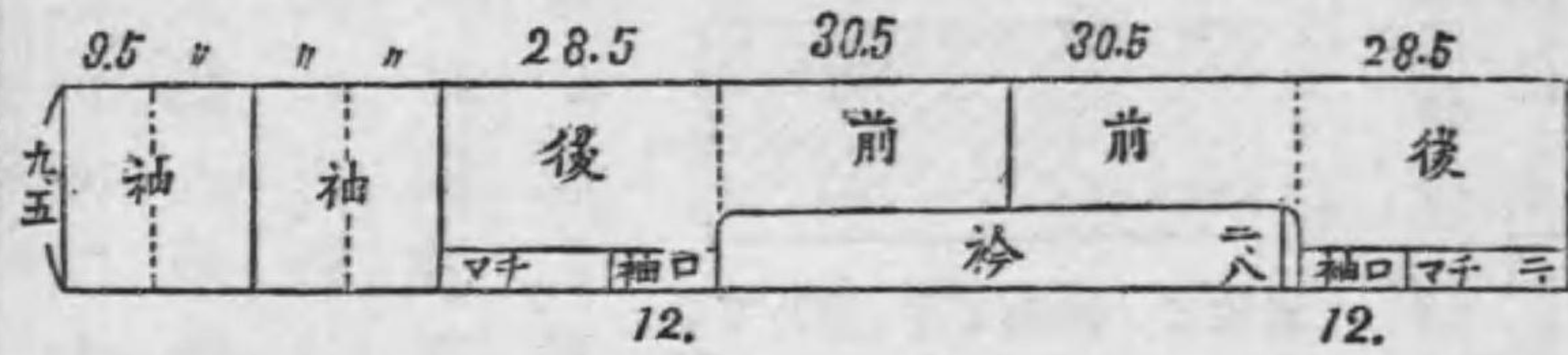
大人物、子供物を通じて、名稱、形式は、大體同じである。
 用布、表、裏、袂袖 一丈七尺より、二丈 筒袖、元祿袖、一丈四尺より一丈六尺。

裏、裏、袂袖 一丈一尺内外 筒袖、元祿袖九尺内外。
 普通仕立て上げ寸法(着物の寸法により、凡次の如く増減する)。

中裁ち及び小裁ち

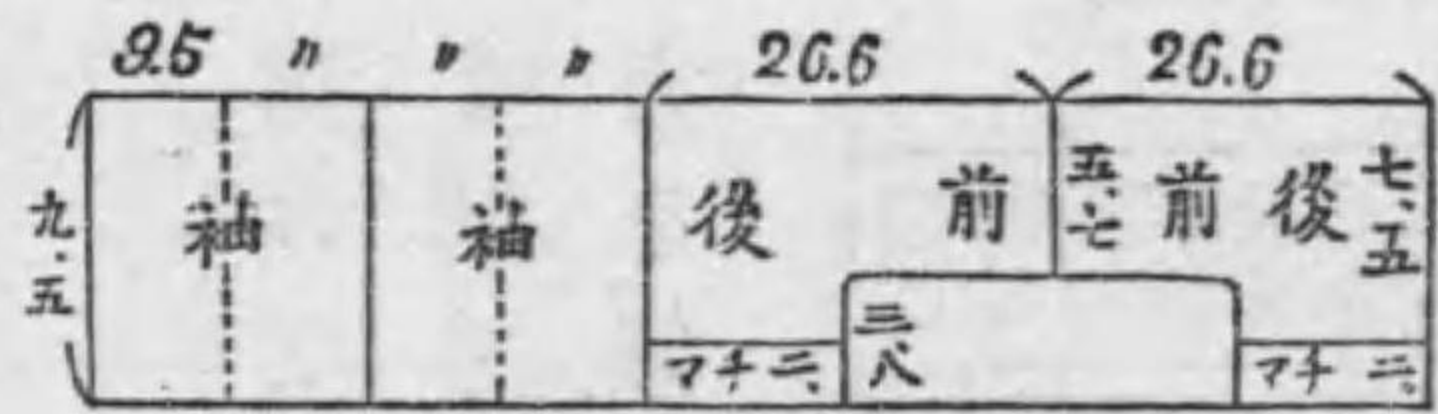
明き一寸八分前後の差二寸

第四十二圖



積り方公式 袖丈×4+後身丈×4+前後差×2=總尺

同算式 $9.5 \times 4 + 28.5 \times 4 + 2 \times 2 = 156$



第四十三圖

積り方公式 (上り袖丈×8+上り身丈×8+總縫代)-表用布=裏用布

同算式 $(9 \times 8 + 29 \times 8 + 15.2) - 156 = 91.2$

總縫ひ代

袖 胸 三 線 前	接 衿 縫	下 代 越	5×8	} 15.2
			5×8	
			2×8	
			2×8	
前下及び縫ひ代			1×4	

同裏の裁ち方積り方。仕立て上げ寸法。袖丈、九寸 身丈、二尺。

標附け方。袖。前卷四つ身綿入參照。本裁ち、女綿入羽織に同じ。仕立て方。袖。元祿袖故、袖の丸みの大ききの

巾裁ち及び小裁ち

四五

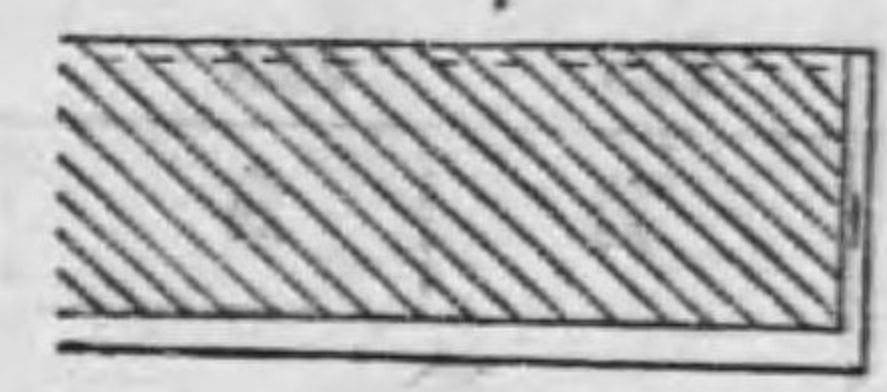
- (1) 袂袖。袖丈、同寸 袖口、同寸 袖附け、二分多く 袖幅、二分廣く 身丈、二尺内外 身入つ口、三分減ずる 後幅、いつばい 肩幅、いつばい 前幅、四寸二分内外 前下り、五分、より八分 衿肩明き、一分を増す 乳下り、七寸内外 襷、上五分 下一ばい 衿幅、一寸四分内外 繰り越し二分。
 - (2) 元祿袖、袂袖の一種なれば、袖丈短きのみにて、他の寸法の割り合ひは、すべて袂袖に同じ、但し丸みの標は、丈幅共に二分多くする。
 - (3) 筒袖、袖丈、三分増す 袖口明き、二分五厘より、三分増す 袖附け、二分増す。
- 並幅の布にて、四つ身羽織(元祿袖)表の裁ち方積り方。裁ち切り寸法。
- 袖丈、九寸五分 後身丈、二尺八寸五分 衿幅、三寸八分 衿肩

違ふばかりで女綿入羽織に同じ(前卷四つ身綿入参照)。
 裨。女綿入羽織に同じ。
 綿の入れ方、紵け方、衿付け等、すべて女綿入羽織に同じ。
 但し衿は、幅狭き故、衿幅と同寸位の芯布を表布に合せて、芯布の
 つれない様に、衿付けの方を、躰け糸にて綴ち付け、圖の如く折る。

第四十四圖

衿の折り方

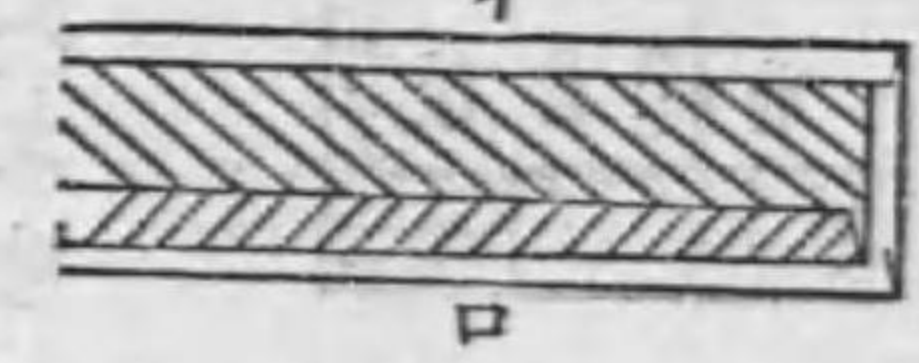
イ



表衿と、芯布とを、重ねて、
 衿附(イ)の方より、一分五厘
 の所を、躰けでおさへる。

第四十五圖

イ



(イ)を三分内側に折る
 (ロ)を衿幅の二倍より、五厘
 を減じたるものに折る
 芯布を(ロ)より、二分五
 厘減じたるものに、折る

第四十六圖



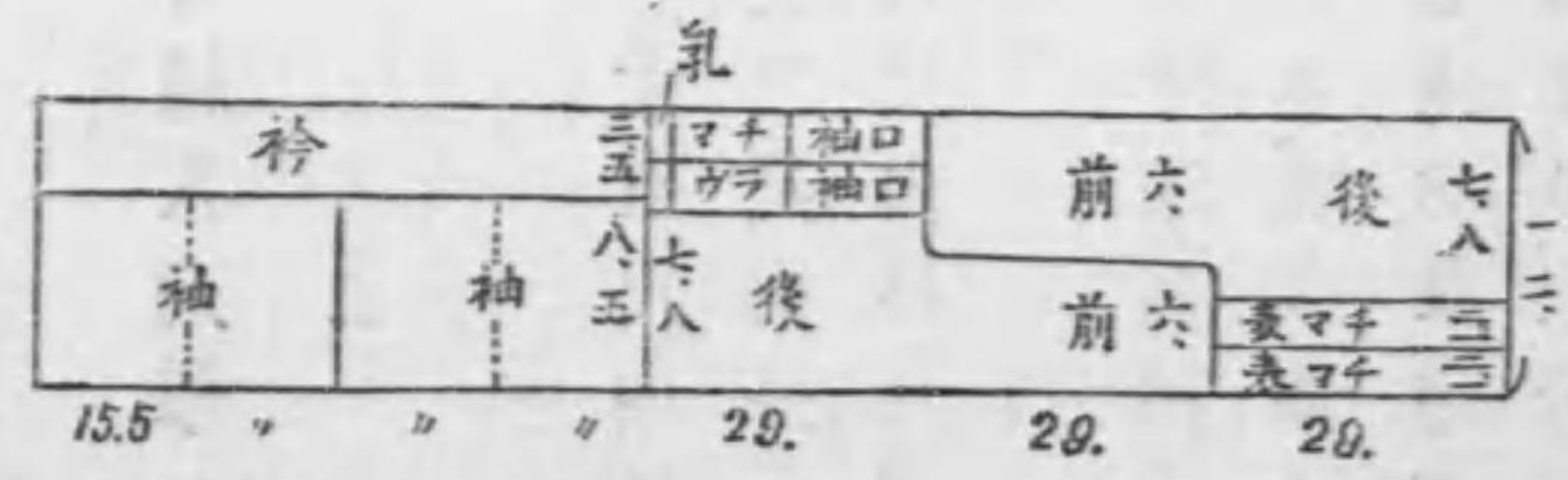
(イ)より五厘を減じて幅を二
 つに折る

肩揚げ。

肩山にて、肩幅を二等分して、揚げの山とし、そこより揚げの寸

法の二分の一をつまみ、前は山
 を三分程袖付けの方によせ、袖
 付けの止まりより、五六分上つ
 た所までこし、後は肩山の位置
 を真直に、袖付けまで通し、二本
 糸にて二目落しをなす、但し肩
 山にては中央及び前後に小針
 を出す。
 各種裁ち方。
 両面中幅物にて、裁ち方及び積り方。
 裁ち切り寸法。
 袖丈、一尺五寸五分 後身丈、二尺
 九寸。

第四十七圖



積り方公式 袖丈×4+後身丈×3=總尺

同算式 15.5×4+29×3=149

注意。筒
 袖及び元
 祿袖の場
 合には、裏
 襠を取ら
 ずに、衿こ
 續ける。
 大幅(二尺
 物にて、裁
 ち方及び
 積り方。
 裁ち切り
 寸法。

袖丈、一尺 後身丈、三尺〇五分。

三つ身綿入羽織

各部の名稱。

四つ身に同じ。

用布、表 \parallel 袂袖、一丈五尺内外、元祿袖、及び筒

袖、一丈二尺内外。

裏 \parallel 袂袖、八尺内外、元祿袖及び筒袖、五

尺内外。

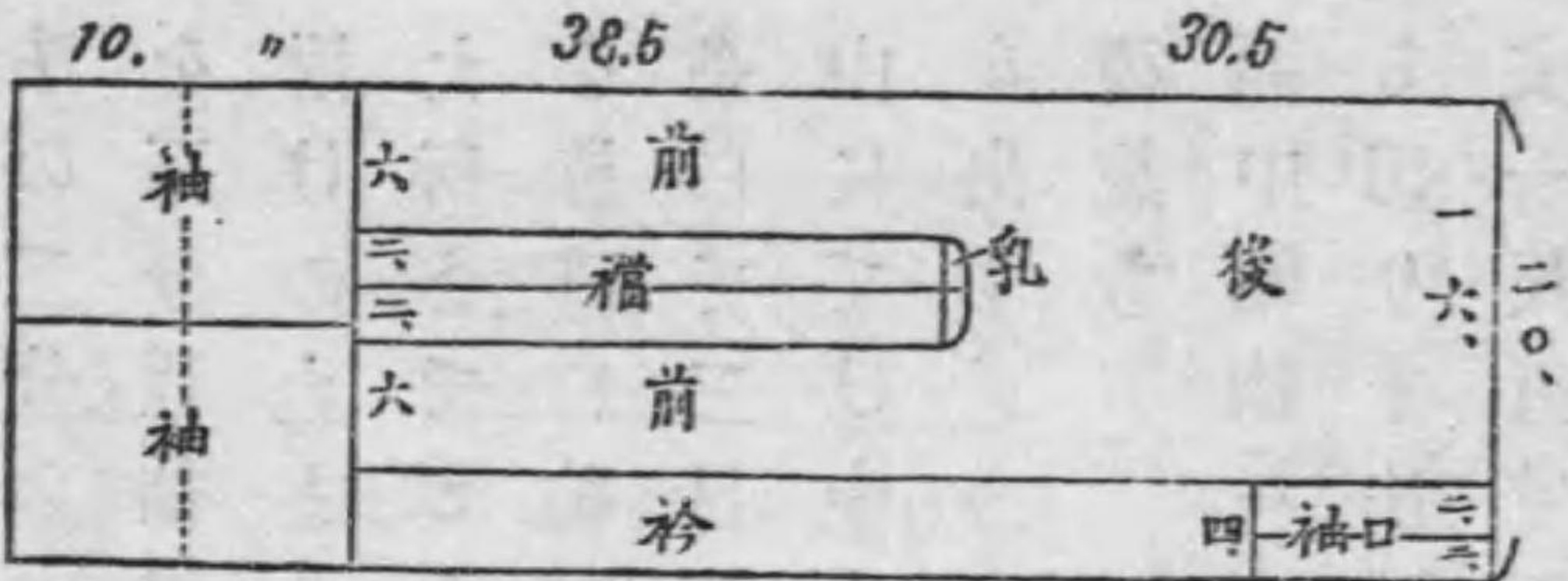
普通仕立て上げ寸法(筒袖)。

着物の寸法により、次の如く増減する。

袖丈、下に着するものより二分長く、袖口、

下に着するものより二分長く(袂袖、元祿袖

第四十八圖

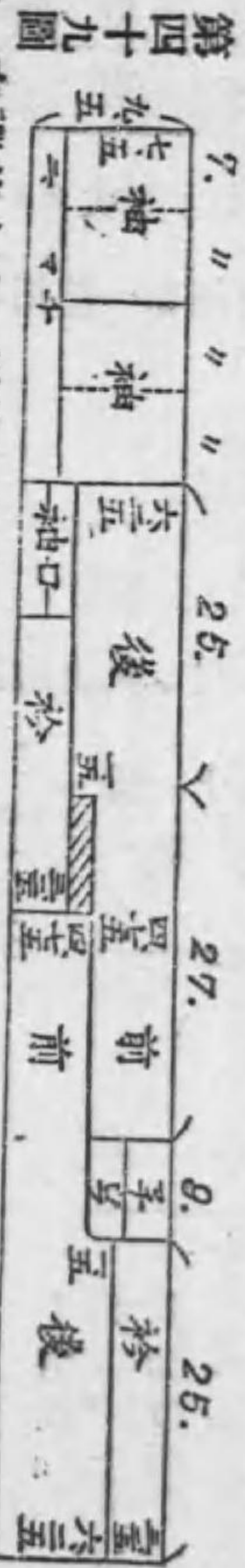


積り方公式 袖丈 \times 4+後身丈 \times 2+前後差=總尺

同算式 $10 \times 2 + 30.5 \times 28 = 89$

の場合には同寸) 袖付け、下に着するものより二分多く 袖幅、
 一二分廣く(七寸内外) 身丈、一尺六寸内外、身八つ口二寸 後幅、
 いつばい 肩幅、いつばい 前幅、四寸 前下り、五分内外 衿肩
 明き、一寸三分 乳下り、六寸内外 襠幅、上五分、下いつばい 衿
 幅、一寸二分 繰り越し、二分。
 常幅の布にて、三つ身、筒袖羽織、表の裁ち方、及び積り方。
 裁ち切り寸法。

袖丈、七寸 身丈、二尺五寸 前後の差、二寸。



備考 友禪若くは、新等の場合には、袖口布を横に取つてよい。

積り方公式 袖丈 \times 4+後身丈 \times 3+前後の差+ムダ布=總尺

同算式 $7 \times 4 + 25 \times 3 + 2 + 0 = 114$

三つ身綿入羽織

同裏の裁ち方、積り方。



積り方公式 (上り袖丈×8+上り身丈×6+總縫代+ムダ布)-表用布=總用布

總縫ひ代

袖 胸 三 線 前	下 接 衿 越 下	5×8	} 11
		5×6	
		5×6	
		2×6	
		8×2	

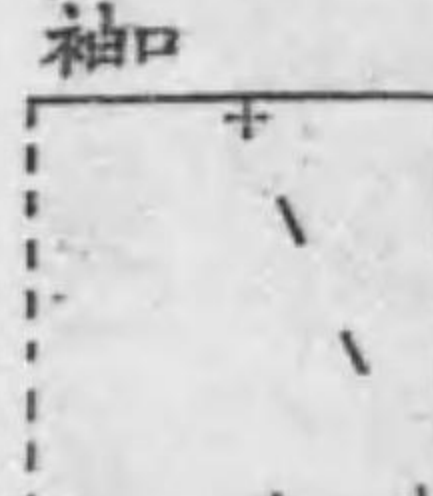
同算式 6.5×8+16×6+11+9-114=54

第五十二圖 裏袖



1. 山標
2. 丈、表より一分つめる
3. 袖口、上り寸法
4. 丈標で幅を附けて、袖下の標を附ける
5. 袖附
6. 袖口布の縫代

第五十一圖 表袖



1. 山標
2. 丈、(上り寸法に、二分を加へる)
3. 袖口明(上り寸法に、一分を加へる)
4. 丈標で袖幅を附けて、袖下の標を附ける
5. 袖附

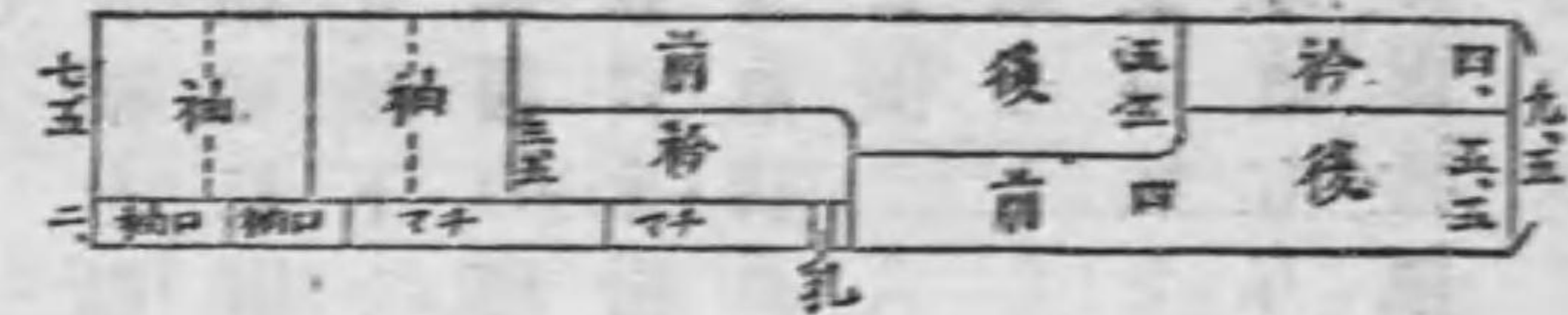
(一)袖。 標の附け方。

二三裨、及び襠の標附け方、衿の折り方は、總べて四つ身と同様なれば略する。

縫ひ方。

- (イ) 表袖を標通りに縫ひ、表返して、袖口、袖下共に躰けを掛ける。
- (ロ) 裏袖に袖口布を掛け、口先は、袖口布のつる様にして躰けを掛け、袖下を縫ふ。
- (ハ) 袖幅の標を附け、振り八つを表裏縫ひ合せ、綿を含め、表返して躰けを掛ける事、元祿袖に同じ。
- 其他裨の縫ひ方、綿の入れ方、紵け方等、總べて四つ身に同じ。
- 尙振り八つは縫はずに、表裏別々に袖を附けて、綿を含め置き綿を入れてから、紵けてもよい。
- 裏の裁ち方圖にて、地質により、残り布を衿芯ごしてもよい。
- 表地裁ち方。
- (イ) 片面常幅物にて、短袖の裁ち方。

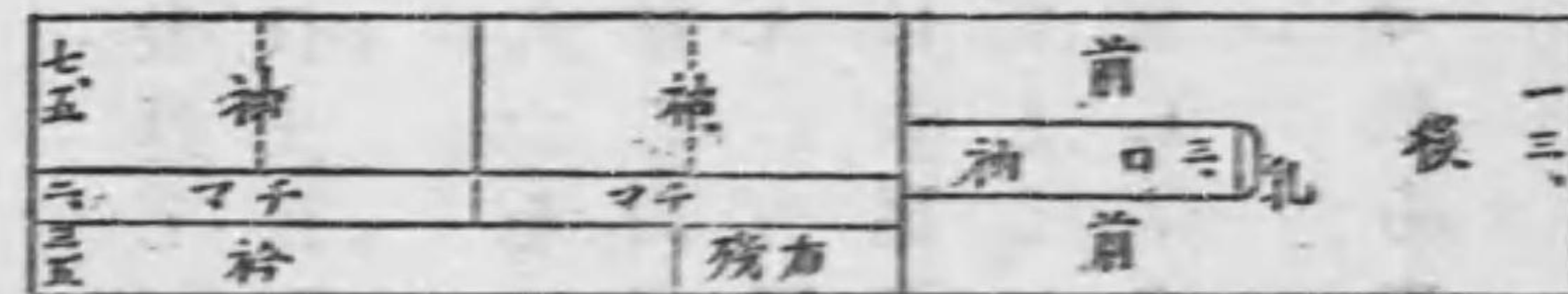
第五十三圖



積り方公式 袖丈×4+身丈×3=總尺

。方ち裁の袖長てに物幅中(口)

第五十四圖



積り方公式 袖丈×4+身丈×2=總尺

方。 び ち 袖 織 つ に 二 物 (ハ) 積 方 の 元 身 二 一 片 及 裁 祿 羽 寸 寸 幅 尺 面

第五十五圖

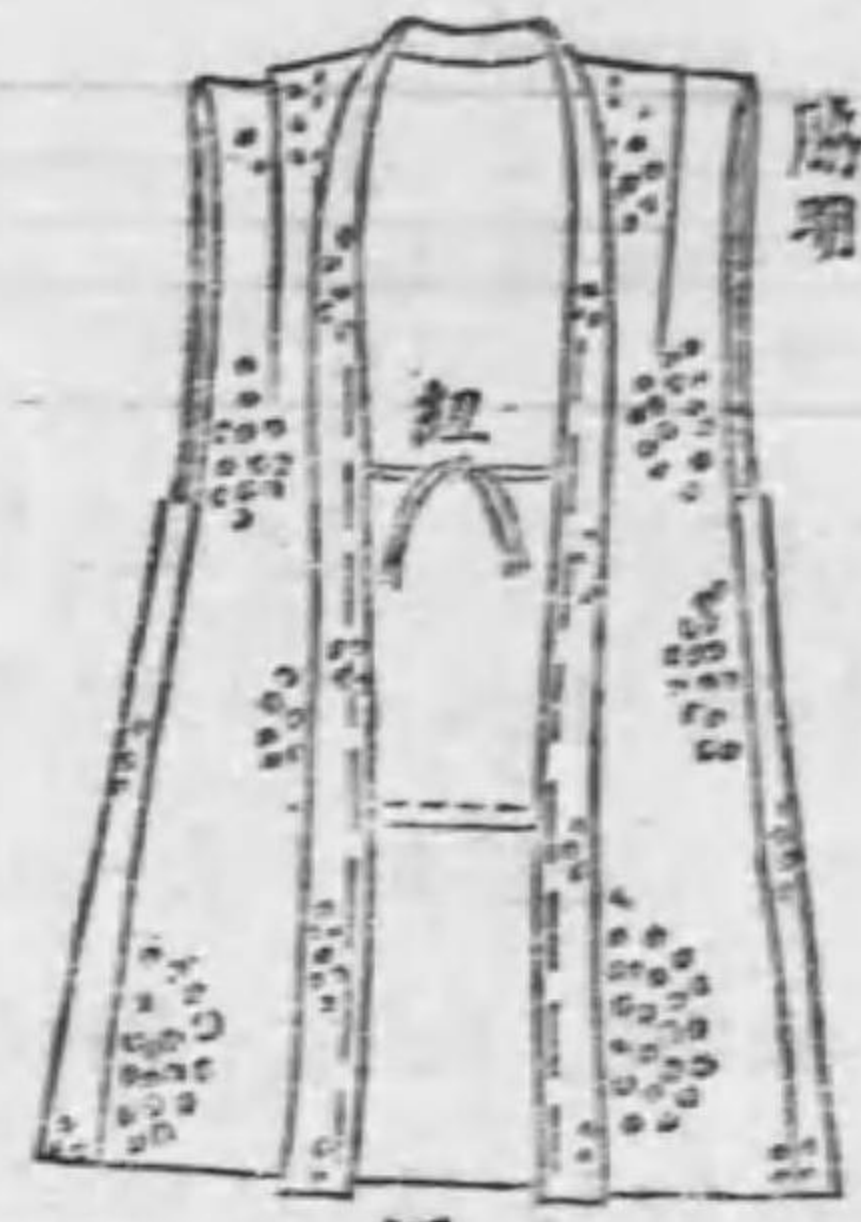


積り方公式 袖丈×4+身丈×5=總尺

各部の名稱。

小裁ち一つ身袖無し羽織

第五十六圖



越し、一分五厘、
よろしい。
常幅、長さ六尺の布にて、
裁ち切り寸法。

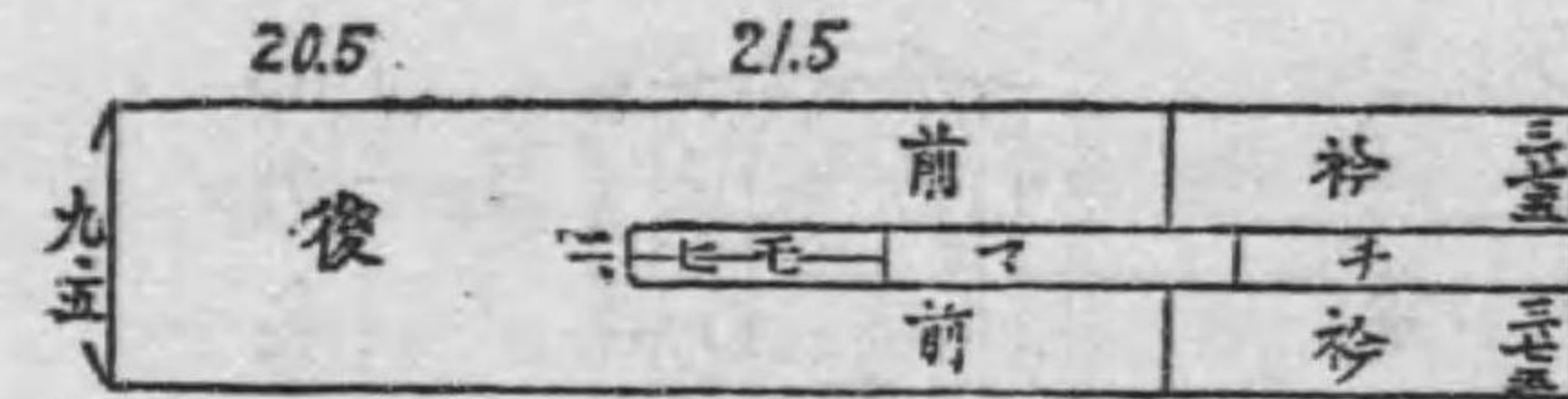
小裁ち一つ身袖無し羽織

用布、表、六尺内外 裏、二尺内外。
普通仕立て上げ寸法。

身丈、一尺五寸 後幅、いっばい 前幅、
いっばい 襷、上、八分より一寸、下、一ば
い 衿肩明き、一寸、 衿幅、一寸 紐附
け、五寸五分 脇明き、五寸五分 繰り

身丈、一尺五寸上り
し。
衿肩明き、一寸
前後の差、一寸
前下りな

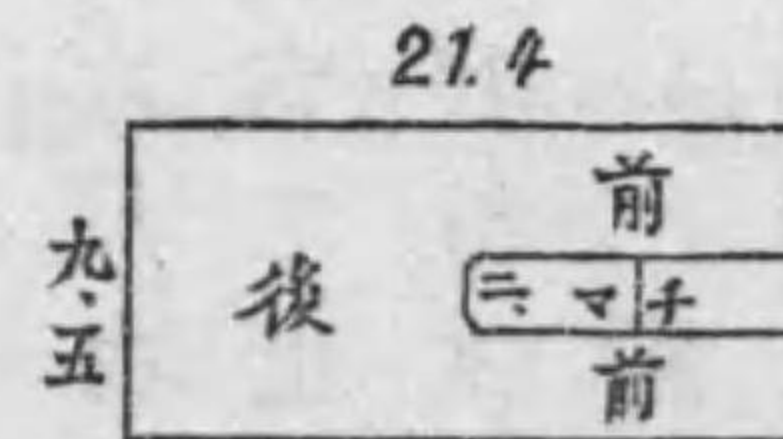
第五十七圖



積り方公式 衿丈の積り方 上り身丈 + 三衿縫代 + 衿肩明 + 繰越 × 2 + 衿先縫代及接代 = 衿丈 (總用布 - 衿丈 - 前後の差) ÷ 2 = 後身丈 後身丈 + 前後の差 = 前身丈

同算式 $15 + .2 + 1 + .15 \times 2 + 1.5 = 18$ (衿丈)
 $(60 - 18 - 1) \div 2 = 20.5$ (後丈) $20.5 + 1 = 21.5$ (前丈)

第五十八圖



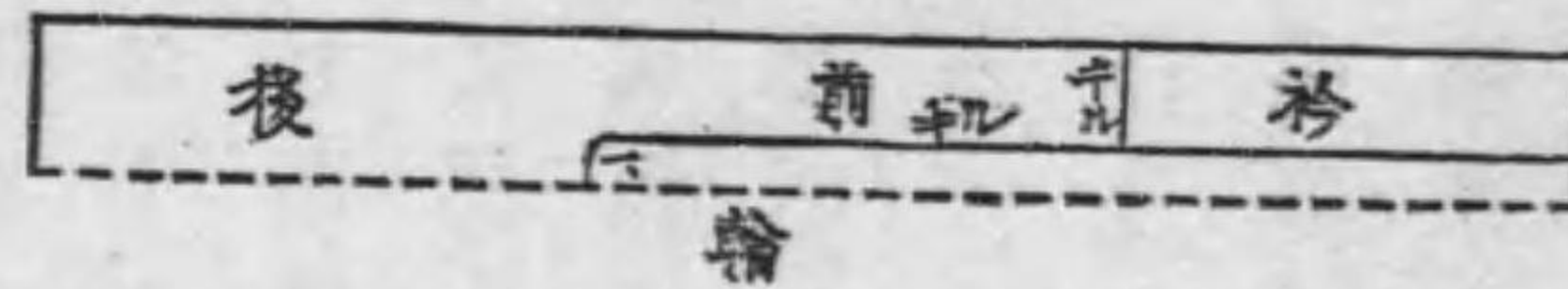
積り方公式 上り身丈 × 5 + 總縫代 - 表用布 = 裏用布

同算式 $15 \times 5 + 6.4 = 81.4$ (總縫代)
 $81.4 - 60 = 21.4$

總縫代 { 衿 1
 肩 .5 × 4
 明 .2 × 5 } 6.4
 接 .15 × 6
 衿先縫代及接代 1.5

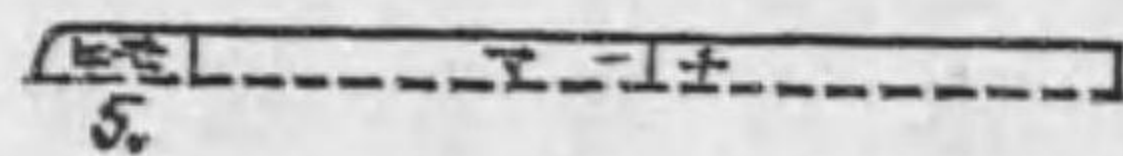
同裏の裁ち方、積り方。

第五十九圖
裁ち方分解圖



1. 後身丈を定めて衿肩明の寸法に標を附け、前衿及衿にかけて通し籠をする
2. 衿丈を定めて通し籠をする
3. 標通りに裁ち切る

前落し布



(口) 質の落附かざるものは縫ひ躰け。
 襠を接ぎ合せ、折りを襠と同様に返して、襠附けをする、附け方

標の附け方。
 襠。背縫ひなく、袖附け、身入つ口の處が、脇明きとなる外、三つ身に同じ。
 襠。襠附けは、前後共、同様の斜にする。
 縫ひ方。(前に於ける三つ身綿入羽織と異なる點)。
 (イ) 前後の胴接ぎをなす、折りは三つ身と同様裏の方に返し、二目落しに躰けを掛ける(地

は三つ身に同じ。

(ハ) 襟の上部を、一分きせの掛る様に縫ひ、裏に綿を含める。

(ニ) 脇明きの縫ひ方。脇明きの表裏にて、襟をはさみて四つごめ

をなし、それより、七八分の間にて、襜形に、表を一分縫ひ出し、裏

は五厘縫ひ入れて縫ひ、終りの方は、別の糸にて、こめ置く、裏の

方に折りを付け、表の方に綿を綴ち付ける。

綿の入れ方。

袖のないのみで、總べて三つ身、四つ身と同様。

紵け方。

(イ) 裾口、及び脇明きの綿を、正しく含めつゝ、假綴ちをする。

(ロ) 前襟の綴ちをする。

(ハ) 衿付けの處を假綴ちをする。

(ニ) 紐布を縫ひ合せ、折りを付けて表返し、真綿か、青梅綿ならば、真

綿にて、よくくるみて、紐の中に通し、紐の一方の先をとめ、襜に

て紐の位置を定め、紐を付ける、其際紐の縫ひ目は、幅の中央と

なし、男物は縫ひ目を下向きに、女物は上向きにする。

(ホ) 衿山を接ぎ合せて、兩方に開き、衿と同寸法の、新モス等を衿芯

となし、芯布を心持ちゆるみ加減にして、四つ身の如く、衿付け

の方を、躰けにておさへ置く。

(ヘ) 衿の折り方、付け方、紵け方等は、四つ身に同じ。

(ト) 仕上げ。

肩揚げの仕方。

肩幅の中央を山となし、後を真直に、前は山を二分程、脇明きの方

によせ、脇明きとまりより、五分程上から、着物と同様に、縫ひ置く。

表地の裁ち方。

常幅の布にて、衿接ぎ無しの裁ち方。

中幅の布にての裁ち方。

單羽織に就いて

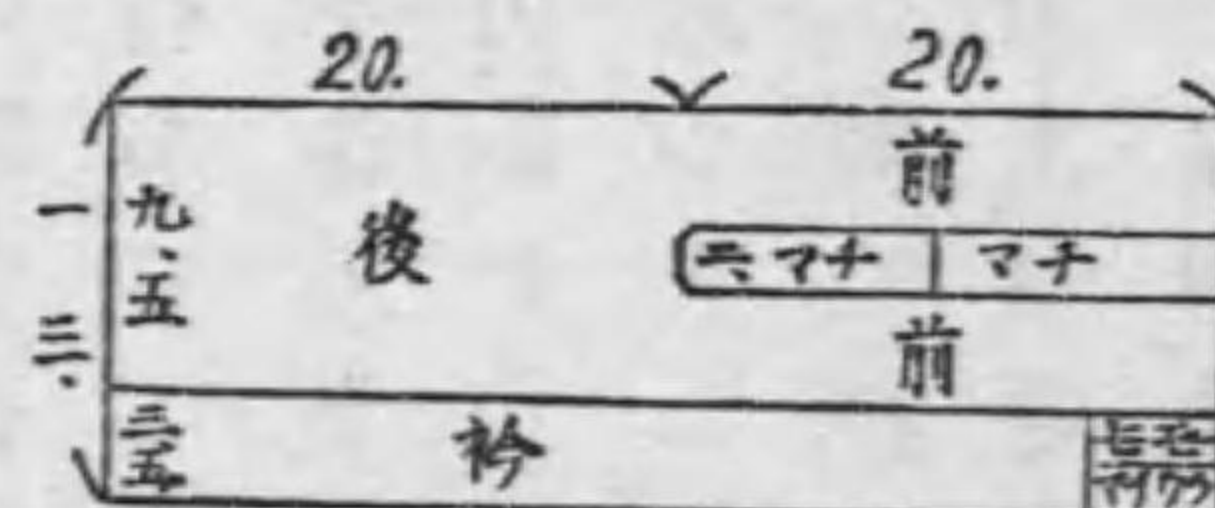
第六十圖



積り方公式 裁切身丈×3=總尺

同算式 20×3=60

第六十一圖



積り方公式 裁切身丈×2=總尺

同算式 20×2=40

紋紗を模様風に透したものの、又紹織には、肩の裏側、即肩當ての部分に、模様を織り出したものなど、頗精巧なものがある。

各部の名稱。袷羽織に同じ。地質 平紹、紹縮緬、紹御召、紗、紋紹、紗御召、紋紗、透綾、明石、銘仙。

其他薄地の絹布類、セル等の毛織物を用ひる。中でも主に用ひられるは、紹

及び紗の類である、紗織には

用ひる季節によつて、地質を選ばねばならぬ、平紹は、季節を通じて用ひられる、紗、明石は盛夏のものである、又紹縮緬、紹御召、銘仙等は、盛夏には適しない。地直し。

火加減。絹織物には、強いのはよろしくないが、特に薄地のものには、直接布には當てずに、必別布をあて、かけるやうに、注意せねばならぬ。

紹織。製織、又は仕上げのために、横紹の、曲みたるものは、布に無理を生じない程度に、裏から火熨斗で平に直す。

耳糸のつれたるもの。單衣は、縫ひ代が見えるので、なるべく、鉄を入れることを避けねばならぬ、然し甚しく耳糸のつれた時、又は紹織には、耳糸の太くて厚いものがある、これは縫ひ込みが落ちつかないので、耳を全部切りこつて、布を損じない様に、十分注

意して、平に火熨斗をかける。
裁ち方の種類。

棒襠裁ち、鈎襠裁ちの別がある、長着の棒衽裁ち、鈎衽裁ちと同様、
用布の丈の長き時は、棒襠裁ちとし、不足の時は、鈎襠裁ちとする。
仕立て方の種類。

普通仕立て。縫ひ代を、耳縮けにしたもの。

上仕立て。縫ひ代の端を折つて、縮け附けたもの。

總落とし仕立て。縫ひ代を切つて、細く撚り縮けにしたもの。

透織物に就いての注意事項。

(イ) 肩當て。附けないのが普通である、薄物を透して、肩當ての見
えるは、外見上よろしくない、衿附けの力布として、衿肩の廻り
のところだけに、附けることもある、然し又地質によつては、附
けても差支へない。

寸法 後 三寸以上、一尺三寸位。

前 一寸位短くする、長い時にも、乳下りまでを、限度とする。

(ロ) 衿芯。色。表の色によつて、芯の色を選ばねばならぬ。

幅。衿と同じく、上り衿幅から、縫ひ代を引いた寸法にするこ
ともあるが、薄地の時は、主に衿幅いつばいの寸法にする。

(ハ) 折り返し。身丈の長いのを、裾にて裏に折り返すのを云ふ、折
り返し上り幅は、凡二寸五分、三寸五分位を適度とする。

三つ折りにすることゝ、二つ折りにすることゝ、ある、地厚の布
の時(セル等)は、二つ折りにし、地薄の時は、三つ折りにする、薄地
のもので、用布短く三つ折りの幅の狭い時は、三つ折りの中で
薄い別布を接ぐ。

(ニ) 標附け。

透織の場合ひは、寸法に多少の斟酌をしても、目隙きの處に標を附けぬ様にする。

(ホ) 縫ひ方。

縫ひ目の線、又は糸留めの箇所等には、目隙きの處は、糸のしまりが悪いので、避けるがよい。

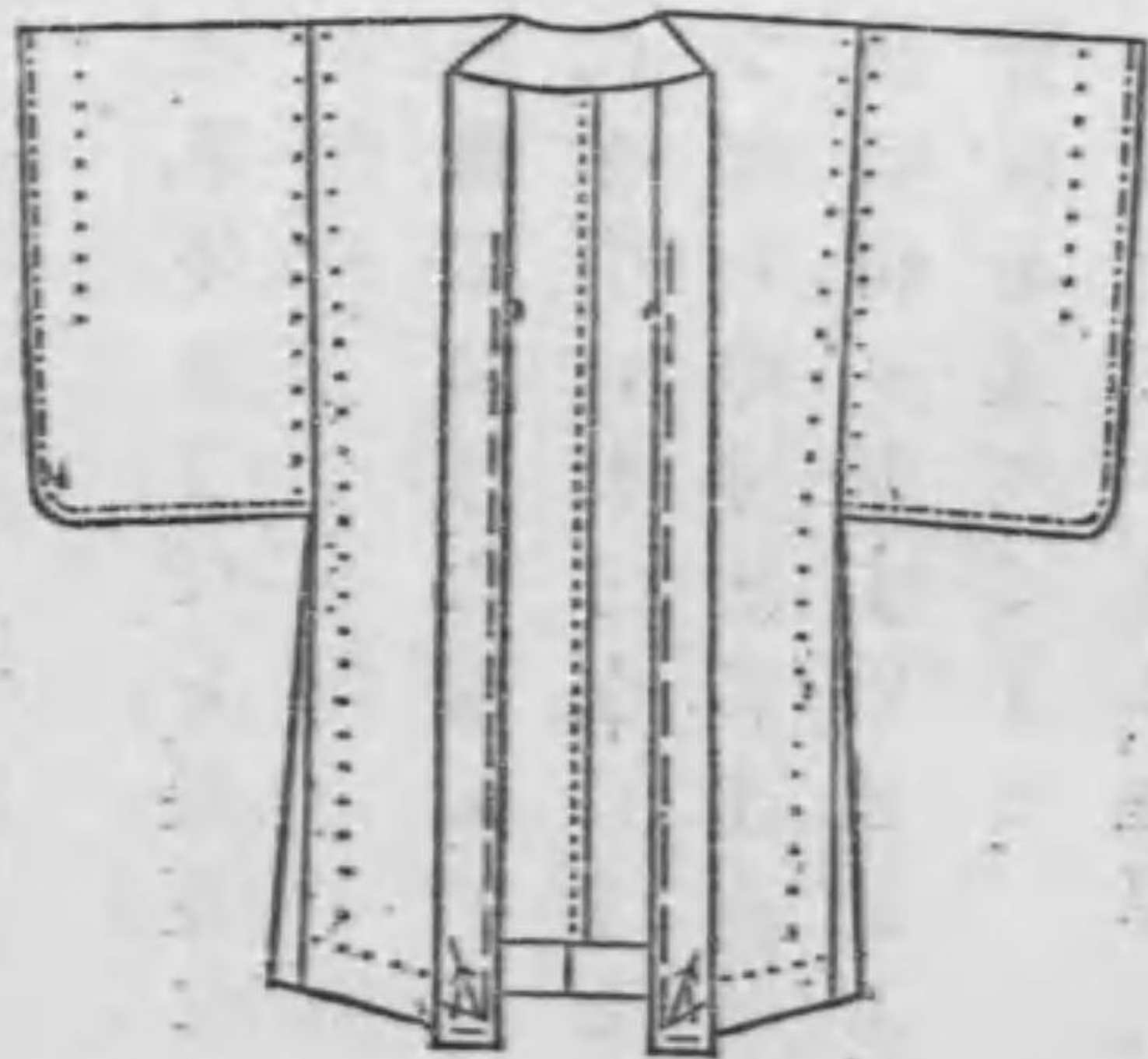
(ヘ) 折り山。

折り山は、摩れて損じ易い處であるから、なるべく、目隙きの部分に、ならぬ様にする。

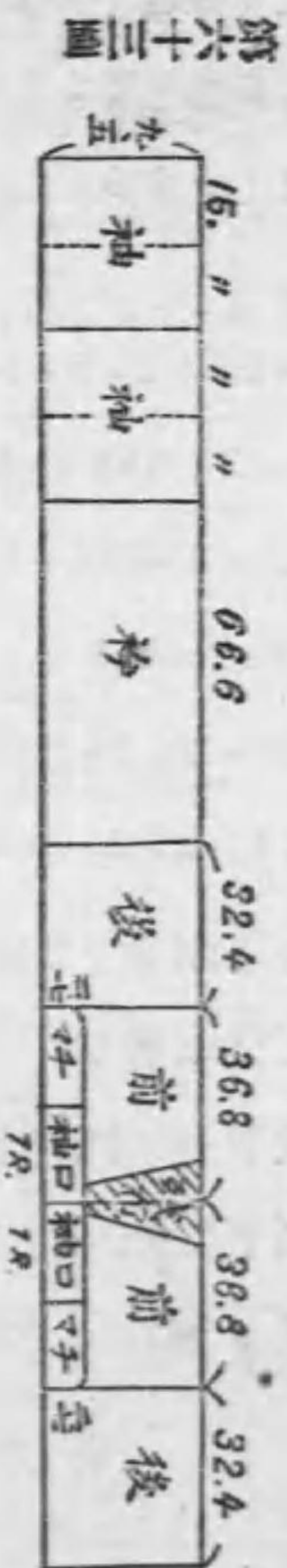
本裁ち男單羽織

常幅二丈六尺五寸の布を以て、本裁ち男單羽織の裁ち方(棒褶)。

第六十二圖



仕立て上げ寸法。袷羽織に同じ。
袖丈、一尺五寸裁ち切り 上り身丈、二尺八寸 前下り、一寸 袖口布丈、一尺八寸 袷肩明き、二寸六分、内五分の丸み 袖附け、一尺四寸 繰り越し、二分。
裁ち方、及び積り方。



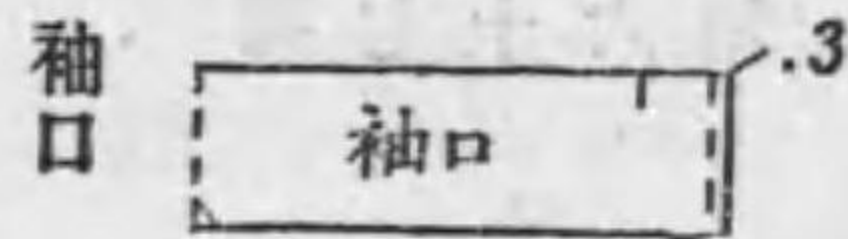
積り方公式

1. 袷 丈 (上り身丈+三つ袷縫代+袷肩廻+繰越×2+前下+袷先縫代)×2=袷丈
2. 褶の足し布 (袖口布丈-袖附+繰越+褶の上の褶代)×2=褶の足し布
3. 後身丈 (總用布-(袖丈×4+褶丈+褶の足し布))+4=後身丈
4. 前身丈 後丈+褶の足し布+2=前身丈

- 1. 山
- 2. 丈 (仕立上袖丈+.1)
- 3. 袖口明、(仕立上袖口+.1)

(ロ)袖口 左右の布を中表に合せ、丈を二つに折る

第六十五圖

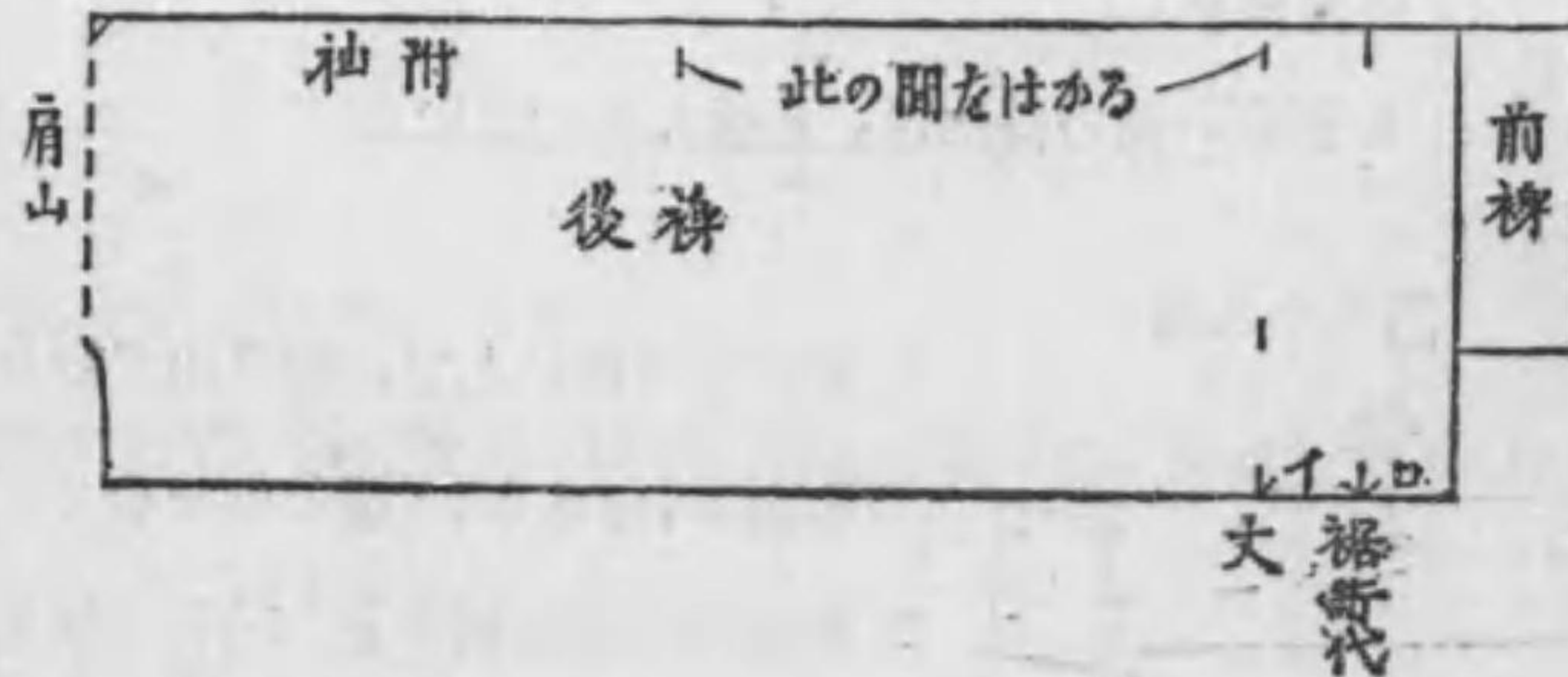


- 1. 山
- 2. 丈
- 3. 袖口明、(表袖口明標-.05)

裨。(二)

(ハ)裨 左右の布を中表に合せ、衿肩にて前裨を後に、.2 繰り越し、圖の様に置く

第六十六圖



- 1. 山
- 2. 袖附

裁切前身丈 $\begin{cases} \text{イ、後身丈} + \text{繰越} \times 2 \text{前下} = \text{衿附の處の前身丈} \\ \text{ロ、後身丈} + \text{繰越} \times 2 = \text{脇縫の處の前身丈} \end{cases}$

注意 前襦丈に多少の斟酌を要するから、裁ち切るのは、標附の後になすをよしとする。

積り方公式

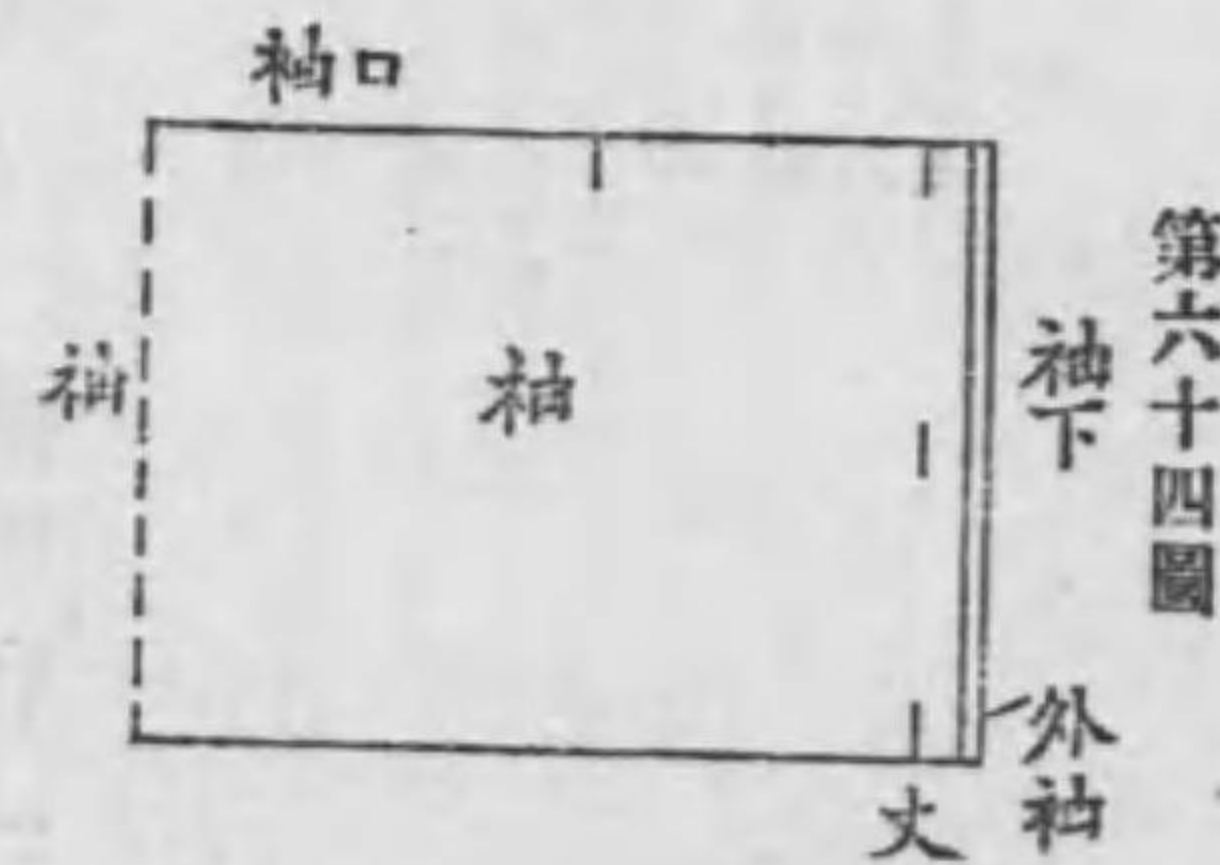
- 1. 衿 丈 $(28 + .3 + 2.6 + .2 \times 2 + 1 + 1) \times 266.6$
- 2. 襦の足し布 $(18 - 14 + .2 + .2) \times 2 = 8.8$
- 3. 後身丈 $\{265 - (15 \times 4 + 66.6 + 8.8)\} \div 4 = 32.4$
- 4. 前身丈 $32.4 + 8.8 \div 2 = 36.8$

裁切前身丈 $\begin{cases} \text{イ、} 32.4 + .2 \times 2 + 1 = 33.8 \\ \text{ロ、} 32.4 + .2 \times 2 = 32.4 \end{cases}$

(イ)袖 左右の布を中表に合せ、外袖を二分五厘(新代)長くして、丈を二つに折る。

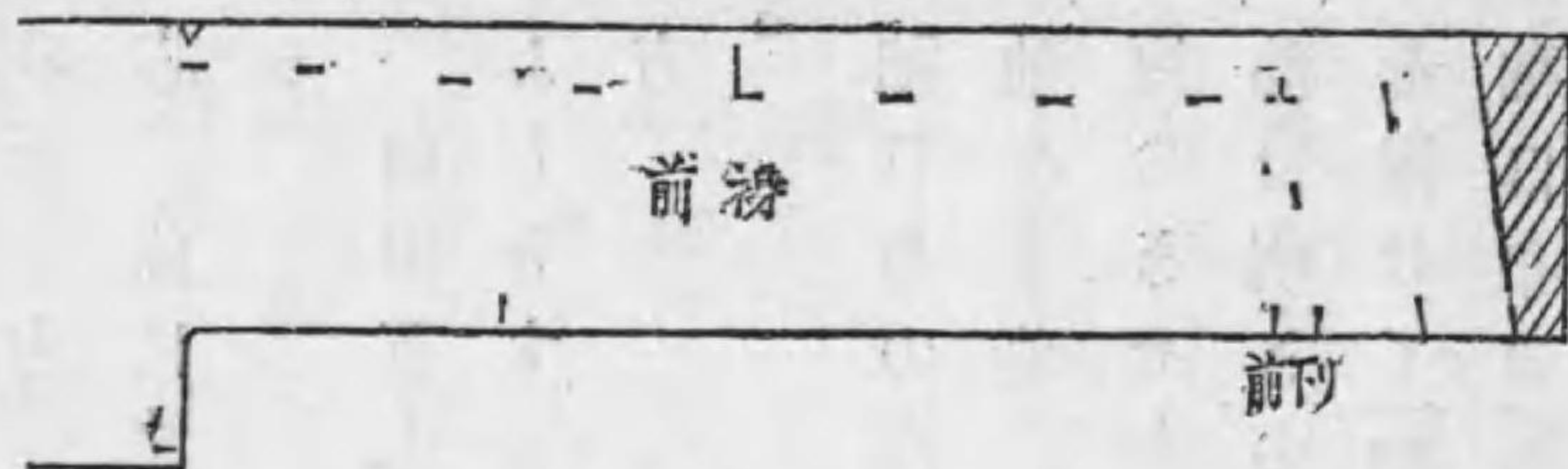
但し紋附の時は、紋下りの寸法に依つて、丈を定めるので、袖下に差を生じないこともある、此場合縫代多き時は、内袖を二分切る

(一)標の折り方。女綿入羽織に同じ。標の附け方。



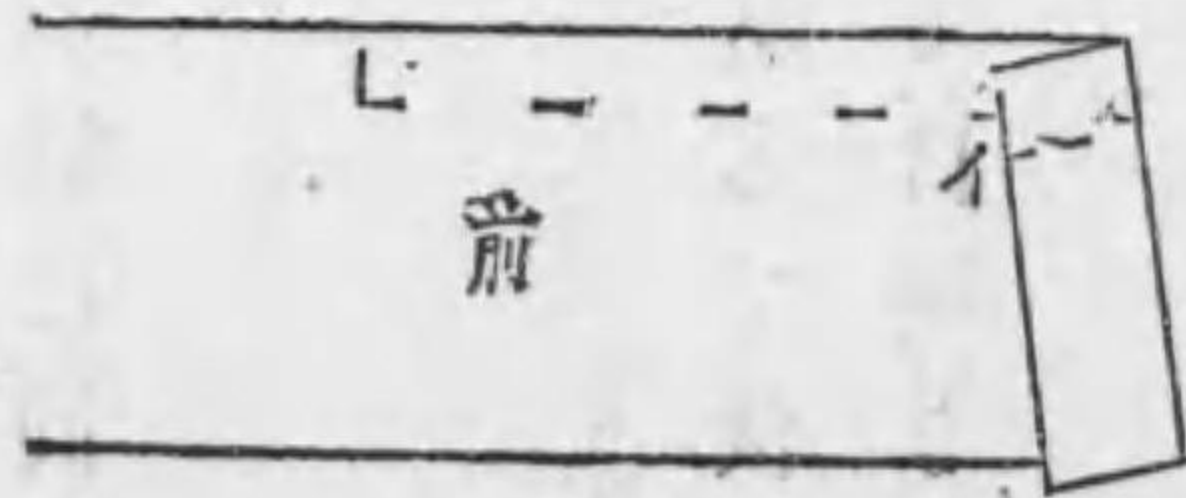
(ホ) 前下及び前幅

第六十九圖



1. 前幅 衿附の縫代と、きせと加へたものに袖附標まで付け、次に肩幅標まで斜に附ける
2. 襦附の丈 前襦丈と同様に前幅の處に附ける
3. 前下 後丈の標より裾口の方に向つて附け、次に襦丈へ當て、斜に標を附ける
4. 新代 襦と同寸法に附け、残布を裁ち落す

第七十圖

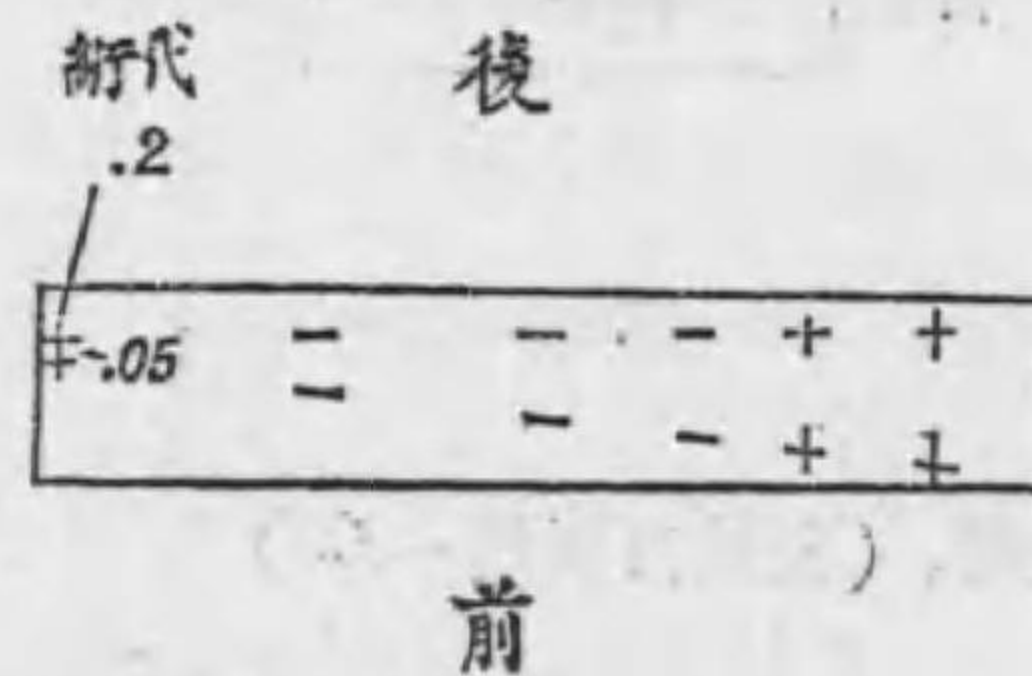


1. 裾を假に三つ折りにする
2. 折り山で、前幅標より衿附けの方に向つて、前襦ではかつた(イ)の寸法を附ける
前襦を附ける時、裾口までは、真直に附けそれよりこの標に向つて附ける

3. 丈(上り身丈+.3)
4. 新代(イよりロを、0.3位狭くする)
5. 背の縫代
6. 後襦附の丈をはかる(後袖附の標より裾まで)

(ニ) 襦

第六十七圖



1. 上部の新代 .2
2. 丈標、(襦の後襦附の丈と同じ)
3. 裾新、後襦に同じ
4. 後襦附 { 衿羽織に同じ }
5. 前襦附 { 衿羽織に同じ }
6. 裾新の處の襦幅は、前後とも一ぱい

第六十八圖



1. 裾を三つ折にして、新け山で標を圖の如く、合せる、(後の標を合せる)
2. 前襦附の標の幅の差(イ)の寸法をはかる
3. 前の襦附の處の丈の寸法をはかる

(三) 衿の折り方。衿羽織に同じ。
 (四) 衿芯。前に記したやうに、表の地質によつて幅を定めて裁ち切る。

(五) 乳。前の落とし布から取る、折り方、衿羽織に同じ(なるべく細きをよしとする)。

縫ひ方。

(一) 袖。

(イ) 袖口布の丈の標を、裏の方に折り返して、伏せ縫ひにする。

(ロ) 袖を手前に、袖口布を向うに持ちて、口明きを合せて縫ひ、五厘のきせを掛けて、袖の方に折る。

(ハ) 袖口明きの止りで、四つごめをなし、其糸で、袖口下より(丸みを付けて)袖下まで縫ひ、袖幅の標を付け、折りを附ける。

(ニ) 袖口布の、四つ留めの下を細かに縫つて縫ひ目を開き、袖の

縫ひ代に綴ち附ける(衿のやうに、四つ縫ひにしてもよい)。

(ホ) 袖口布の奥を折つて、縮け附ける(針目三四分)。

(ヘ) 袖丸を拵へ、袖下の、外袖の長き部分を折つて、針目四分位に縮け附ける。

(ト) 表に返し、折り目を正しくして、躰けを掛ける。

(二) 袴。

(イ) 背縫ひ。背を縫ひて、後幅、肩幅の標を付け、折りを附ける。背の縫ひ方。

(1) 耳糸太くて厚いものは、二度縫ひにする。

(2) 耳糸の色の變つたもの、又は切り込みを入れたもの、時は、袋縫ひにするか、又は平に折り込んで、三分位の針目に縮け附ける。

又紋の附かないものは、背の縫ひ代に、二分五厘位の差を

附けて衿肩をあけ、縫ひ代を折りて、縮け附ける事もある。

(3) 二度縫ふ處を、耳縮けの様に、縫ひ代間に大針を出だして、三分位の針目に、綴ちる事もある。

(ロ) 襠の上の方を、三つ折りにして縮ける。

後襠を向うに、後襠を手前にして、標を合せて縫ひ(裾口は縮け代の山から一針中まで、襠の方に折りを附ける。

(ハ) 乳。乳の作り方及び附け方は、衿羽織に同じ。

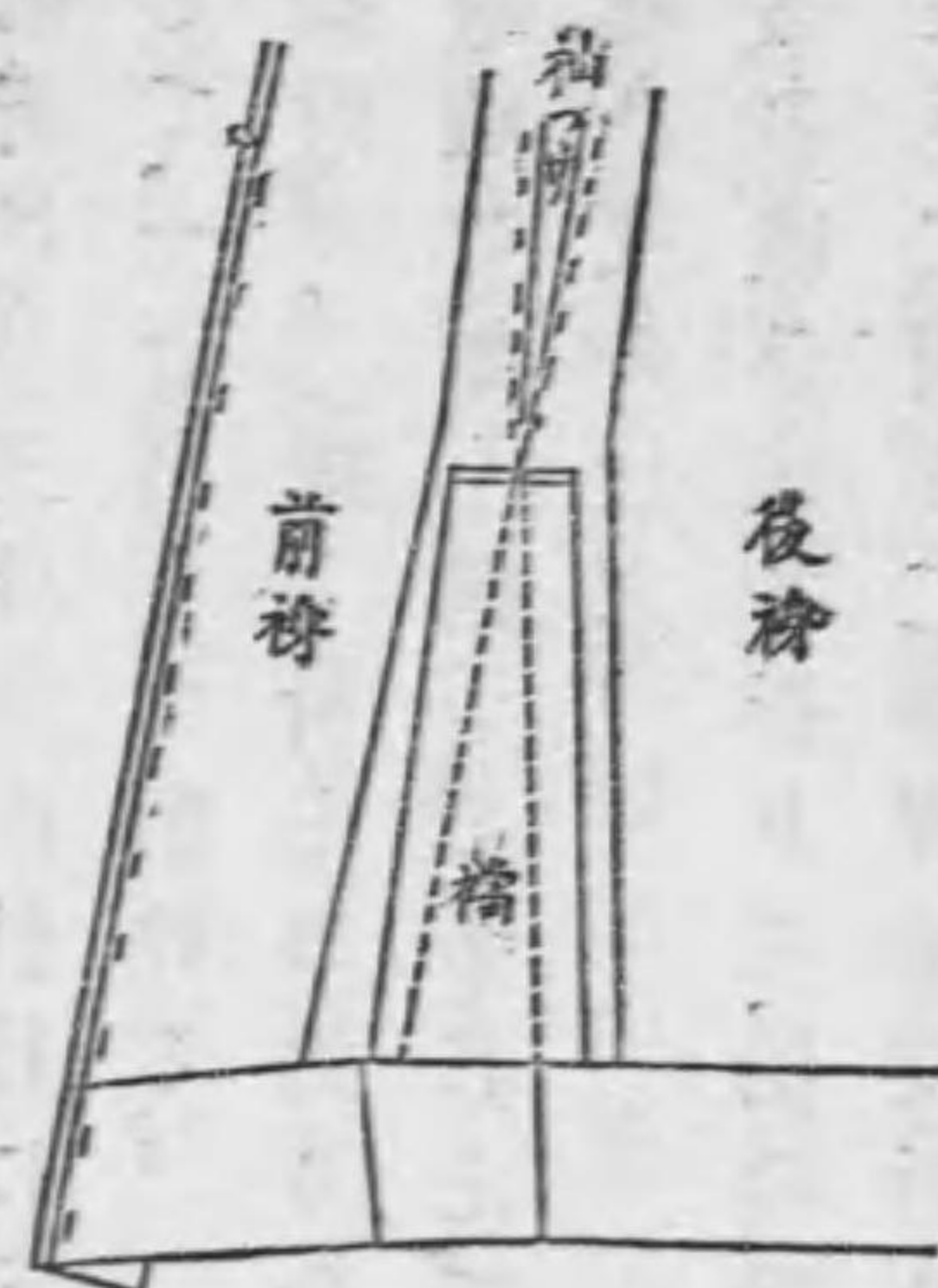
(ニ) 衿附け。衿羽織の袋附けの仕方に同じ(但し始めに三つ衿の處の裏衿の方を、標から標まで、襠の表の方に縫ひ附け、次に左右の衿を附け、三つ衿の着裏の方の明きたる處から返して縮ける、衿の時は、三つ衿の表で縮けたものを、單羽織は裏で縮ける、尙袋附けをするに、困難な地質の場合ひは、綿入の時のやうにして附ける(始めに前下りを、三つ折りにして、

躰けて綴ちて置く)。

- (ホ) 前襠附け。前襠と、前襠との標を合せて縫ひ(裾の三つ折りの山から、一針中まで縫ひ、中に入る部分は縫はぬ方がよい)、折りを附ける。
- (ヘ) 裾縮け。三分位の針目にして、各縫ひ目の際には、返し針にして、一針出して縮ける。
- (ト) 袖附け。袖と、襦との釣り合ひを見て、袖附けの留めを、綿入羽織の如く、四つごめにして附け、袖の方に折りを返す。
- (チ) 縫ひ代の仕末。
- 襠の縫ひ代を折りて、脇の縫ひ代に縮け附け置き、次に脇、袖ともに、耳を二分五厘位折りて、表の方に四分位の針目で縮け附ける。
- (リ) 仕上げ。始めに裏より、各縫ひ目に火熨斗を掛け、次に表に

第七十一圖

襟附の部分をも、裏より見たる圖

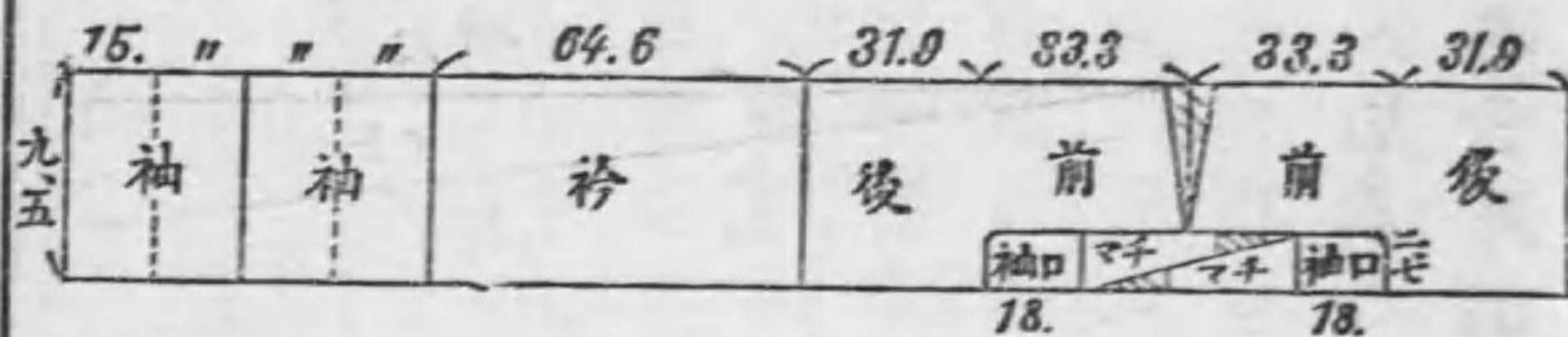


返して、全體に掛ける、表よりかける時は、直接火熨斗を布に當てず、當て布を用ひる。

常幅二丈二尺五寸の両面物を以て、本裁ち男單羽織、鈎襦裁ちの、裁ち方積り方。仕立て上げ寸法。上り身丈二尺七寸 裁ちに同じ。裁ち切り寸法。 他は棒襦

袖丈、一尺五寸裁ち切り 袖口布、一尺八寸 身丈、二尺七寸 前下り一寸 繰り越し二分。 裁ち方積り方。

第七十二圖



積り方公式

1. 衿丈 (上り身丈+三つ衿縫代+衿肩廻+繰越×2+前下+衿先縫ひ代)×2=衿丈
2. 後丈 (總用布-(袖丈×4+衿丈+繰越×4+前下×2))÷4=後身丈
3. 前丈 後身丈+繰越×2+前下=前身丈

同算式 (27+3+2.6+2+2+1+1)×2=64.6

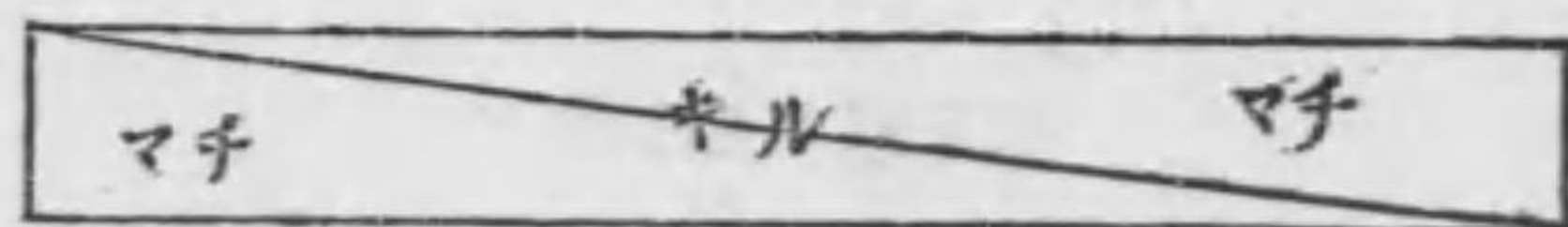
(255-(15×4+64.6+.2×4+1×2))÷4=31.9

31.6+.2×2+1=33.3

第七十三圖

棒襦と異なる點のみ示す

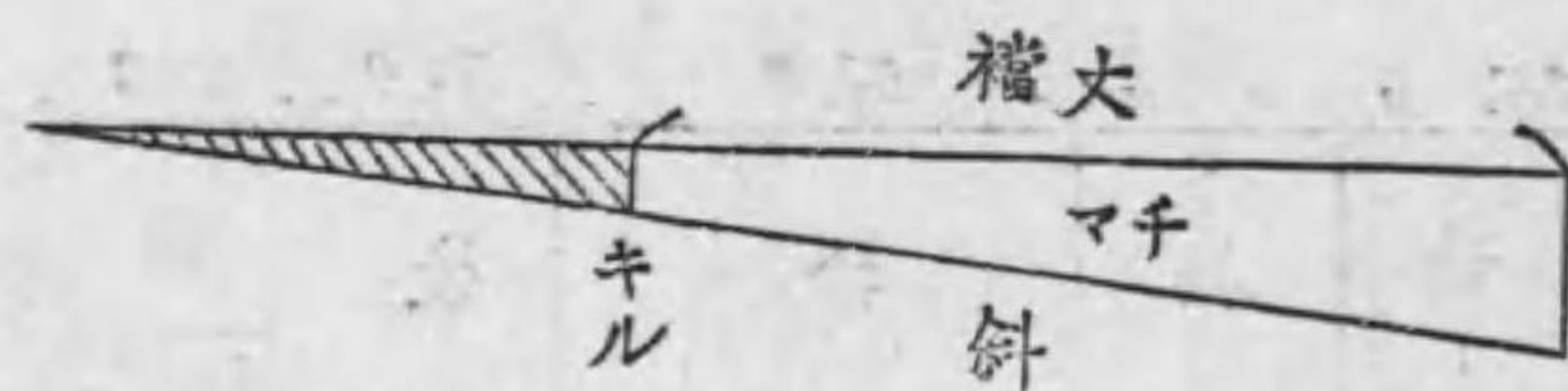
襦



1. 中央の斜線を切る

裁ち方分解。

第七十四圖



縫ひ方。
棒襷と異なる點。

2. 襟の一方を裏返しにして、圖の様に重ね、幅の廣き方から、丈を定めて切る（後の襟の襟丈に上部の縮け代を加へたものを、襟の裁ち切りとする）

棒襷と異なる點のみを示す

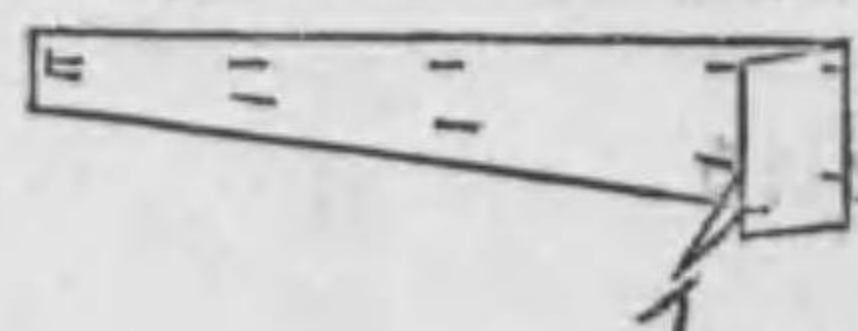


第七十五圖

標附け方。

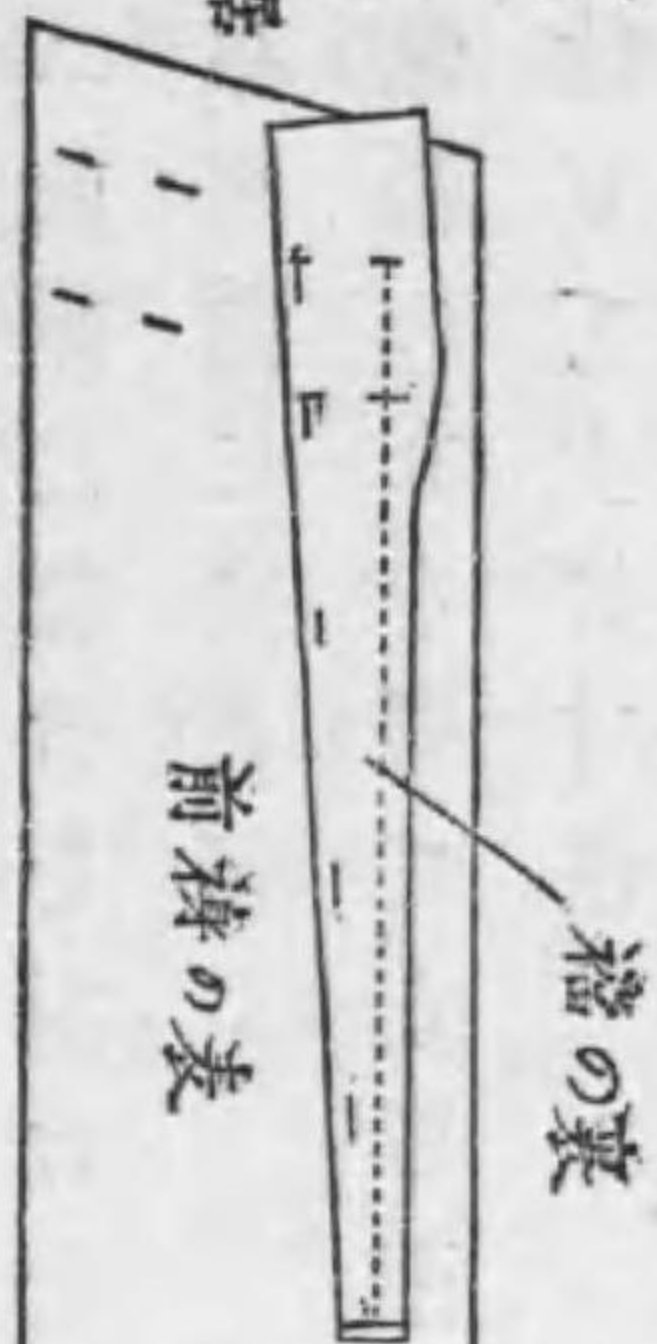
1. 上部の縫代 2. 丈標 3. 裾縮
4. 前襷附 前即斜の方の縫代を、3として、圖の様に標する
5. 後襷附 前の標から上部及裾口の幅を定めて後襷附けの標をする（但し三つ折の山の處は2と標をする）他は棒襷に同じ

標を終りたる圖

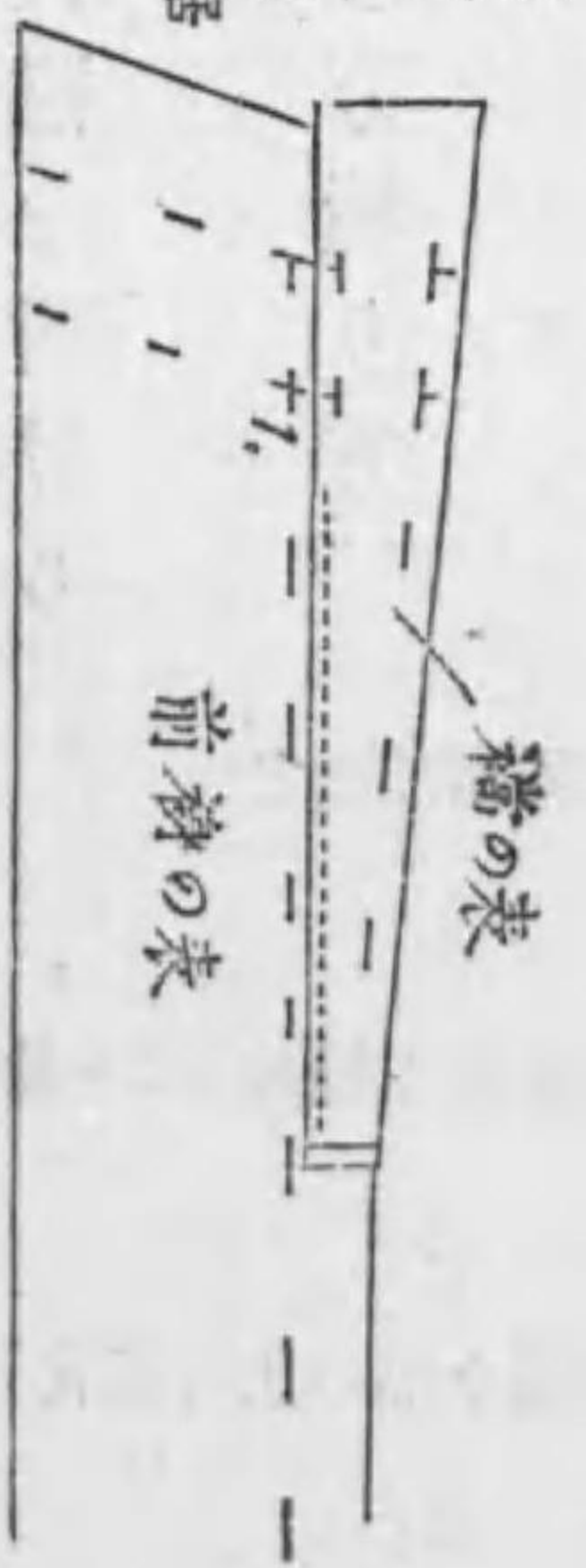


第七十六圖

第七十六圖



第七十八圖



順序。1. 前襷附け、2. 衿つけ、3. 後襷つけ、他は棒襷に同じ。
 襷。薄地のものを、斜に裁ち切りたるもの故、布がほつれ易いから、斜の方を袋縫ひにする。
 (イ) 襷。上の方を、三つ折りにして縮ける。
 (ロ) 前襟の襷附け。標より、一分はなれた所に、前襷、即ち斜の裁ち目を、圖の様に重ね、裁ち目から、一分奥を裾から、一分位、手前まで縫ひ、折りは襷を襟の上に折る。（第七十七圖の様になる）。
 (ハ) 前襷附けの標を合せて、第七十八圖の様に、裾縮けの折り山から、一分内まで縫ふ、折りは襟の方に返す。

(二) 前裾に躰けを掛け、衿を附け、後裾を附ける事、棒襠に同じ。
常幅の布を以て、女單羽織の、裁ち方積り方。仕立て上げ寸法。
裕羽織に同じ。

所要寸法。
袖丈、裁ち切り、一尺六寸五分 上り身丈、二尺六寸 折り返し、三寸二分 衿肩明き、二寸七分 繰り越し、五分 前下り、一寸 袖口布丈、一尺五寸 袖附け、六寸六分 身八つ口、二寸五分。
裁ち方及び積り方。

寸法の異なるのみにて、裁ち方圖は、男單羽織に同じ

積り方公式

1. 衿 丈 (上り身丈+三つ衿縫代+衿肩廻+繰越×2+前下+衿先縫代)×2=衿丈
2. 襠のたし布 (袖口布-袖附-身八口+繰越+襠の上の衿代)×2=襠のたし布

3. 後裁切身丈上り身丈+三つ衿縫代+折返×2=後裁切身丈

4. 袴の用布 後裁切身丈×4+襠のたし布=袴の用布

5. 總用布 袖丈×4+衿丈+袴の用布=總用布

積り方公式

1. 衿 丈 (26+.3+2.7+5×2+1+1)×2=64 衿丈
2. 襠のたし布 (15-6.6-2.5+.2)×2=13.2 襠のたし布
3. 後裁切身丈 26+.3+3×2=142.4 後裁切身丈
4. 袴の用布 32.3×4+13.3=142.4 袴の用布
5. 總用布 16.5×4+64+142.4=272.4 總用布

標の附け方、男物と異るところ。
襠の上の幅を廣くし、振り八つ及び身八つ口の標をする外は、みな男物に同じ。

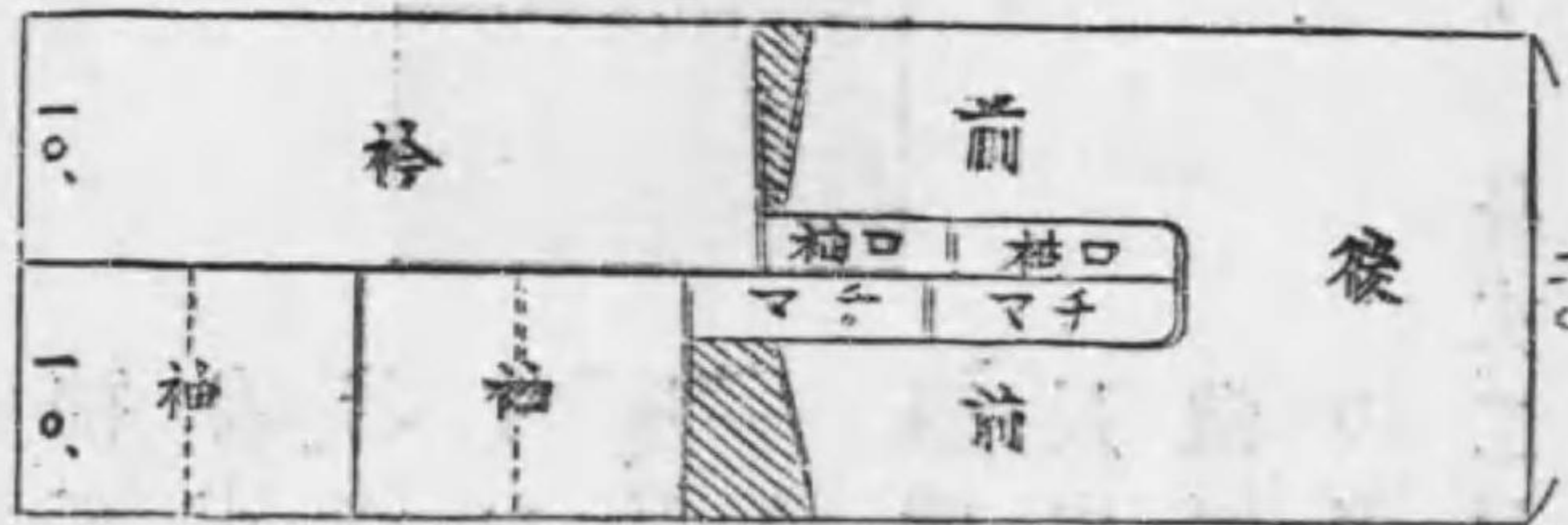
縫ひ方。
振り八つ、身八つ口があく故、袖附けが異なるのみにて、他は男單羽織に同じ(振り八つは折つて締ける)。常幅の布を以て男單羽織の裁ち方(肩當てつき)。

2. 總用布 袖丈×4+(仕立上身丈+三衿縫代+折返×2)×2+
襠のたし布=總用布

備考 袖丈の四倍より衿丈の方の長い時は、次の如く積る、
衿丈+(仕立上身丈+三衿縫代+折返×2)+襠のたし布=
總用布

。方ち裁の織羽單男ち裁本(2)

第八十一圖

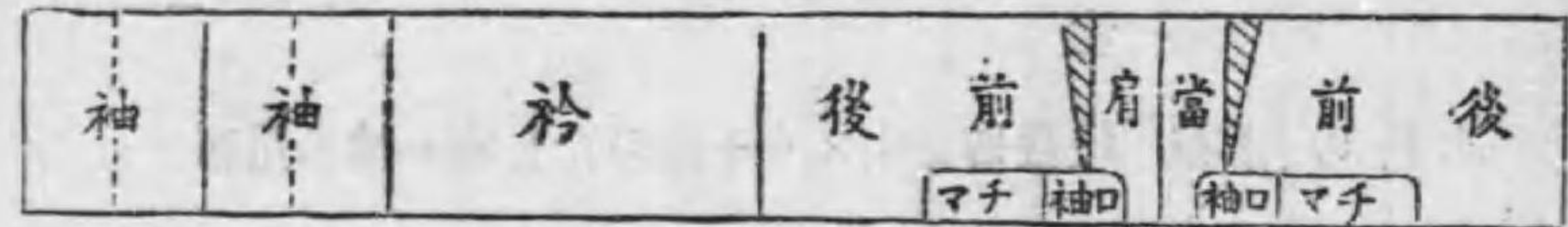


積り方公式

1. 衿 丈 (上り身丈+三衿縫代+衿肩廻+繰越×2前下+衿先縫代)×2=衿丈
2. 後身丈 總用布-(衿丈+袖口布丈×2)=後裁切身丈

女綿入半纏
各部の名稱
半纏類

第七十九圖



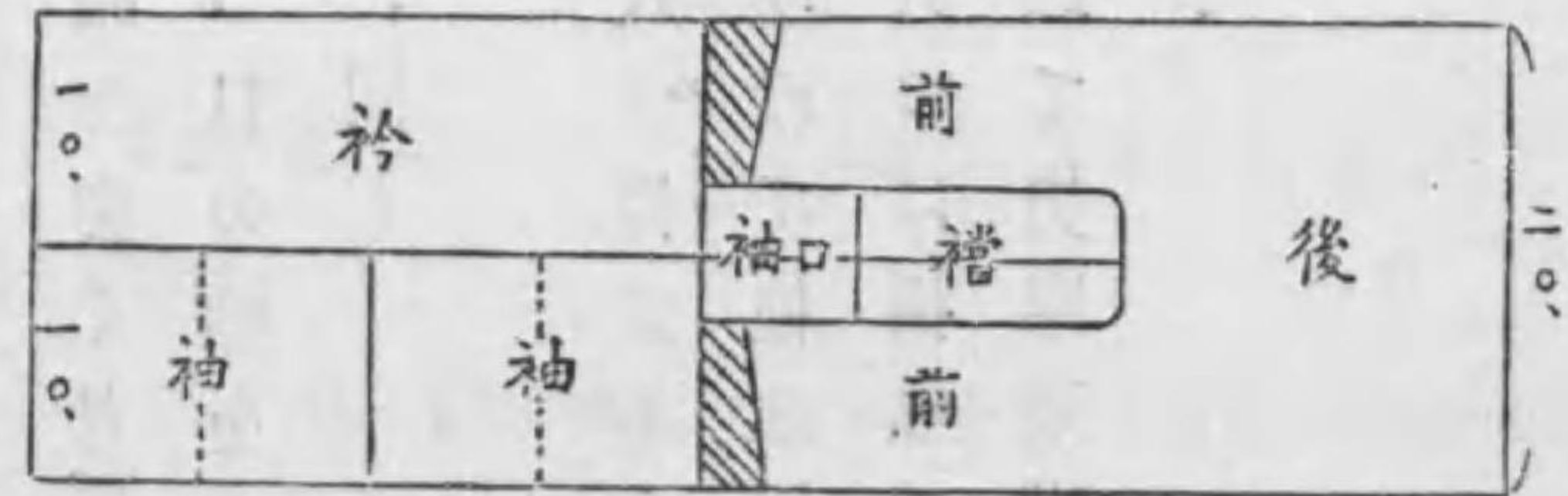
積り方

1. 衿 丈 男單羽織に同じ
2. 襠のたし布 男單羽織棒襠に同じ
3. 後身丈 上り身丈+三衿縫代+折返し幅×2=後裁切丈
4. 總用布 袖丈×4+後裁切身丈×4+衿丈+襠のたし布+
肩當後丈×2=總用布

備考 前肩當布は残布を以てする、後肩當の丈より五分乃至1短くする。

(1) りち織ての幅
方裁織單ち本方方の單布二
ちの羽女裁積裁羽に尺

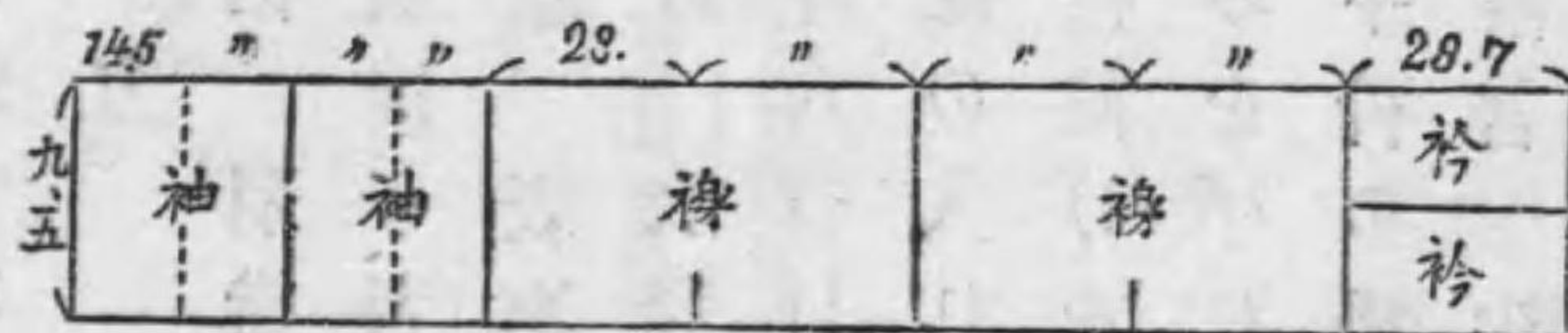
第八十圖



積り方公式 用布の積り方

1. 襠のたし布 袖口丈-袖附-身八つ口+繰越+襠の上の筋代
=襠のたし布

第八十三圖



積り方公式 上り身丈+三つ衿縫代+繰越×2+衿肩明+上下の
縫代=裁切衿丈

$$\{ \text{總尺} - (\text{裁切袖丈} \times 4 + \text{衿丈}) \} \div 4 = \text{身丈}$$

同算式 $25 + 3 + 3 \times 2 + 2.3 + 1.5 = 29.7$

$$\{ 200 - (14.5 \times 4 + 29.7) \} \div 4 = 28 \text{強}$$

公式 上り袖丈×8+上り身丈×8+衿裁切丈
+總縫代-表用布=裏用布

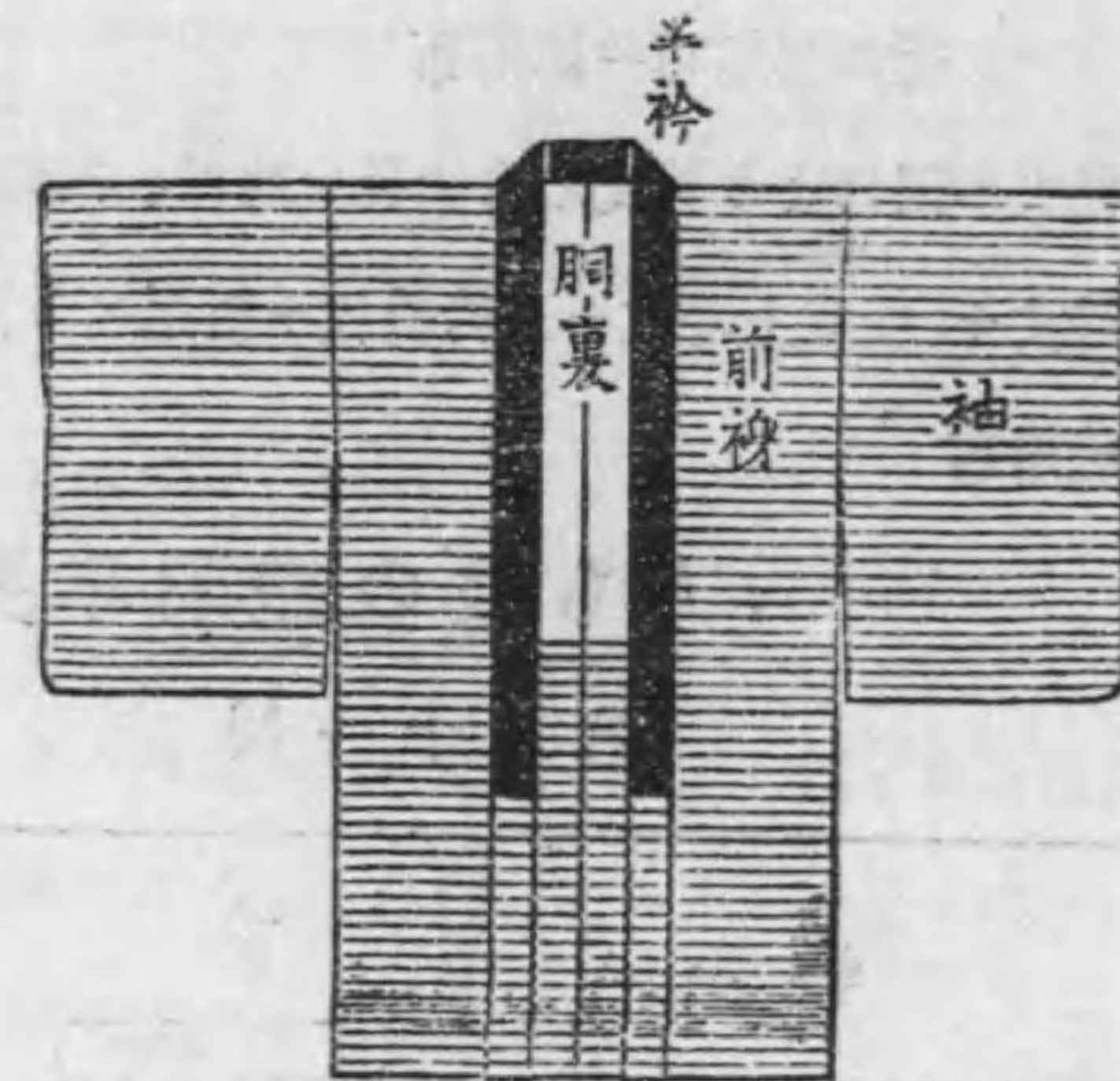
算式 $14 \times 8 + 25 \times 8 + 29.7 + 12.8 - 200 = 154.5$

總縫ひ代	}	袖下縫代	.5×8=	4	} 12.8
		胴接代	.5×8=	4	
		三つ衿縫代	.3×8=	2.4	
		繰越	.3×8=	2.4	

裏の裁ち方。
衿を取らない、他は表の裁ち方に
同じ。
裏用布の積り方。

標の附け方。
襠と、前下り
とが無いの
と、衿が違ふ
外は、羽織の
標附け方と
同様。
衿は、山接ぎ
の標と丈標

第八十二圖



但し、袖丈、一尺四寸

身丈、二尺五寸 繰り越し三分。

仕立て上げ寸法。
袖丈、袖附、袖口、袖幅、衿、羽織と同寸。
身丈、羽織より一寸短く 衿肩明き、
着物より一分多く 後幅、着物と同
寸か、二三分増す 前幅、衿肩明きよ
り、真直 衿幅、一寸三分か、一寸四分
繰り越し、羽織と同寸 身八つ口、
羽織より二分多くする 半衿丈、四
尺内外。
常幅二尺の布を以つて、女綿入半纏
の表の裁ち方、積り方。

とをすする。

縫ひ方。

(イ) 袖。羽織に同じ。

(ロ) 胴接ぎ、背縫。羽織に同じ。

(ハ) 脇。表裏續けて縫ふ。

(ニ) 衿。表裨に衿肩から、真直に附ける、三つ衿の加減、着物に同じ。

(ホ) 身八つ口の、縫ひ方、袖の附け方、着物(綿入)に同じ。

(ヘ) 綿の入れ方、袖口紘け方、背、脇の、堅綴ちの仕方、羽織に同じ。

(ト) 衿附けを、表裏綴ち合せ、衿幅をきめ、衿先を縫ひ、前裨の縫ひこ

みを平にして、紘け附ける。

(チ) 半衿の掛け方。狭衿の着物の、半衿の掛け方に同じ。

附言 半衿は、黒八丈、黒縹子、黒毛縹子等を用ひ、半衿を掛ける

下には、別衿を用ひる事もある。

鯉口衿半纏(一名もぢり袖)

各部の名稱。

仕立て上げ寸法。

袖口、三寸より、四寸 袖附け、一尺より

一尺一寸 其他は、長袖の場合ひに同

じ。

裁ち方、積り方。

袖の寸法の異なる外は、長袖の半纏に

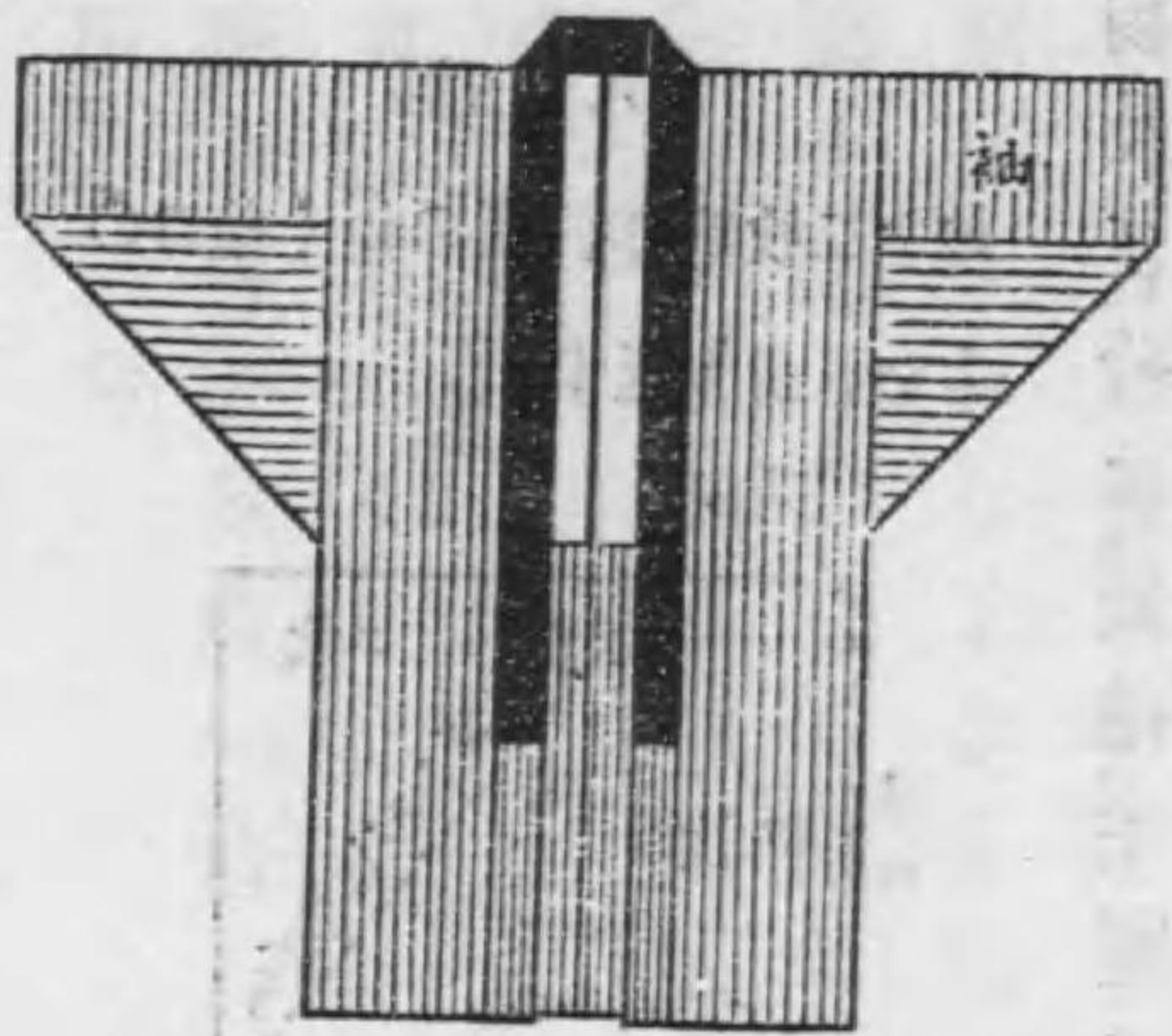
同じ。

袖丈の定め方

積り方公式 袖口×2+布幅+縫代=袖丈 同算式 $4 \times 2 + 9.5 + .3 = 17.8$

他の積り方は長袖の積り方に同じ

第八十四圖



鯉口衿半纏

標の附け方。袖。

第八十五圖

袖を二枚重ね、圖の如く袖口の方を、折り返す



第八十六圖

(1) 上圖の袖下を折り返した所



裨及び衿は、長袖、半纏に同じ。但し袖は皆附く故、身八つ口はない。縫ひ方。

(イ) 袖口を表裏合せて縫ひ、表の方に折りを附けて、毛抜き合せに

する。

(ロ) 接ぎ標の所で、下の方の裏表で、上の二枚を挟んで、袖口の方から、四つ縫ひにし、附けの方を、三寸位の間は、表裏を別々に縫ひ表の方に折りを附けて、表返す。

(ハ) 胴接ぎをして、背を四つ縫ひにする(衿羽織に同じ)。

(ニ) 脇を、裾の方二寸位の間は、別々に縫ひ、それから上は、後脇の縫ひ込みを、袖附けの方の、つれない程度に、開き置きて、四つ縫ひにする。

(尚、裏表別々に縫ひ、縫ひ込みを開いて、綴ち合せてもよい)。

(ホ) 袖を、男衿羽織の袖と、同様に附ける(七つ留めでない方の縫ひ方)。

(ヘ) 前の衿附けの所を、裏表合せて、躰けを掛けて、衿を女綿入半纏の様に附ける。

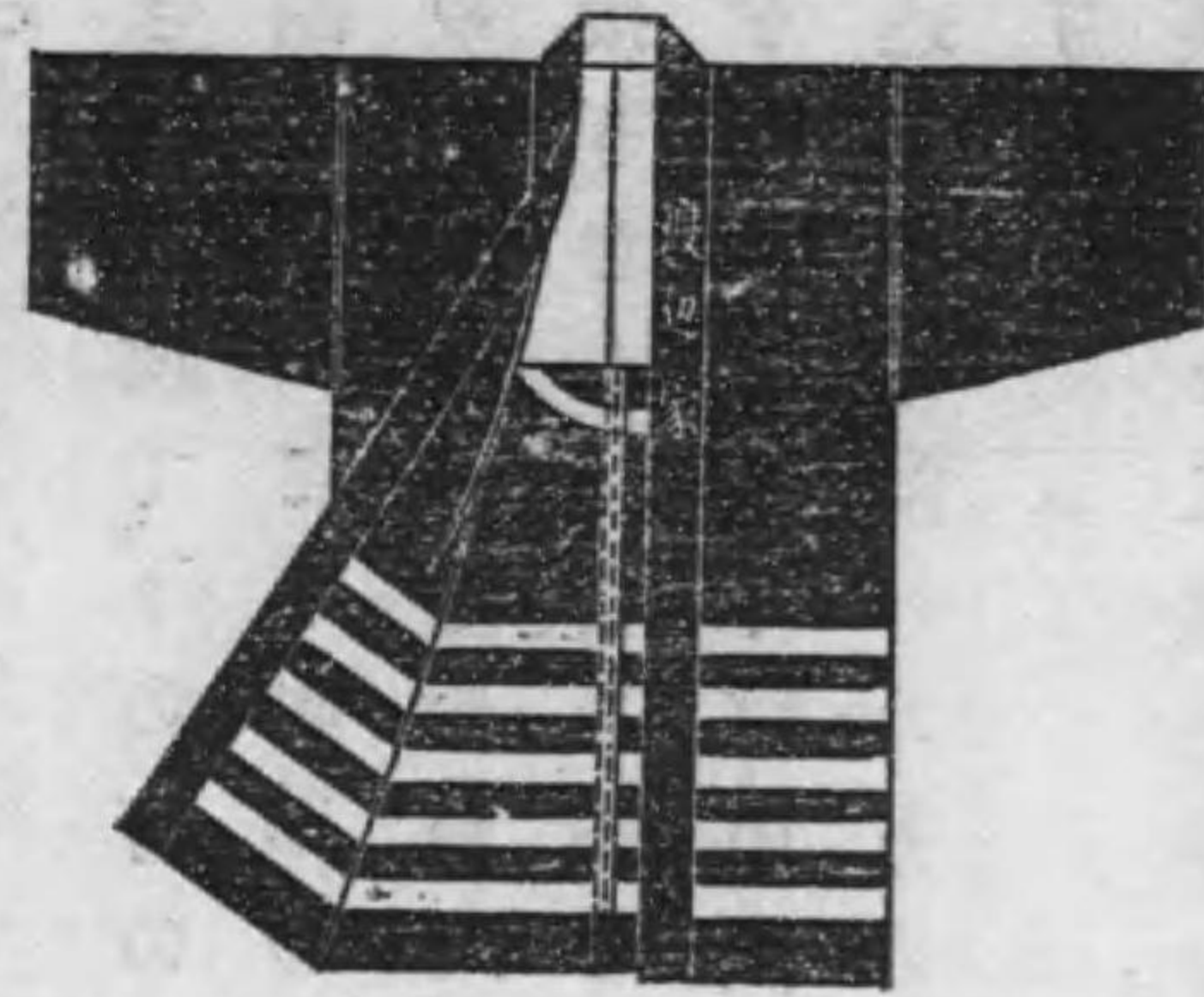
(ト) 衿拵け方、半衿掛け方、女綿入半纏に同じ。

但し、袖口には、共布で、細い縁を取る事もある。

印半纏

印半纏は、一般に職人の着するものである。

第八十七圖



第八十八圖



仕立て方。

衿と、單とある、但し、衿を着る人は稀で、この社會の人は、冬でも單を幾枚も重ねて着るを、一種の見えとして居る。

地質及び色、表。三河木綿で色は、黒、又は紺。

肩當て、及び裏は淺黄木綿。

袖口布、共布、淺黄木綿、更紗、又は赤茶の木綿(ベンガラ色とも云ふ)。

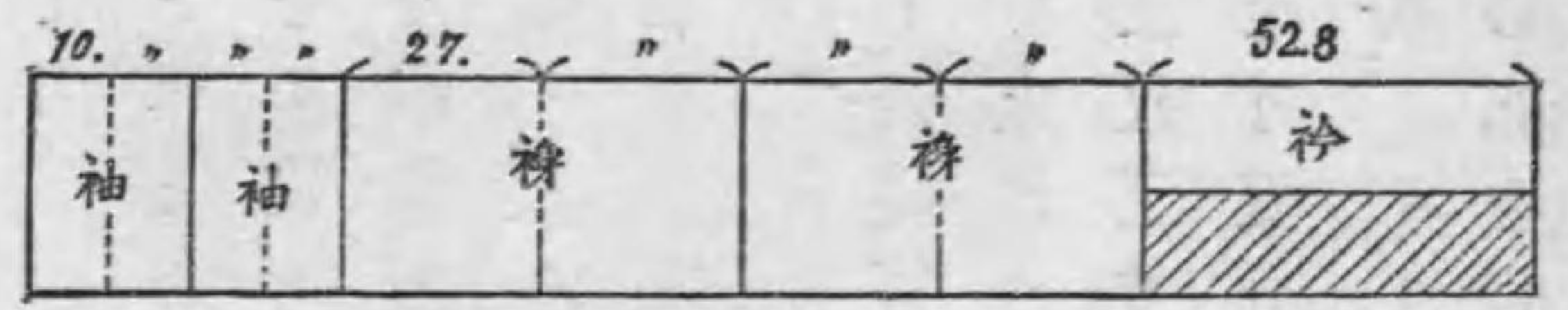
但し、祭禮等に見えて着る場合ひは、羽二重、夏は、紹等を用ひる。仕立て上げ寸法。

身丈、二尺三寸	袖丈、九寸より、一尺	袖口、三寸	衿一ばい	後
幅、七寸五分	前幅、五寸五分	袖幅、一寸五分	衿肩明き、二寸	
一分。				

常幅の布を以つて、印半纏の裁ち方、積り方。

。衣單し但

第八十九圖

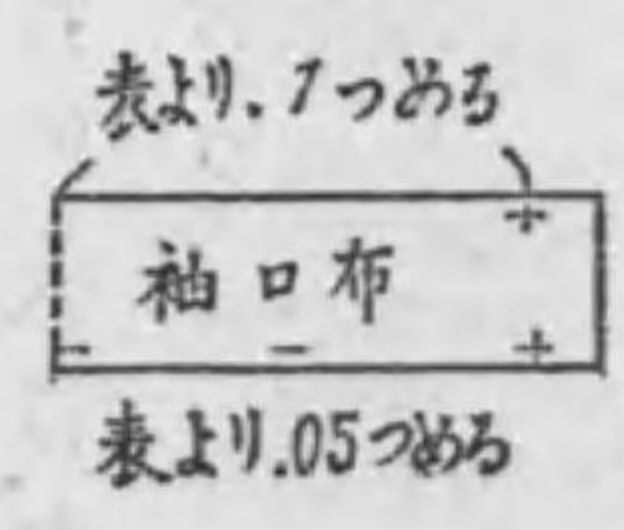


積り方公式 (上り身丈+三つ衿縫代+衿肩明+衿先縫代) × 2 =
 衿丈 袖丈 × 4 + 身丈 × 4 + 衿丈 = 用布
 同算式 (23 + .3 + 2.1 + 1) × 2 = 52.8
 10 × 4 + 27 × 4 + 52.8 = 200.8

肩當ての裁ち方、單衣の肩當と同様に裁つ。標の附け方。

第九十一圖
袖口布

袖口布を二枚重ねて、丈を二つに折る

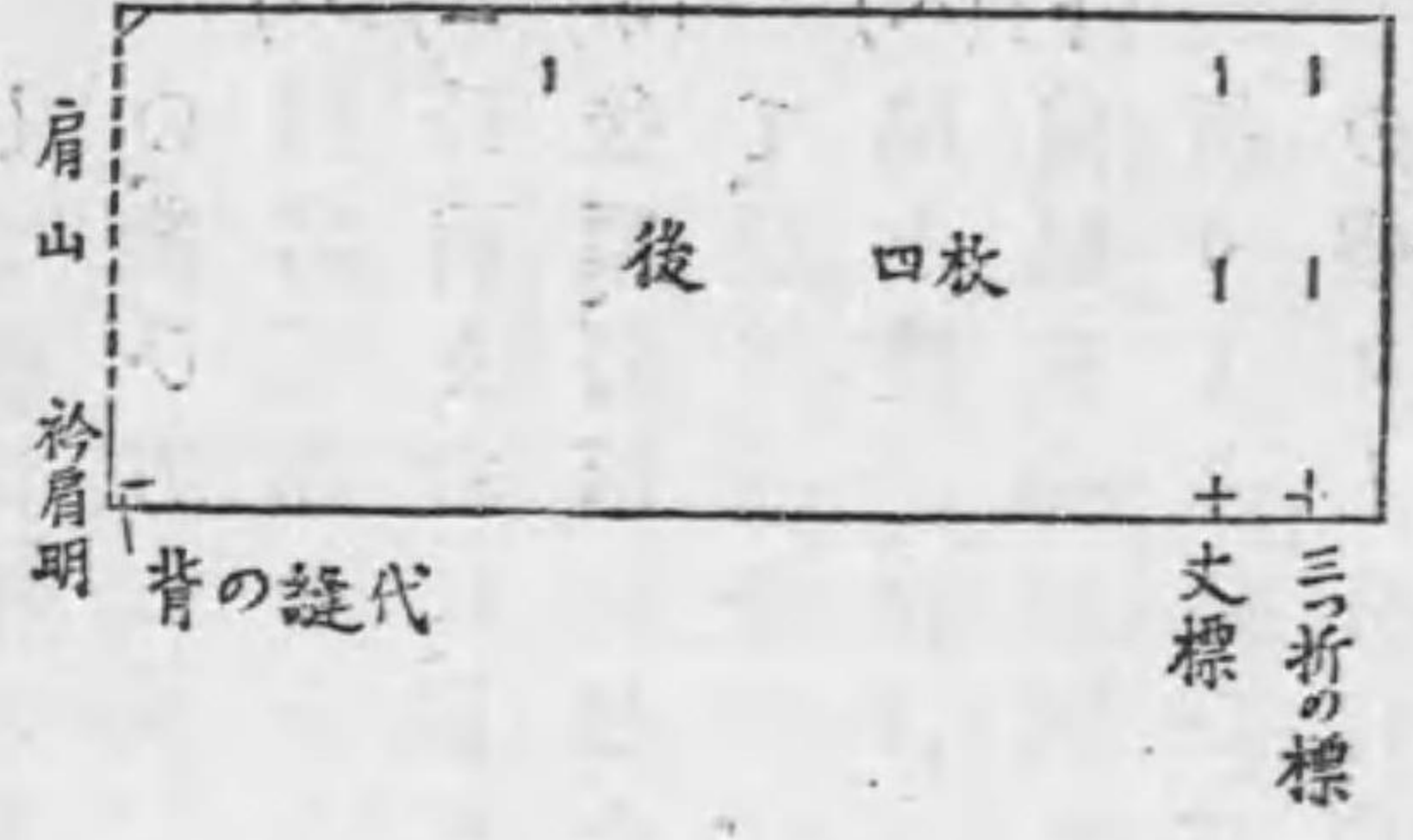


第九十圖
袖

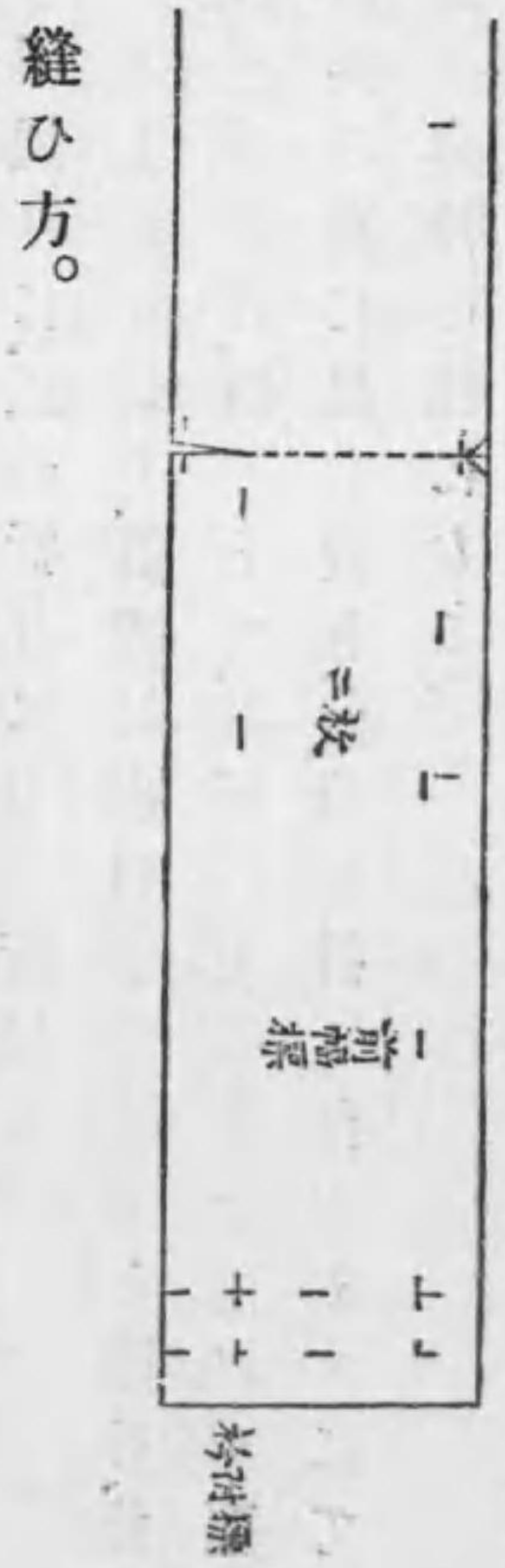
袖を二枚重ねて、丈を二つに折る



袖附 第九十二圖



裱 中表に二枚重ねて、丈を二つに折る



縫ひ方。
 (イ) 袖口に、袖口布を縫ひ合せて、毛抜き合せにする。
 (ロ) 袖下を、袖口布を折り返して、衿け附ける所より、少し袖口の方によりたる所より、袖幅の五分手前まで、表を出して、一分縫ひ代に縫ひ、裏返して、袖口先から、袖下を縫ひ、表返

して、袖口布の奥を折りて、縫ひ附けること、一つ身單衣の濶袖の縫ひ方に同じ。

(ハ) 肩當て布の下を、二つ折りにして、伏せ縫ひにする。

(ニ) 衿肩を右に、肩當て布を、向うにして、背を二度縫ひをする。

(ホ) 後幅、肩幅の標を附けて、背縫に折りを附け、肩當て布を、平にして、縫ひを掛けて置く。

(ヘ) 脇を縫ひ、裾口を標通りに、三つ折りにして縫ひける。

(ト) 前幅を、衿肩明きの止まりより、真直に裾口まで折りを附け、此折りより、縫ひ代三分だけ、廣くして、其所にも折りを附け、布幅の残りし分は、前裨の裏に出し置き、前裨を折りたるまゝにて、衿を附ける(前裨が裏衿の様になる)。

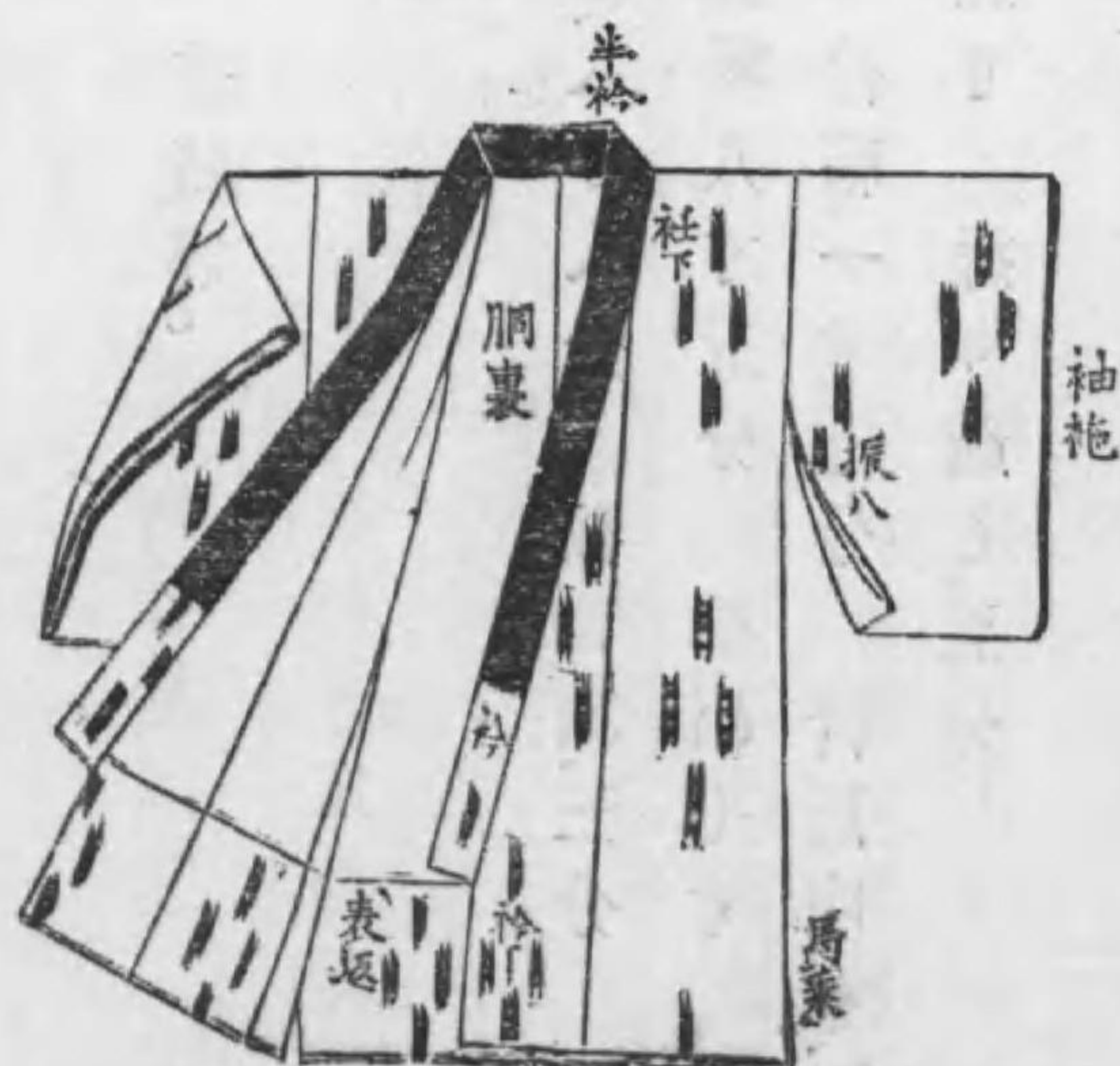
三つ衿には、別布を芯に入れ、前幅の残つた分は、衿幅の中に、芯の如くに折り返して、縫ひ目に折りを附け、次に衿先を縫ひ、衿

子守半纏

各部の名稱。

を縫ひける、此時始めに衿を附けた針目の出ぬ様にして縫ひける。
(チ) 袖を附け、肩當て布を、袖附けの縫ひ目の處に縫ひ附ける。
注意 背紋、腰字、衿字等のある時は、字、又は模様を合せるは、勿論、其位置にも注意をすることを要する(背紋下りは、裁ち切り一寸位)。

第九十四圖



仕立て方の種類。

袖無し、袖有り、衽無し、衽有り。

地質。絹布、Ⅱ銘仙。綿布、Ⅱ染紵、紡績等。

但し、半衽には天鷲絨を用ひる。

仕立て上げ寸法。

袖丈、一尺五寸 袖付け、八寸 袖幅、八寸八分 袖口襷三分 身

丈、二尺九寸 衿、一尺七寸五分 後幅、八寸五分 前幅、七寸 衽

幅、四寸 衽下り、五寸 衽下、五寸 衽幅、一寸七分 衽肩明き、二

寸八分 身八つ口、三寸 馬乗り、五寸 繰り越し、五分。

裁ち切り寸法。

袖丈、一尺五寸五分 衽肩明き、三寸。

一反の布を以て、表の裁ち方。

普通の衣服に同じ。但し衽は不用。表の積り方。

積り方公式 (總尺-袖丈×4+衽下×2)÷6=身丈

同算式 (230-15.5+5.5×2)÷6=38.1強

裏の裁ち方。衽を取らないから、衽を一幅で裁ち合せ、半幅にする外は、表の裁ち方に同じ。裏地の積り方。

積り方公式 上り袖丈×8+(身丈+三ツ衽縫代)×11+衽下×3

+總縫代-表用布=裏地

同算式 15×8+(29+3)×11-5.5×3+15-280.=160.8

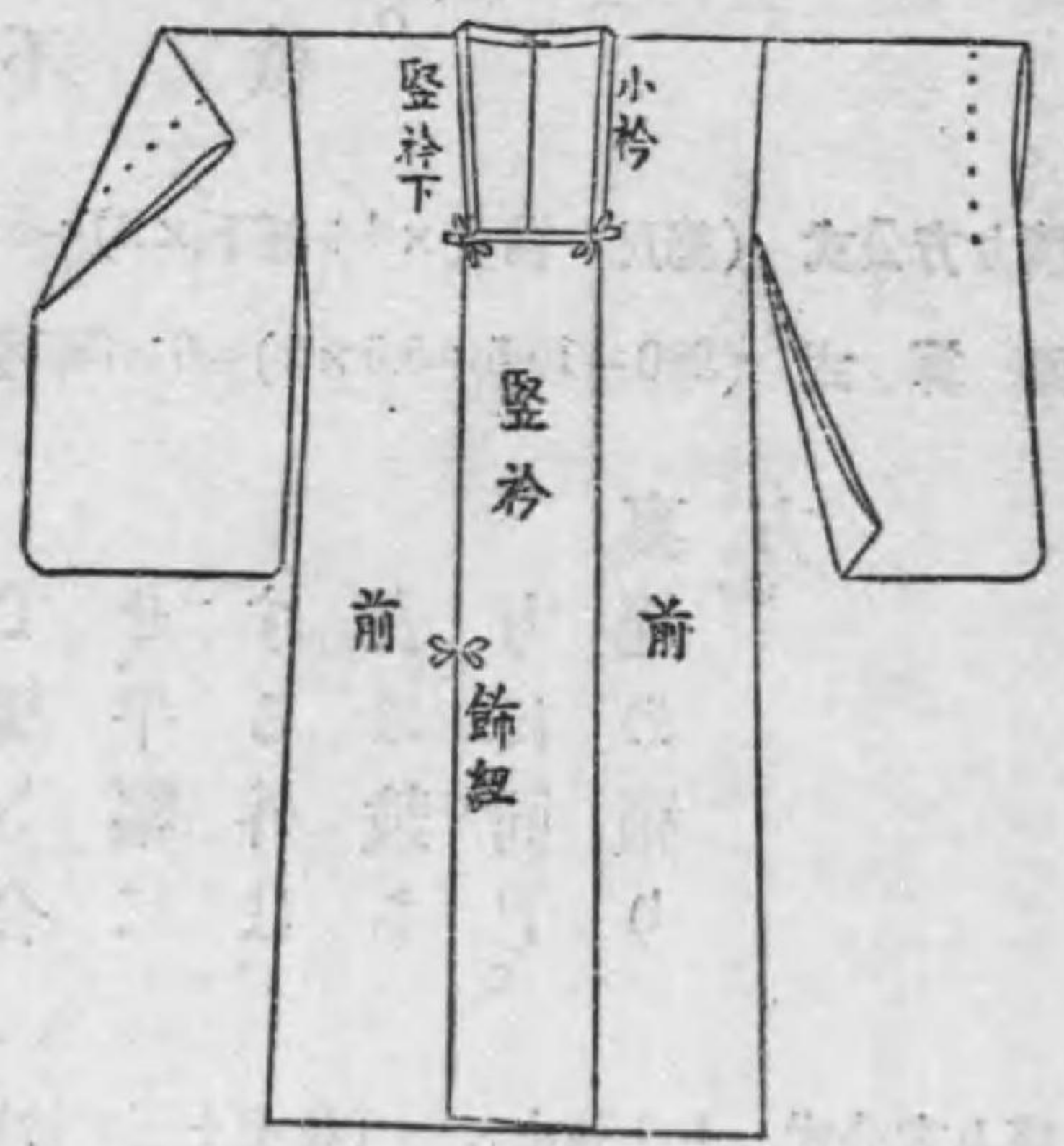
總縫ひ代 袖下4、胴接代5.5 繰越 5.5

縫ひ方。袖の縫ひ方は、一つ身綿入潤袖に同じ。衽の縫ひ方は、身八つ口を付け、又衽下を付ける外は、男物綿入胴着に同じ(前卷参照)。

本裁ち單合羽

各部の名稱。

第九十五圖



とあり、衿、單の別がある。

普通仕立てで上げ寸法(長着を標準として)。

袖丈、同寸 袖口、同寸 袖付け、三分増し 衿、二分増し 袖幅、二分増し
 後幅、三分増し(裾口にて) 前幅(身八つ口止にて)抱幅と

種類。

(1) 道行仕立て、(2) 被布仕立

地質。(防水性を有して、色の褪めないもの)。

綿布 || 木綿、綿セル等。

毛布 || 薄羅紗、セル、綾モス、

アルバカ等。

紙布 || 雁皮織等。

其他 || 蠟引、防水布等。

同寸)裾口にて五分増し 衿下り(肩山より小衿幅の山までを云ふ)五分増し 衿肩明き、一分増し 小衿幅、五分内外 切り上げを付ける場合ひ、五分 繰越し、四分 衿幅、衿幅と同寸(但し上は體格によりて寸法をつめる) 身丈、一寸つめる。裁ち方積り方。

常幅二丈八尺の布を以て、本裁ち單合羽の裁ち方積り方(道行仕立て)。

所要仕立て上げ寸法。

袖丈、一尺六寸五分 衿肩明き、二寸四分 衿下り、六寸五分。



第九十六圖
 積り方公式 (用布一袖丈×4+衿下×2)÷6=身丈 身丈一衿下=衿下丈

本裁ち單合羽

(堅衿下+衿肩廻+堅衿幅+縫ひ代)×2=小衿丈

同算式 (278-17×4+6×2)÷6=37 身丈 衿丈 37.-6.=31.

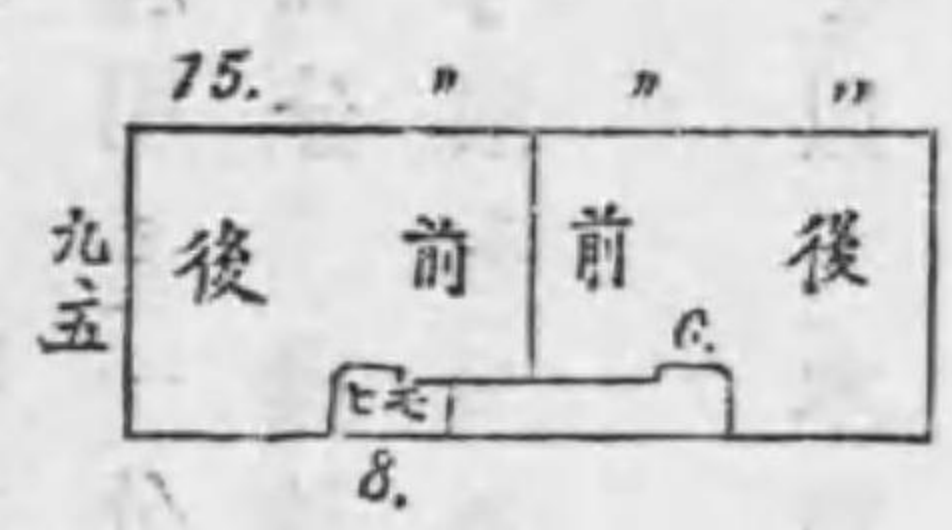
(6.5+2.5+4+1)×2=28 小衿丈

繰越を附ける時は、前を繰越の二倍だけ長くする、従つて小衿丈も、繰越の二倍だけ長くする

堅衿下は肩山より附ける

つ裁てつ以を布の尺六幅常。布て當肩

第九十七圖



積り方公式 用布÷4=身丈

同算式 60÷4=15

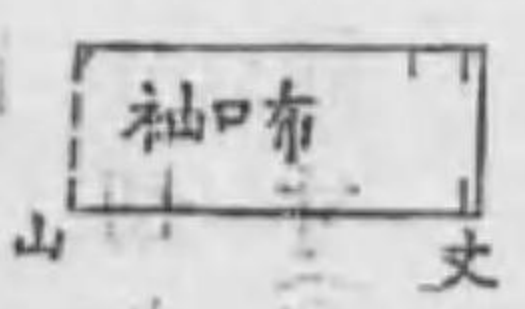
前の落とし布を、衿芯にしてもよい(地質によりて)

標附け方。



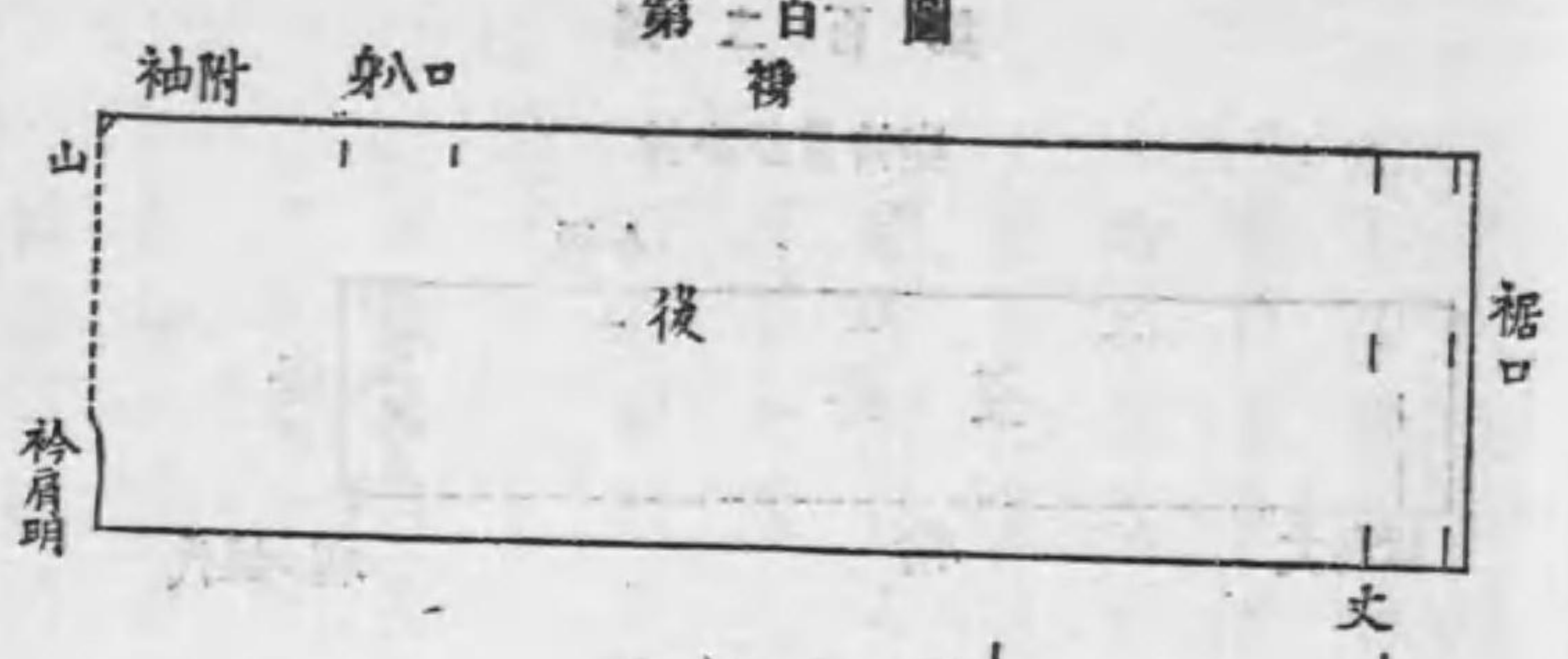
第九十八圖

第九十九圖



- 1. 中表に二枚重ねて丈を二つに折る
- 2. 袖丈(上り袖丈に+.1)
- 3. 袖口 4. 山 5. 袖附 6. 袖口布の丈
- 7. 袖口 8. 山

第一百圖



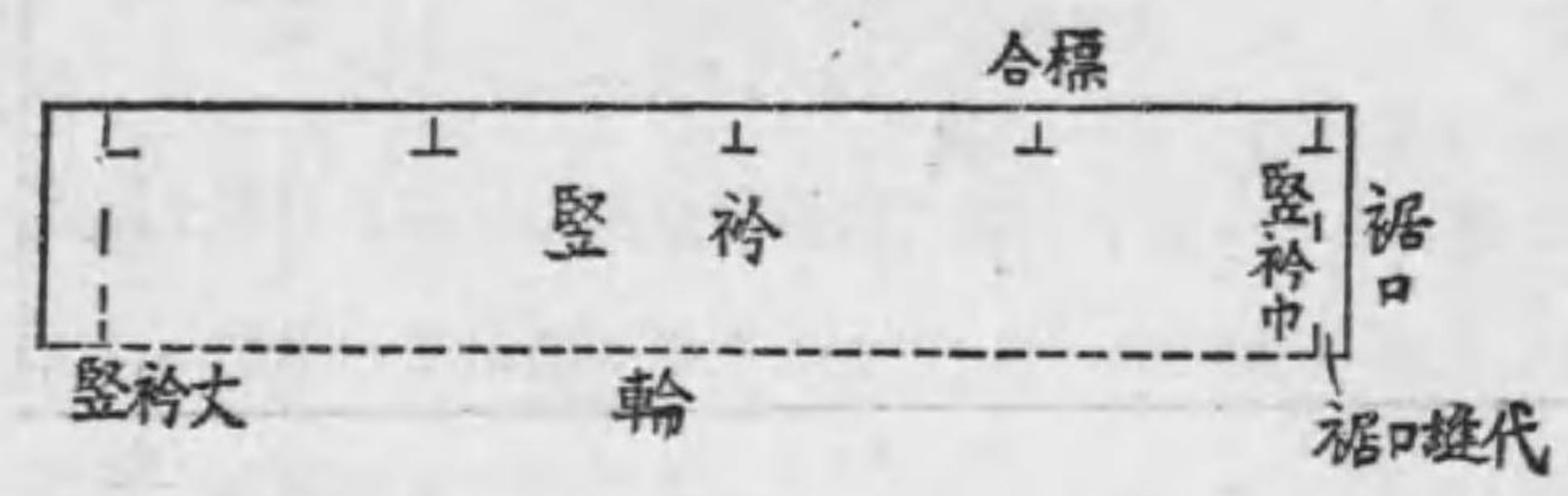
本裁ち都合羽

- 1. 中表に二枚重ねて、丈を二つに折る
- 2. 丈(上り身丈+三つ衿縫代)
- 3. 裾口縫代
- 4. 山
- 5. 袖附
- 6. 身入つ口 後を左に返し、前を出す
- 7. 堅衿下
- 8. 堅衿丈をはかる(切上を附ける時は、前にてつけるから、堅衿丈は切上だけ短くなる)

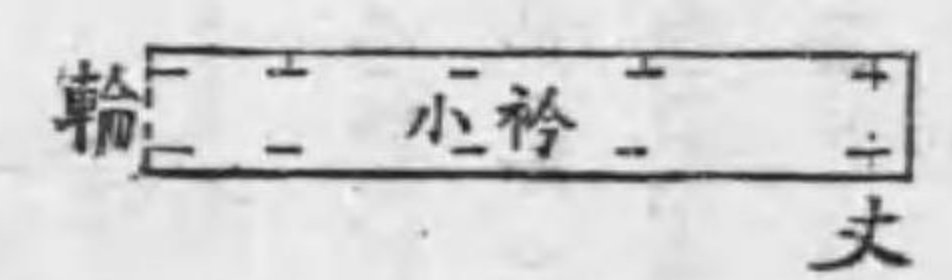
第一百圖

第百二圖

豎衿及び小衿



第百三圖



- | | |
|--------------------|----------------|
| 1. 幅を二つに折り、裾口を右に置く | 1. 丈を二つに折る |
| 2. 裾口の縫代(.5) | 2. 衿肩明(上りに+.1) |
| 3. 豎衿丈 | 3. 豎衿下 |
| 4. 豎衿幅(上りに+.05) | 4. 豎衿幅 |
| 5. 合標 | 5. 小衿の幅 |

(一) 縫ひ方。

- (イ) 袖口布の丈を二分裏の方に折り返して、單羽織の如く伏せ縫ひをする。
- (ロ) 袖口布と袖とを合せて、袖口明きを縫ひ、折りは袖の方に返す、單羽織と同様。
- (ハ) 袖下を一分縫ひ

(二) 裓。

- 代で、表を見て、袖丸の寸法と、袖幅の縫ひ込みの寸法とを、残して縫ひ、折りを付けて、裏返す。
- (ニ) 袖口止まりを、四つごめをして、(外袖と袖口布とを、縫ひこみのつらない様に斜に折る)袖口布のある間は、極細かに一針ぬきに縫ひ、それより袖下の終りまで、串縫ひに縫ひ、袖標の標を附ける。
- (ホ) 折りを附け、袖丸を拵へ、袖口布の奥を折りて、四分位の針目に紵け附ける。
- (イ) 本裁ち單衣の如く、背を二度縫ひをして、後幅、肩幅の標を附け、折りを附けて、肩當て布を附ける(單衣と同様)。
- (ロ) 前裓の裾を、三つ折りにして、躰けにて假綴ちをして置く。
- (ハ) 前裓の、豎衿附けの縫ひ代を、いつばいにして、裏表の豎衿で

裨を挟んで、合ひ標を合せ、豎衿丈の標から標まで縫ふ。

(ニ) 豎衿の裾口は、丈標より一分先を縫ひて、裏の方に折り返し、其縫ひこみを、豎衿付けの縫ひ目のきわに、一針ぬきに綴ち付け、豎衿付けの折りは、表衿の方に返して、豎衿下りの處より引き返し、折りを正しく附ける。

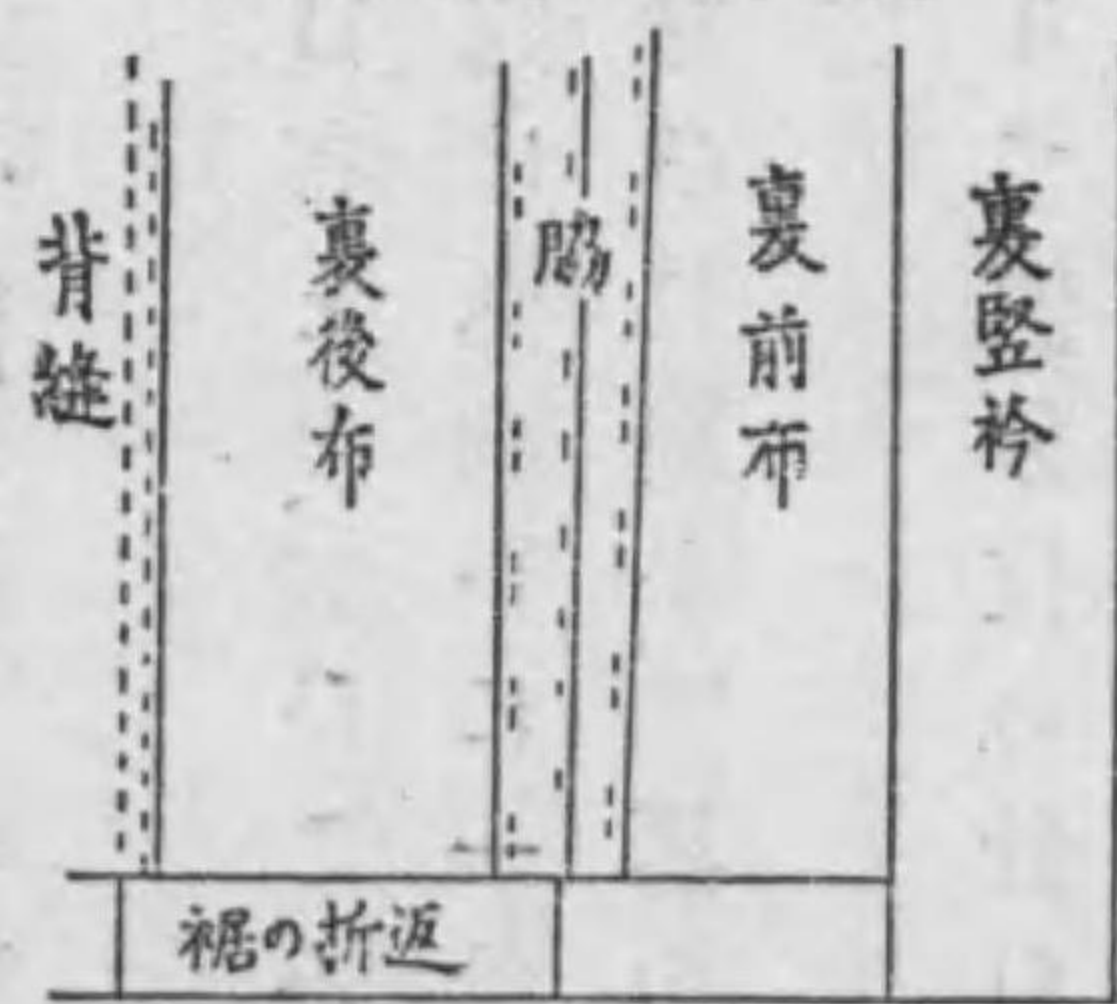
(ホ) 豎衿の上の方の縫ひ込みを、縫ひ代二分位残して、豎衿の中に折り込む(中に袋の入らぬ様注意する)。

(ヘ) 豎衿の縫ひ目より前幅の標を附けて、脇を縫ひ、縫ひ込みを開きて綴ち

ニ 附ける事、女單衣の仕方に同じ。

(ト) 裾口を標通りに、折り、四五分の針目に絞ける。

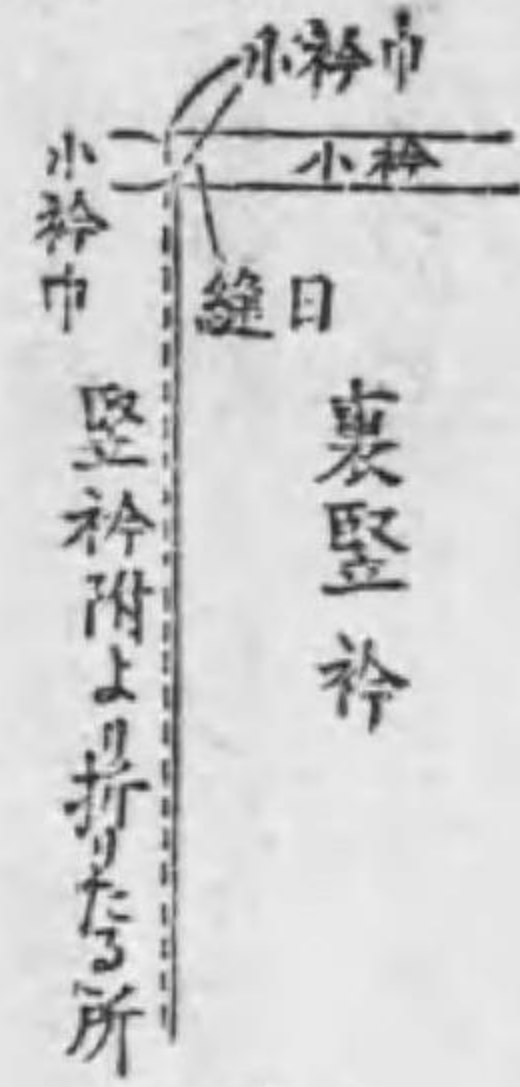
第四百圖
裾の方を裏から見た圖



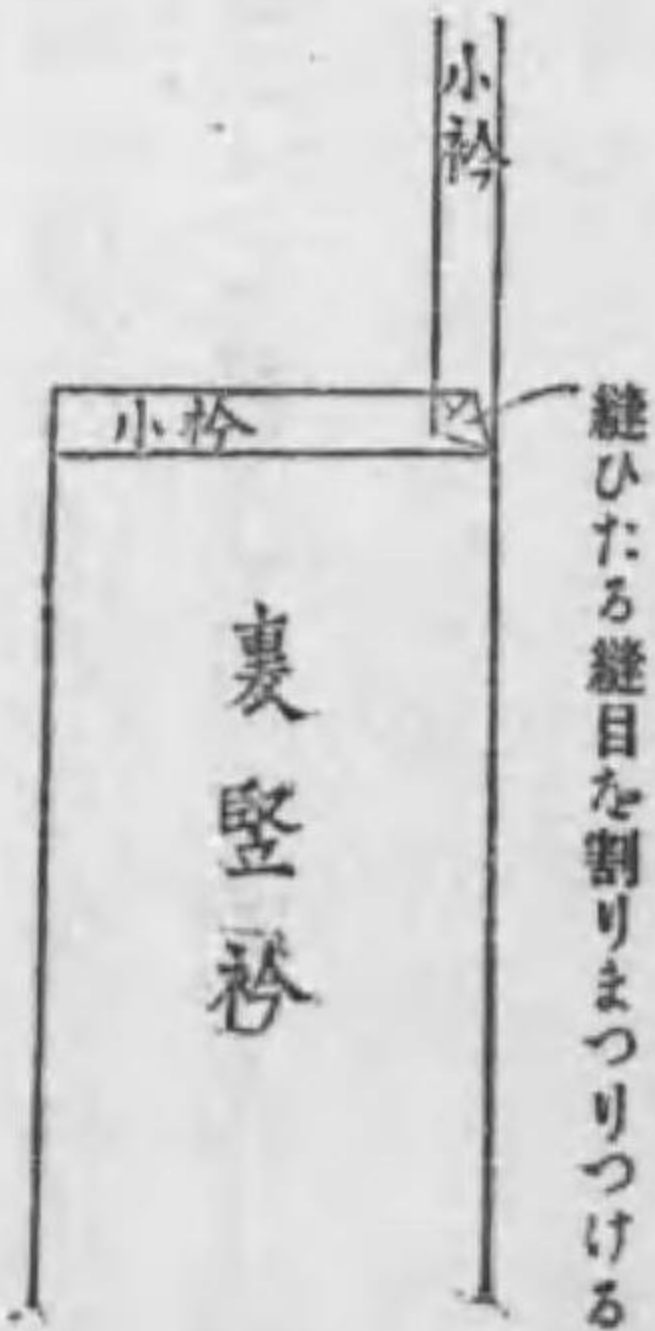
(チ) 小衿の山と、背の縫ひ目と合せ、衿肩廻しでは、小衿を少しゆるみめにし、待ち針をさし、小衿付けの縫ひ、代を二分にして、豎衿幅と、小衿とは、平に釣り合ひを取りて、其間を一針ぬきに縫ひ、豎衿の角では、心持ち小衿をゆるみめにし、一針返してこめ、裨の向きを變へて、衿山に向ひて縫ふ、衿肩廻しでは、こまかに縫ひ、背縫ひでは一針返して、上前の豎衿の端まで縫ひて、小衿の方に折り返す。

(リ) 衿先を、一分先を縫ひて、裏の方に折り返して引き返し、小衿の裏を絞け附ける(衿の縫ひこみ少き時は、地薄の場合は、芯布を、縫ひ目に綴ち附ける)、次に豎衿下りの角で、小衿の裏を、圖の如く摘みて、返し縫ひをなし、縫ひ目を割りて、廻りを纏りつける。

第百五圖



第百六圖



(又)袖付け。單衣と同様袖山と、襟の山とを合せ、つり合ひをみて袖を付け、袖付けの始め終りは、よくとめる、折りを付けて振り八つを、耳筋けにする。

肩當てを、袖付けの縫ひ目のきわに、筋け付ける。

(ル)仕上げ。霧を吹き、白布の上から、火熨斗を掛ける。

(ヲ)飾り紐。

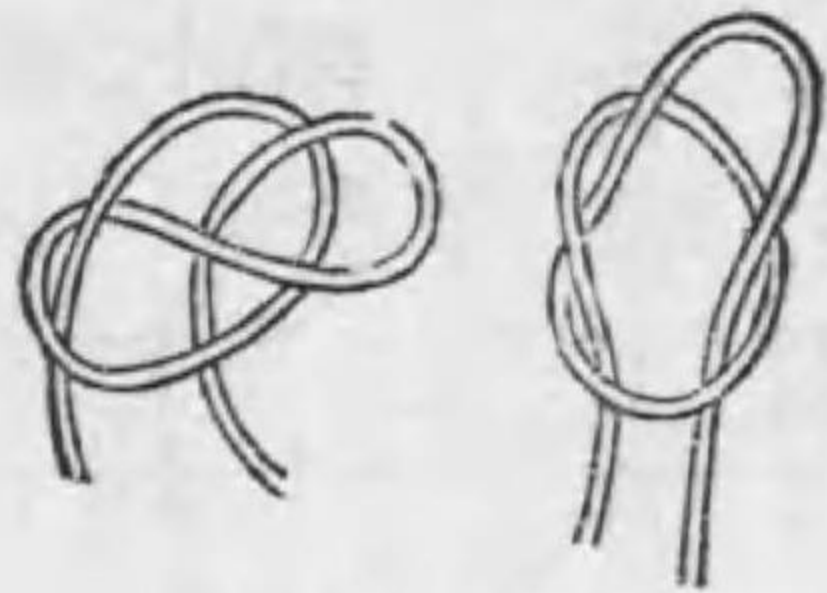
(イ)上前の堅衿の両端に、シヤカ結びのある方の紐を綴ち付け、前襟の小衿のわきに、輪の方を綴ち付ける、この時、左右の形の異なる様に注意して、裏には中央に小針を出し

てとめ、紐の廻りを、細かにまつり付ける。

(ロ)下の紐は、堅衿丈の中央より、凡一寸位上りたる處で、上前の堅衿の端に、シヤカ結びの紐を付け、下前には、前幅の約三分の一(但し堅衿付けより、度りて)のところ、に付ける。

注意 下前紐付けの位置は、體格、又は紐長き場合、等には、斟酌を要する。

(シヤカ結び)
第百八圖 第百七圖



第百九圖



第百十圖



第百十一圖

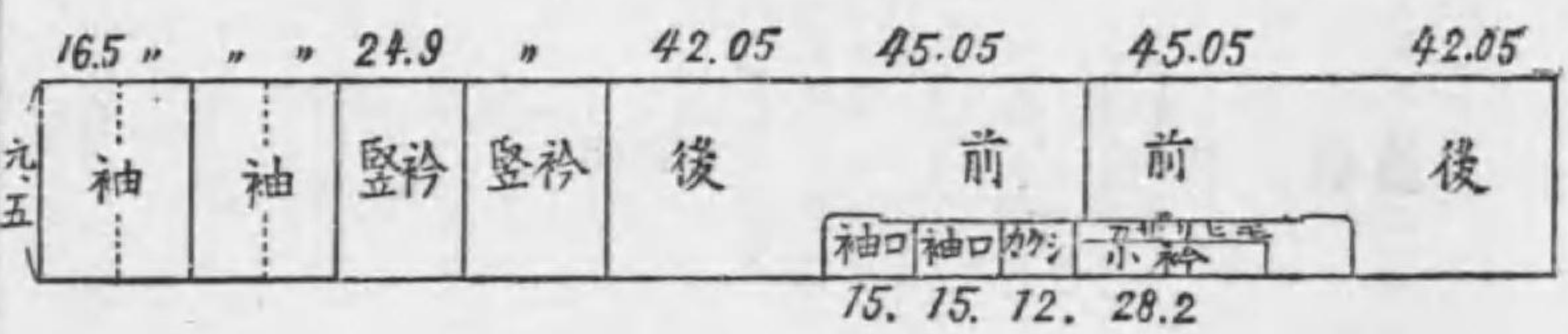


表。絹布 御召、縮緬、羽二重、八端、紹紗等。
 裏。絹布 甲斐絹、八つ橋、羽二重等。
 種類。衿、単、ありて、衿には道行衿、丸衿、へちま衿等の仕立て方がある。

普通仕立て上げ寸法(長着を標準とする)。
 袖丈、同寸、袖口、同寸、袖幅、二分増し 袖付け、三分増し 後幅、三分増し(裾口にて廣く) 前幅、五分増し(裾口にて廣く) 衿下り、五分増し(衿下りよりも) 衿幅、衿幅と同寸(上幅二分減ずる事もある) 小衿幅、五分内外 衿、二分増し 繰越し、三分隠しの下り、衿下りより三寸五分 隠しの口明き四寸 前下り、八分 身丈、羽織より二三寸長くする。
 裁ち方積り方。

常幅二丈九尺の布を以つて、本裁ち女衿半コートの裁ち方積り積り方。
 所要仕立て上げ寸法。
 身丈、二八尺寸
 袖丈、一尺六寸、
 衿下り、
 六寸五分 前
 下り八分。

第百十九圖



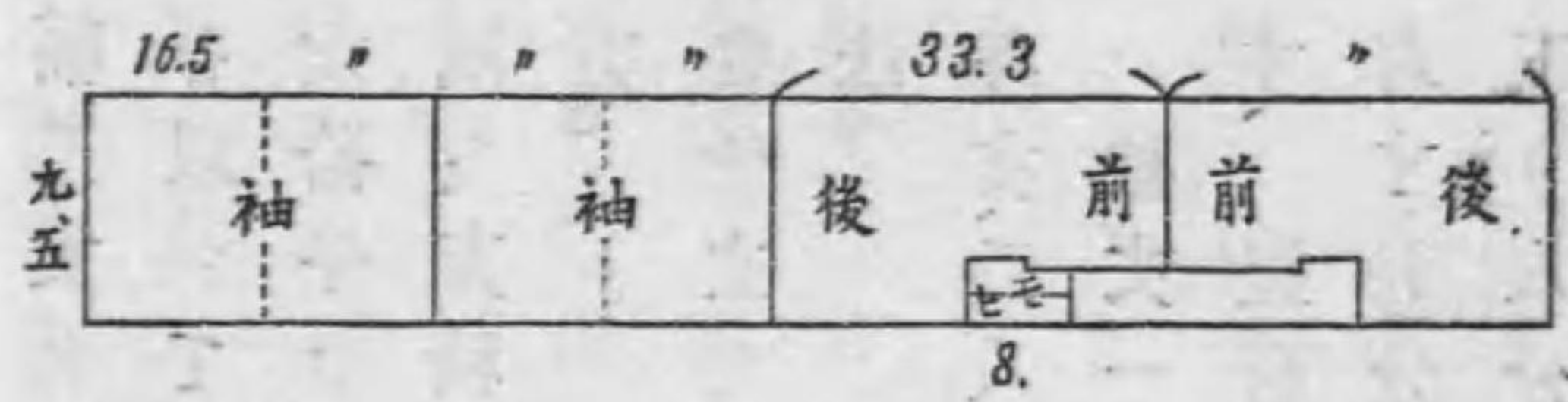
積り方公式 上り身丈+前下+衿縫代+繰越+三つ衿縫代-
 丈下=衿丈
 上り袖丈+縫代=裁切袖丈
 $(\text{總用布} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿丈} \times 2) + \text{前後の差} \times 2) \div 4 = \text{後丈}$
 後丈+前後差=前丈
 $(\text{衿下} + \text{衿肩明} + \text{衿幅} + \text{縫代} + \text{繰越}) \times 2 = \text{小衿丈}$
 同算式 $28 + .8 + 1.5 + .3 + .3 - 6 = 24.9$ (衿丈)
 $16 + .5 = 16.5$ (裁切袖丈)
 $\{290 - (16.5 \times 4 + 24.9 \times 2) - 3 \times 2\} \div 4 = 42.05$ (後丈)
 $42.05 + 3 = 45.05$ (前丈)
 $(6.5 + 2.5 + 4 + .8 + .3) \times 2 = 28.2$ (小衿丈)

半コート

一〇七

胴裏の裁ち方積り方。

第二十圖



積り方公式 (上り袖丈+上り身丈)×8+堅衿丈×2+總縫代-表用布=裏用布

同算式 $(16+28) \times 8 + 24.9 \times 2 + 20.8 - 290 = 132.6$

總縫ひ代 { 袖前襟三つ 5×4, 1.×8, 1.×4, .3×2.4, .3×2.4 } 計20.8

標附け方。

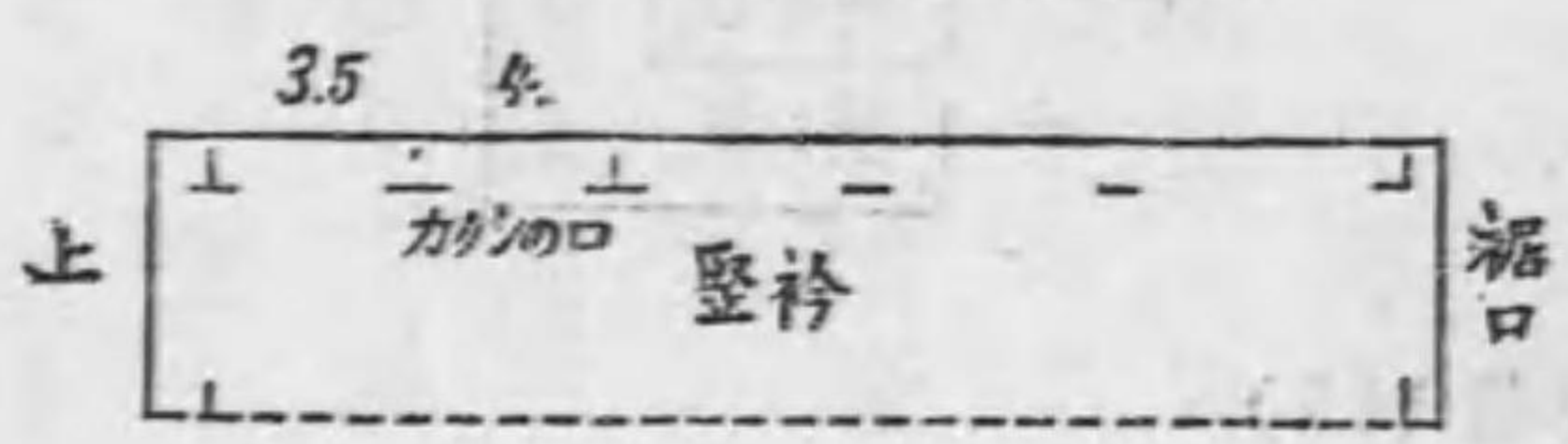
(一) 袖。袷羽織と同様。
(二) 裨。

袷羽織と同様にして丈を折り、袖付け、身入つ口、前下りの標を付け、後を左に開きて、堅衿下りは、合羽と同様に附け、次に隠しの口明きの標を附け、堅衿丈をはかる。

第二十一圖

堅衿及び隠し布

幅を二つに折りて、二枚重ねる



1. 裾口縫代
2. 丈標
3. 幅標
5. 隠の口、(丈の標より3.5下てり)下前のみにつける

ら、縫ひ代を一枚づゝ綴ぢる。

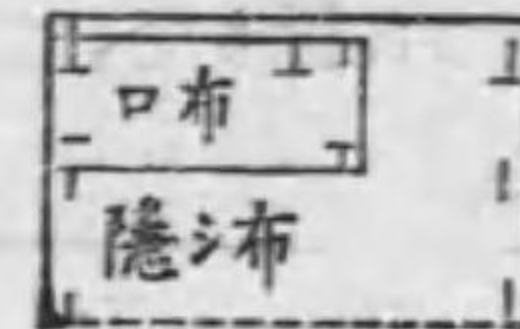
縫ひ方。

(一) 袖。女物本裁ち、袷羽織と同様。
(二) 裨。

(イ) 前後の胴接ぎをして、胴の方に折り返し、次に前下りを袷羽織の様に縫ひ、折りを附け、一束に躰けを掛ける。
(ロ) 背を細かに縫ひ後幅、肩幅の標を附け、次に兩脇を、背縫と同様細かに縫ひて、縫ひ目を割る。
(ハ) 背、脇を表裏合せて、堅綴ぢをする(縫ひ目が割つてあるか

幅を二つに折りて、其上に布を重ねる(口布は二枚)

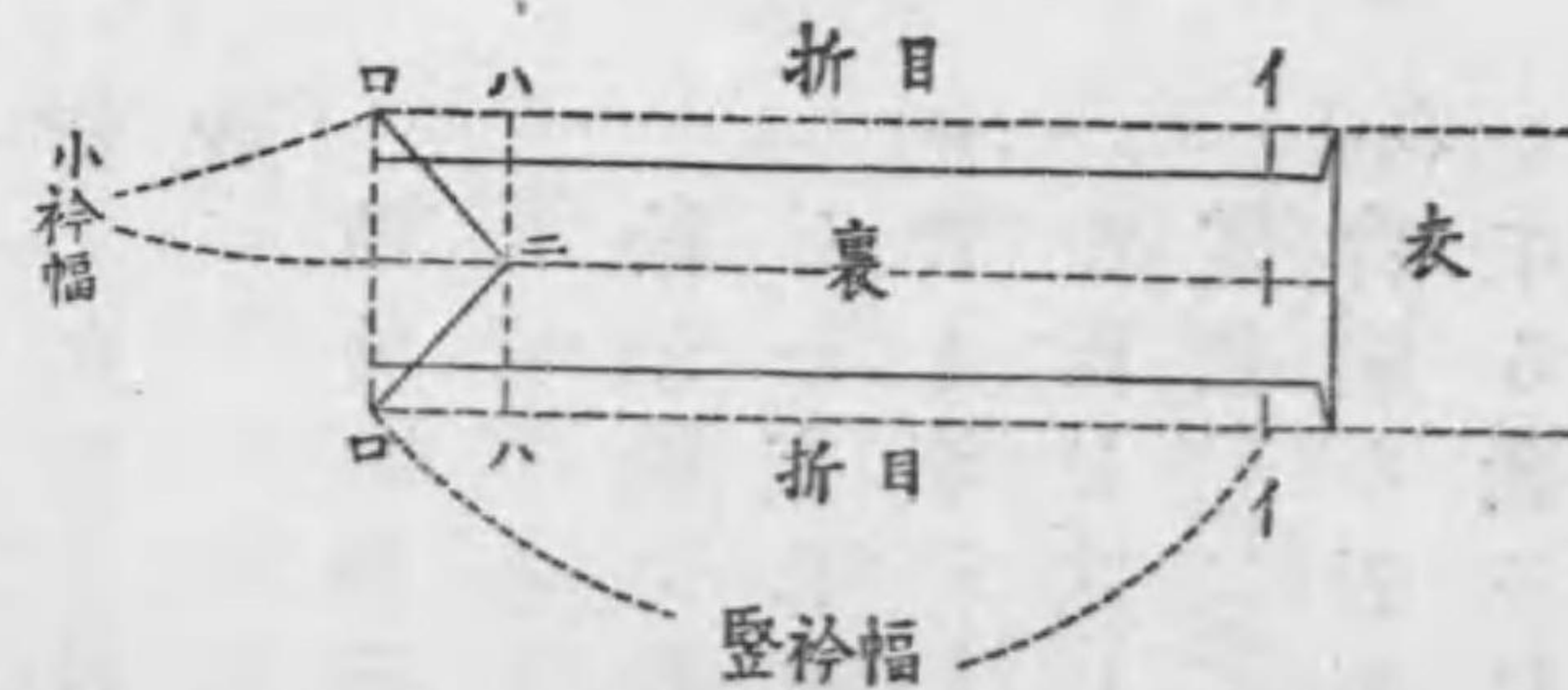
第二百二十二圖



1. 上の縫代(5)
2. 口明 (4)
3. 袋の深さ(4)
4. 口布の丈と縫代
5. 隠布の幅(縦衿幅より.05じめる)

第二百二十三圖

小衿の標附



1. 小衿の丈を二つに折つて、衿肩明、縦衿下、縦衿幅の標を附け次に幅をつける
2. (イ)と(ロ)とは縦衿幅、(ハ)と(ニ)は小衿幅、(ハ)と(ロ)も同様小衿幅
3. (ロ)(縦衿幅)より、衿を折つて、(ロ)より(ニ)に向つて通し筋をする

(4) 隠し布を二枚揃へて平にし、口明きのごまより下の方は、袋に縫ひ、口明きの上の方も、二枚縫ひ合せ、幅の輪の方を、縦衿幅の輪の處に綴ち附ける。

(5) 隠しの口の上下に、小さく門留めをして、口明きに躡けをかけて置く。

(ト) 小衿の額縁の標を、小針で返し縫ひにして、縫ひ目を割る。

(チ) 縦衿下りの角を、小衿の額縁の角を合せて、待ち針をさすか、又は糸にてさめるかして、縦衿を、小衿とを、平に釣り合ひを取りて、細かに角では、小衿のつれぬ様にして縫ひ、縫ひ目に割り罫を掛ける。

(リ) 小衿の先を縫ひ(角にしても、隅切りにしてもよい)折りは裏に返して後、衿芯を縫ひ目に綴ち附け、小衿の裏を割り目の上にのせて、縫ひ込みを、縫ひ目の際に、綴ち附ける。

重ね襷(二重襷)前五つ襷、前後五つ襷等がある。
各部寸法の割出し方(後三つ襷)。

各部名稱	割り出し方	備考
紐下	着丈の十分の七	但し子供物は着丈の十分の六 但し子供物は紐下の三分の二に か・五加へる
相引	紐下の三分の二に一或は一・五を 加へる	
後幅	着物の後幅に・五加へる	年齢體格によりて斟酌する
後一の襷幅	後幅の四分の三	
後中襷幅	布幅より後幅を減じ一加へて二分 する	
前後重ね幅	後幅の十分の一	
後寄襷幅	上 後幅の八分の一 下 後幅の四分の一	
後襷幅	一の襷幅の四分の一	
前後腰幅	後幅に同じ	子供物及腹部の太つた人は、五乃 至一加へる
前一の襷幅	後幅の五分の三	
前中襷幅	後幅に一・五加へて布幅より減じ 残りを三分する	

前二の襷幅	中襷と一の襷の中央より・五中襷 の方による
前寄襷幅	上 後幅の十分の一 下 後幅の五分の一
前襷幅	前一の襷幅の四分の一
後紐丈	後幅の六倍半若しくは六倍
前紐丈	後幅の十一倍

後大紋腰の割出し方

各部名稱	割り出し方	備考
後一の襷幅	後幅と同様	他は三つ襷と同様
後幅	後幅の四分の一	

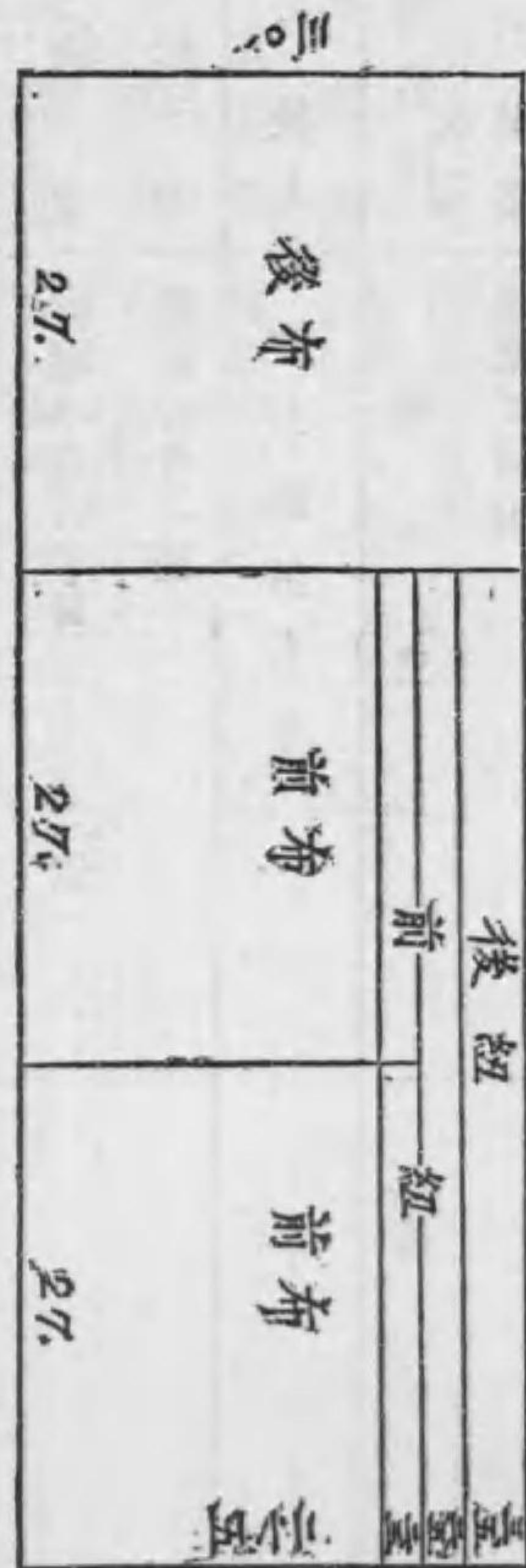
本裁ち女袴。

幅三尺の布を以つて、本裁ち、後三つ襷、女袴の裁ち方。
積り方(但し紐下二尺三寸)。
所要裁ち切り寸法。

前紐。幅、二寸五分 丈、一丈八寸。
後紐。幅、三寸五分 丈、五尺四寸。

備考。體の恰好や、人の好みによつて、切り上げ又は前後の差を附ける、切り上げを附ける時は、五分以上八分位まで。

第二百五十八圖



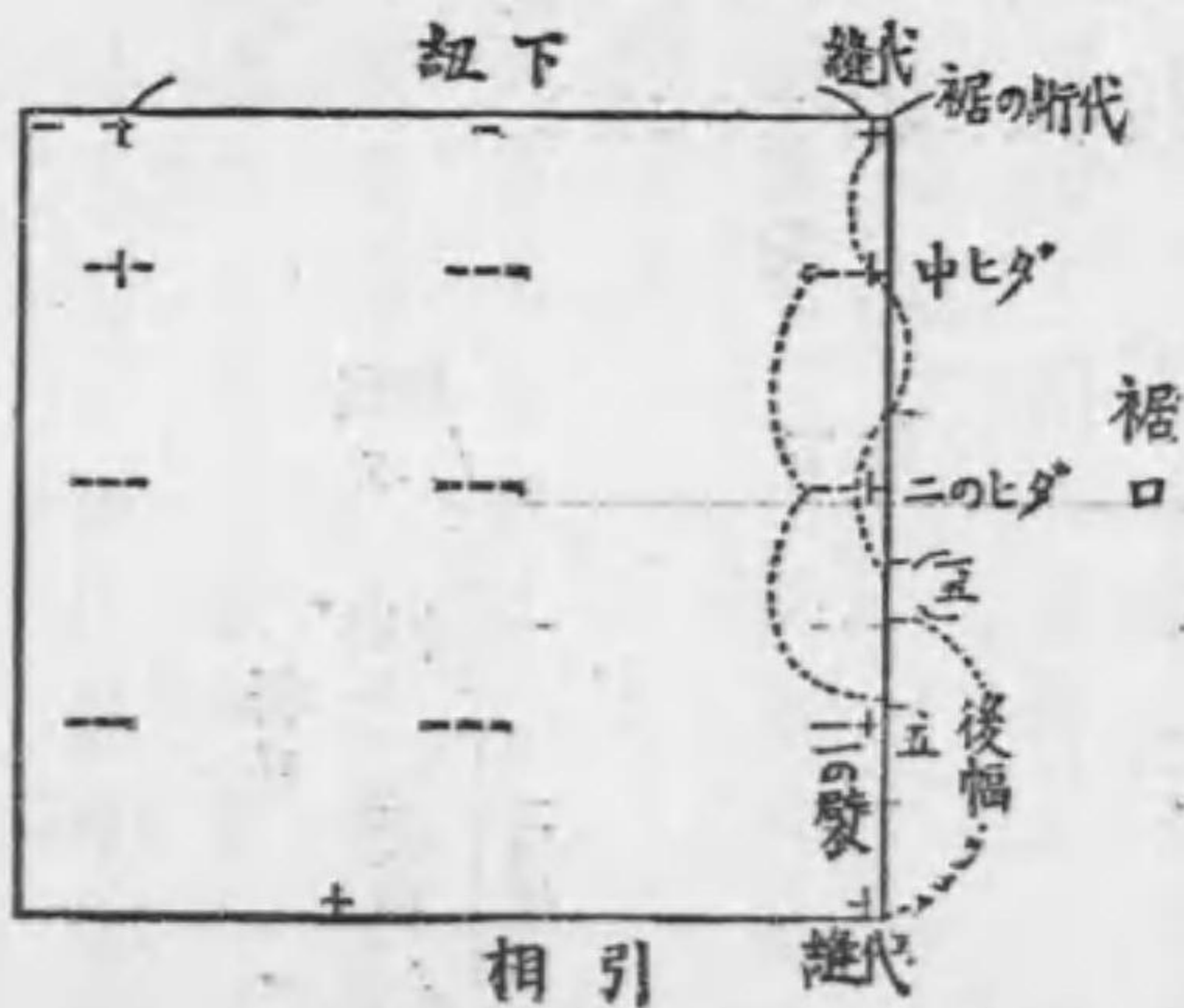
積り方公式 (紐下+裾折代+上の縫代)×3=總尺
回算式 (23+0.5+3.5)×3=81

仕立て上げ寸法。

相引、一尺六寸五分 後幅、八寸 後腰幅、八寸 後一の襷幅、六寸
 中襷幅、下二寸、上一寸 後襷幅、一寸五分 前腰幅、八寸
 一の襷幅、四寸八分 二の襷及び中襷、下一寸六分、上八分 襷幅、一寸二分 後紐幅、一寸四分 前紐幅、九分。
 標附け方。

第二百二十九圖

前布を中表に二枚重ねる



1. 裾口の方で相引の縫代を取る
2. 後幅を取る(8)
3. 一寸五分取る
4. 中央の縫代を取る
5. 中央の縫代の標と、一寸五分の標との間を、三等分して、中襷を取る

5. 裾の筋代を取る

6. 紐下及び、相引を取る

切り躰をする事、前と同様

後は、中襷が五分深くなり

前は、中襷より二の襷が五分、二の襷より、一の襷が五分深くなる
始めに後幅を前後とも取るのは、襷の深さを見るためであるから
後幅を取つて残つた寸法は、全體の襷の深さである

縫ひ方。(裁ち目は巻き縫ひにする)。

(イ) 前布を、二枚合せて中央を縫ひ、背と反対に折りを返す(後布に縫ひ目のある時も、前と同様に縫ひ、折りも同様に返す)。

(ロ) 前後の相引を合せて縫ひ、前布の方へ、折りを返す。

(ハ) 裾口を三つ折りにして、三四分の針目で締める。

裾裏布を付ける時は、表布を手前に、裾裏布を、向うにして縫ひ付け、裾裏布の方に折りを付け、表布を一分裏の方に返る様にして、一束に躰けを掛け、裾裏布の上の端を折つて、三分位の針目にて、表布に締

6. 相引の縫代より一の襷幅を取る

7. 一の襷の標より五分取り、其標と、中襷との間を、二等分して二の襷を取る

8. 裾の筋代を取る

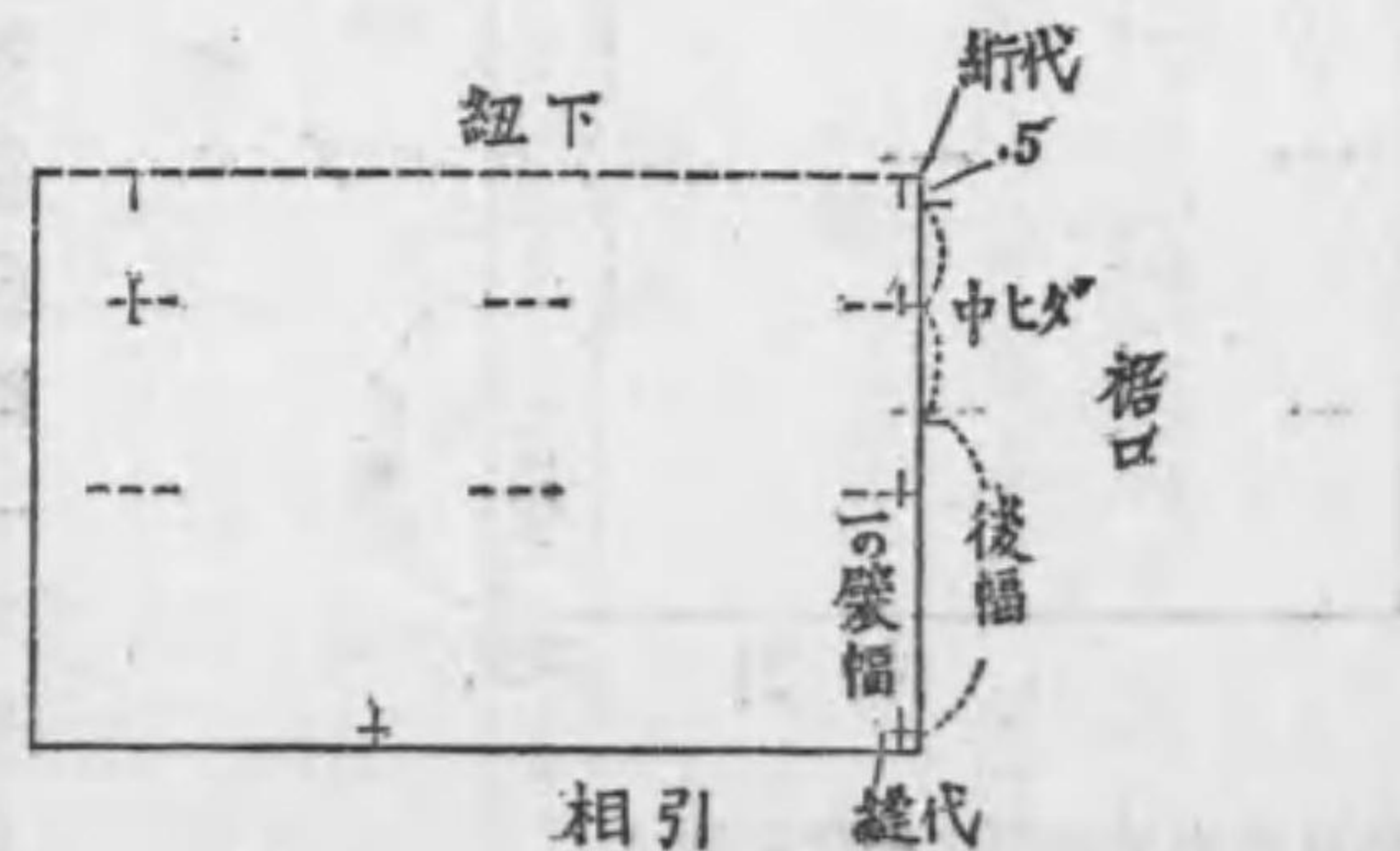
9. 紐下及び相引を取る

標は、躰糸二本で、二枚一緒に縫ひ、糸をゆるめにして置き、布の間で切る

第百三十圖

後布を中表に幅を二つに折る

輪



1. 裾口の方で、相引の縫代を取る
2. 後幅を取る(8.)
3. 輪の方から五分取り、其標と、後幅の標との間を、二等分して中襷を取る
4. 一の襷幅を取る

け附ける。

襷の取り方。

(イ) 前後共、標通りに折りを附ける(折りの附きにくいものは、襷けでおさへる、中襷の下前になる方は、前後とも、重ねの寸法だけ折りだして、襷けを掛ける)。

(ロ) 後布を上にし、裾口を右になる様にして、平に伸ばし、左脚の中襷の標を、中央の縫ひ目に合せ、其上に、右脚の中襷の折り目を合せて重ね、丈標及び裾口をよく合せて、襷けをかける(中央八分重なる)。

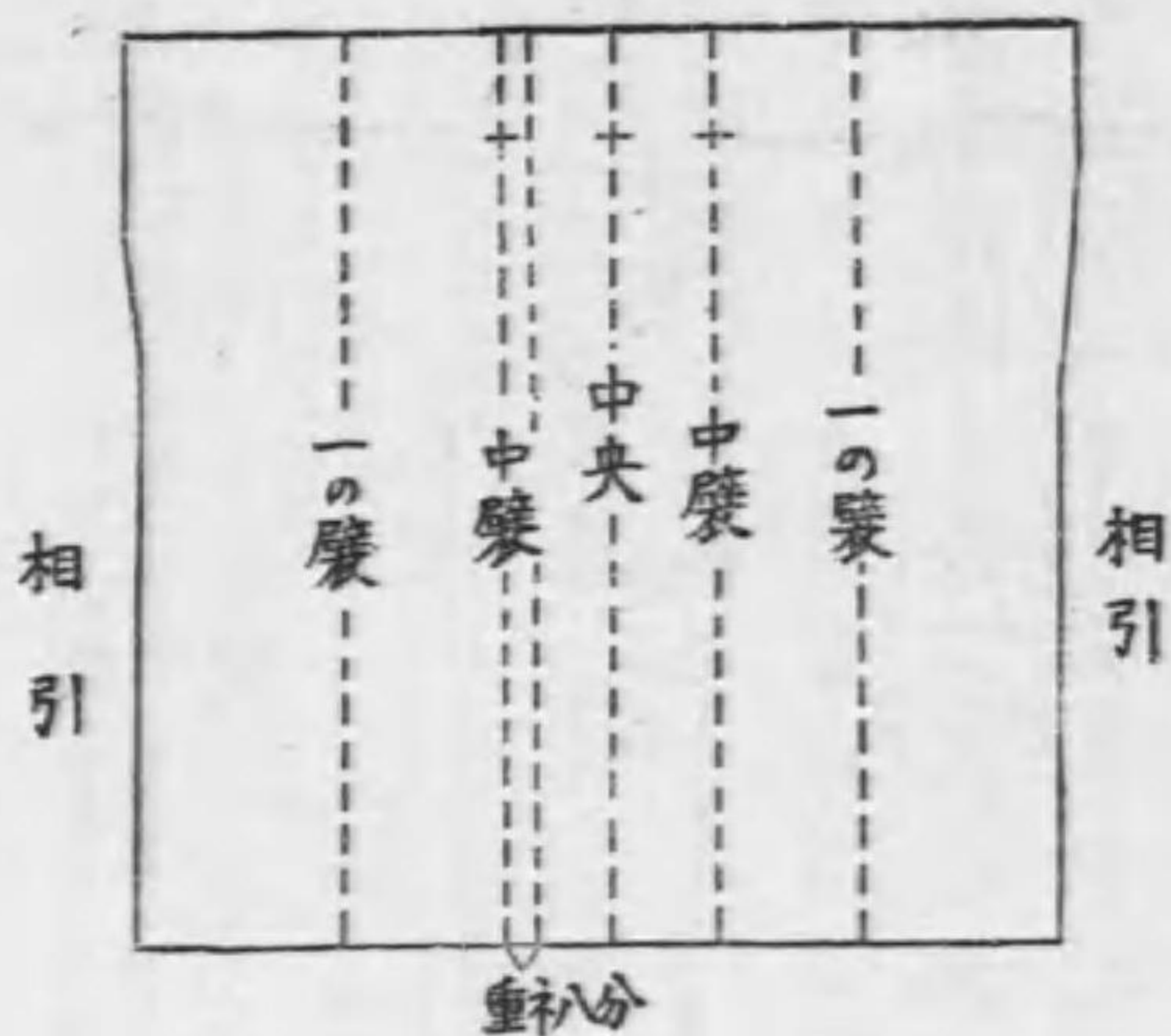
(ハ) 左右の一の襷を、上下の寄せ襷の寸法に従つて寄せ、だりつりのない様、平にして、襷けを掛ける。

(ニ) 前布も後と同様の仕方で寄せ、襷けでおさへる(但し後と反対に中央は右脚が下になる)。

襷の標に折りを附けたる圖

第百三十一圖

後



第百三十二圖

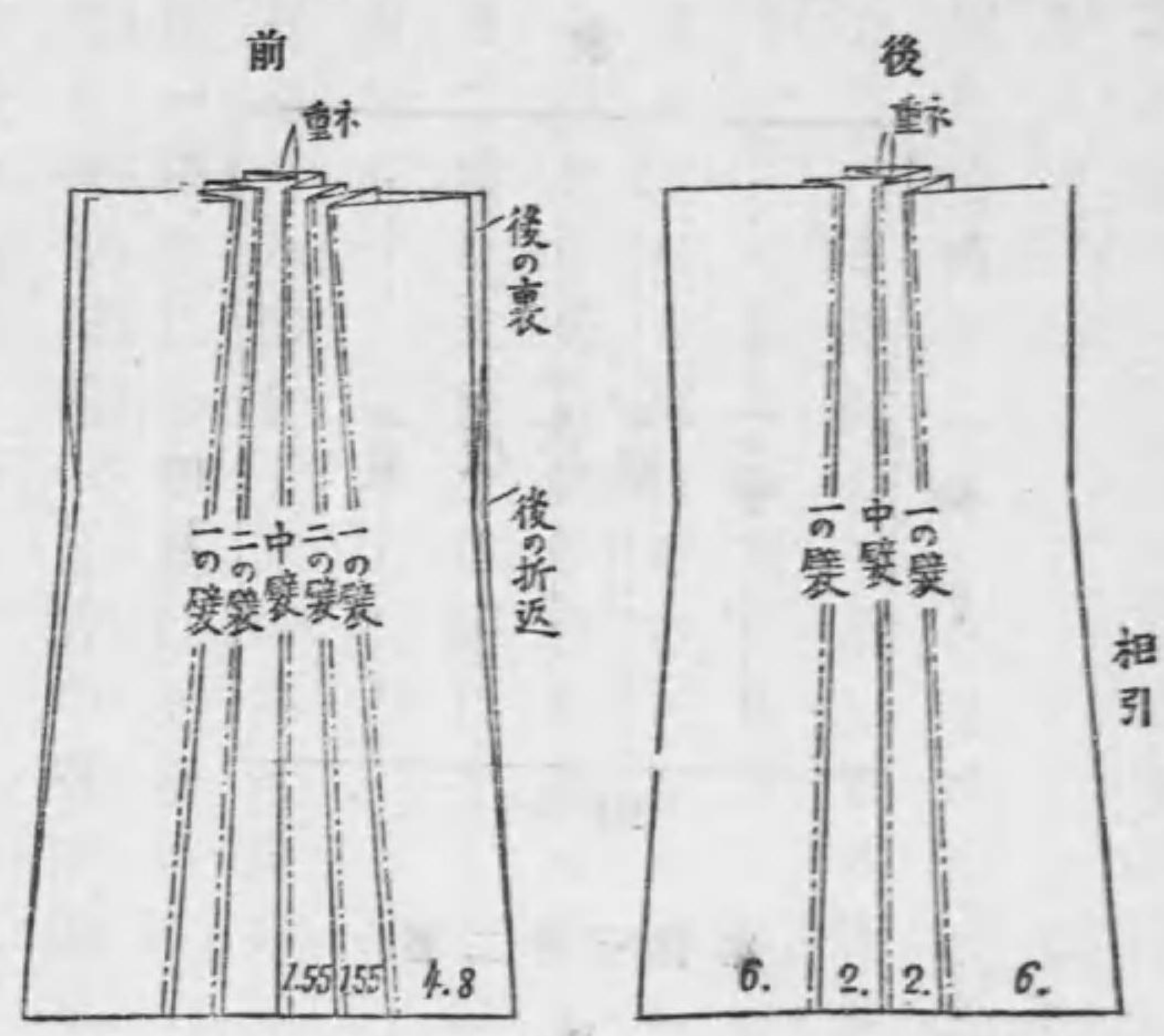
前



寄せ襷を取り上げた圖

第三百三十五圖

第三百三十四圖



相引

- （イ）笹襷になる處の耳をよく伸ばして置く。
- （ロ）第一三五圖の如く寸法を取り（ロ）の標を山として、裏の方に折り、次に（イ）の標の處を、恰好よく笹の葉形に折りて、第一三六圖の如く折りて、軽く鍔を掛ける（紙か布の上から）。
- （ハ）相引の止りに、小さく門

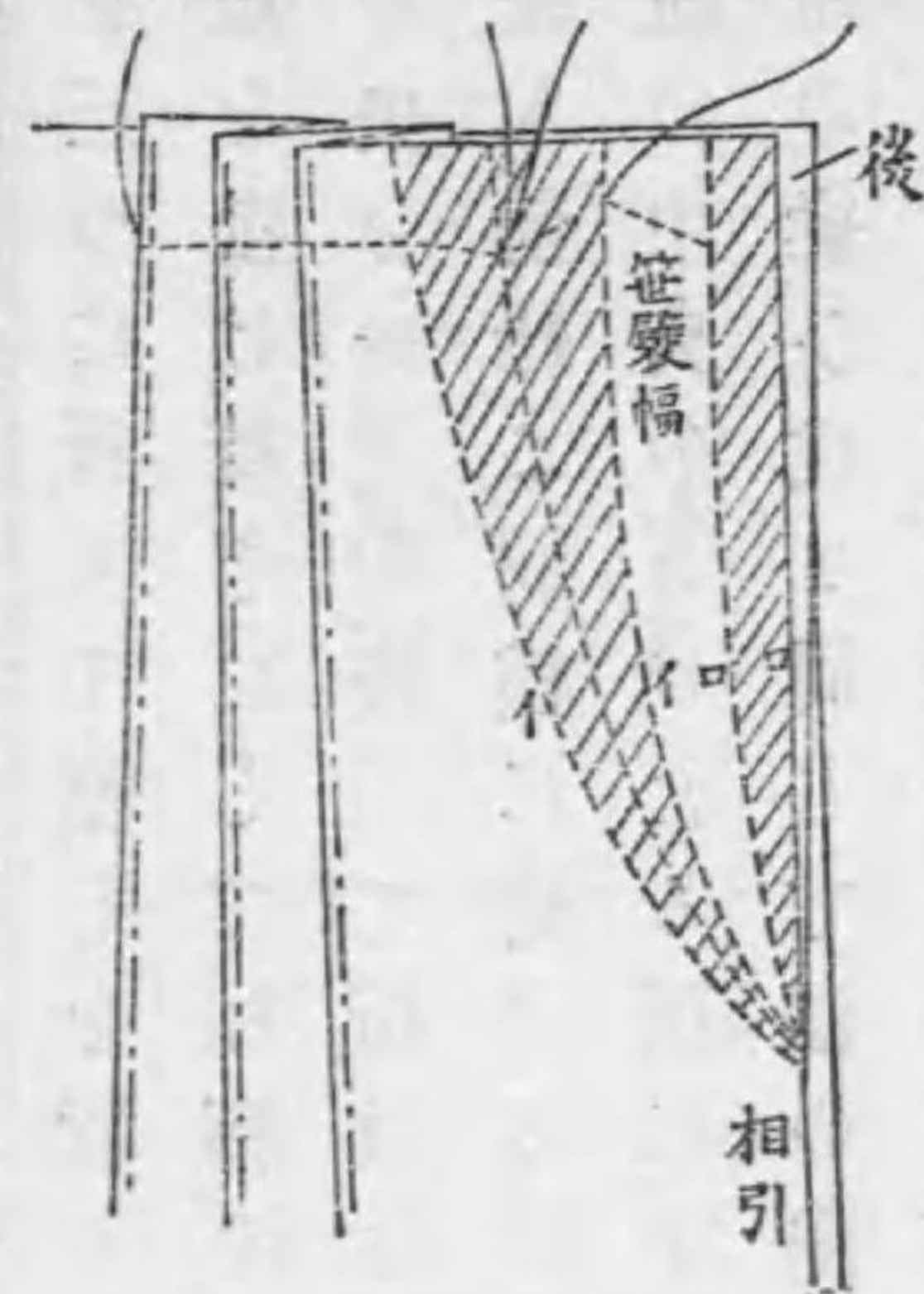
留めをする。

（ニ）笹襷の折り目を開き、折り山から一分の處を、五分位の針目で綴ち（相引のとめの處より、三分位離れた處から、小針三針程出して綴ち始める）次に裏を縮ける（平に下に置きて針をうち、裏の方がだつても、其儘縮ける（若だれたのを、伸ばすと、振れる事がある）前後とも同様。

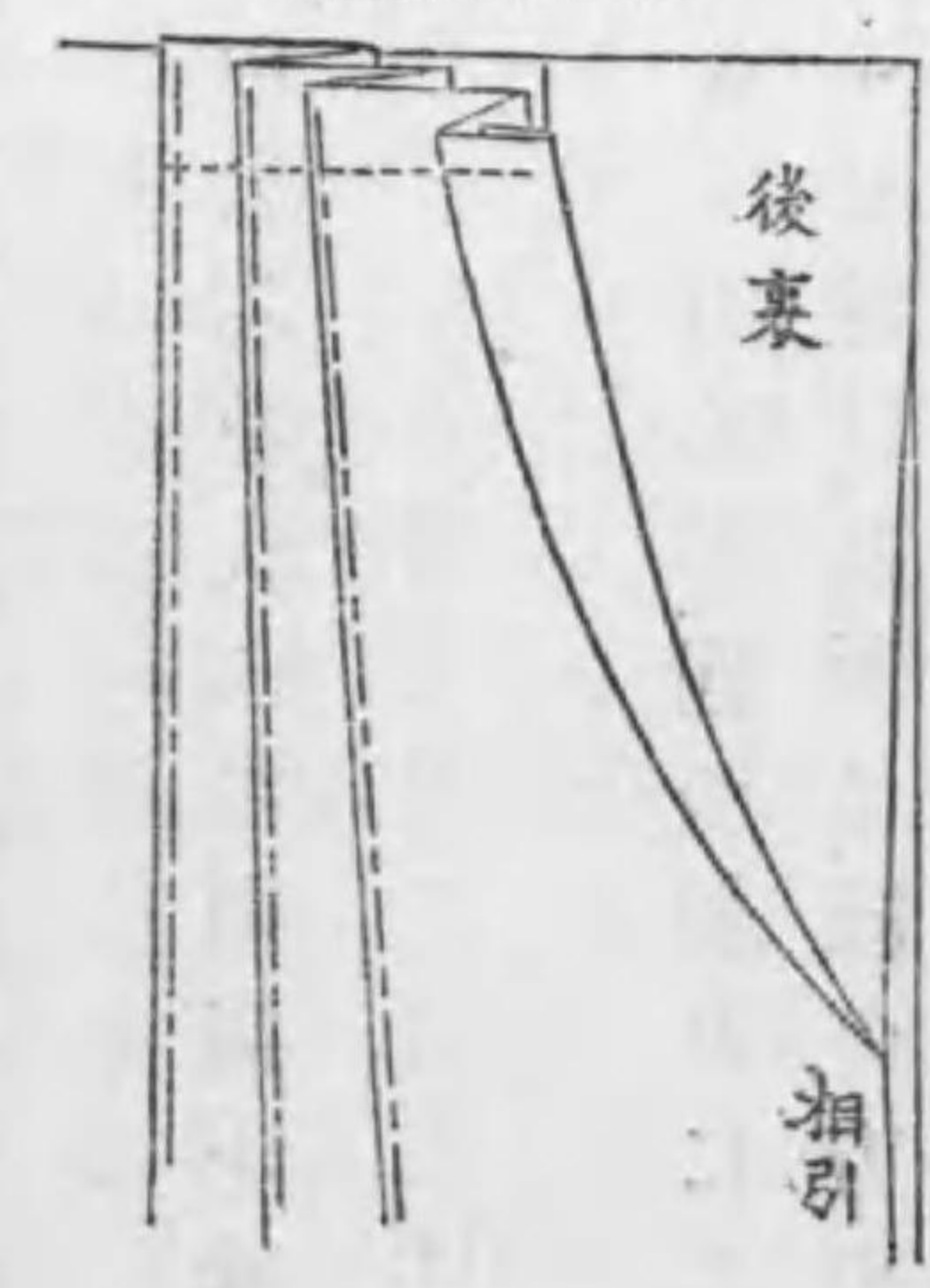
注意（イ）と（イ）との間は中に疊みこまる
（ロ）と（ロ）との間は中に疊みこまる

笹襷の取り方 第三百三十五圖

腰幅÷2-0.2 笹襷幅-0.2



笹襷を折りたる圖 第三百三十六圖

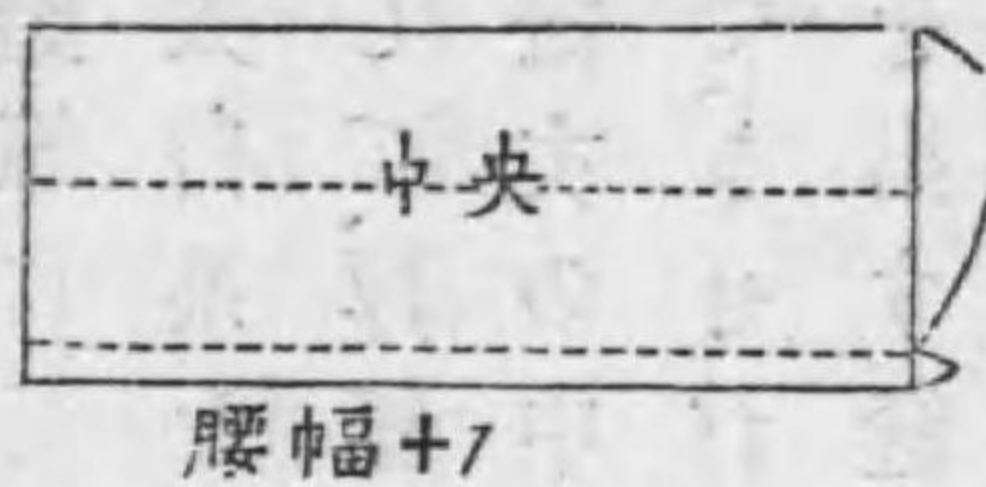


女袴

- (ホ) 丈を三つに折りて、壓しを置く。
- (ヘ) 前紐を掛け接ぎにして、紐幅を折り、中に芯を入れて、両端を縫ひ、中央を一尺程、残して縮ける。
- (ト) 後紐も、前紐と同様に縮ける。
- (チ) 前紐の中央のあけたる所に、半紙をよくもんで、四つ折りにして、紐の縫ひ代と同じ寸法の處に折り、其所に紐の方の折りこを、合せて、紐を引き加減にして綴ちる。
- 袴を三つ折りにしたまゝ、前の方を後に折り返し、紐の中央と袴の前腰の中央とを合せ、中央で二分下げて、弓なりに針をうち、より糸で返し縫ひに、少しきせのかゝる様に縫ひ付け、表裏とも、襷の山には、必針を出す、縫ひ込みの平になる様、薄き處には、芯を入れて、紐の縮け残したる處から、裏を縮ける。
- (リ) 後紐には、板目紙か厚紙、又はキヤンバス(麻布)を入れ、飾をして

厚紙の裁ち方

第三百三十七圖



よる
二倍の
紐幅の
一分減
り
縫代三分

第三百三十八圖

折りたる處



み落
丸の
切
六分
五にし
す

附ける。
厚紙の幅は、紐幅より五厘引いたものを、二倍して裏表とし、それに縫ひ代を三分加へる。
丈は、腰幅より、左右にて、五分づゝ一寸長くする。

注意。厚紙の折り目には、通し篋を

して、能く折り目を附ける。
厚紙の附け方は、後紐丈の中央と腰紙丈の中央とを、合せて、紐の中央に腰紙を入れ、紐布を十分引きて綴ち、折り目より三分上つた處に、飾りをする、飾りは二目落しに、大針、三針より五針、出す。
飾り紐の通し方は、厚紙の裏の方

女袴

に、鉛筆にて、針敷を寸法通りの針目にして記し置き、其標通りに、太白糸を、中央より兩方に通し、始めと終りと、糸を少々長くして、厚紙に綴ち附ける。

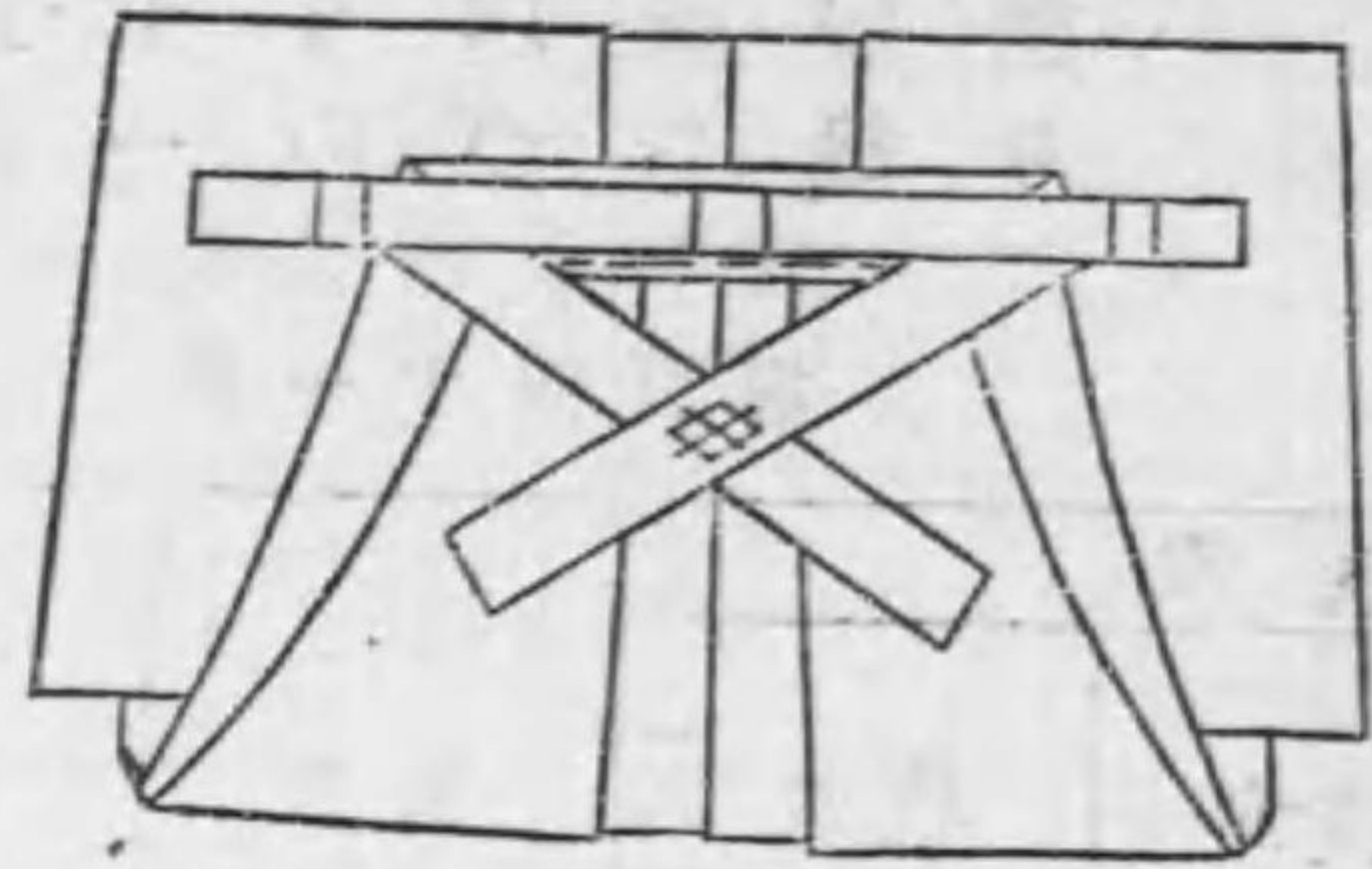
後紐丈の中央と、後腰幅の中央とを、合せて待ち針を刺し、より糸で、きせだけ浅く返し針に縫ひ附けて、裏表の襷の山には必針を出す、縫ひ込みを平にして、裏を縮け附ける。

若丈が長くて、縫ひ込みの多い時は、紐幅だけにして裏に折り返し、紐附けの縫ひ目の處に、返し針に縫ひ附け、其上に紐を縮け附ける、前紐も同様仕上げ。

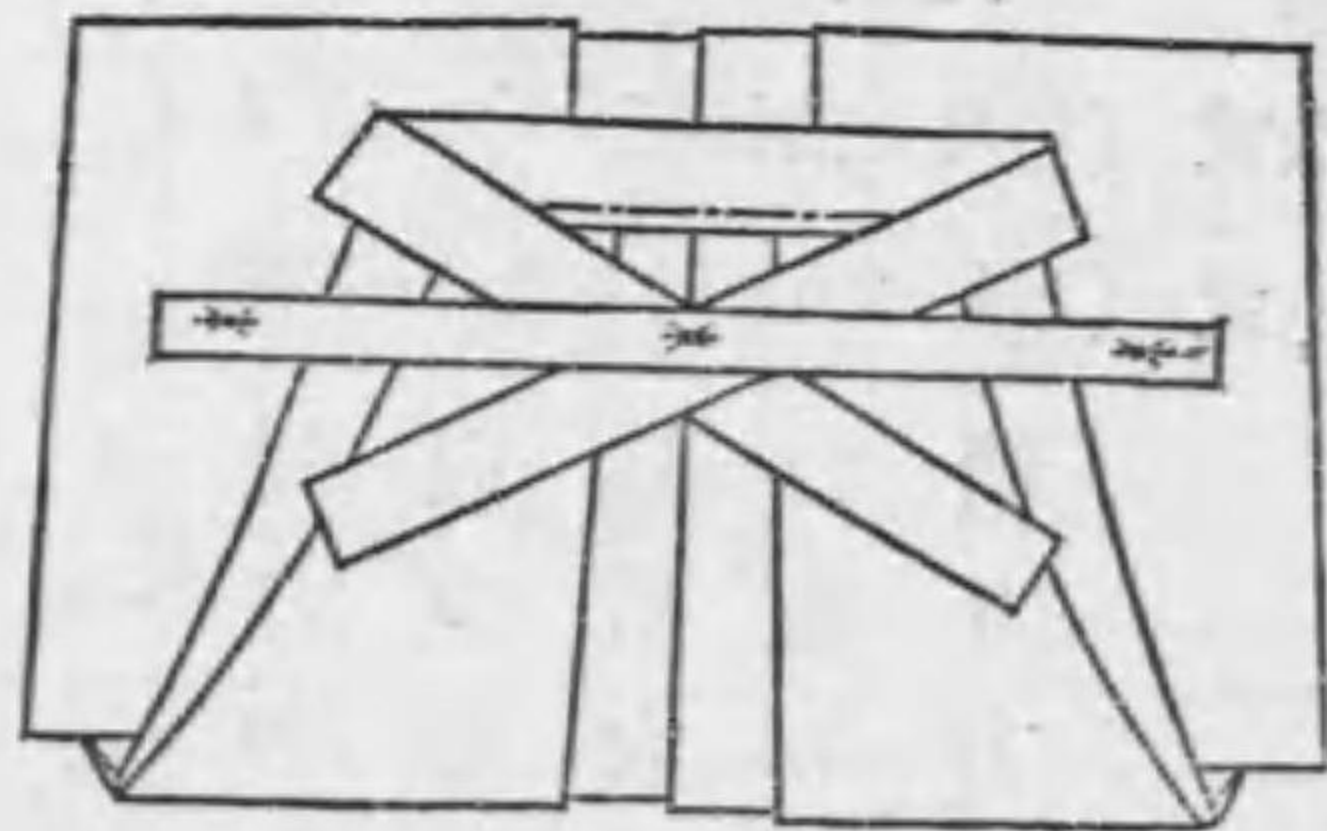
出來上つたならば、白布に霧を吹いたものを當て、火熨斗を掛け、圖の如く疊みて、後紐の重つた所を、白糸で綴ち、前紐は、兩端を五分、中央は、七分に切つた紙で封じる、又一四〇圖の様な

仕方もある。

疊み上げたる圖
第百三十九圖



第百四十圖



前紐は、前後の間で組み合はせて、兩方に出して折る

附言 前記の縫

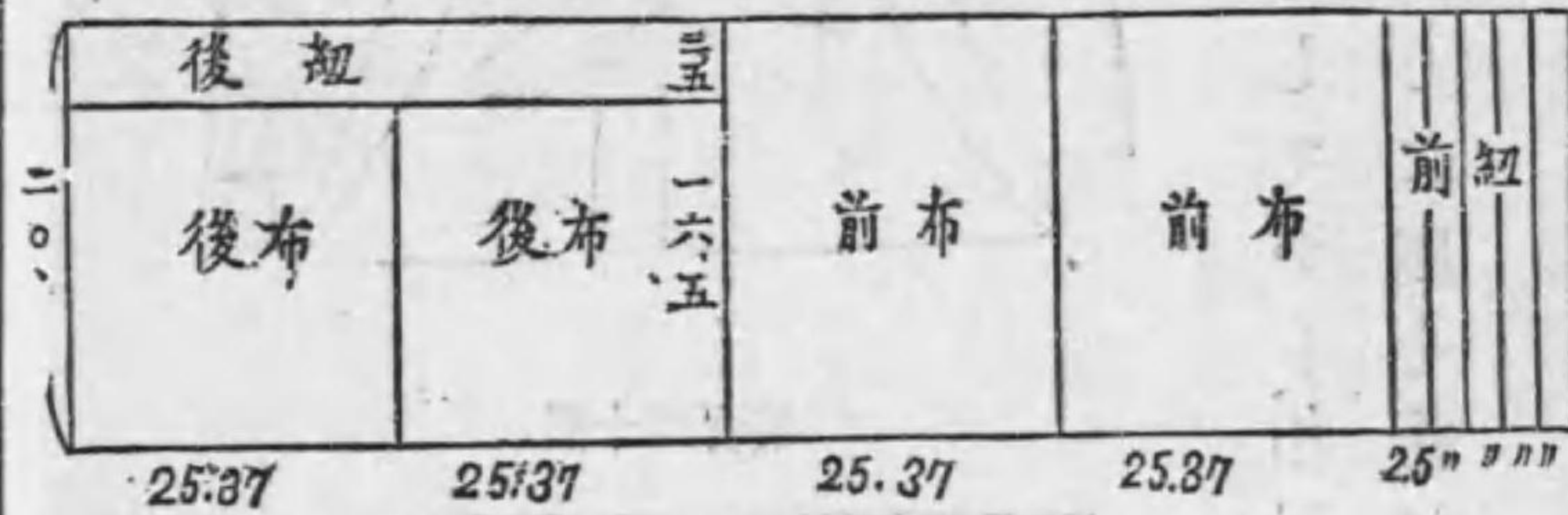
ひ方は、相引きを縫ひ合せて後、襷取りをする仕方であるが、相引きを合せない前に、前後別々に、寄せ襷を取り、襷の

よく、押しをしてから、相引きを、縫ひ合せ、次に、裾口の相引きの處の、縮け残した處を、縮ける方法もある。

裁ち方 各種

幅二尺、長さ一丈一尺四寸の布を以つて、本裁ち女袴の裁ち方積り方。

第百四十一圖

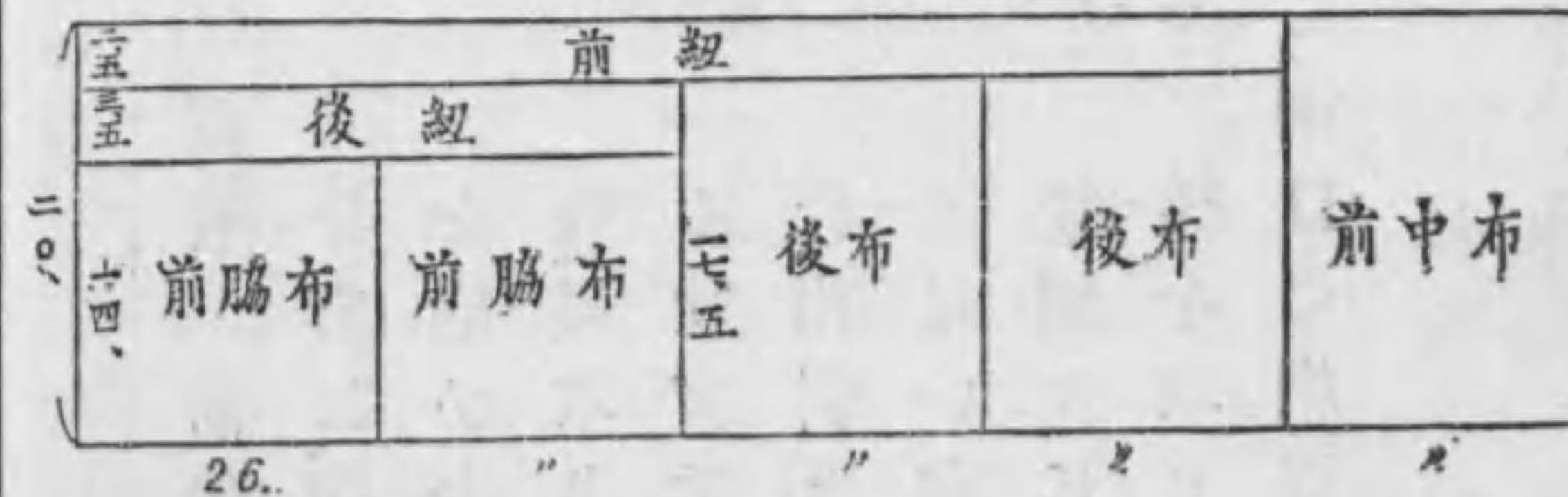


積り方公式 (總尺-前紐幅×5)÷4=布丈

同算式 (114-2.5×5)÷4=25.37強

幅二尺、長さ一丈三尺の布を以つて、本裁ち女袴の裁ち方積り方。(但前紐を横に取る。)

第百四十二圖

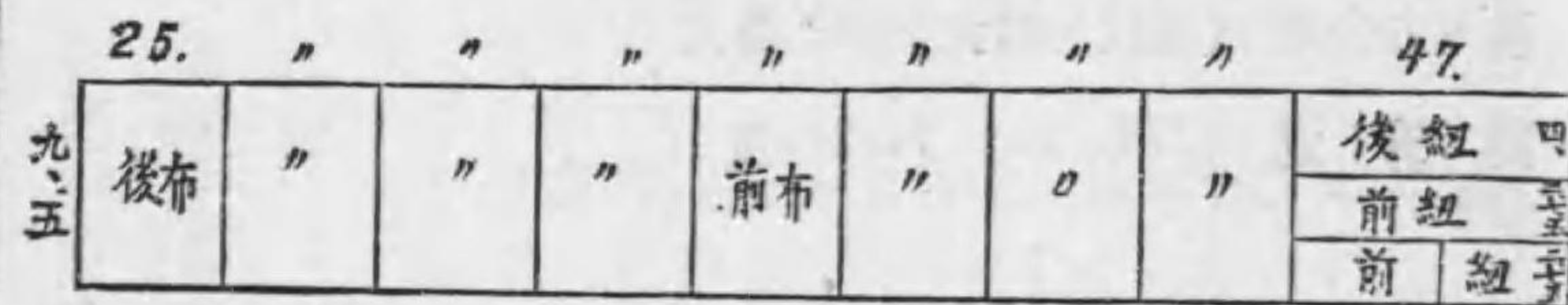


積り方公式 總尺÷5=布丈

同算式 130÷5=26

並幅の布を以つて、本裁ち女袴の裁ち方積り方。(但し紐下二尺二寸。)

第百四十三圖

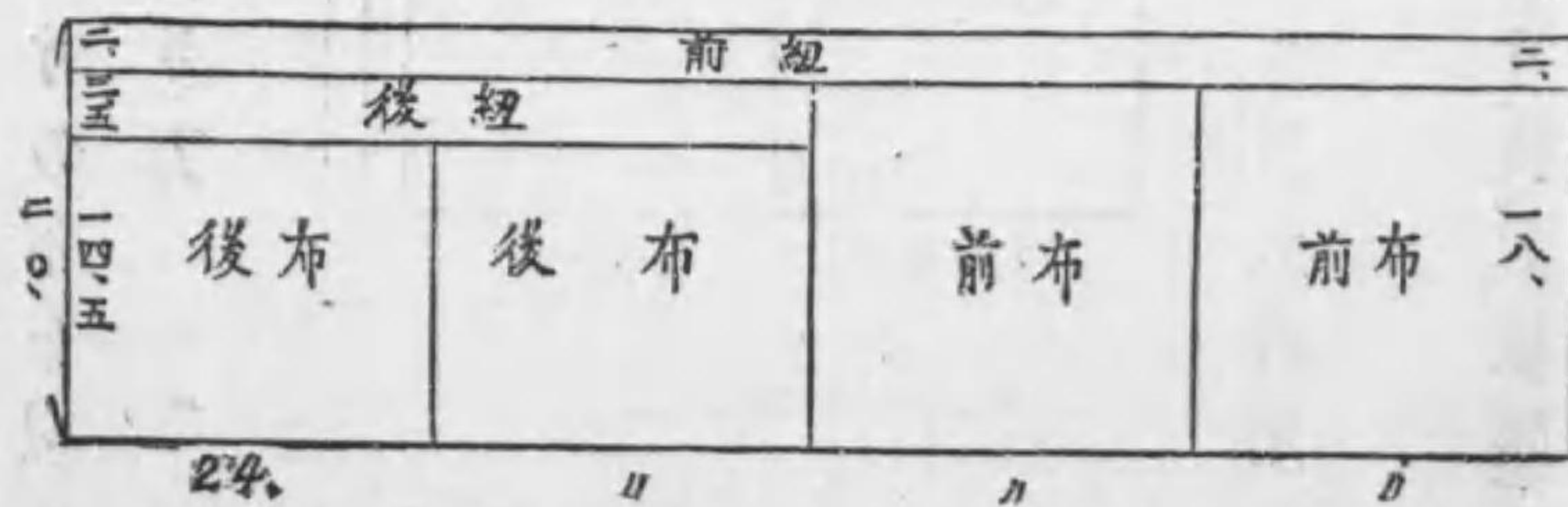


積り方公式 (紐下+裾幅代+上の縫代)×3+後紐丈-總尺

同算式 (22.+0.5+2.5)×3+47=247

幅二尺、長さ九尺六寸の布を以つて、十歳の女袴の裁ち方積り方。

第百四十四圖

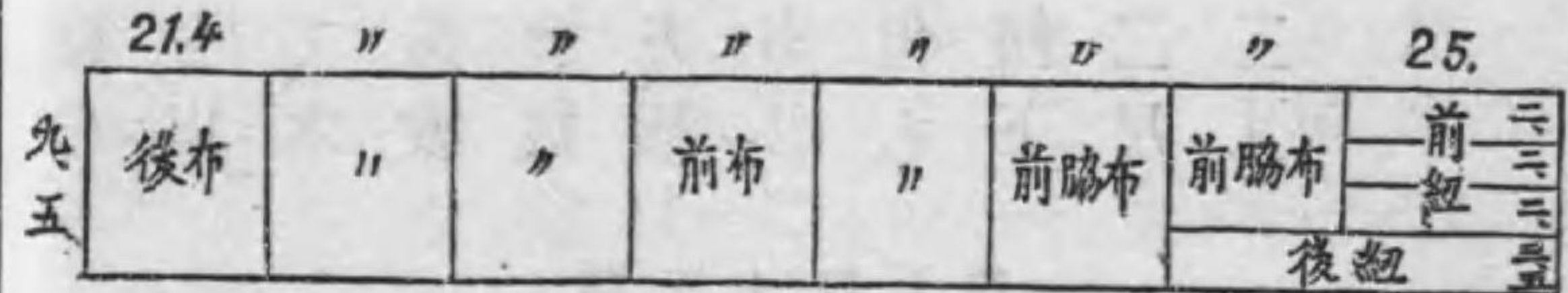


積り方公式 總丈÷4=布丈

同算式 96÷4=24

並幅、長さ一丈七尺五寸の布を以つて、十歳の女袴の裁ち方積り方。

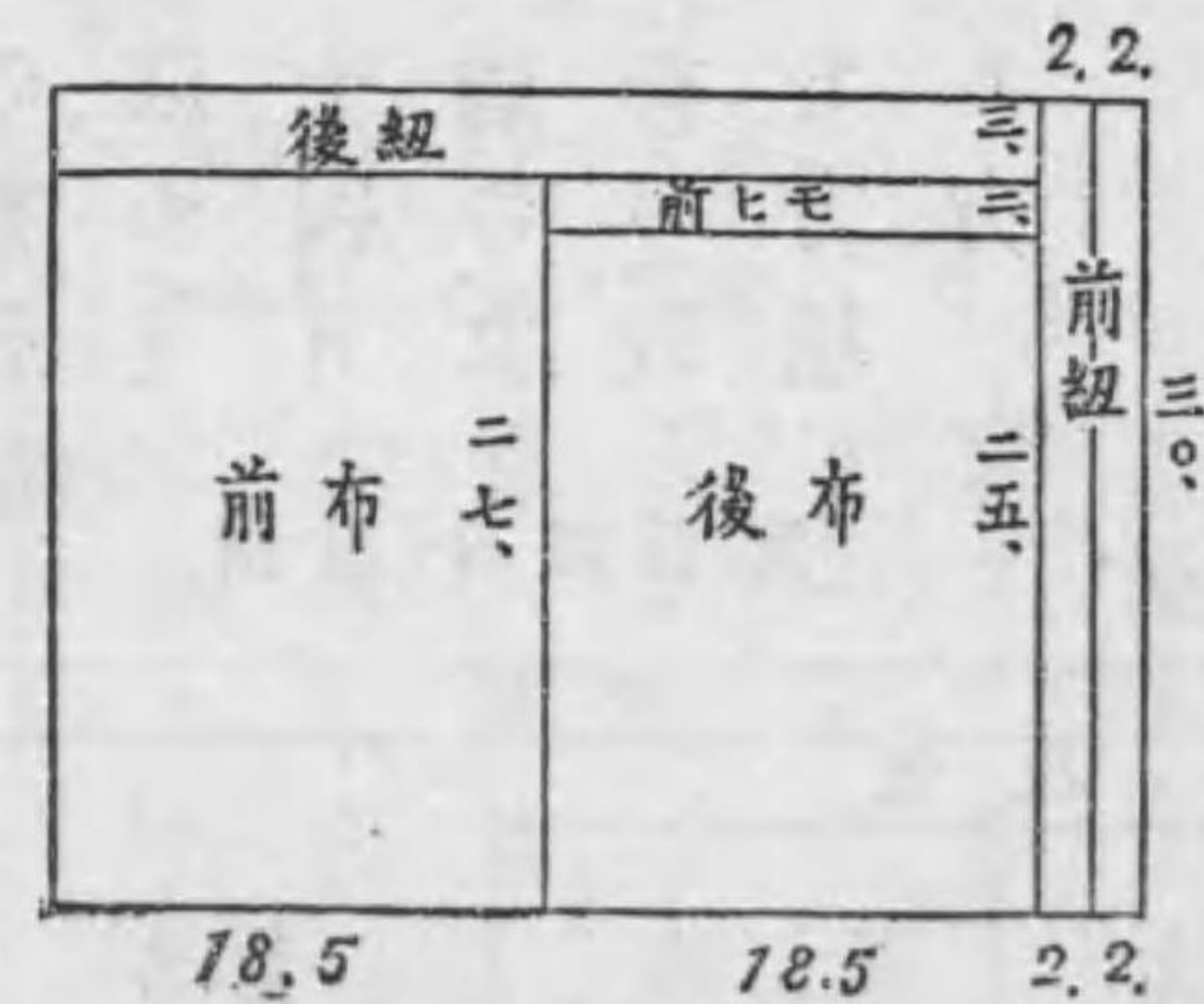
第四百十五圖



積り方公式 (總尺-紐丈)÷7=布丈

同算式 (175-25)÷7=214強

第四百十六圖



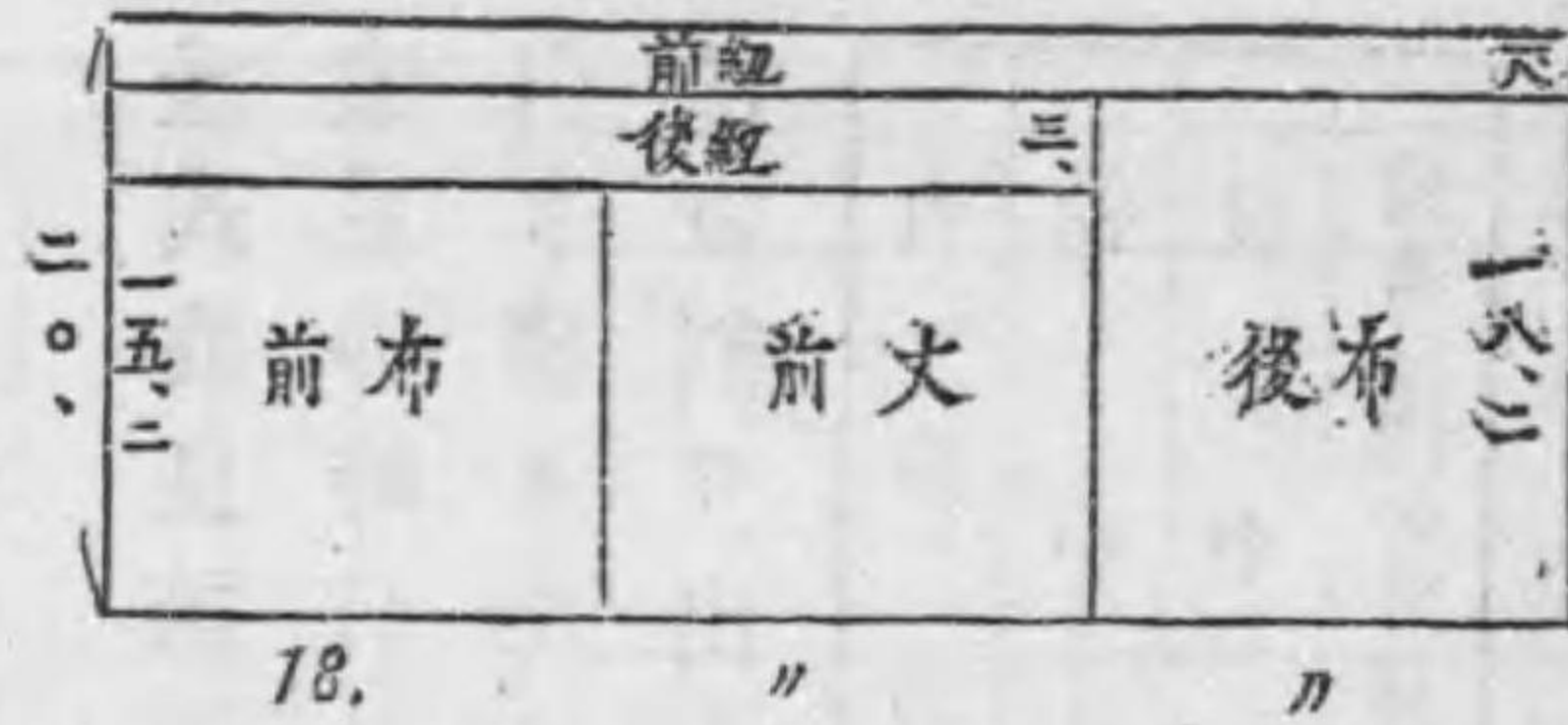
積り方公式 (總尺-紐幅×2)÷2=布丈

同算式 (41-2×2)÷2=18.5

幅三尺、長さ四尺一寸の布を以つて、七八歳用の女袴の裁ち方、積り方。

幅二尺の布を以つて、五六歳用の、女袴の裁ち方積り方。
(但し紐下一尺四寸、後、大紋腰)。

第四百十七圖

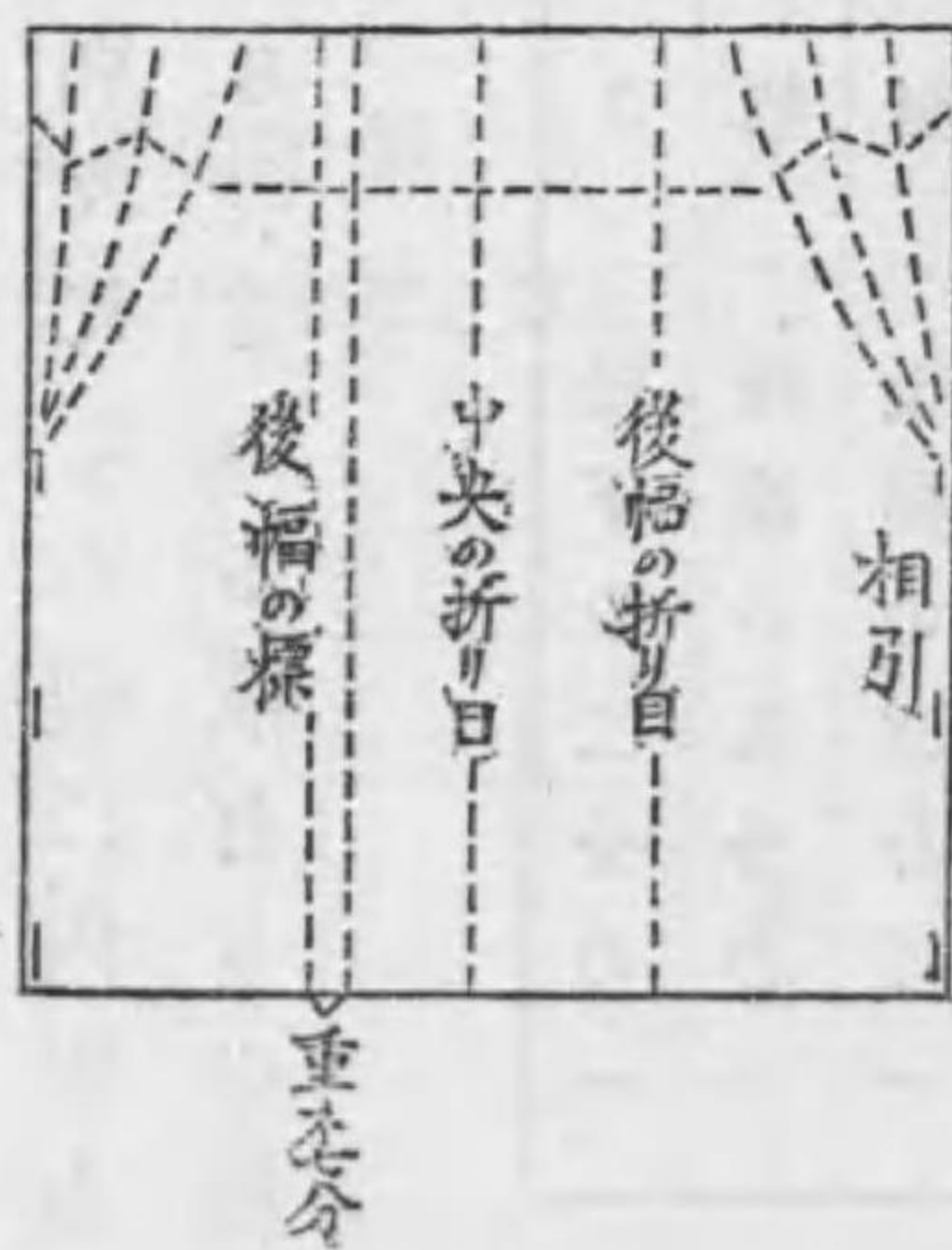


積り方公式 (紐下+裾新代と上の縫代)×3=總尺

同算式 (14+4)×3=54

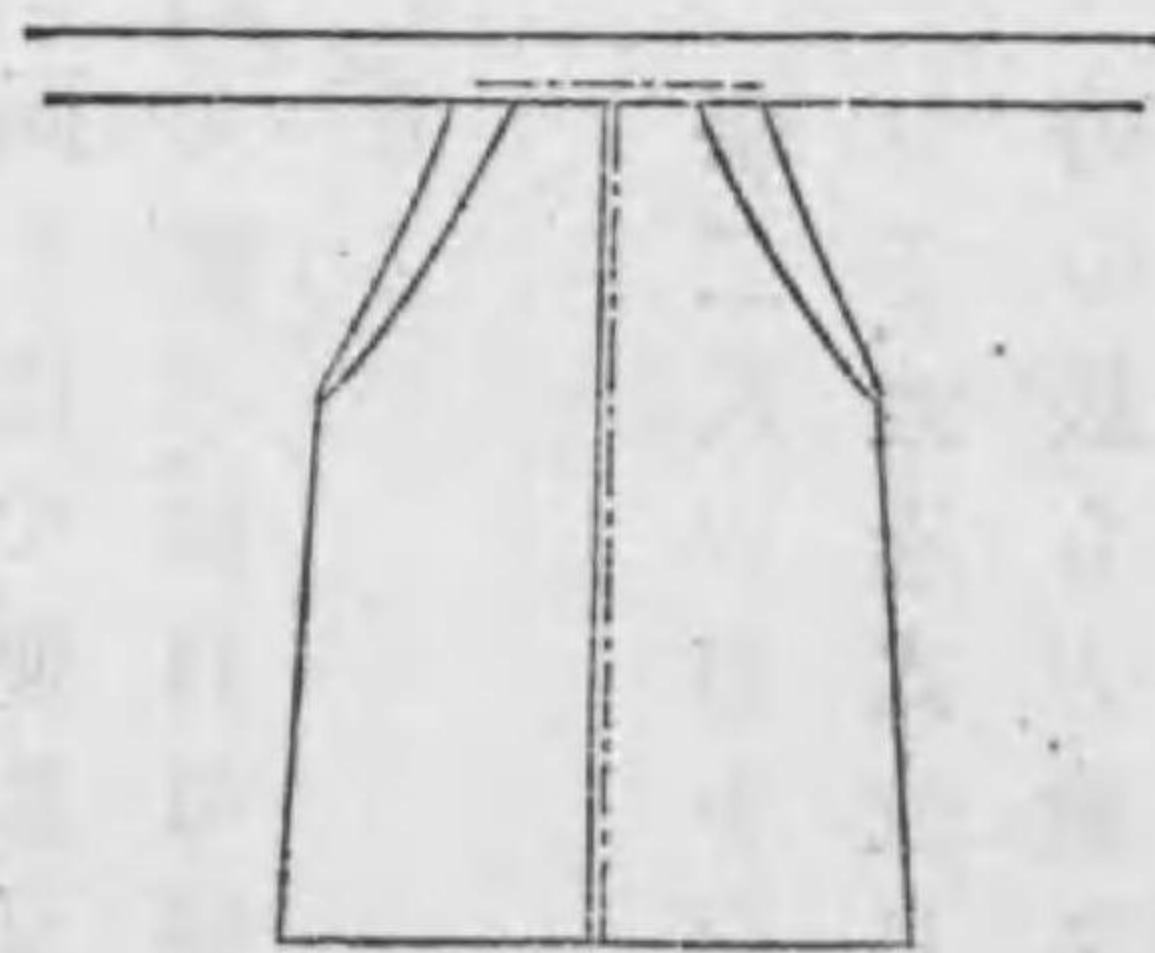
後布に襷折りの附け方

第四百十八圖



後出来上り圖

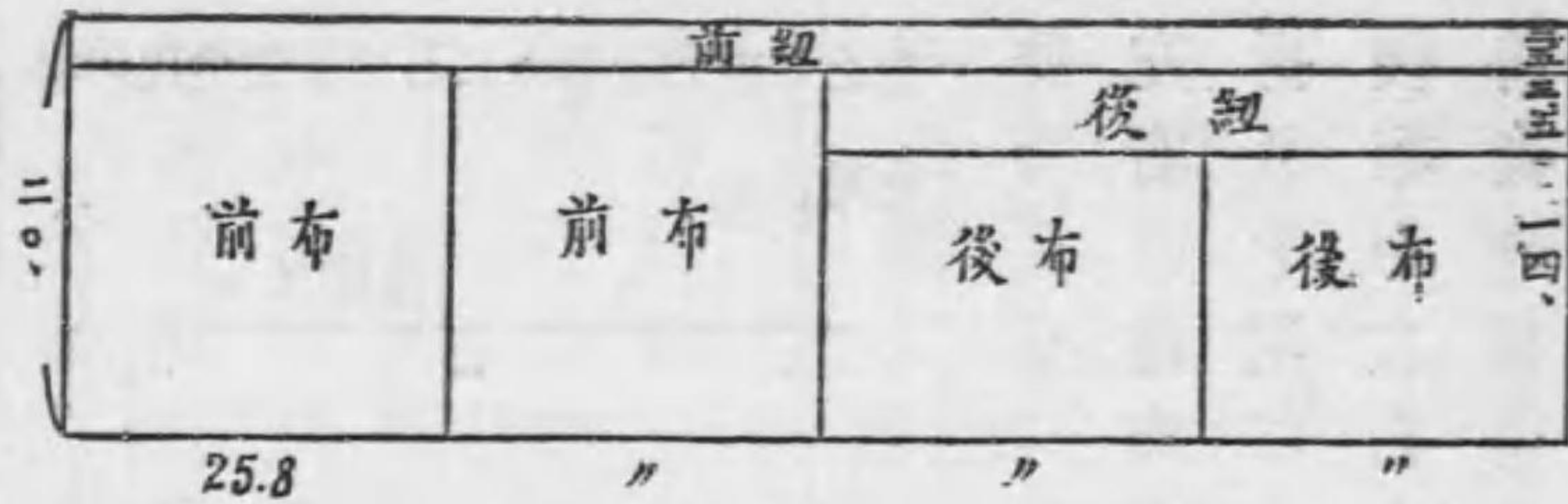
第四百十九圖



注意 紐下の寸法があつて、裁ち切り寸法を定める時は、前の裁

ち方は十分縫ひ込みを取つて、仕立て直しの時に、差支へのない様にしてあるが、一杯にする場合ひは、二寸位長くすれば宜

第百五十圖

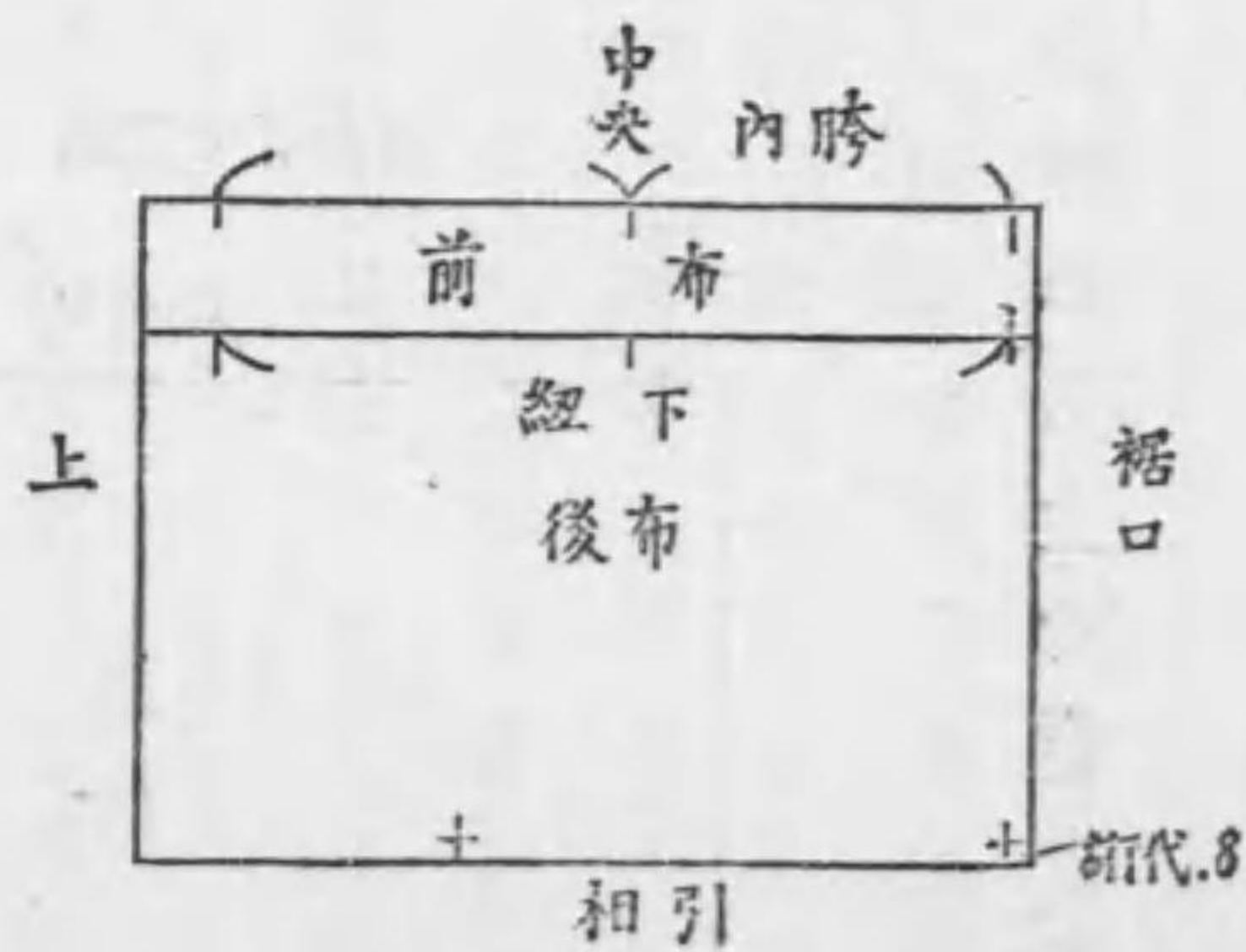


積り方公式 (紐下+裾新代+上の縫代)×4=總丈

同算式 (23+0.3+2)×4=103.2

第百五十一圖

前布二枚の上に、後布を重ねる



1. 裾新代
2. 紐下
3. 相引
4. 内胯の高さ
5. 相引の縫代

標附け方。

しい、若丈に揚げをするならば、揚げの分だけ、相引きを高くして置く。

渡邊式改良袴

渡邊式改良袴は、平素用ひる時は、普通の女袴と同じ様で、運動又は遠足の時には、左右別々になる様に、内胯を釦で掛け、裾口の紐を引き締めて、く、るものである(襠有りの様になる)。

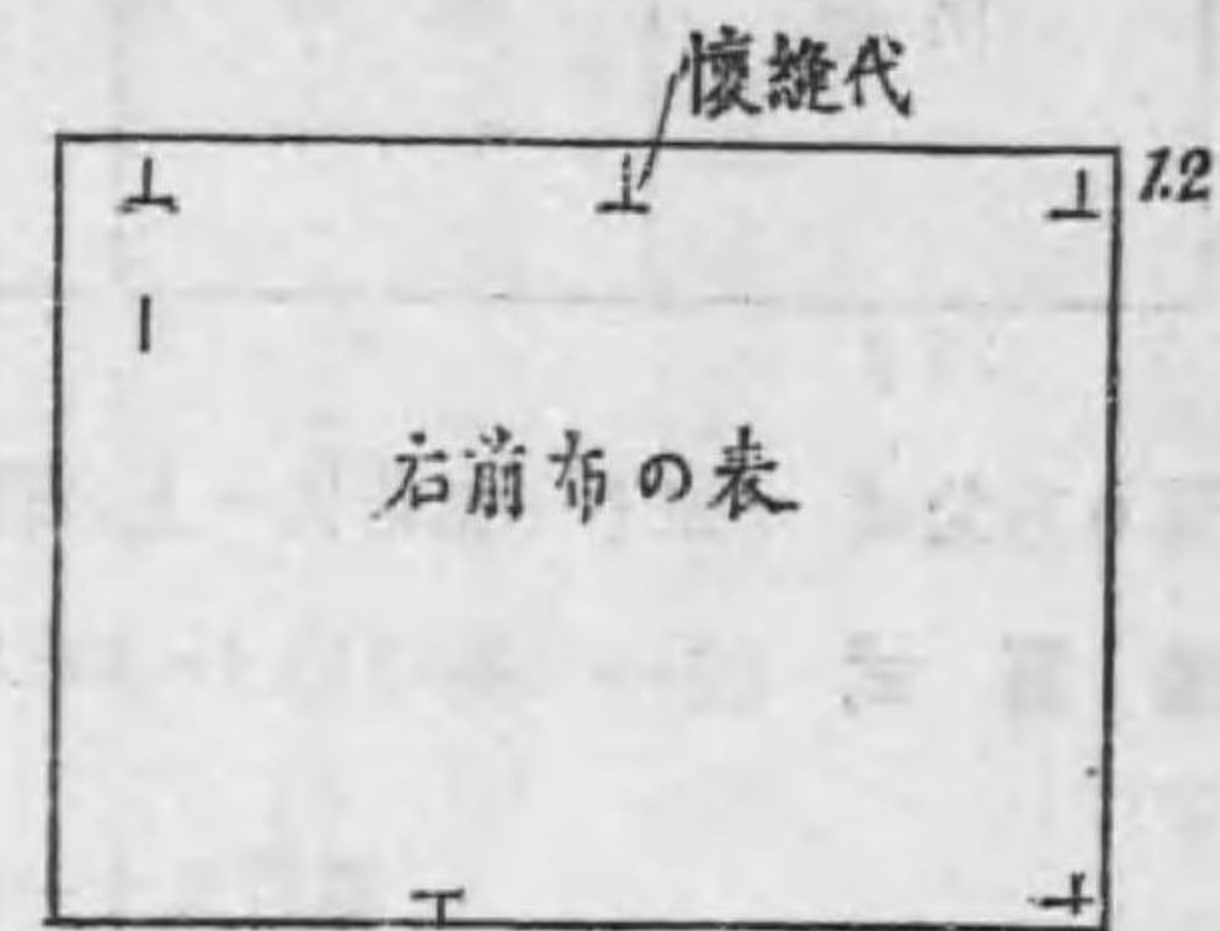
備考 他の寸法はすべて普通女袴に同じ	後	前	内
	中	中	胯
	襠	襠	の高
	幅	幅	さ
	後幅の四分の一	後幅の五分の一	紐下の二分の一

幅二尺の布を以つて、渡邊式改良袴の裁ち方、積り方(但し紐下二尺

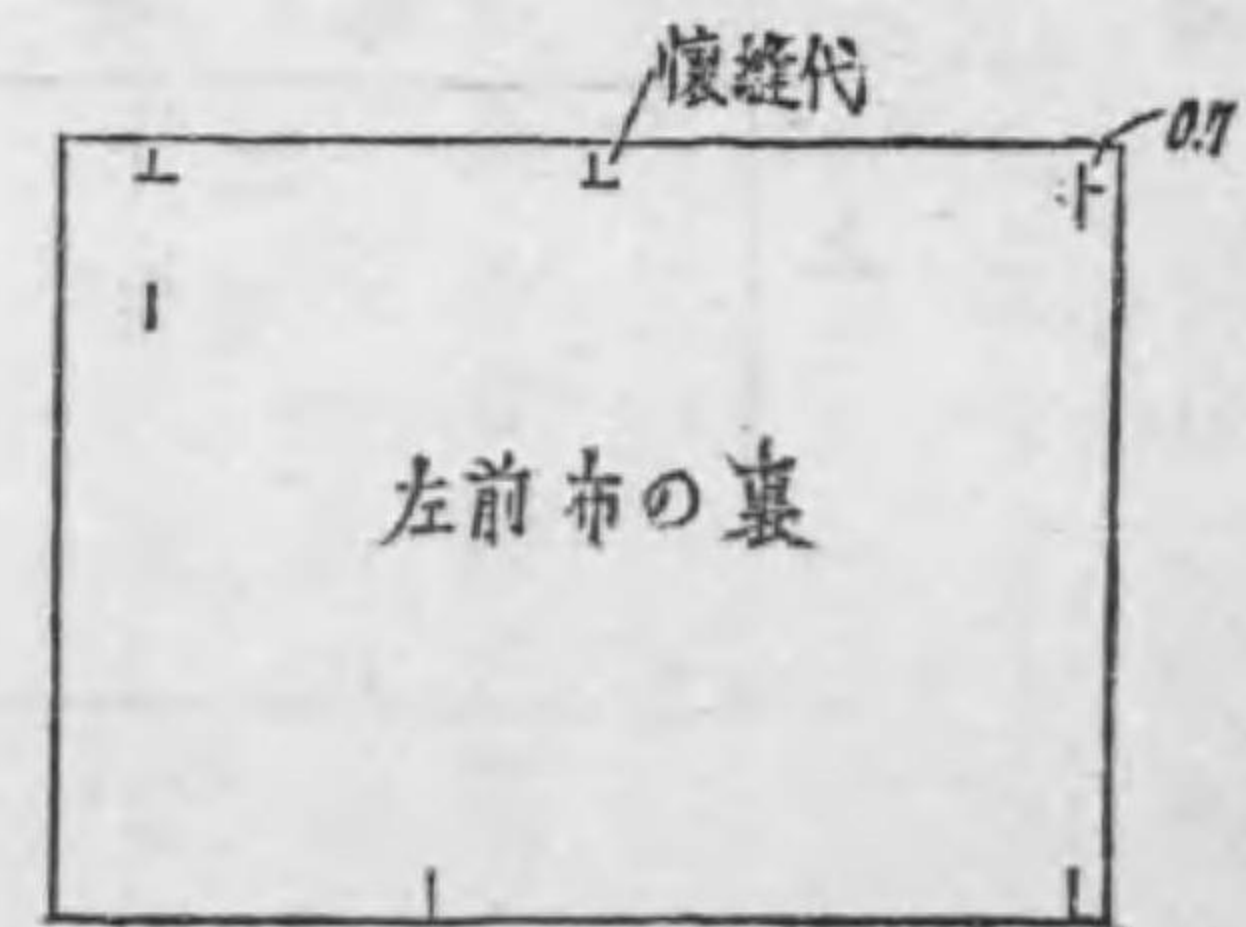
三寸)。

第一百五十二圖

左右の前布を別々にして、懐縫代の標を付ける



第一百五十三圖



後布の懐の縫代も、前と同様の仕方で付ける(但し後は左布の方が1.2右布の方が.7)

- 縫ひ方。
- (イ) 左右の前布を合せて、内胯の標から上を縫ひ、背縫ひと反對に折りを付ける。
 - (ロ) 後布を左右合せて、前と同様に縫ふ、折りも前と同様。
 - (ハ) 前後の相引きを合せて縫ひ、前布の方に折りを返す。

- (ニ) 左前布の内袴を、縫ひ代だけ裏に折り、上り幅五分にして、裁ち目を中に折り込み、裾口から、胯止りより一寸上まで縮け、見返しにする。
- (ホ) 右前布の内胯は、持ち出しの分として、標から五分外に折りを付け、五分の三つ折りにして、胯止りから上は、縮け代の引きつれぬ様に、斜に折り出して、裾口から、胯止りまで縮け、それより上は、下の縫ひこみにかけて、縮けつける。
- (ヘ) 内胯の止りに、閉止めをなし、それより八分上つた所には、裏から見返しと、持ち出しとの、折り山にかけて、こめる。
- (ト) 後も、前と同様に、見返し、持ち出しを拵へる。
- (チ) 裾の縮け代の八分を裏に折り、其端を、三分中に折りこんで、前後共左右の端は、襷先の様に斜に折つて止め、其中に布幅より四寸長い、共色のテープ、又は共布で縮けた、細い紐を入れて縮

け附け、長くした紐は、端の方から巻いて、解けない様に纏つて置く。

(リ) 見返しの方に、内脛止りから、五分下つて一つ、裾の縮け目から二分上つて一つ、その残りを、四等分して三つ、都合五ヶ所に、穴を明けて膝る(穴の大きき三分、釦の寸法と同じにする)。

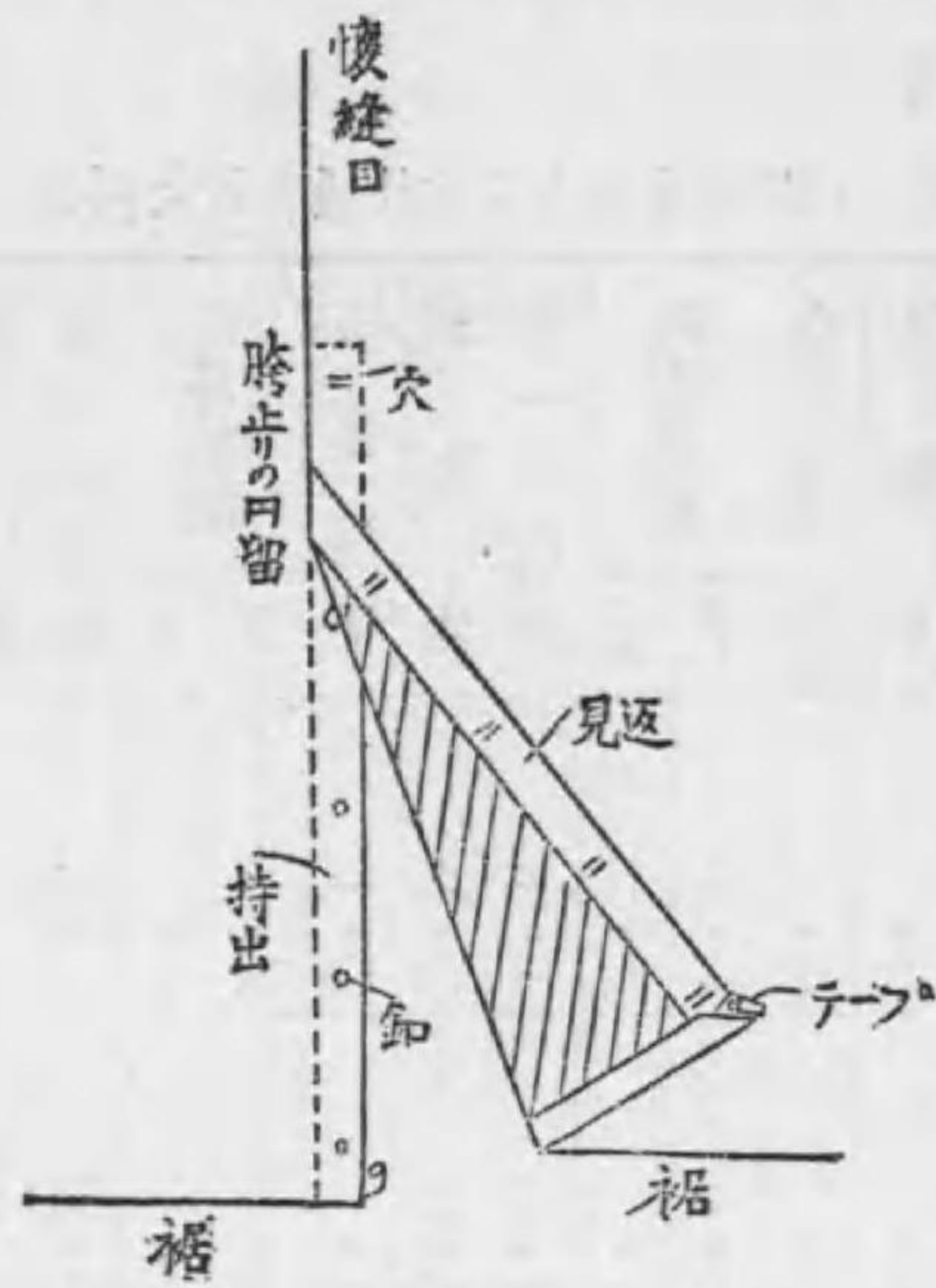
(ヌ) 共布で包み釦を十個作る、其作り方は、貝釦に、釦より廻りを二分大きく裁つた布をかぶせて、廻りを縫ひ、糸を引き締めて、留める。

(ル) 持ち出し幅の中央に、作つて置いた所の釦を、穴に合わせて縫ひ附ける。

(チ) 割り出しの寸法によつて、普通袴と同様に、前後ともに、寄せ襷を取る。

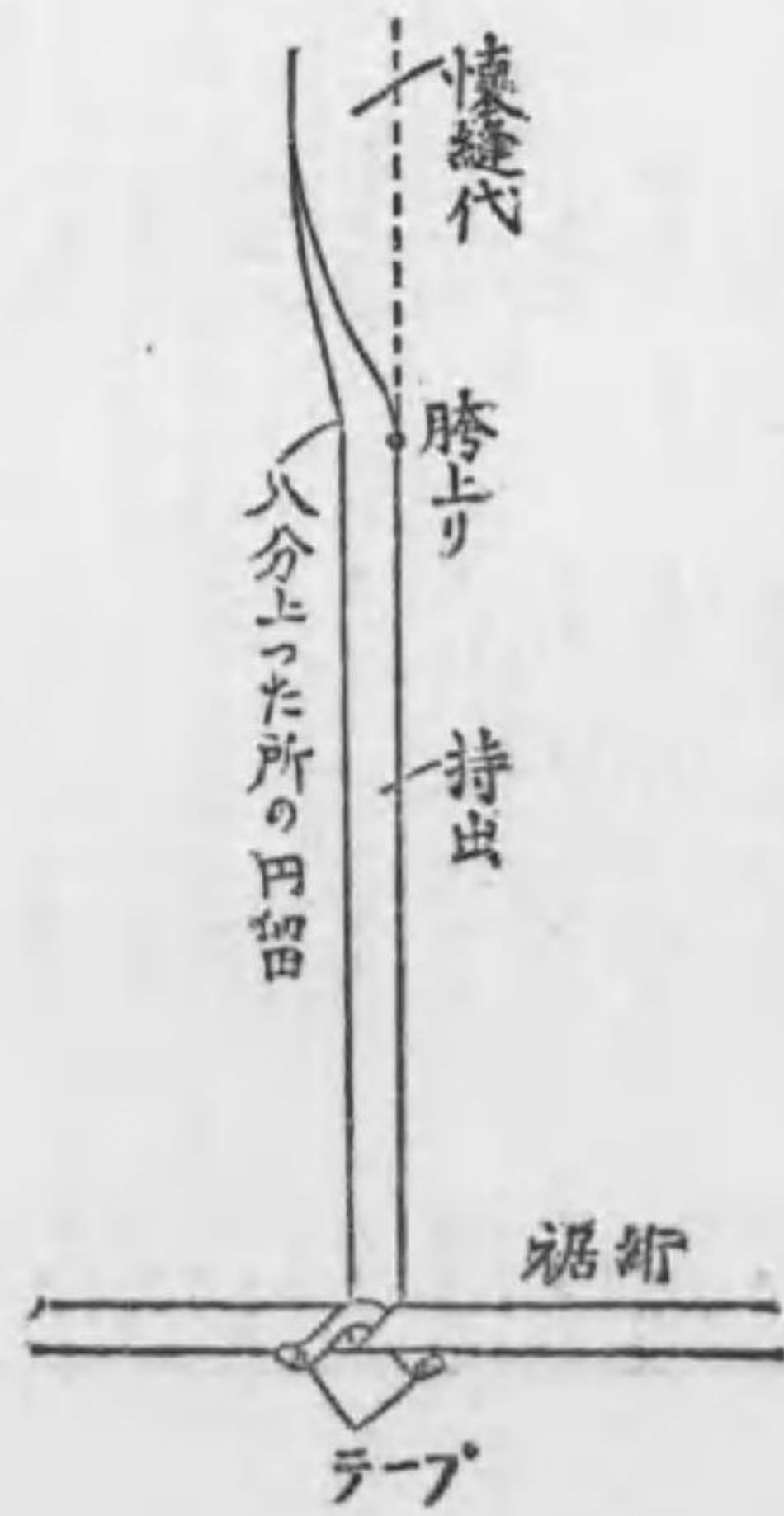
第百五十四圖

表から見た内脛



第百五十五圖

裏から見た内脛



(カ) (ワ) 笹襷を、普通の袴と同様に取る。
紐の縮け方、附け方、仕上げの仕方等、普通の女袴と同様。

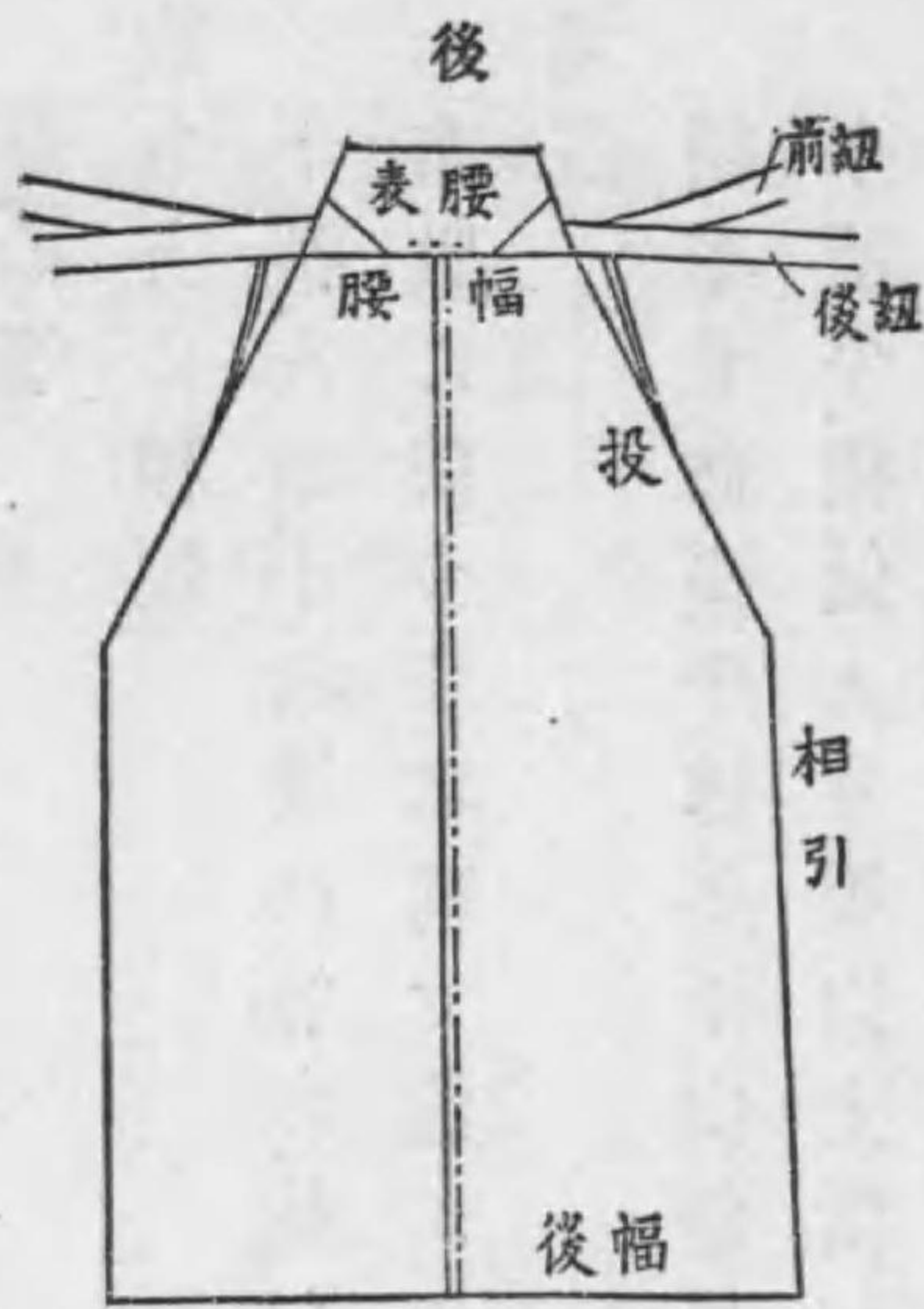
表法寸げ上て立仕通普袴女種各

各部名稱	種類	紐		相引	後幅	後一の襜幅	後寄襜幅		後笹襜幅	前腰幅	前一の襜幅	前寄襜幅		重ね	前紐幅	前紐丈	後紐幅	後紐丈
		下	上				下	上				下	上					
五六歳	小	一一・〇	一一・〇	八・〇	五・五	四・一	一・七	一・四	一・〇	六・〇	三・三	一・六	一・一	一・六	六・〇	一・三	三・五	三・九
七八歳	裁	一四・〇	一四・〇	九・五	六・〇	四・五	一・五	一・五	一・一	六・五	三・六	一・六	一・二	一・六	六・〇	一・三	三・九	三・九
九十歳	中	一五・〇	一五・〇	一〇・五	六・五	四・九	一・八	一・六	一・二	七・〇	三・九	一・三	一・三	一・三	七・〇	一・三	四・〇	四・〇
十二三歳	裁	一八・〇	一八・〇	一二・五	七・〇	五・二	一・九	一・八	一・三	七・〇	四・二	一・七	一・四	一・七	七・〇	一・四	四・五	四・五
十五歳	本	二〇・〇	二〇・〇	一四・五	七・五	五・六	一・五	一・九	一・四	七・五	四・五	一・五	一・五	一・五	八・〇	一・四	四・七	四・七
大人	裁	二三・〇	二三・〇	一六・五	八・〇	六・〇	一・〇	二・〇	一・五	八・〇	四・八	一・八	一・六	一・八	九・〇	一・五	五・〇	五・〇

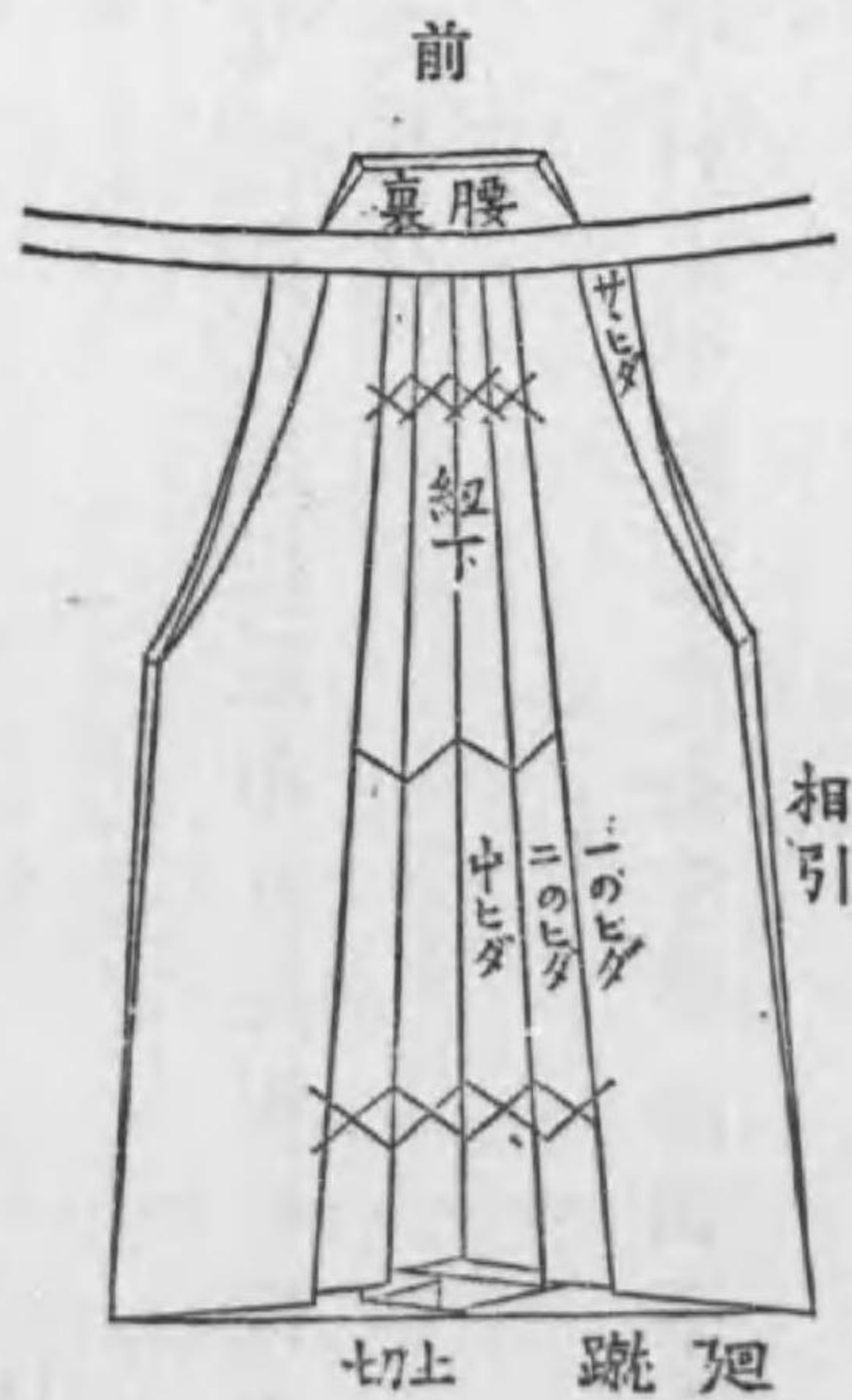
各部の名稱。

男袴

第百五十六圖



第百五十七圖



仕立て方。

襠有り(馬乗り袴)。徳川時代に、馬乗り用に用ひた袴を、改良した

のである。
襠無し(行燈袴)。現今流行して居る。
單、袴等。

裁ち方の種類。

十番、八布、十布遣ひ等の、裁ち方がある、是は、用布の長短に伴ふ布數に依つて、名稱が違ふのである。
地質。

絹布 〓 仙臺平、博多平、山邊里平、村上平、諏訪平、茶宇平、兩面平、嘉平治平、獨鉆入り等(以上常幅)。

綿布 〓 小倉織(常幅)。

毛織 〓 セル、サージ、アルバカ、薄地羅紗等(以上大幅)。

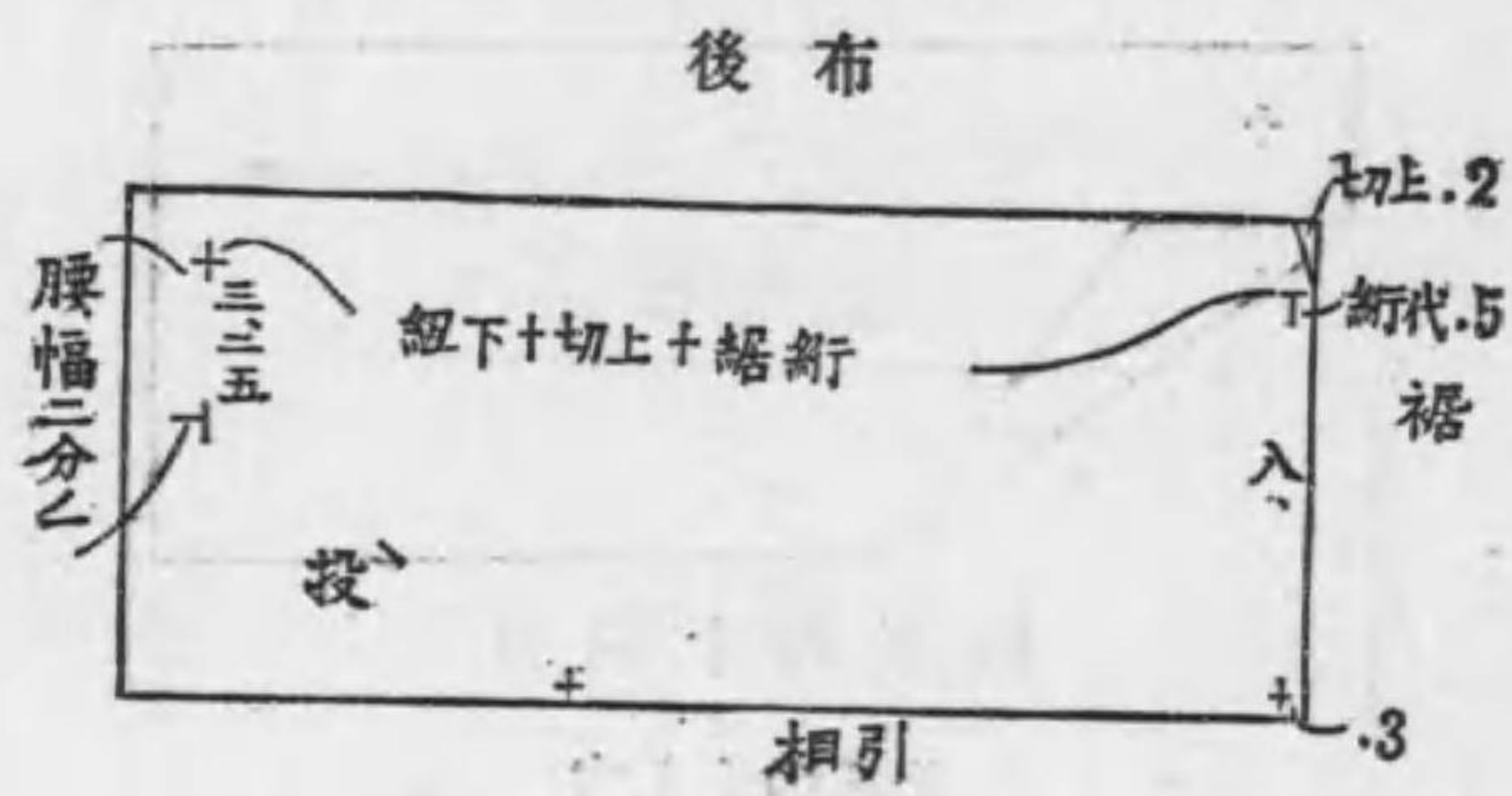
用布の幅と、丈。

本裁ち袴の用布は、一反を普通とする。

(イ) 常幅(九寸五分内外)一反(二丈二尺より、二丈七尺)。
(ロ) 大幅(二尺幅より、三尺六寸)一反(八尺より、一丈二尺)。
普通仕立て上げ寸法、及び各部寸法の、割り出し方。

各部名稱	普通寸法	寸法割り出し方
紐 下	二二・〇	着丈の十分の六
相 引	一四・六	紐下の三分の二
後 幅	八・〇	着物と同寸
後 重 り	八	後幅の十分の一
腰 幅	六・五 八・〇	後幅の四分の三に・五を加へる 前は後幅と同寸
腰 紙 幅	六・五	後幅の四分の三に・五を加へる
腰 紙 高 さ	二・三	腰紙幅の三分の一に・一か・二を加へる
附 菱 幅	二・二	腰紙幅の三分の一
附 菱 高 さ	一・三	腰紙高さの二分の一に・二加へる
一 の 裓 幅	四・七	後幅の五分の三より・一減する

第百六十圖



標
附
け
方。

第百六十一圖

投の折り方



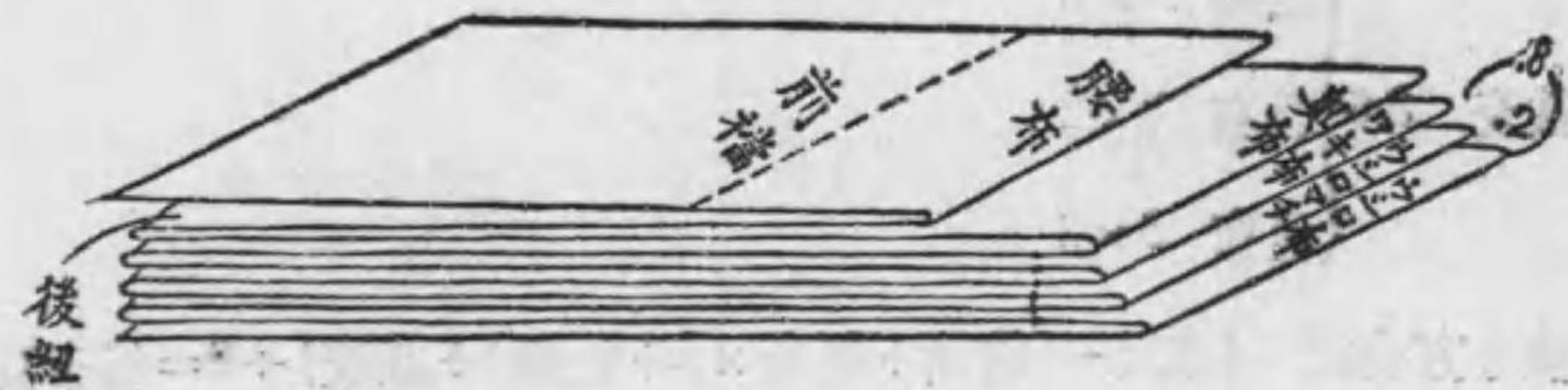
第百六十二圖



る切り裁てつよに序順の

第百五十九圖

折畳み方順序

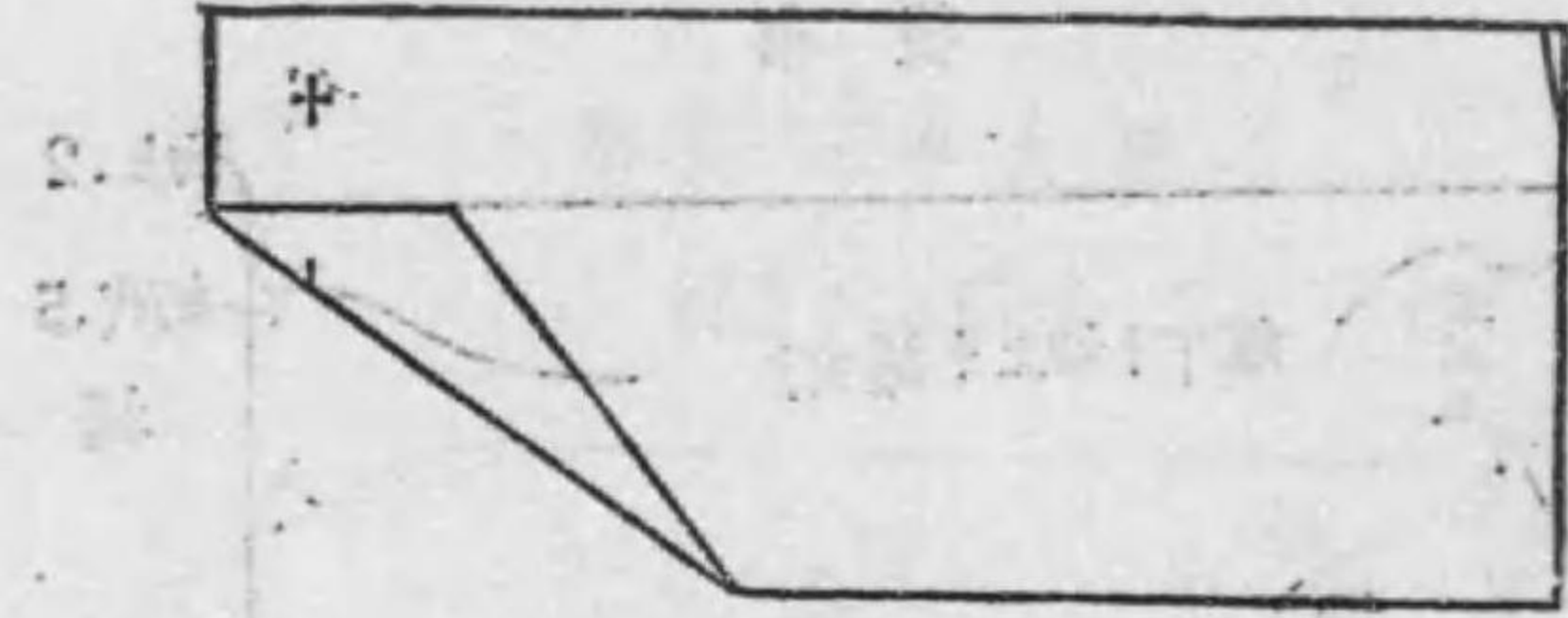


1. 後布 二枚
2. 後裾 二枚 後布より二分短くする
3. 脇布 二枚 後布より八分短くする
4. 奥布 二枚 後布より八分短くする
5. 紐布丈 一枚
6. 腰布、及び前裾

裁ち切り方

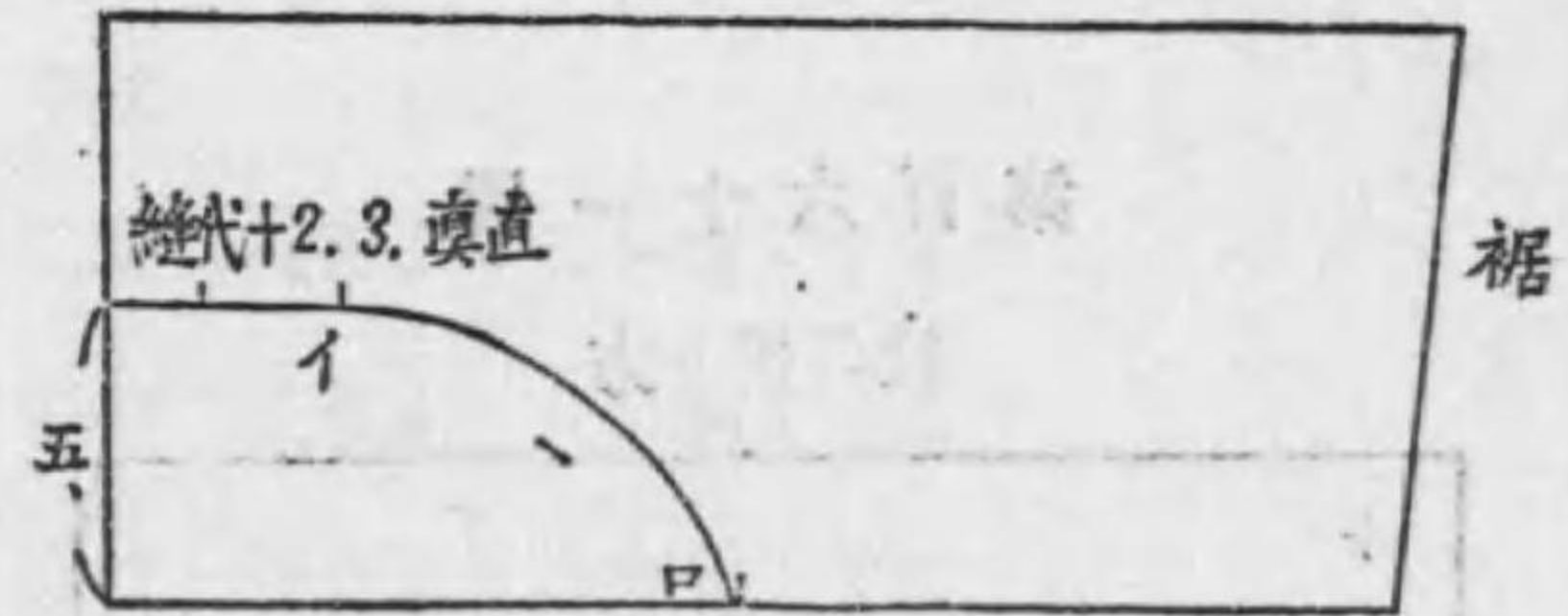
1. 折り畳みたるまま、後布を上にする 2. 後布二枚を裁ち切る
3. 後裾に1.2 形を附けて、二枚裁ち切る
4. 脇布の形の、1.2 附いて居るのを、.8にして、残りを裁ち落して、脇布を二枚裁ち切る
5. 脇布の形に合わせて、奥布を二枚裁ち切る 6. 前裾を裁ち切る
7. 紐を一本裁ち切る(幅の五分分)
8. 腰布を二枚裁ち切る
9. 紐を裁ち切る

第百六十三圖



第百六十四圖

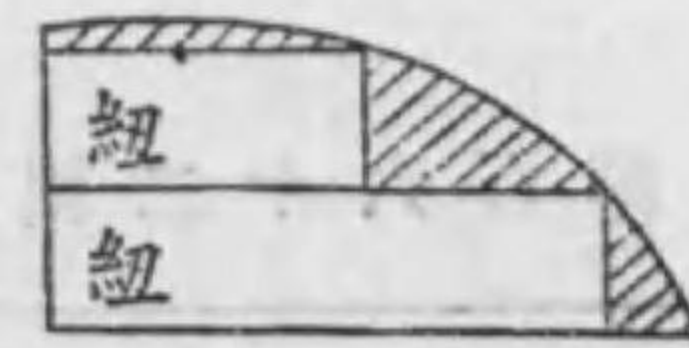
後襠のくり方



(イ)(ロ)丈の中央にて、(イ)(ロ)丈の $\frac{1}{5}$ 乃至 $\frac{1}{6}$ 出して、形よくくり落す

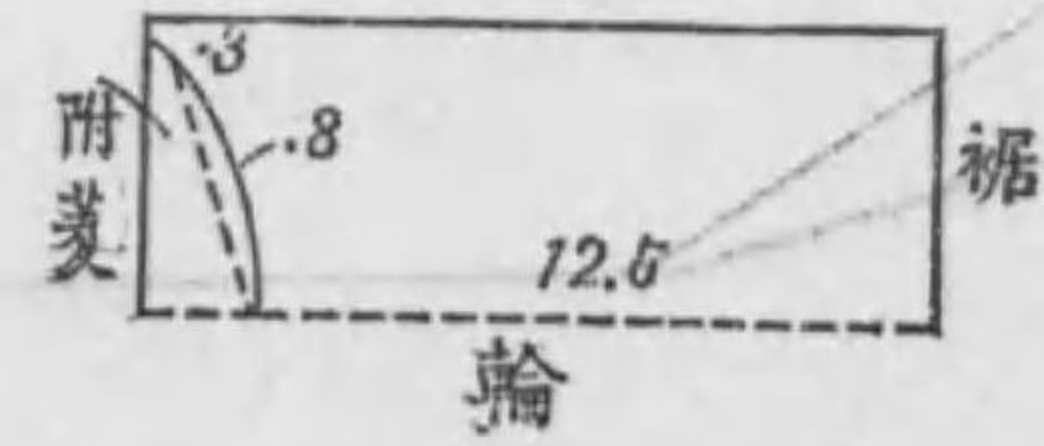
第百六十五圖

後襠落し布



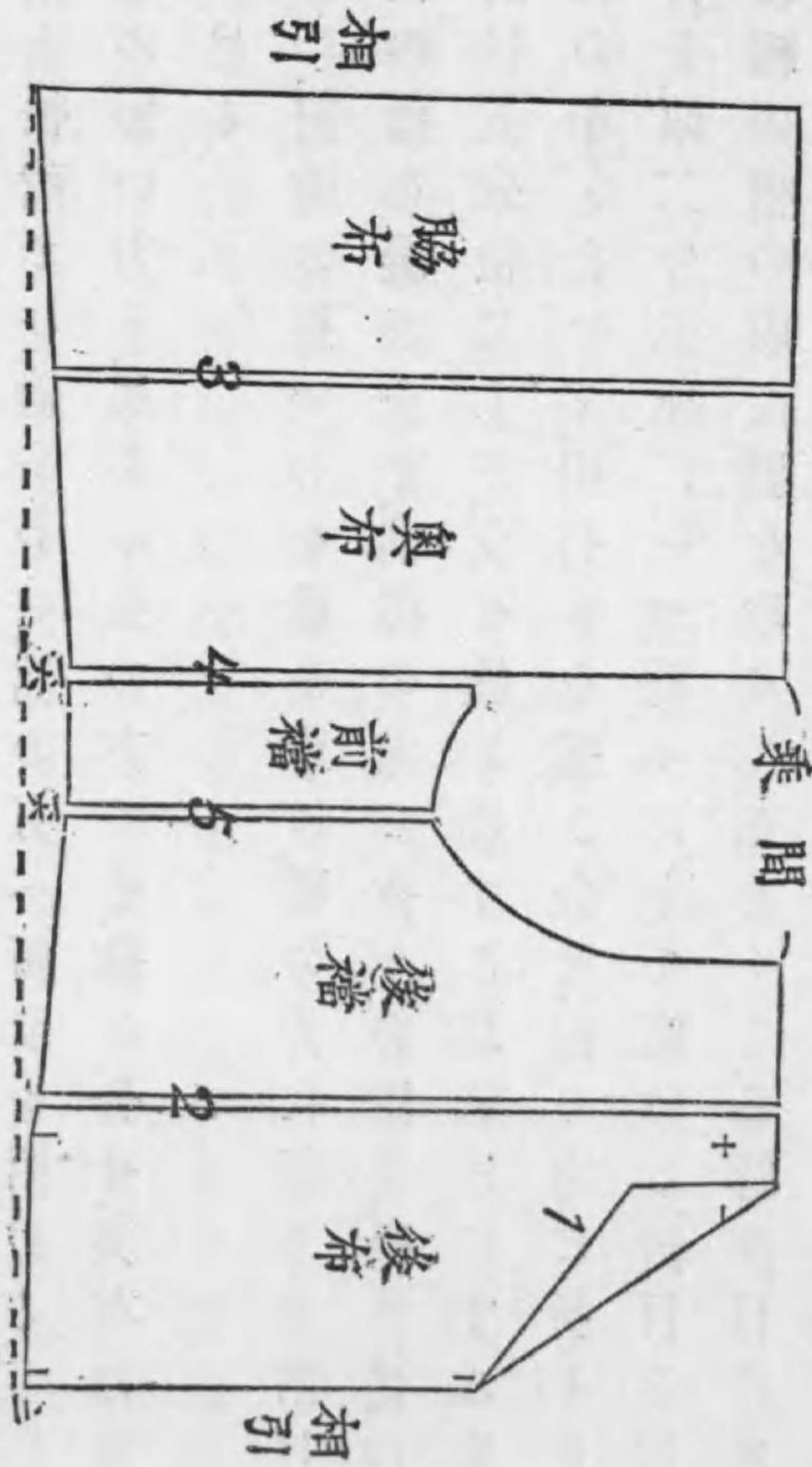
第百六十六圖

前襠



縫ひ方。

男袴

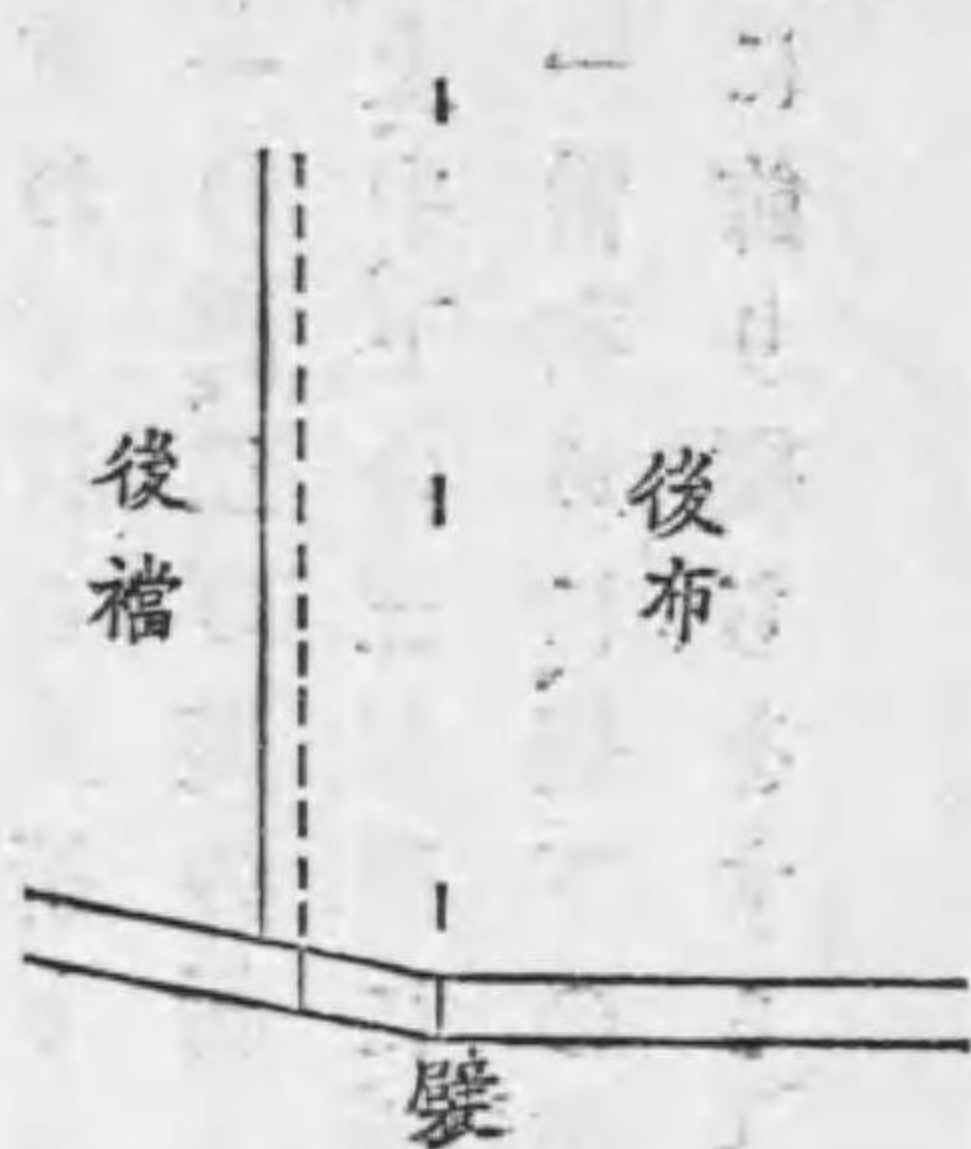


各布の縫ひ合せ方順序
第百六十七圖

- (イ) 後布の投げを、伸さぬ様にして、角には針を掛ける様にして、縮ける。
- (ロ) 後布と後襠とを、縫ひ合せ、襠の方へ折りを附ける。
- (ハ) 脇布の短い方と、奥布の長い方とを、縫ひ合せ、奥布の方へ折りを附ける。
- (ニ) 奥布に、前襠の長い方を縫ひ附け、襠の方に折りを附ける。
- (ホ) 前後の襠を縫ひ合せ、前襠の方に折りを附け、縫ひ代の端の方を、針目五分位にして、伏せ縫ひにする(耳縮けにする事もある)。
- (ヘ) 前後の布を合せて、相引きを縫ひ合せ、前の方に折りを附ける。
- (ト) 裾口を、幅二分五厘に、三つ折りにして、縮ける(針目を四分位とし、後幅の標の處で襷を取りて、正しくし、各縫ひ目の處には針を掛ける)。

第百六十八圖

裾口に襷をよせたる圖



- (一) 後襷の取り方。
左右とも、同じ縫ひ方にする。
- (イ) 後襠の左右合せて、乘間を袋縫ひにする。
- (ロ) 左の後布の、後幅の標を、其中心に當て、折り(重ね幅だけ、中心より先に出す)其上に右脚の後幅の折り目を合せて重ね、裾口及び後丈の標を合せて止め、裾口から上まで四枚だけに、麤けを掛ける。
- (ハ) 後を下にして、後幅の中心の折り目と、乗り間の縫ひ目とを

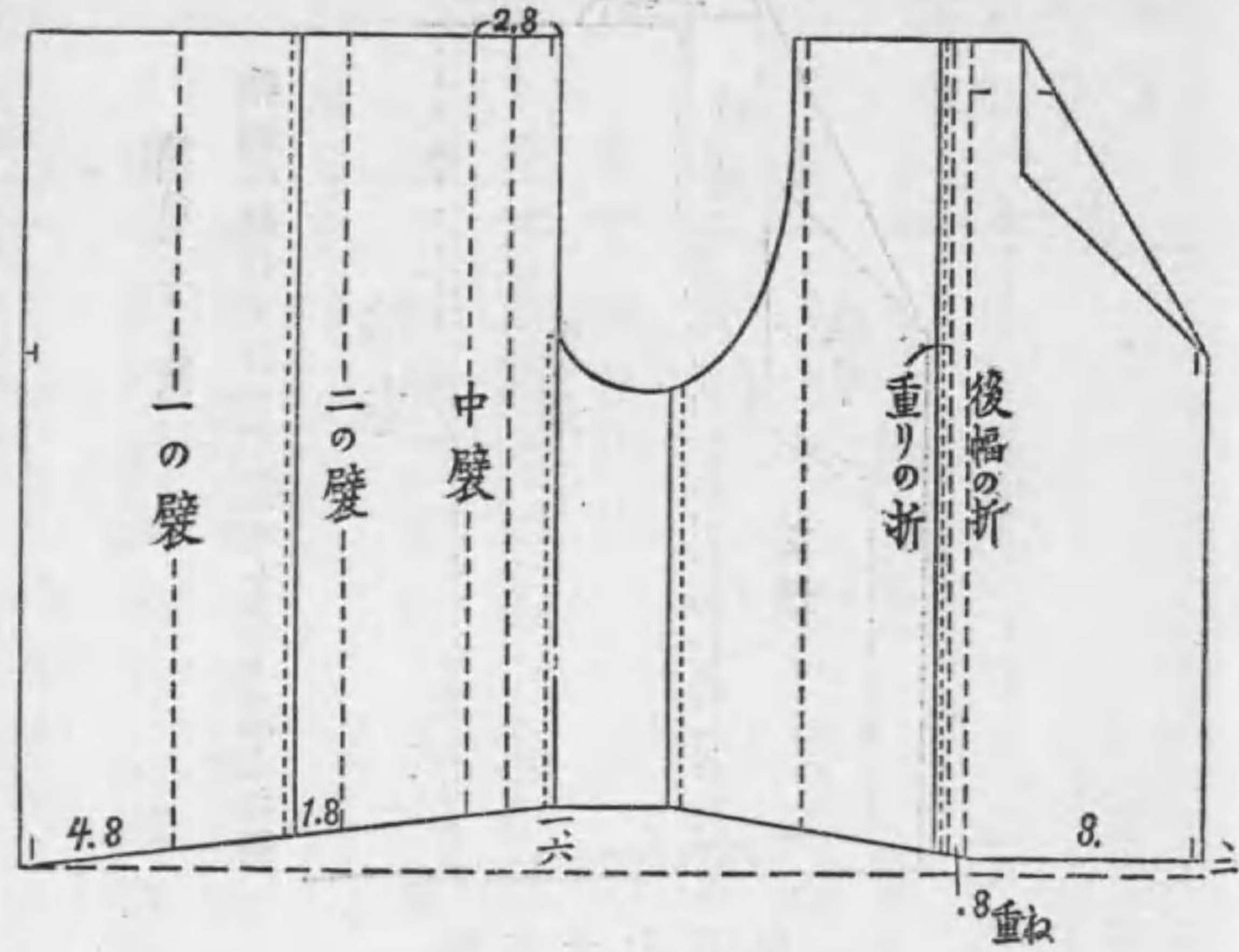
合せて、平にして躰けにてこめ、兩方に出来た折りを、縞目を真直にして、裾口まで折る、其時右脚の方を下にして、前襠を手前の方に折る。

(二) 前襠。

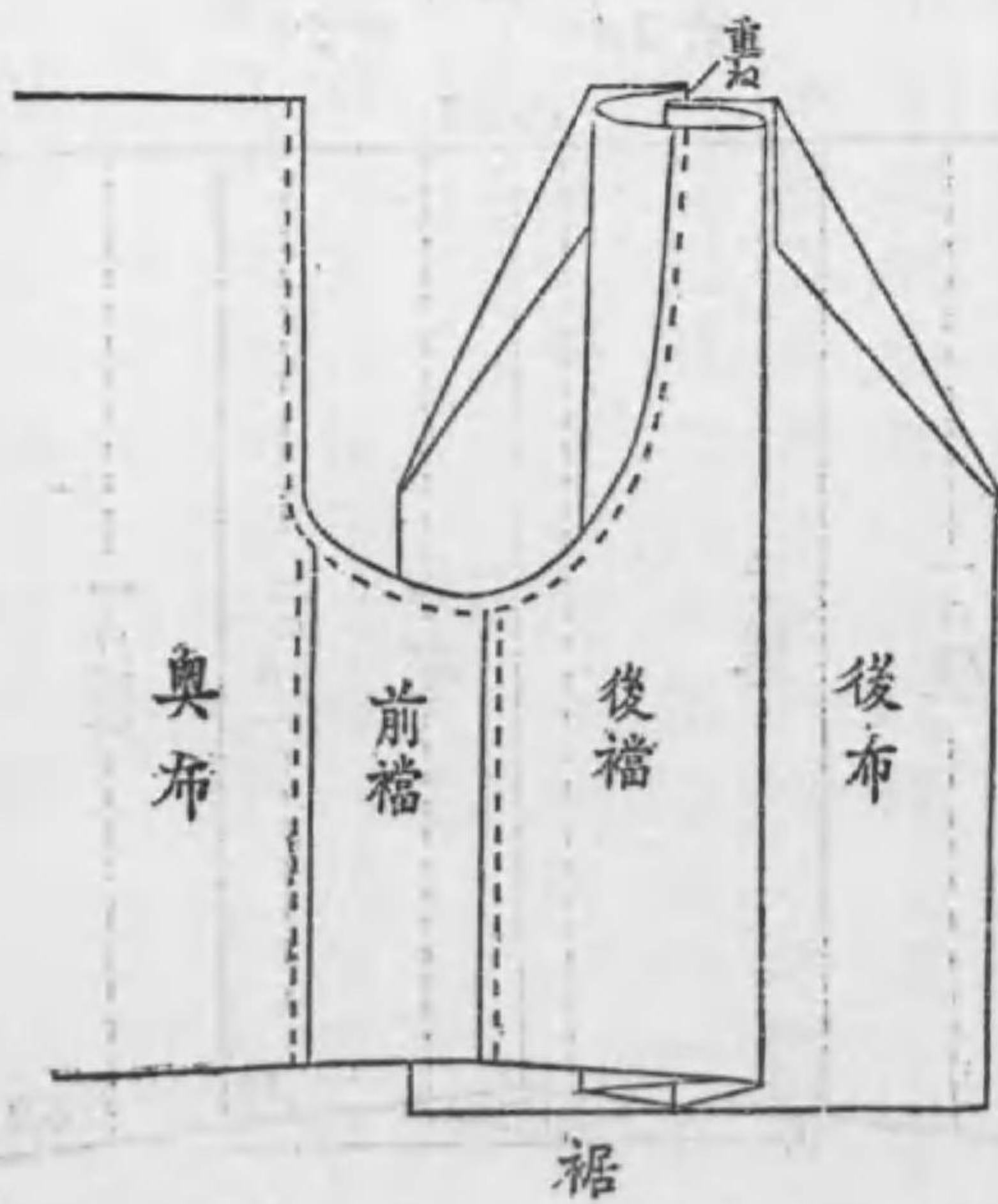
(イ) 前に、手前の方に折りたる布を、前後の乗り間の縫ひ目を合せて、左脚の方に折り返して重ね、次に前布を兩方に開き、右の方の中襠を、左脚の方に折り、左脚の方の中襠を其上に重ねて折る、此折り目を前の中央とする。

(ロ) 一の襠、二の襠の折り方は、女袴と同様にして、寄せる。
(ハ) 上、中、下の三個所に、飾り綴ちをすること、女袴と同様(この時一番初めに、紐下の標の處の寸法を定めて、躰けにて綴ち、次に飾り綴ちをする)。

第百六十九圖

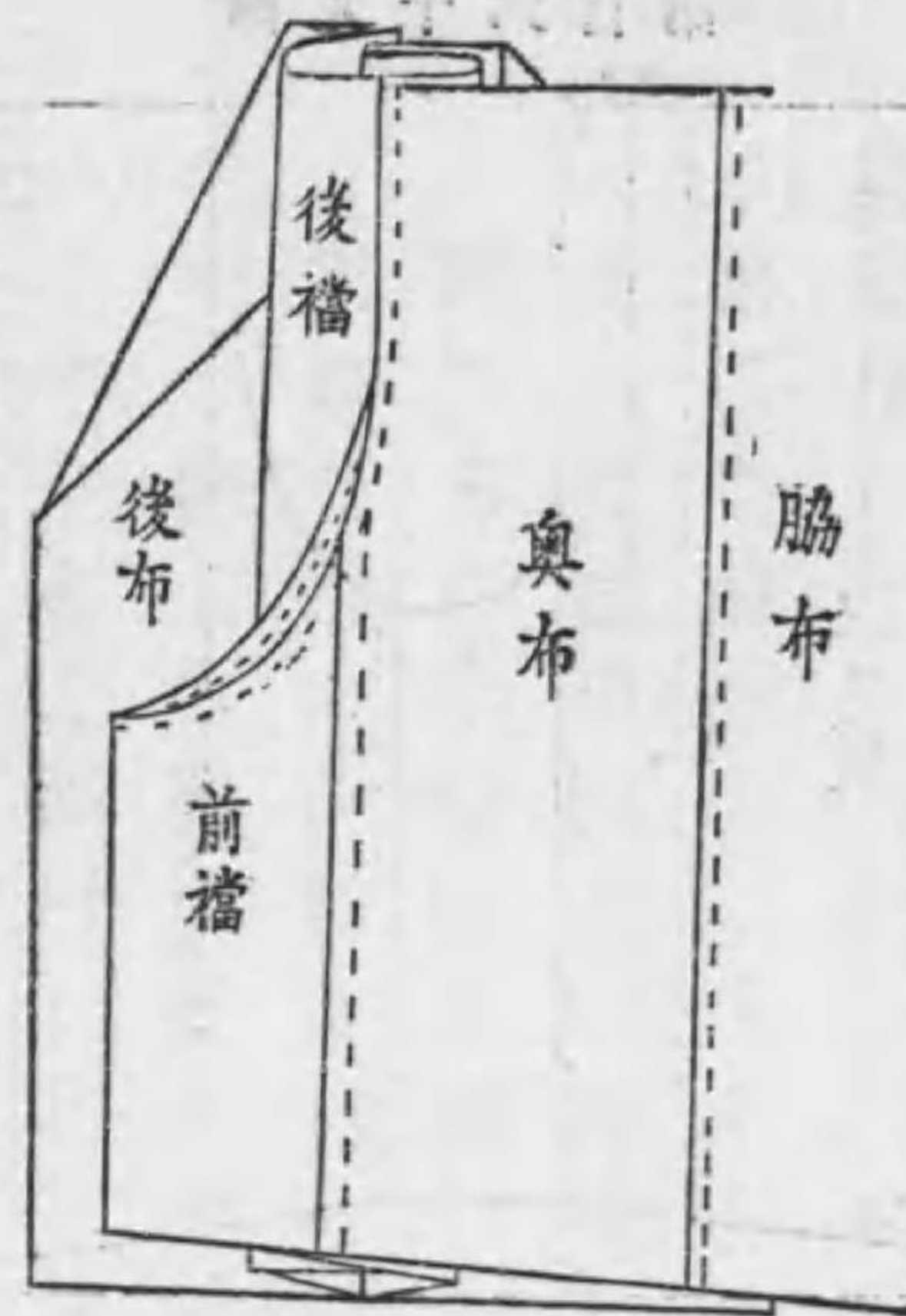


第百七十圖
後襠を裏から見た圖

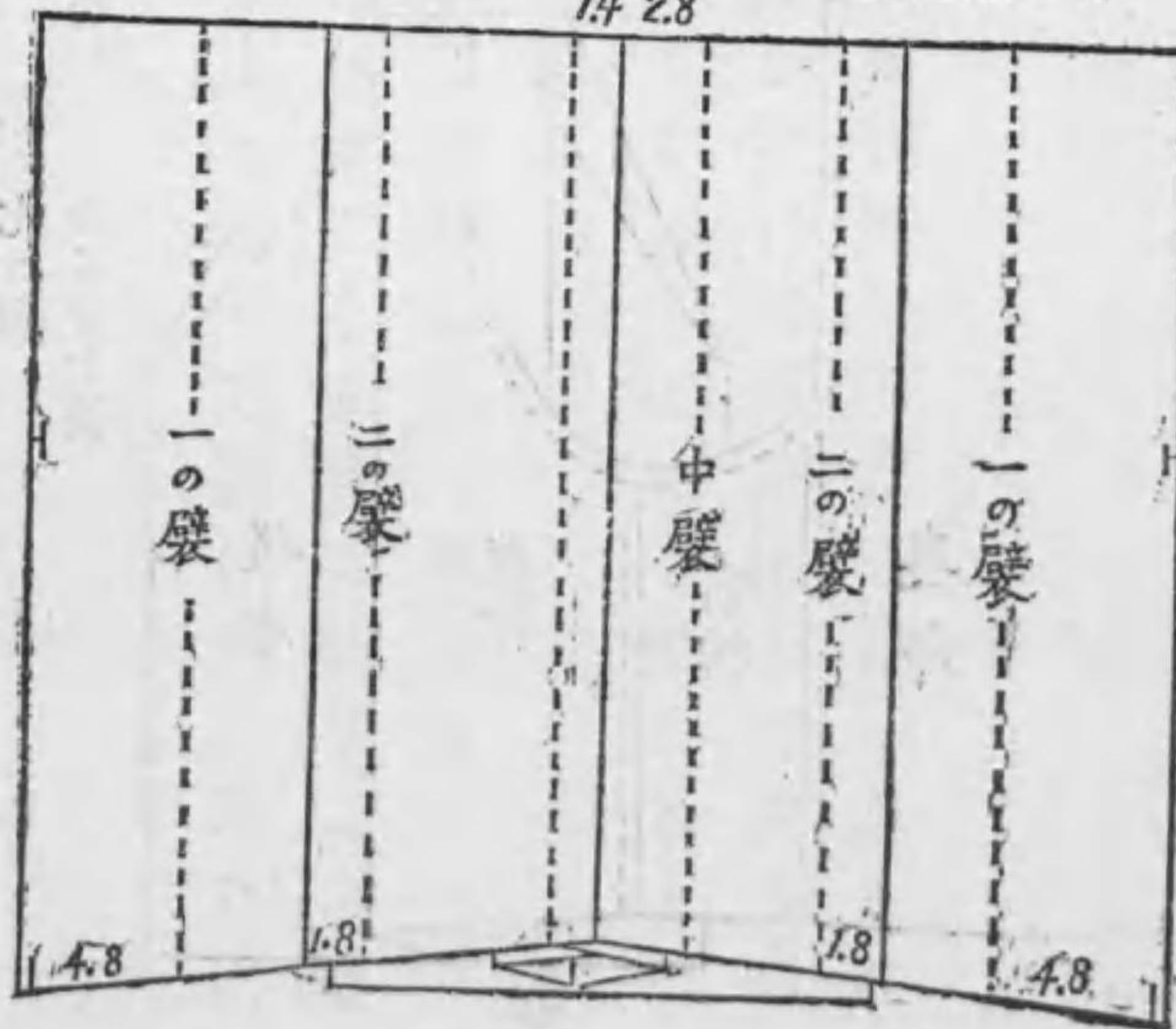


第七十一圖

乘間の縫目を合せて前布を折り返した圖



第七十二圖
右 1.4 左 2.8



前布を両方に開いた圖

相引

第七十三圖
襷の折り方



ら、一寸上つた處に、尺度を入れて、裾口を折り返し、裾口から五分離して、上の方を折り返し置く(中央の襷を前後よく合せて疊む)。

(ト) 後紐、前紐共に、芯を入れて、絞ける(前紐は、中央を一尺位絞け、後紐は、一方の端を二寸程、絞け、残して置く)。

腰の貼り方。

(イ) 半紙をよくもみ、裏腰布及び、付け菱の廻りに、五厘位の幅に糊を付け、乾いてから、布の通りに、半紙を裁ち切る。

第七十四圖

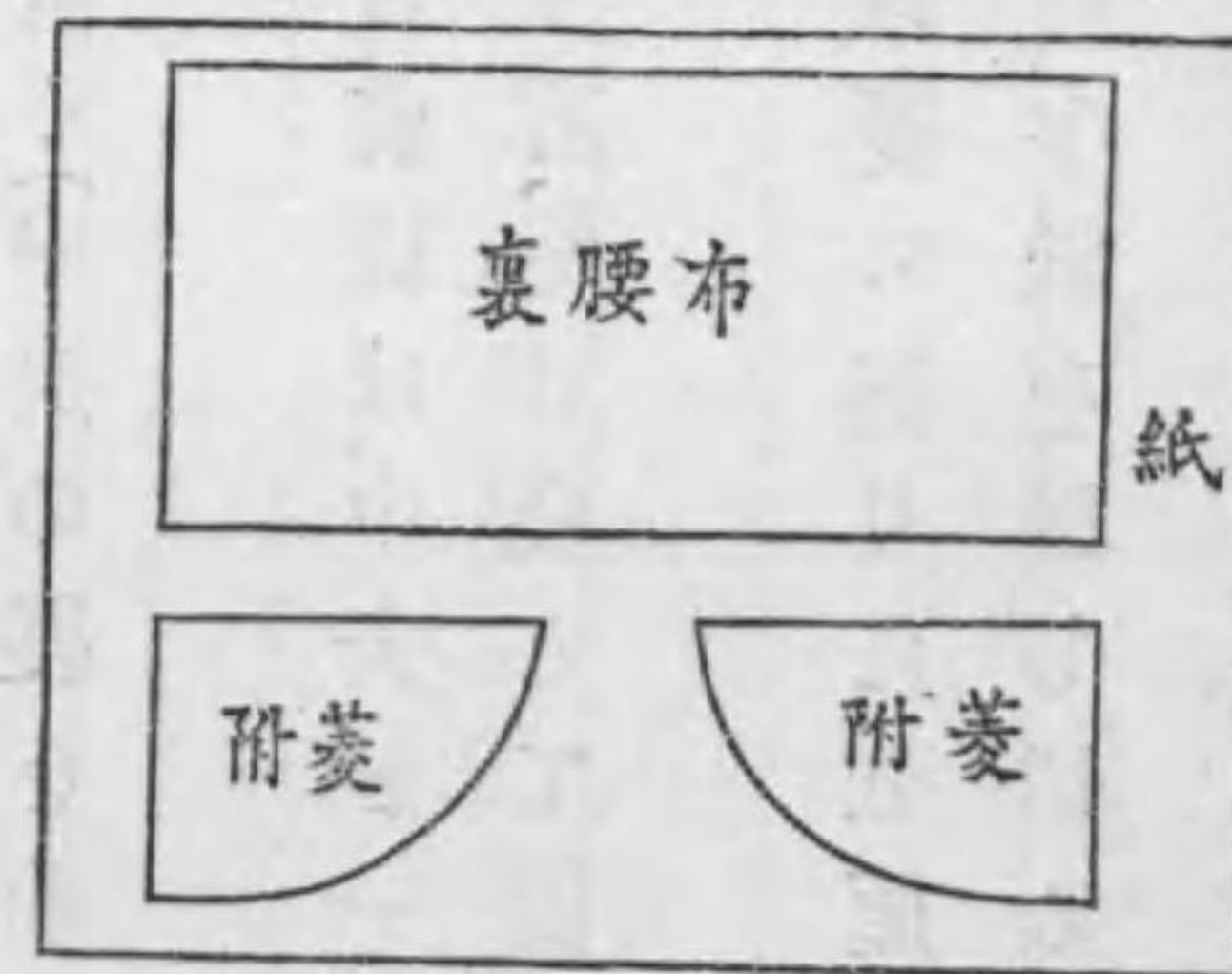
腰紙の裁ち方



両端で腰紙幅の六分一裁ち落とす

第七十五圖

裏腰布及び附菱に裏うちの仕方



(ロ) 腰紙の裏の上部に、二分の深さに糊を付け、表腰布を真直に貼り付けて、表を上に戻す(腰布の縞目を両端で揃へる様に注意する)。

(ハ) 腰紙の表の下方に、二分幅に真直に糊を付け、腰布を曲らぬ様に貼り、腰紙の角から、二三厘離して布を上の方に折り

返し、よく折りを付け、紙捻りに糊を付けて入れる(紙捻りは半紙を幅五分に裁ちて捻り、丈は三寸に切る)。

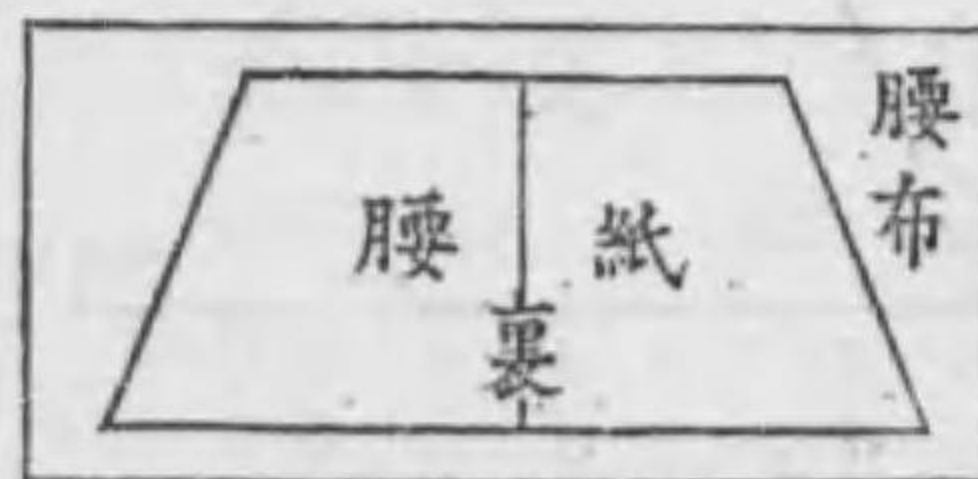
(ニ) 腰紙の裏の下方に、糊を付けて置いて、腰布を裏の方に貼り付ける。

(ホ) 腰紙の下の角から、四分上つた所に、腰布に切り込みを入れて、切り込みから上は、腰布の廻りに、浅く糊を付けて、腰紙の方に、貼り付ける。

(ヘ) 腰の高さの二分の一に、二分を加へた所を、付け菱の高さとし、又腰幅の三分の一を、付け菱の幅にして針をうち、それに合せて、付け菱を折り、腰の上に載せて、裏の方だけに貼り付ける。

第七十六圖

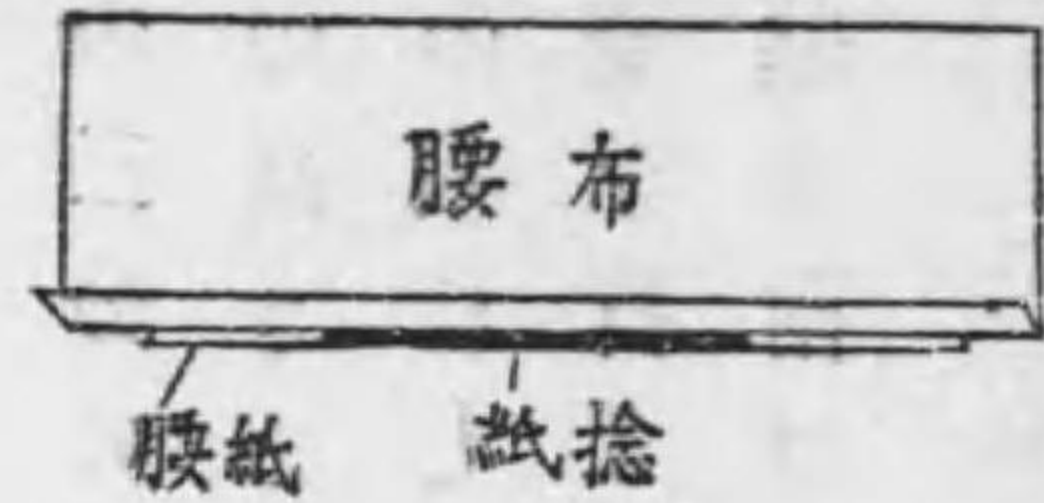
袴腰の貼り方順序



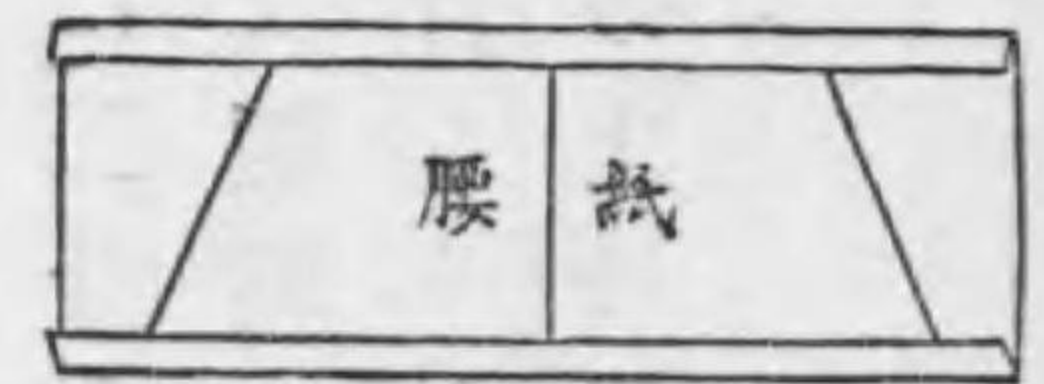
第七十七圖



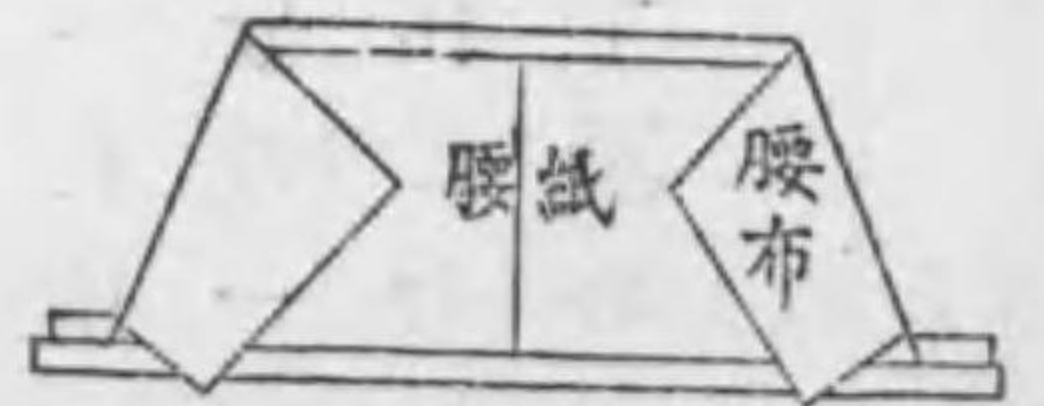
第七十八圖



第七十九圖



第八十圖



第八十一圖



菱の折り方

第八十二圖



第八十三圖 第八十四圖



第八十五圖

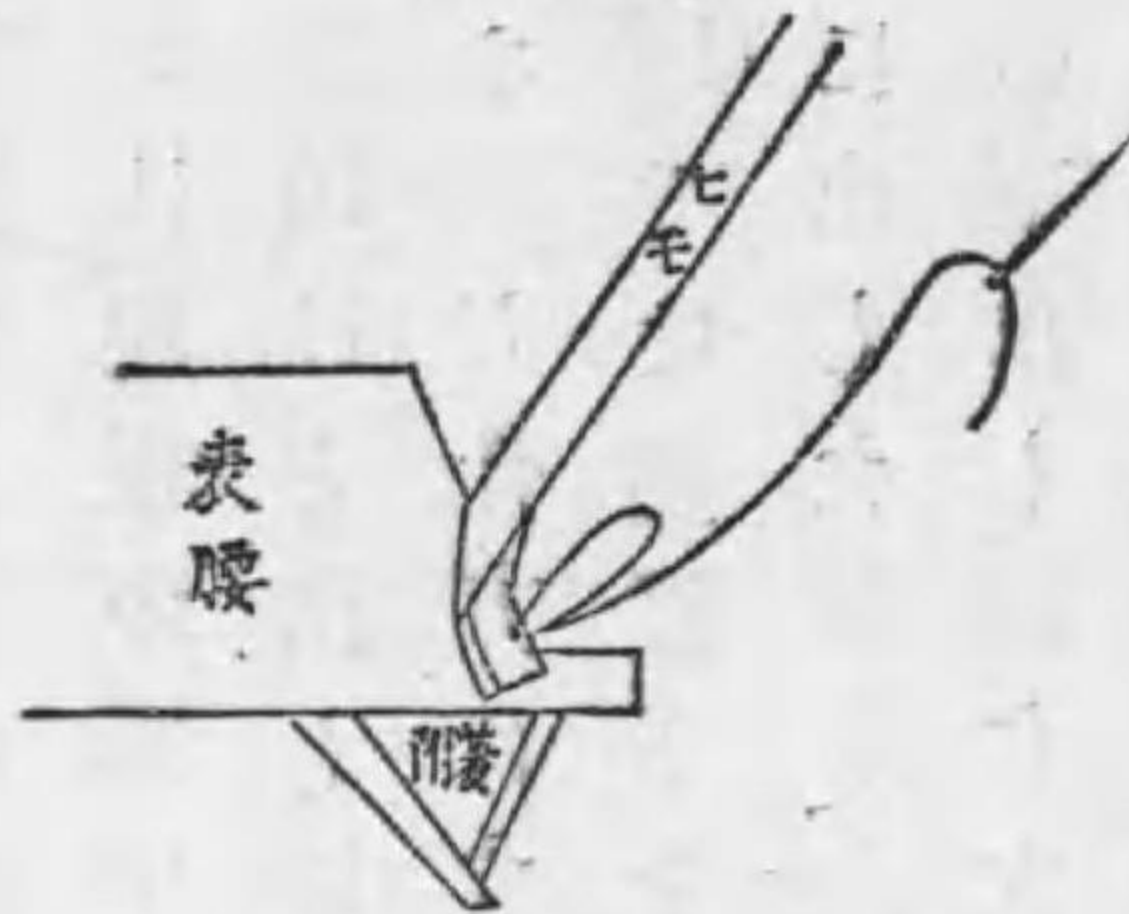


(ト) 腰に後紐を捻り糸で附ける。

圖の様に、紐の紵け残した處を、腰板に當て、腰板の下の角から紐幅だけ上つた處に、二度針を通

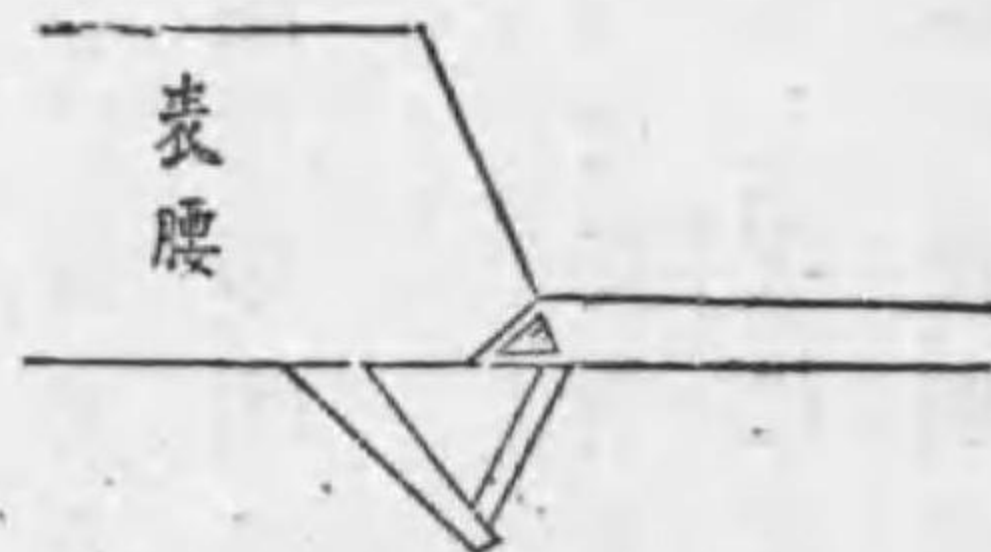
第八十六圖

紐付け方



第八十七圖

紐を附けたる



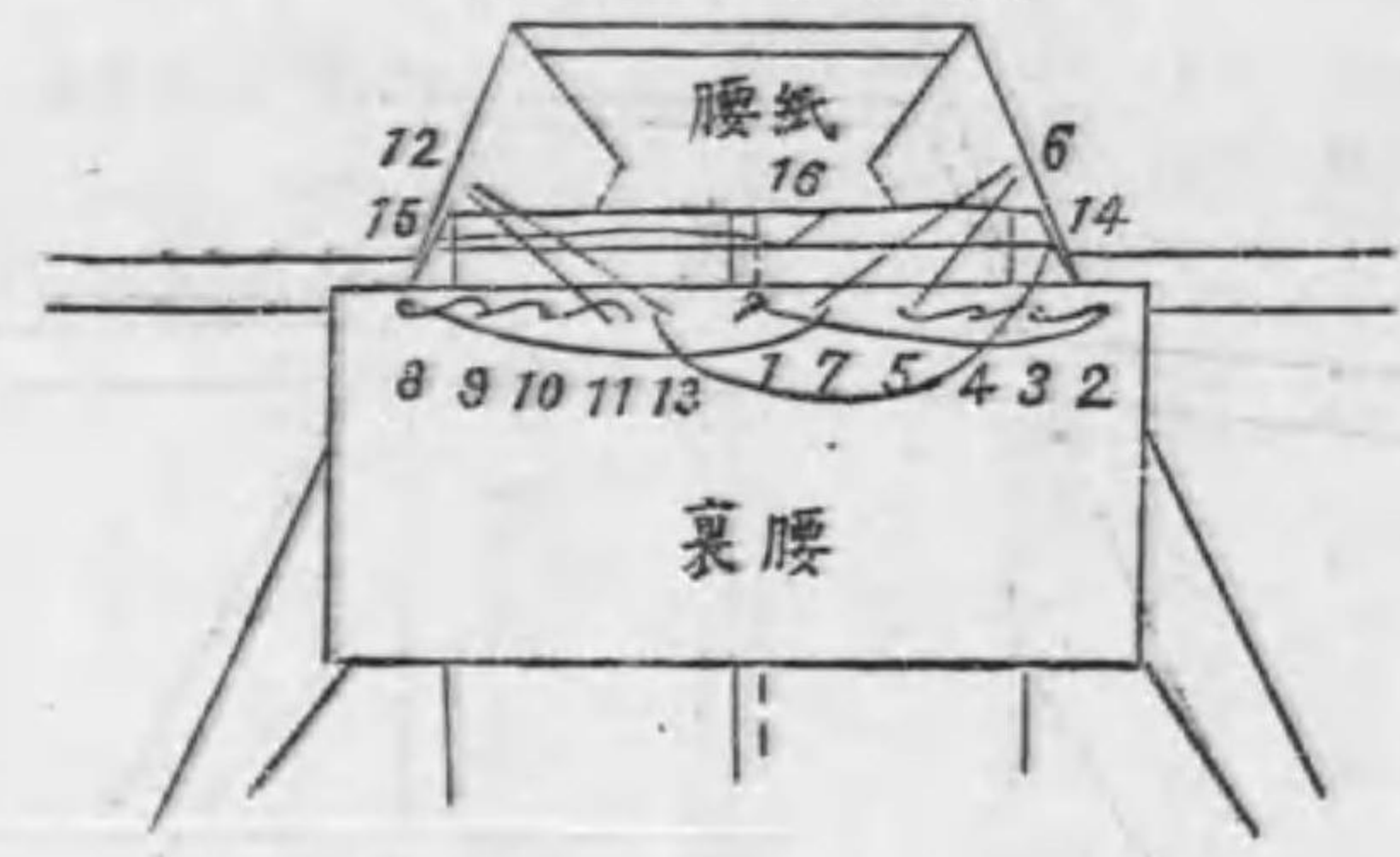
(チ) 表腰を、後布の腰幅標に合せて乗せ、中央、兩端及び附け菱に針をうつ。

(リ) 表腰と、縞目の合ふ様にして、裏腰布を、裏の方に當て、表の方に

さした針を通す。
(ル) (又) 裏腰を手前にして、捻り糸で圖の様な順序に、腰を立てる。
(1) 中央で裏から表の紙捻りのすぐ上に、小さく一針出して裏にて結ぶ。

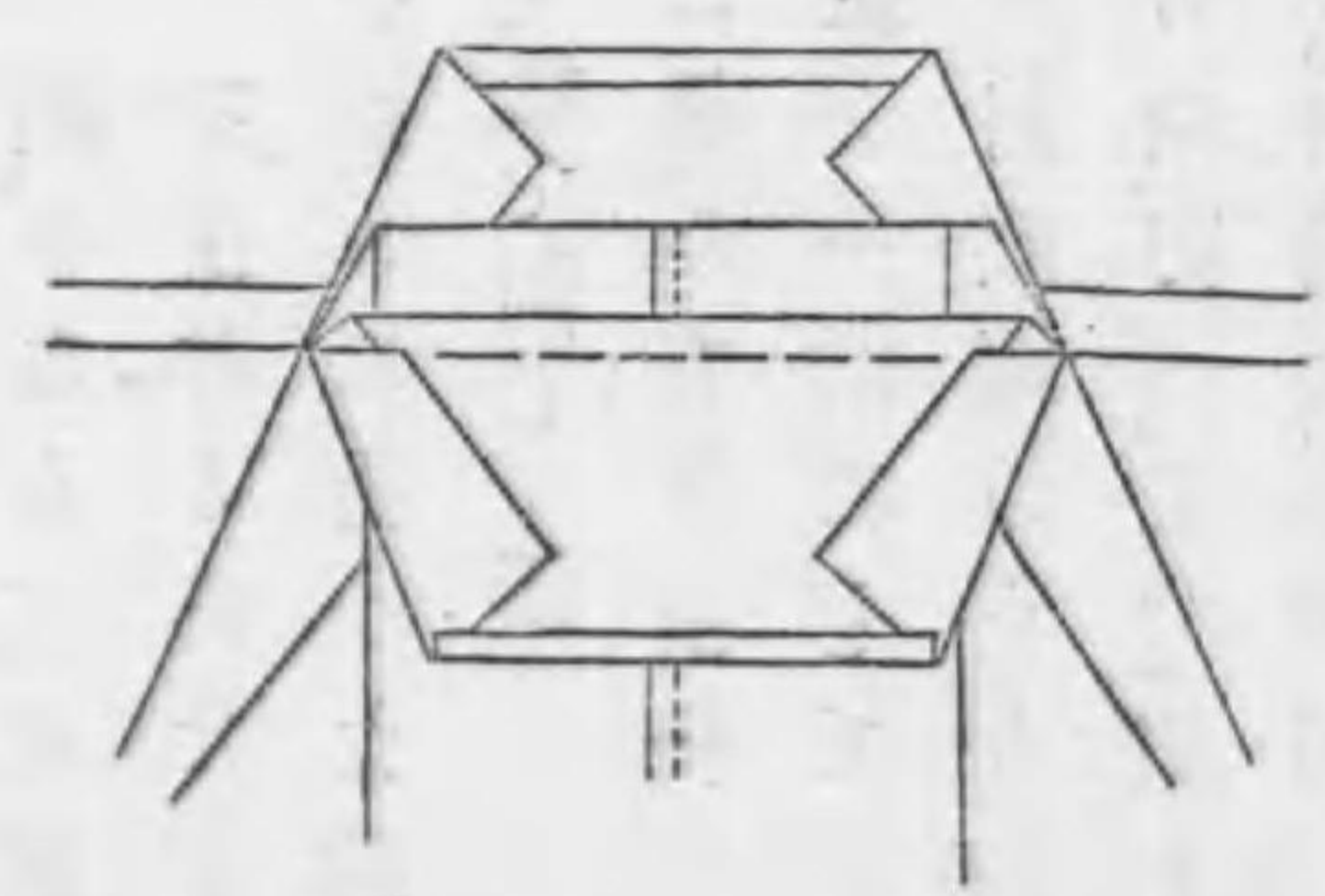
(2) 腰板の端では、一針返してとめる。
 (3) (4) (5)と縫ひ。
 (6) では、付け菱のさきを折り、其角の處にて、表に小さく針を出す。
 (7) は (5) と (1) の間で、(1) と同じ針目に出す。
 (8) は、腰板の端で、(2) と同じに留める。
 (9) (10) (11) と出し、(12) の付け菱 (13) の (1) と (11) の間に、出す事、始めと同じ仕方にする。
 (14) では、裏腰布を、表腰に合せて折り、(表腰より一分つめる) (13) に出した針を、(14) の表に出し、次に裏腰に出し、又表腰に(附菱の下) 出し、同じ穴から、腰紙では、別の處に出してとめ、(15) の針も、同様にしてとめ、(16) の針は中央で、布ばかりを抄つてとめる。

第百八十八圖



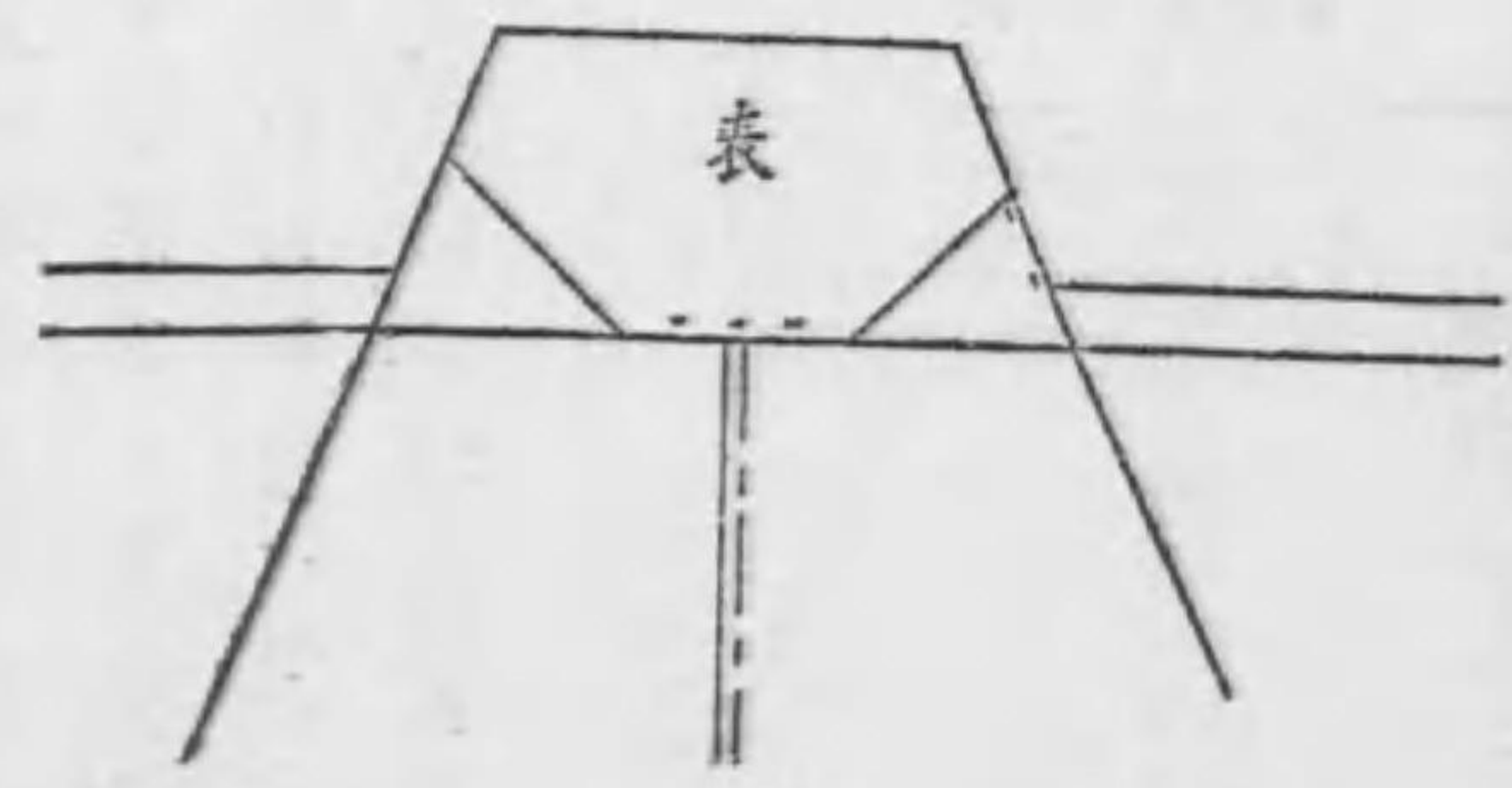
(14). (15)の針は、下圖の様に裏腰を折りて、とめる

第百八十九圖



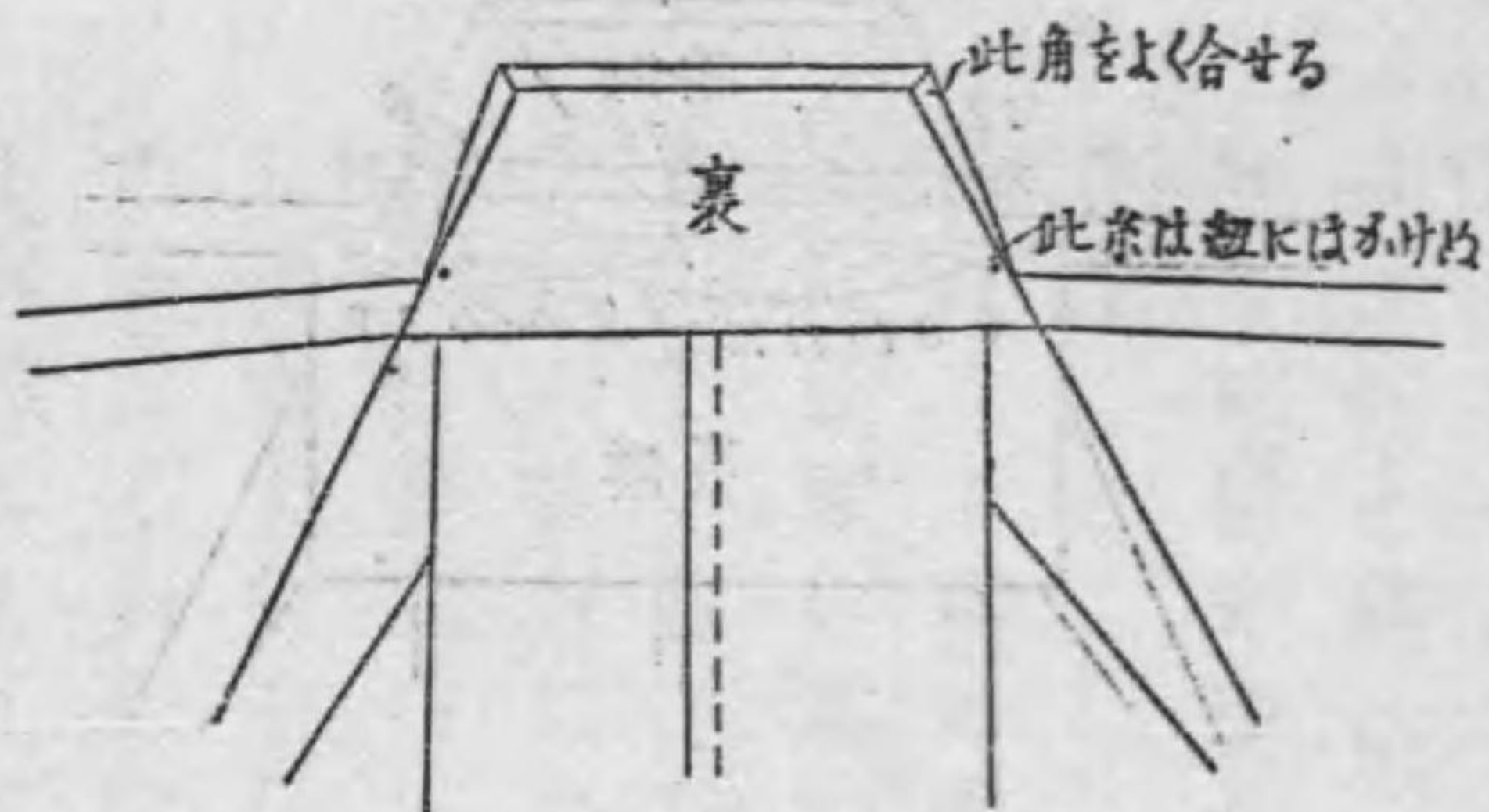
裏腰を折りたる圖

表



第百九十圖

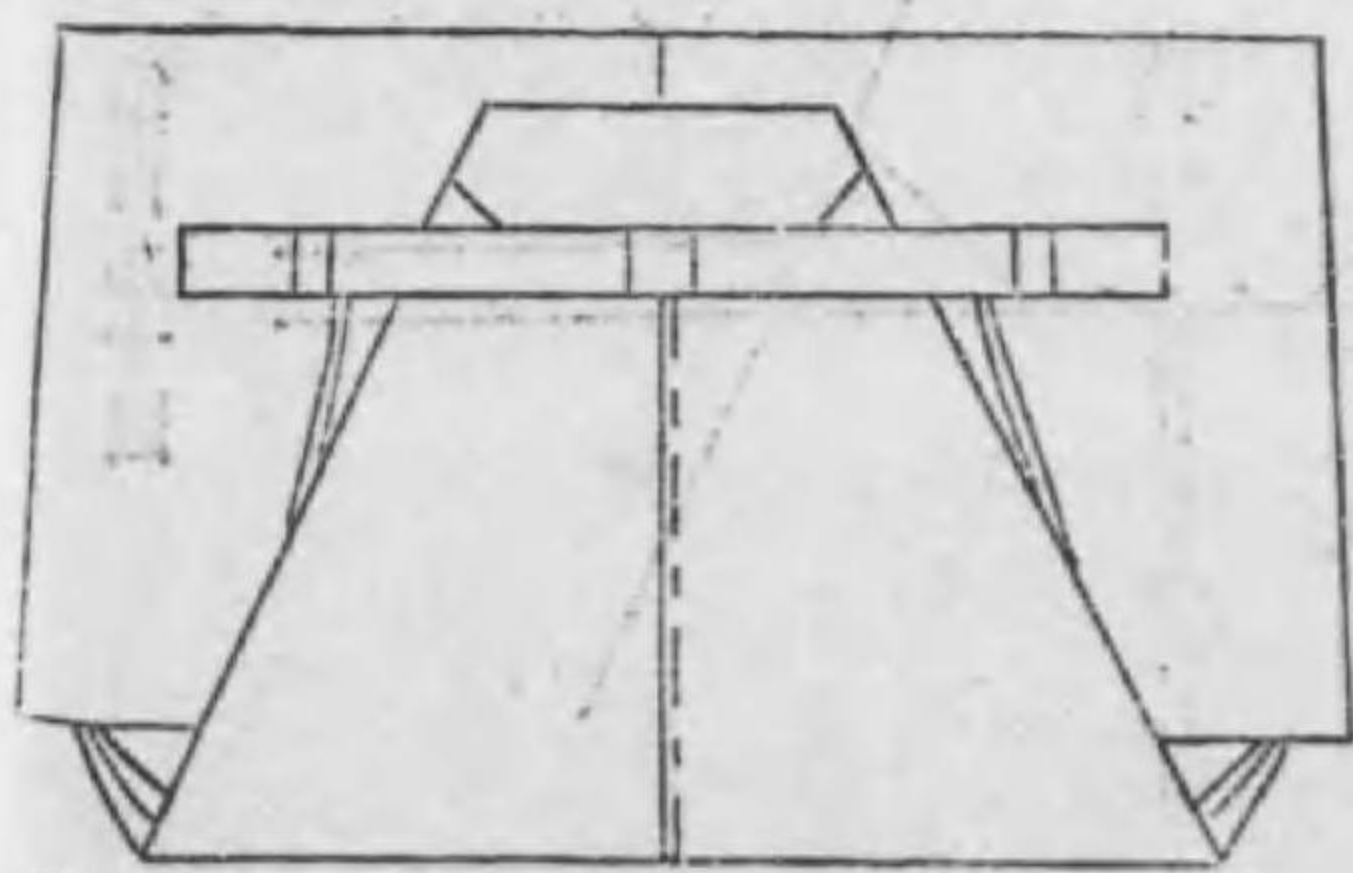
第九十一圖



中央を幅七分の厚紙で封じて置く。

文を始めに折つた通り、三につ折り紐を疊んで、紙で封じて置く。
 紐の疊み方は前後の紐を一緒にして疊み(前腰幅の止りから兩方へ、二寸宛出す)兩端は、前腰幅の止りを、幅五分、中

仕上りの圖 第九十二圖



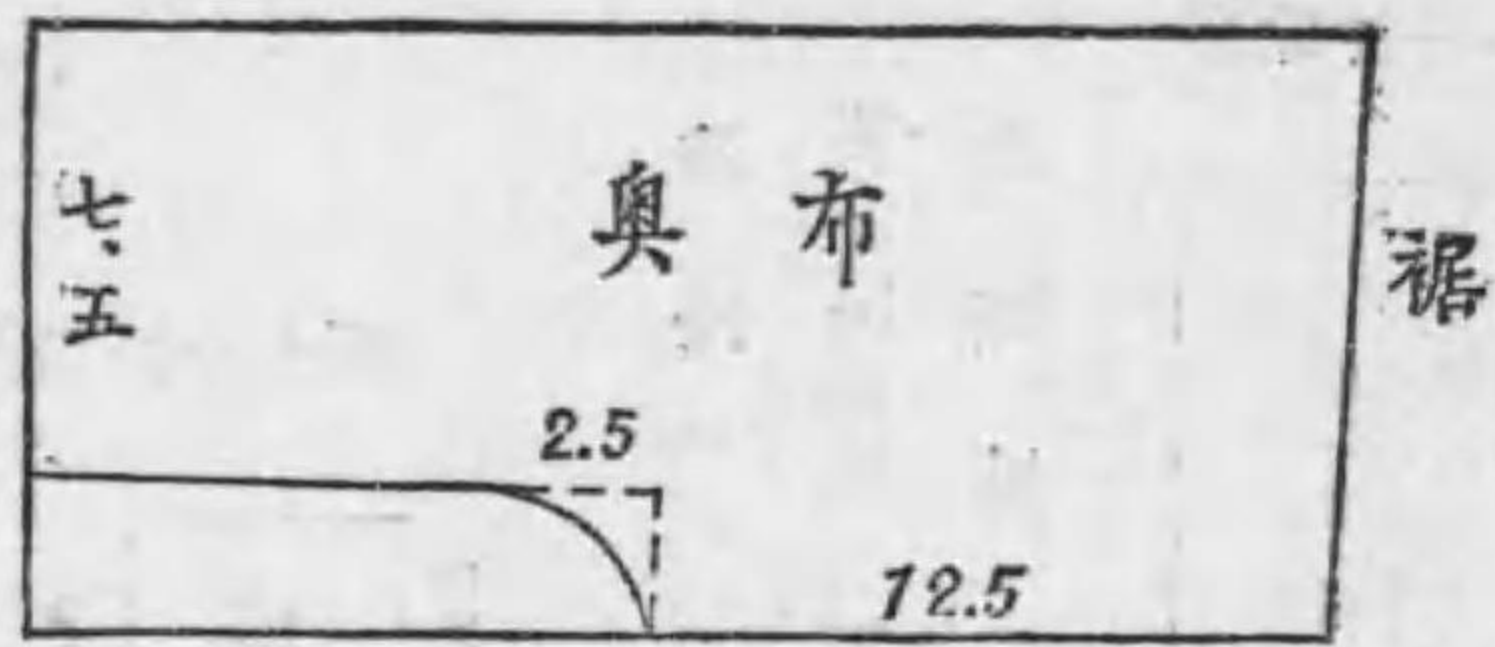
(ヲ) 前紐の付け方、女袴と同様。
 (ワ) 仕上げ。綿布ならば霧を薄く吹き

絹布ならば火熨斗を當てる(火熨斗を掛ける時は、必紙か布を當てる)。

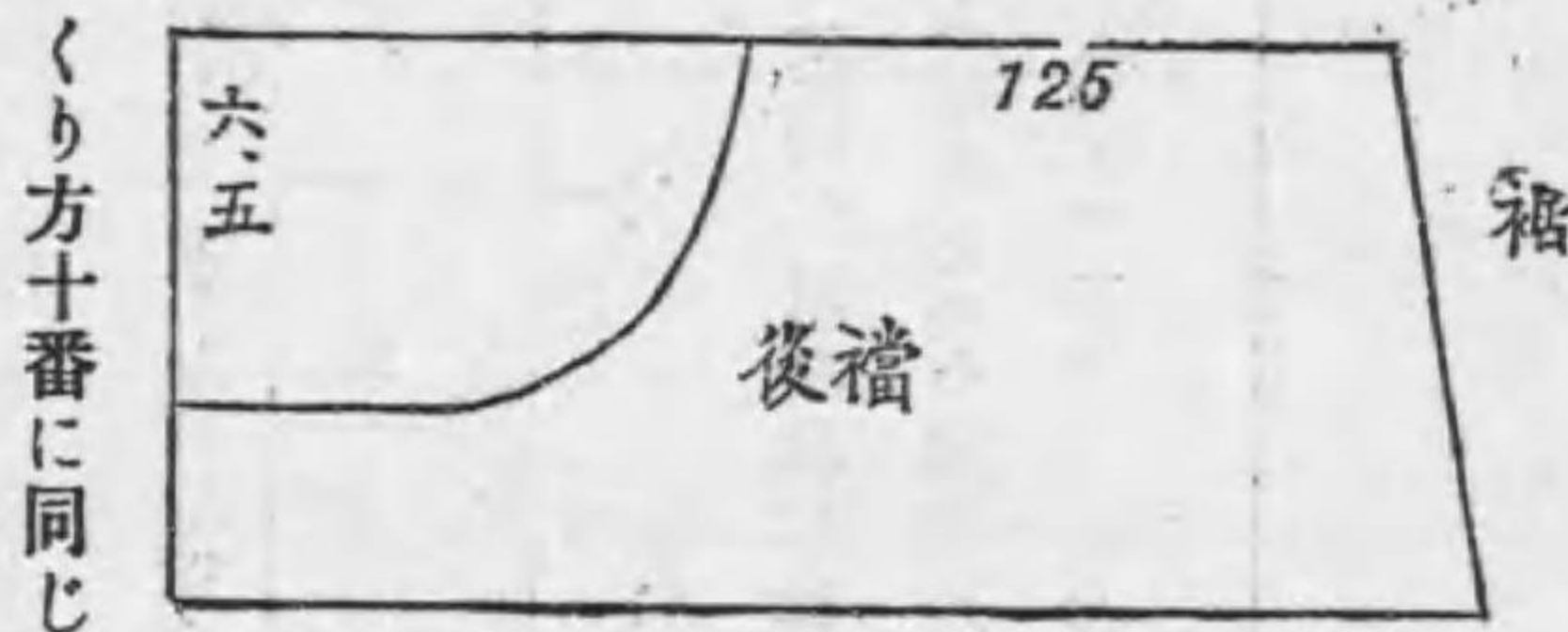
備考 絹布は、綿布より、稍々小針に縫ひ、紵け目は、三分位とする(紵ける時は、針目の間隔は、違つても、宜しいから、糸と同色の所に、針を出すやうにすることは、綿布、絹布共、同様)。
 裾口は、半紙をもんで、幅五分に切り、それを入れて、紵ける。
 乗り間に、眞綿を當てる(仕上げをしてから)。
 透綾のものは、裾口に紙を入れない様にする。
 付け菱及び表裏の腰布には、裏打ちをする方がよい。

各種袴の裁ち方

常幅二丈二尺二寸四分の袴地を以て、八布遣ひ馬乗り袴の裁ち方。



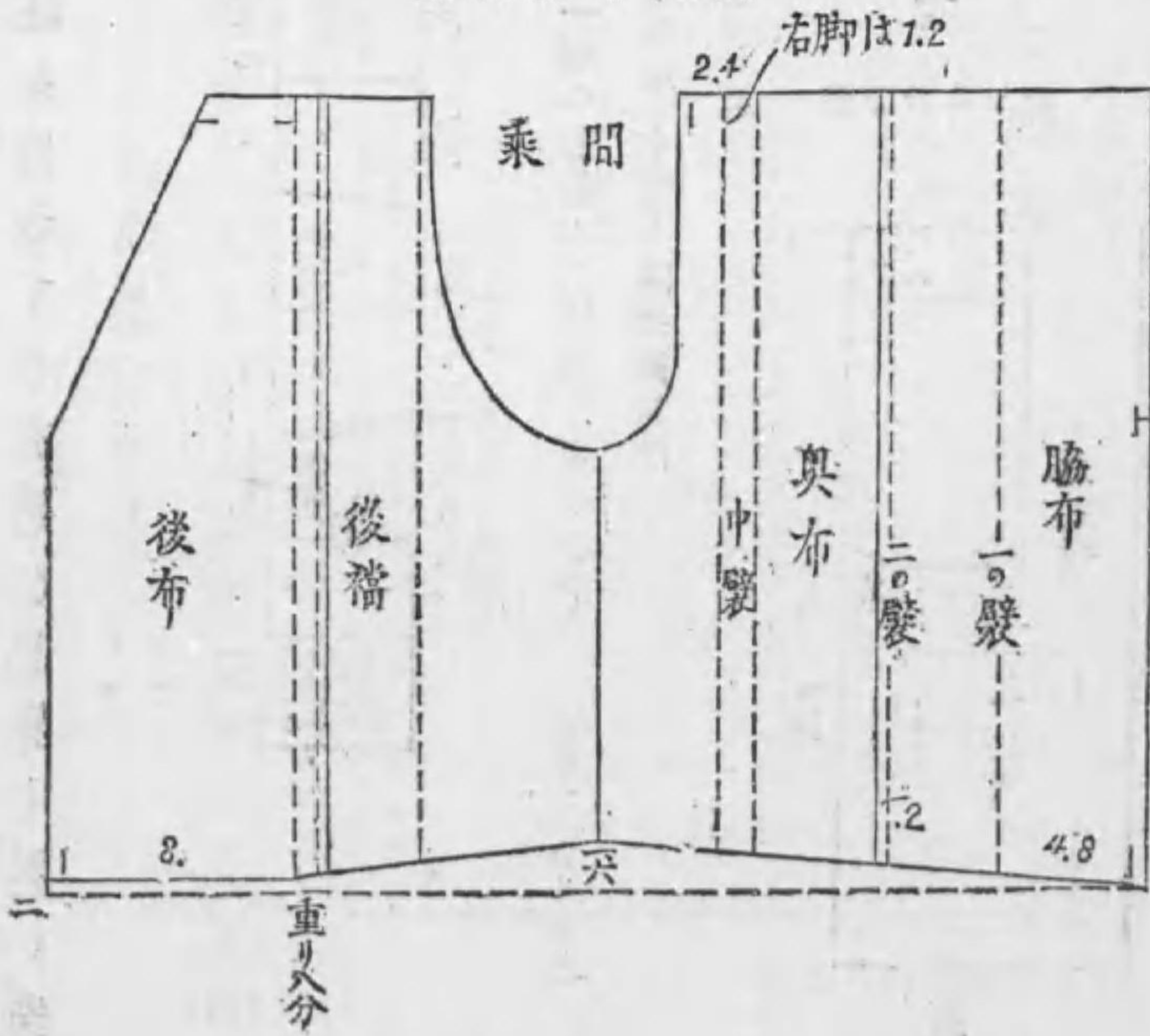
第百九十四圖



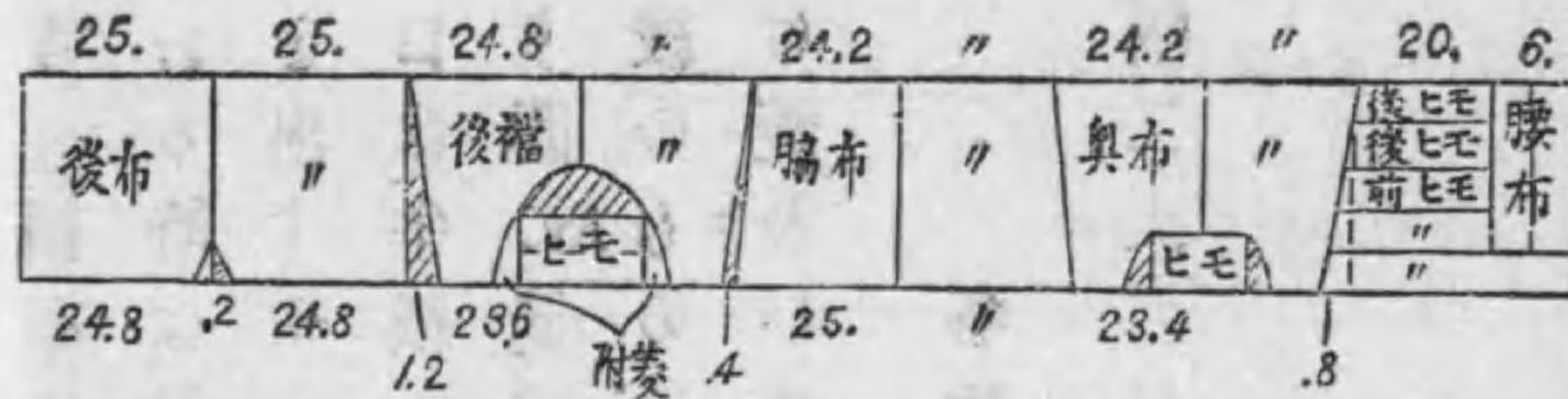
第百九十五圖

くり方十番に同じ

第百九十六圖



第百九十三圖



積り方公式 (總尺-(腰布+後紐)+裁交)÷8=後布裁切丈

同算式 {222.4-(6+20)+3.6}÷8=25

備考 裁ち方、縫ひ方ともに、十番馬乗り袴と同様である、其異つた處は。

(一) 裁ち方。

(イ) 前褶がない、(ロ) 奥布を削る、(ハ) 後褶の削りを深くする。

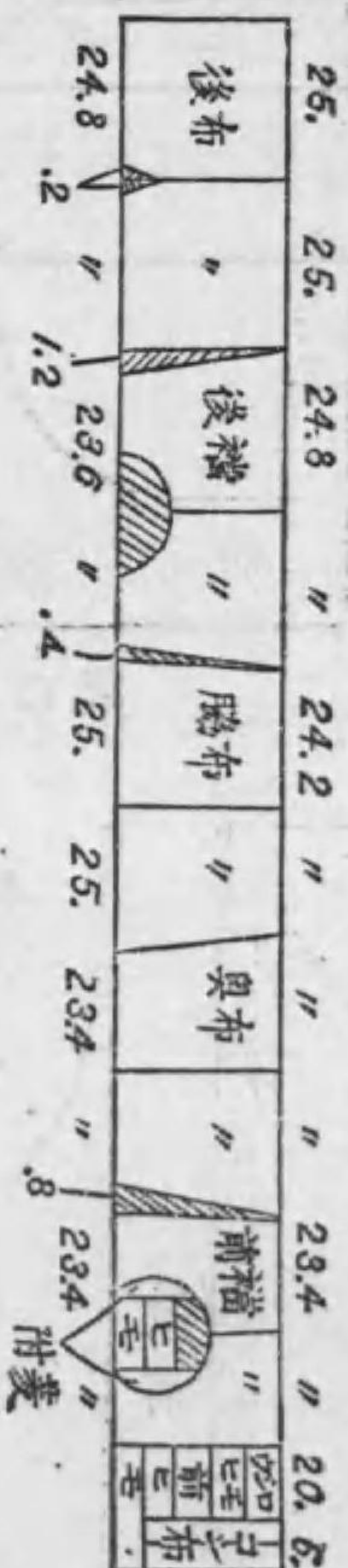
(二) 縫ひ方。

(イ) 中襷を浅くする、(ロ) 二の襷の度り方が違ふ。

八布遣ひは、大人の寸法なれども、蹴廻しの狭い裁ち方故、用布が少くて、已むを得ない場合ひに限り、此裁ち方に依るのである。

常幅二丈六尺九寸二分の袴地を以つて、十布遣ひ馬乗り袴の裁ち方。

第百九十七圖

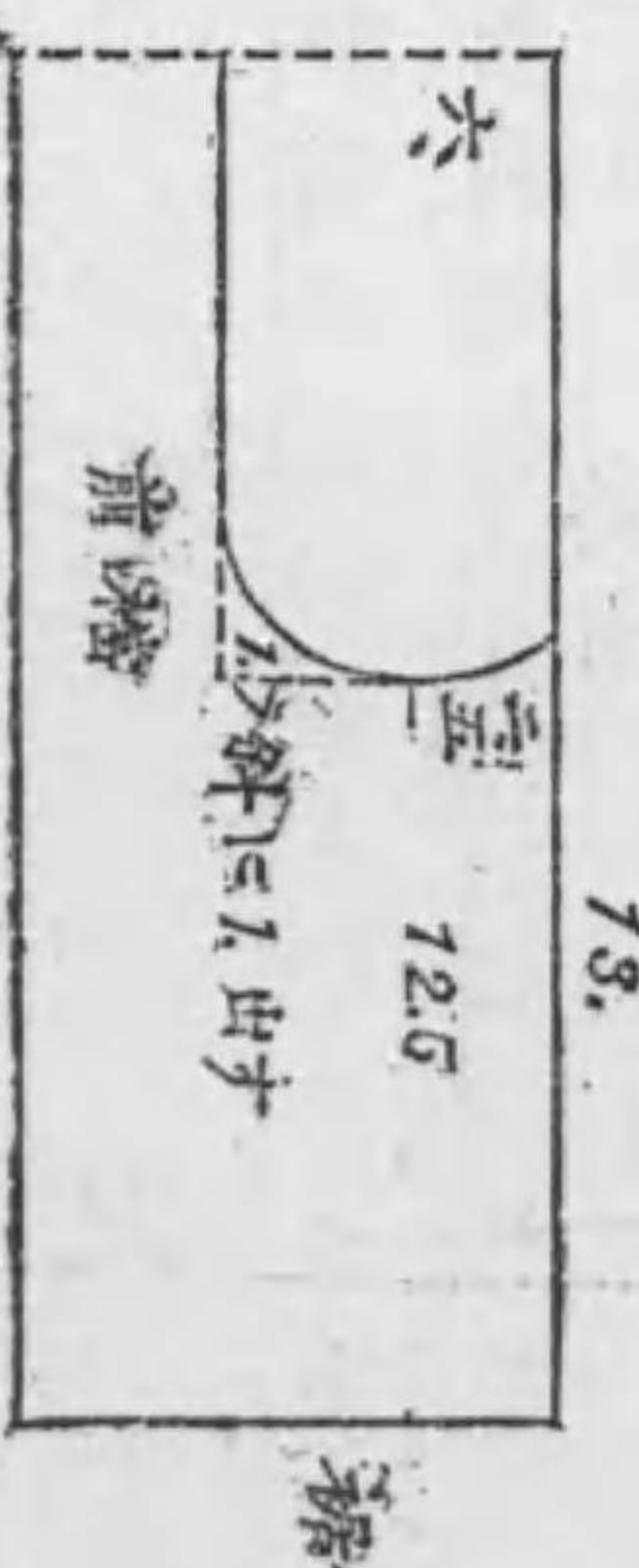


裁交 6.8 (後布、脇布、奥布等の裁交十番と同様 3.6 前襠、 1.6×3.2 $3.6 + 3.2 = 6.8$)
 積り方公式 (総尺 - (腰布 $\times 2$ + 後紐丈) + 裁交) $\div 10 =$ 後布裁切丈
 同算式 $(269.2 - (3 \times 2 + 20) + 6.8) \div 10 = 25$

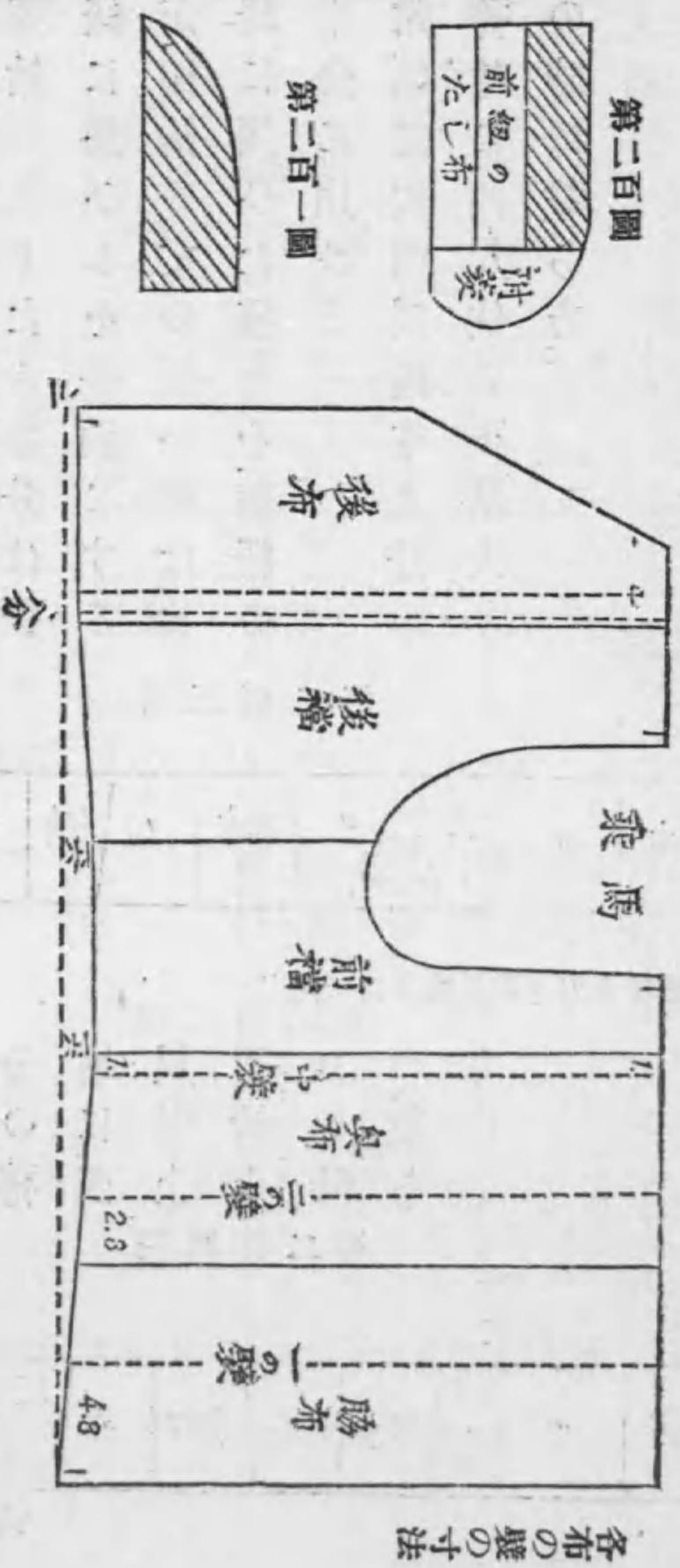
第百九十八圖



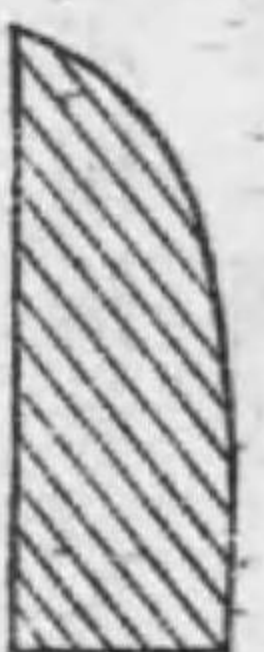
第百九十九圖



第百二十圖



第百二十一圖



備考 十番よりも、布数が二布多くなるから、蹴廻しが廣くなる。
 其他は大差がない、襠の割り方は、圖の様にする。
 獨鉗入り、袴地にて、馬乗り袴、各種の裁ち方積り方。

獨鈷の長さは、袴地によつて相違があるが、凡四尺以上、五尺餘りのものである。獨鈷の入りたる部分は、後紐に用ひるを普通とするが、獨鈷の丈の長い時は、後紐に用ひた残りを、前紐の中央に用ひる。常幅二丈四尺四分の袴地に、四尺位の、獨鈷入りの時の裁ち方。

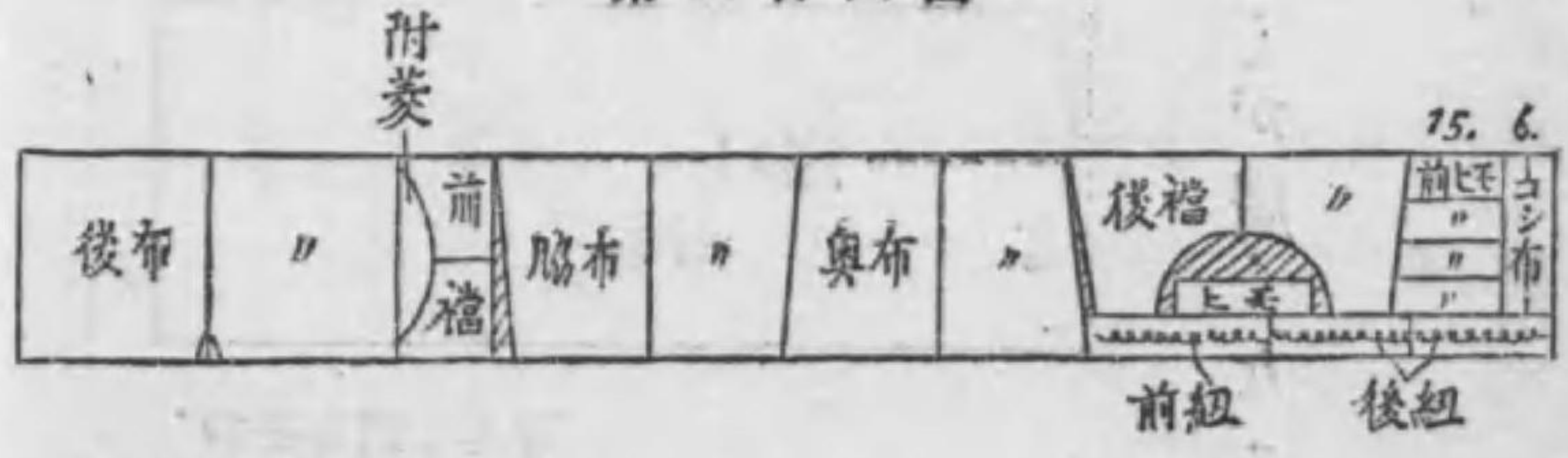
第二百三圖



襦積り方十番馬乗り袴に同じ

常幅二丈四尺四分の袴地に、四尺以上の獨鈷入り時の裁ち方。

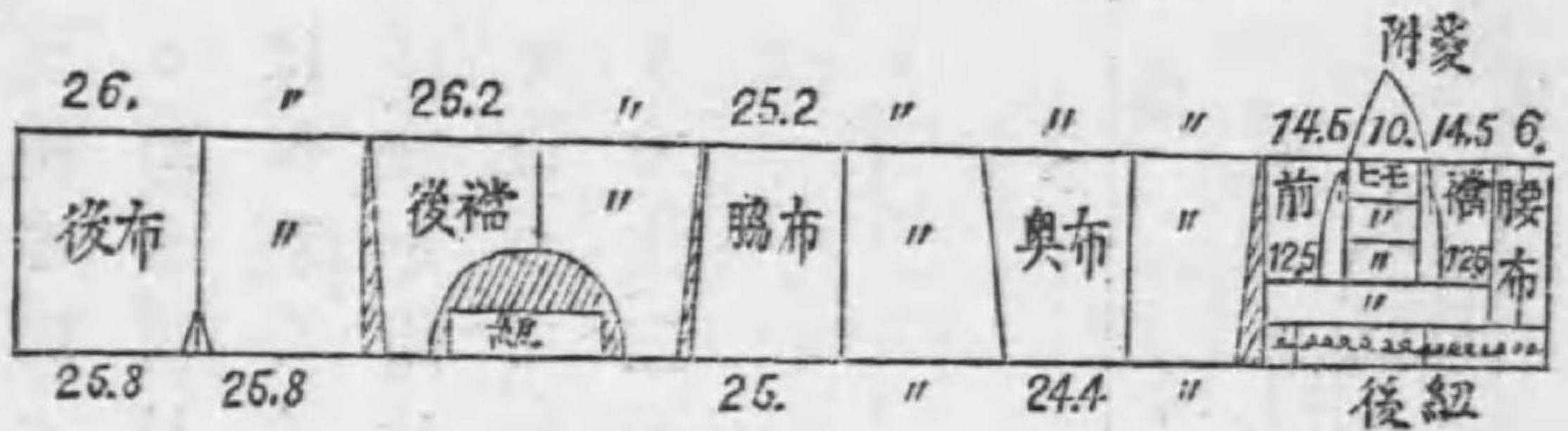
第二百四圖



積り方前に同じ

常幅二丈四尺九寸四分の袴地に、四尺以上の獨鈷入り時の裁ち方。

第二百五圖

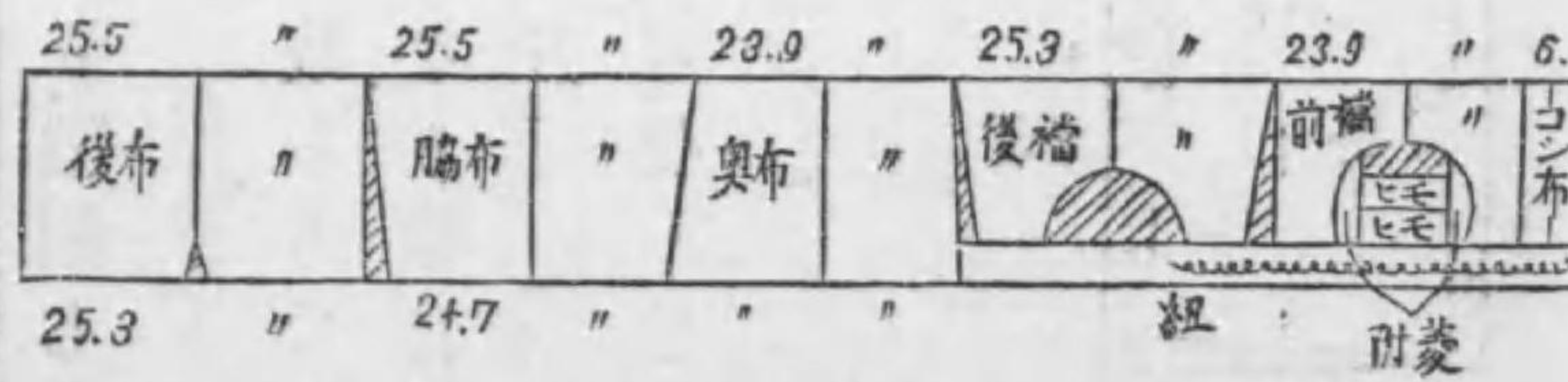


積り方公式 $\{ \text{總尺} - (\text{腰布} \times 2 + \text{前襠} \times 2 + \text{紐}) + \text{裁交} \} \div 8 = \text{後裁切丈}$

同算式 $\{ 249.4 - (3 \times 2 + 14.5 \times 2 + 10) \} \div 8 = 26$

常幅二丈五尺四分の地に、二尺四寸の裁ち方。

第二百六圖

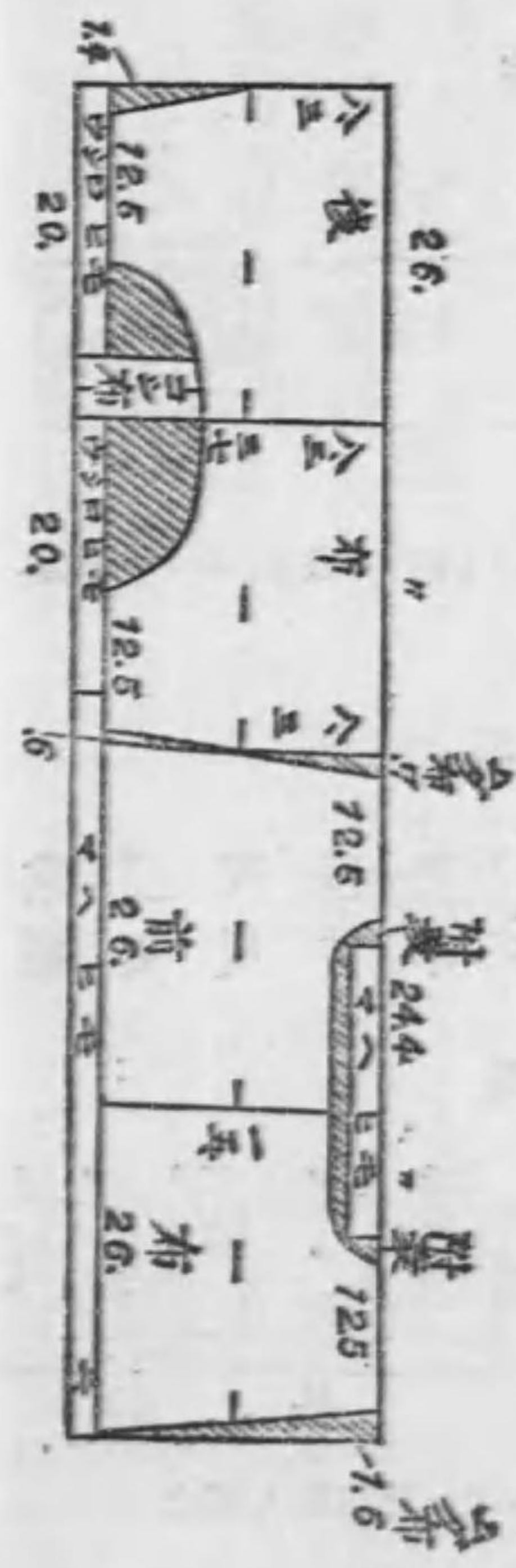


積り方公式 $(\text{總尺} - \text{腰布} \times 2 + \text{裁交}) \div 10 = \text{後布裁ち切丈}$

同算式 $(254.2 - 3 \times 2 + 6.8) \div 10 = 25.5$

備考 前の三種と較べると、用布が多いから、蹴廻しも廣い、隨て襷が深くなるから、着けて恰好がよい。
 獨鈷の長さは、何程長くても、差支へのない裁ち方である。
 總べて獨鈷は、紐を拵け上げて、幅の中央になる様にする。
 幅二尺の布を以つて、大人襦有り袴の裁ち方。
 後布裁ち切り寸法、二尺六寸 裾の切り上げ、後一寸四分、前一寸六分。

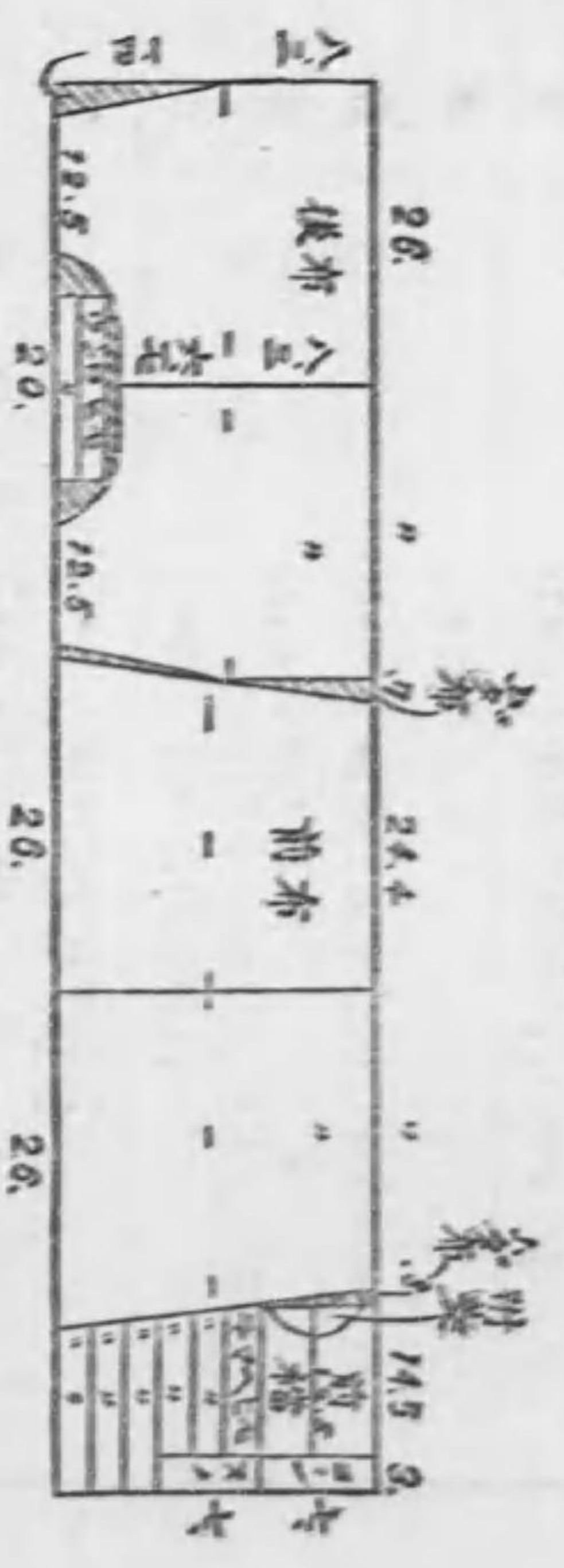
第三百七圖



幅二尺長さ一丈二尺の布を以て、大人襦有り袴の裁ち方。

裾の切り上げ 後一寸四分 前一寸六分。

第三百八圖



裁交 前布1.6-ひだ布.7=9
 積り方公式 後布裁切丈×布数-裁交=總尺
 同算式 26×4-7=103.2

裁交 1.7
 積り方公式 (總丈-前裁丈-腰布+裁交)+布数=後布丈
 同算式 (120-14.5-3+1.7)+4=26.2

各種袴の裁ち方

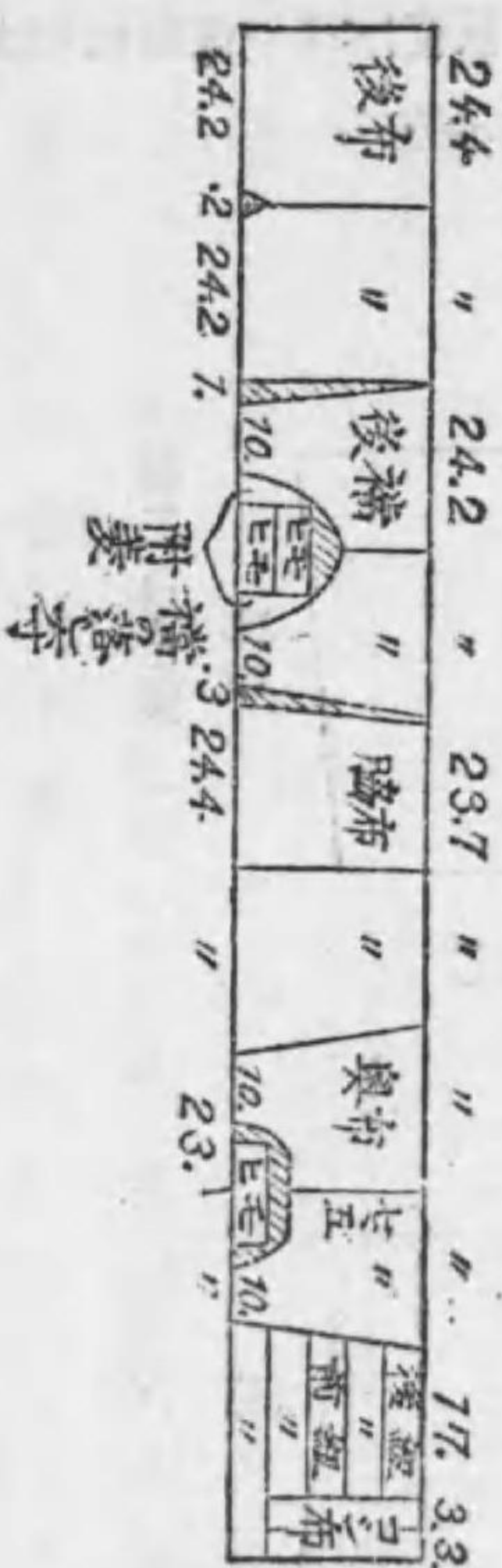
中裁ち男袴

中裁ち各部の寸法の割出し方(十五六歳用)。

各部名稱	年齢	割出し方
紐下	十五六歳	着丈の十六分の六
相引		紐下の三分の二
後幅		紐下の三分の二に一・〇加へる着物と同寸
腰幅		後幅の四分の三に・五を加へる
後重り幅		・七
腰紙幅		後幅の四分の三に・五を加へる
腰紙高さ		腰幅の三分の一に・二を加へる
附菱高さ		腰紙高さの二分の二に、二を加へる
附菱幅		腰幅の三分の一
脇幅		後幅の五分の三より・一減ずる

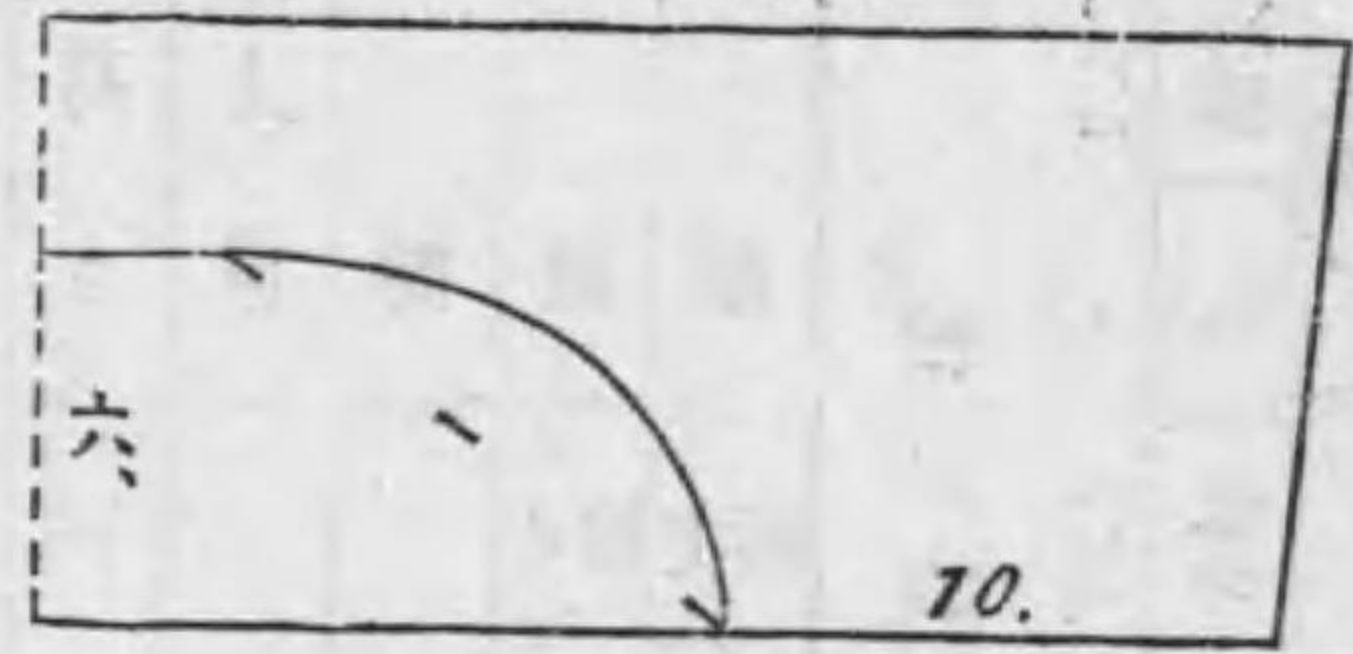
前寄襷幅	上下	一・五七	上後幅の十分の二下後幅の五分の一
前腰幅		七・五	後幅と同寸か・五加へる
笹襷幅		一・一	脇幅の四分の一
襦の高さ		一〇・〇	紐下の三分の二より切上と一・〇減ずる
切り上げ		一・四	
乗間		八・五	腰廻りの二分の一
後紐		丈一七・〇乃至一八・〇幅丈八〇・八	
前紐		丈八〇・八	

第二百九圖



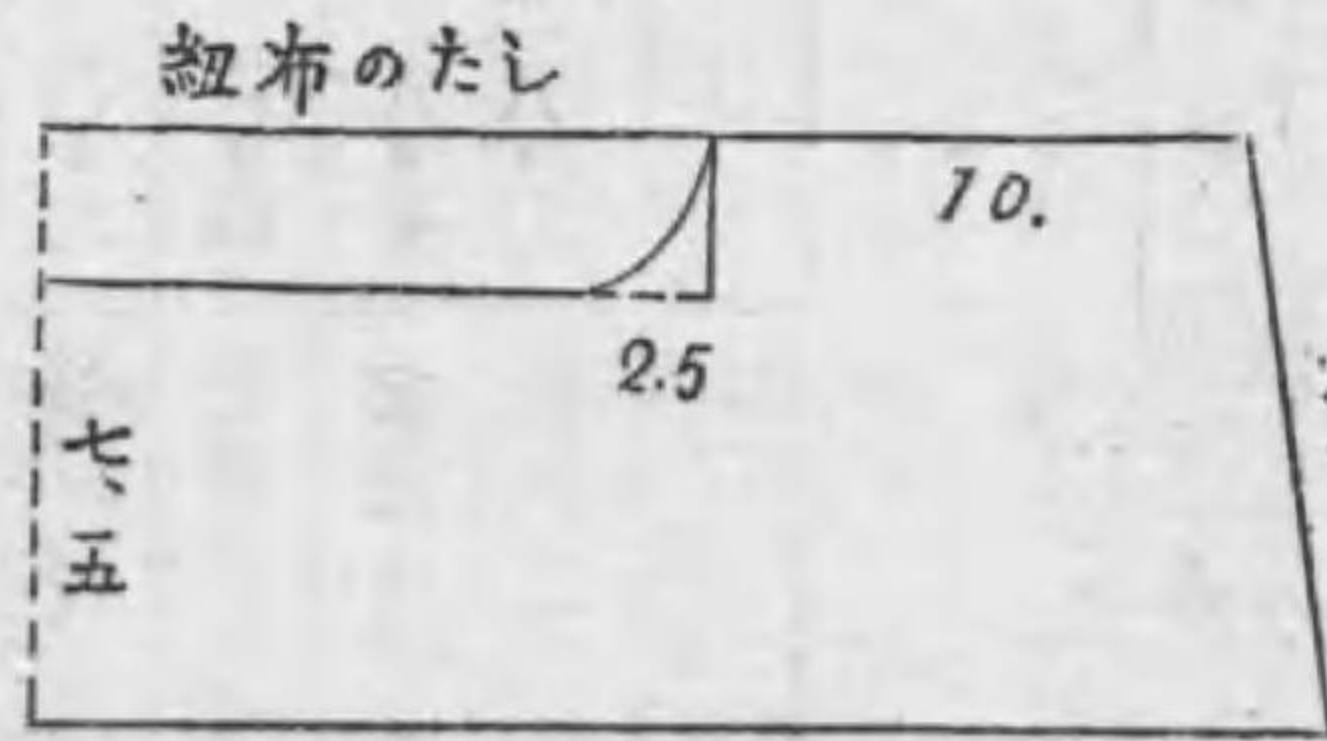
裾口の切上げ
 後1.2 後布.2 後襷1.0
 前1.4 脇布.7 奥布 .7
 裁 交 3.2 { 後襷.2 x 2 脇布.7
 x 2 奥布.7 x 2

第二百十圖



後襠のくり方十番に同じ

奥布



第二百十一圖

積り方公式 (總尺-(後紐+腰布丈×2)+裁交)+8=後布裁切丈

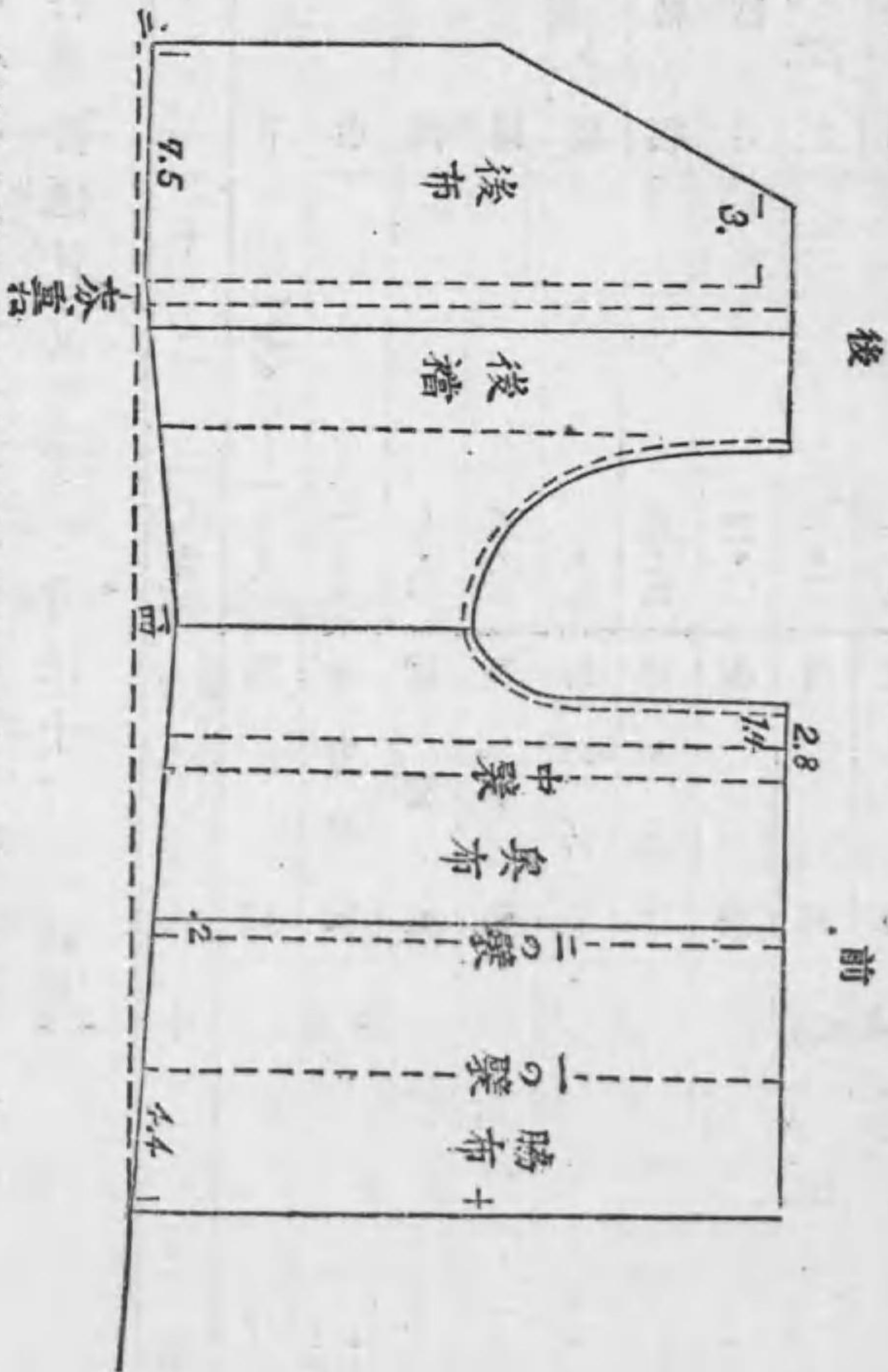
同算式 (215-(17+3×2)+3.2)÷8=24.4

常幅二丈一尺五寸の布を以つて、十五六歳用の男袴の裁ち方。裁ち切る方法は十番馬乗り袴と同じ。標の附け方大人物に同じ。縫ひ方。(1)各部の寸法が異なるのみで、八布遣ひ馬乗り

袴と同様である。

各布の裁の寸法

第二百十一圖



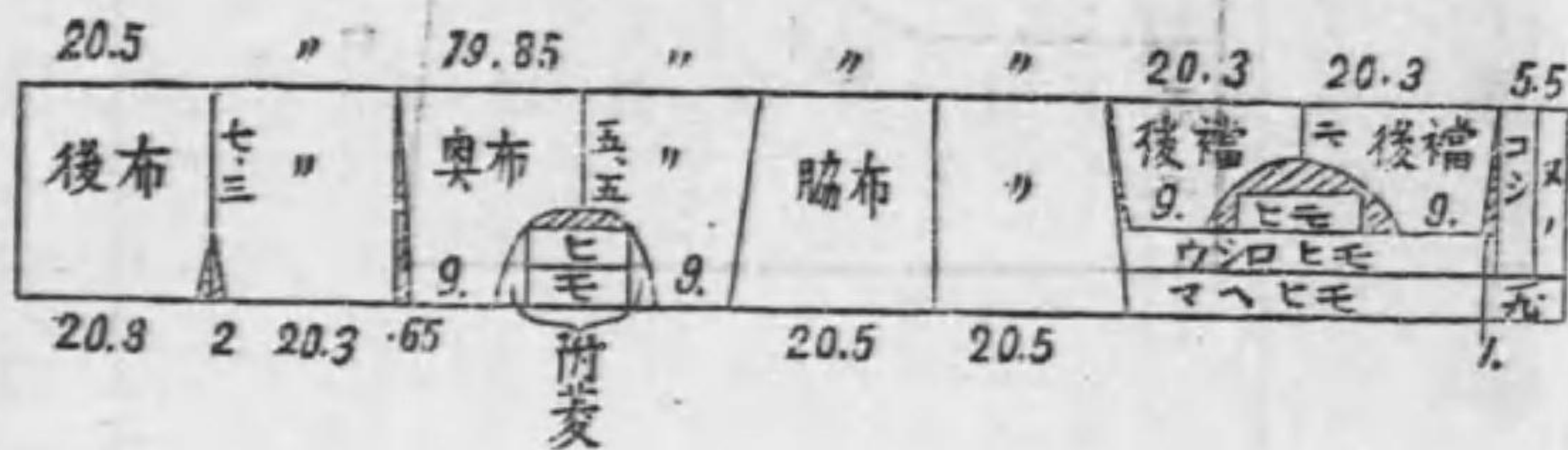
中襠は左脚の方は 2.8 の所を折り右脚は 1.4 の所を折る

(口) 腰立ての糸掛け順序は、大人物と、同様にして、針数は二針少く

中裁ち男袴

常幅一丈六尺六寸五分の布を以つて、十二歳の男袴の裁ち方。

第二百十三圖



裾口の切上

後 1.1 後布 .2 後襠 .9

前 1.3 脇布 .65 前襠 .65

裁交 3.0 { 後襠 .2 x 2
脇布 .65 x 2 奥布 .65 x 2

積り方公式 (總尺 - 腰布丈 x 2 + 裁交) ÷ 布數 = 後布裁切丈

同算式 (166.5 - 2.75 x 2 + 3) ÷ 8 = 20.5

。じ同に物人大 方け附標

第二百十四圖

後襠及奥布のくり方 後襠



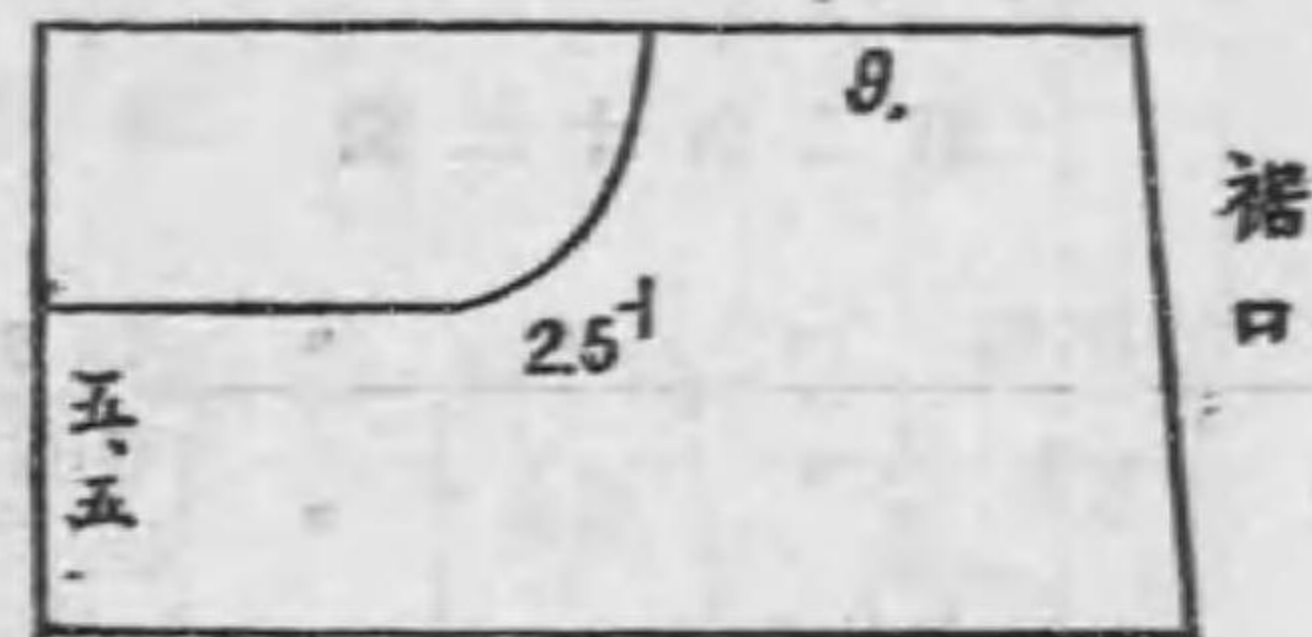
後襠、奥布のくり方八布遣と同じ

(ハ) 仕上げ、疊み方等、皆十番馬乗り袴と同様にする。
中裁ち、各部普通仕立て上げ寸法(十二三歳用)。

各部名稱	年齢	各部名稱								年齢		
		紐下	相引	後幅	腰幅	後重り幅	腰紙幅	同高さ	附菱高さ		同幅	
各部名稱	年齢	一七〇—一八〇	一二・五	七〇	五・五	七	五・五	二〇	二〇	一・二	一・九	十二三歳
各部名稱	年齢	脇幅	前寄襷幅	同腰幅	笹襷幅	幅の高さ	切り上げ	乗間	後紐	前紐	幅丈	十二三歳
各部名稱	年齢	四・二	一・四七	七〇	一〇	九〇	一・二—一・三〇	八〇	一七〇	幅丈 七五〇	幅丈 一六〇—一七〇	十二三歳

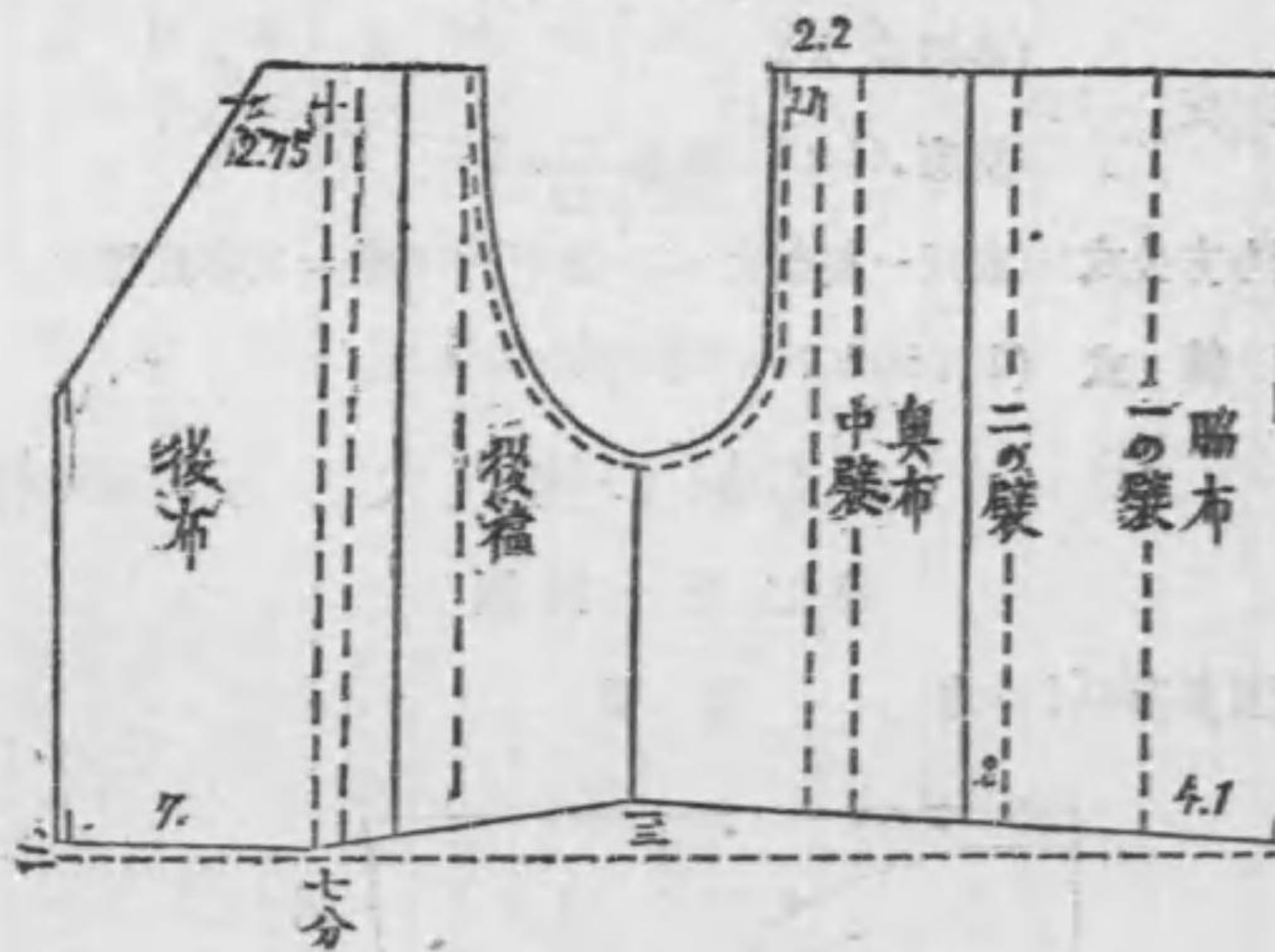
第二百十五圖

奥布



各布の襷の寸法

第二百十六圖



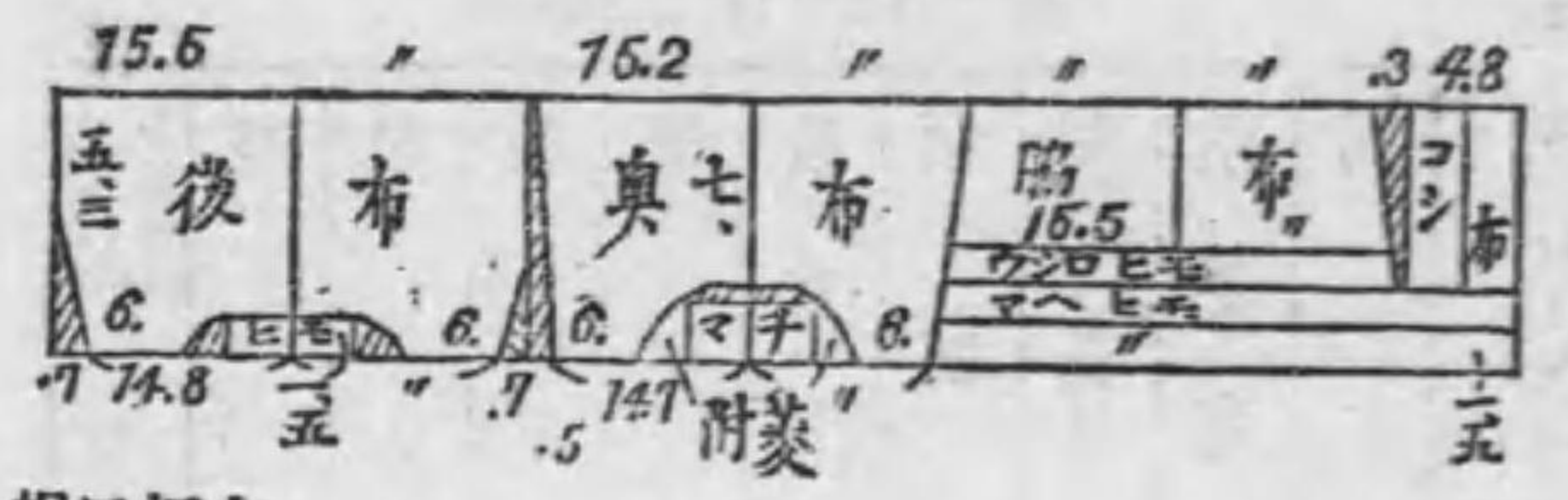
小裁ち男袴

小裁ち各部、普通仕立て上げ寸法、(八九歳用)

各部名稱		年齢	
紐	下	八	九
相	引	一〇・五	一五・〇—一六・〇
後	幅	六・五	五・〇
腰	幅	五・〇	六
後	重り幅	五・〇	五・〇
腰	紙幅	五・〇	五・〇
同	高さ	一・八	一・〇—一・二
附	菱高さ	一・一	一・〇—一・一
同	幅	一・七	一・七
各部名稱		年齢	
脇	幅	八	九
前	寄襷幅	下	上
同	腰幅	六・五	一・三
笹	襷幅	九	六・五
裾	の高さ	八・〇	一・〇—一・二
切	り上げ	七・〇	一・〇—一・二
乗	間	七・〇	一・〇—一・二
後	紐	幅丈	一五・〇
前	紐	幅丈	一六・〇
		幅丈	六五・〇
		幅丈	六〇・〇

常幅一丈四尺一寸の布を以って、八九歳用の、男袴の裁ち方。

第二百十九圖

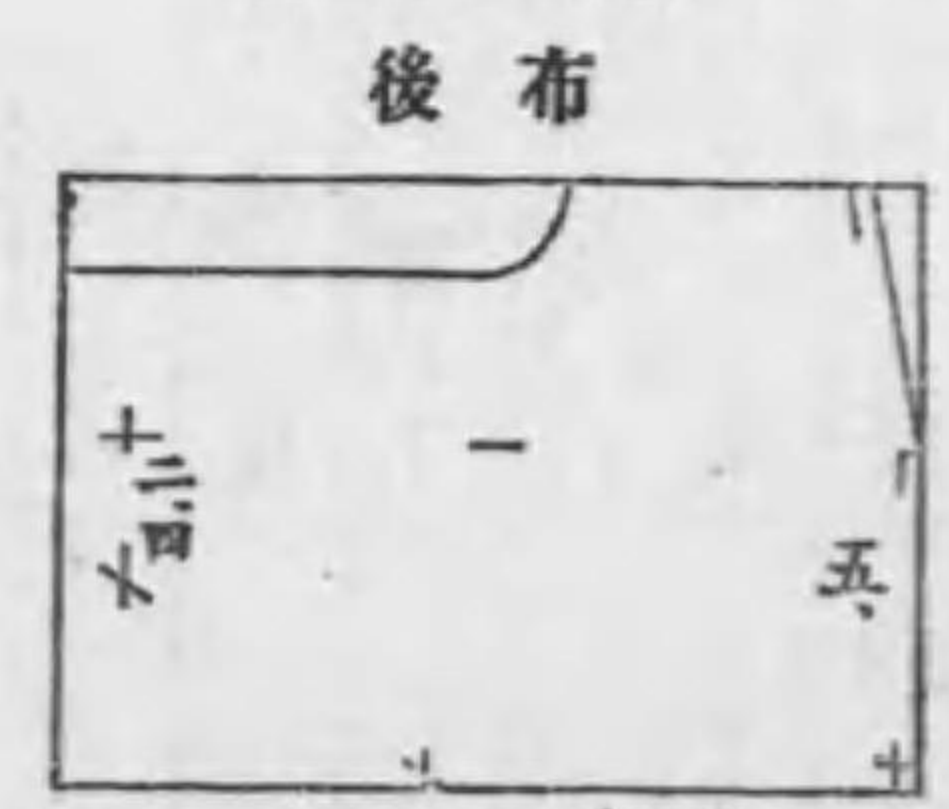


裾口切上
 後.7 後襷.7
 前.8 脇布.3 奥布.5

裁交 $\left. \begin{matrix} \text{脇布 } .3 \times 2 \\ \text{奥布 } .3 \times 2 \end{matrix} \right\} - \text{むだ布 } .3$

積り方公式 (總尺 - 腰布 $\times 2$ + 裁交) \div 布數 = 裁切後丈
 同算式 $(96.9 - 2.4 \times 2 + .9) \div 6 = 15.5$

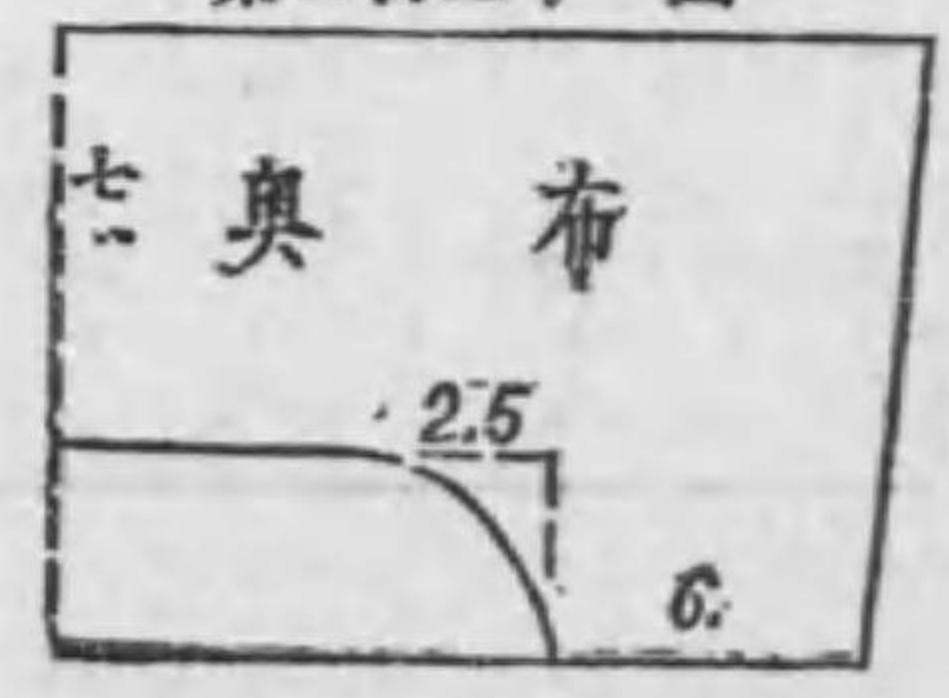
第二百二十圖



第二百二十二圖



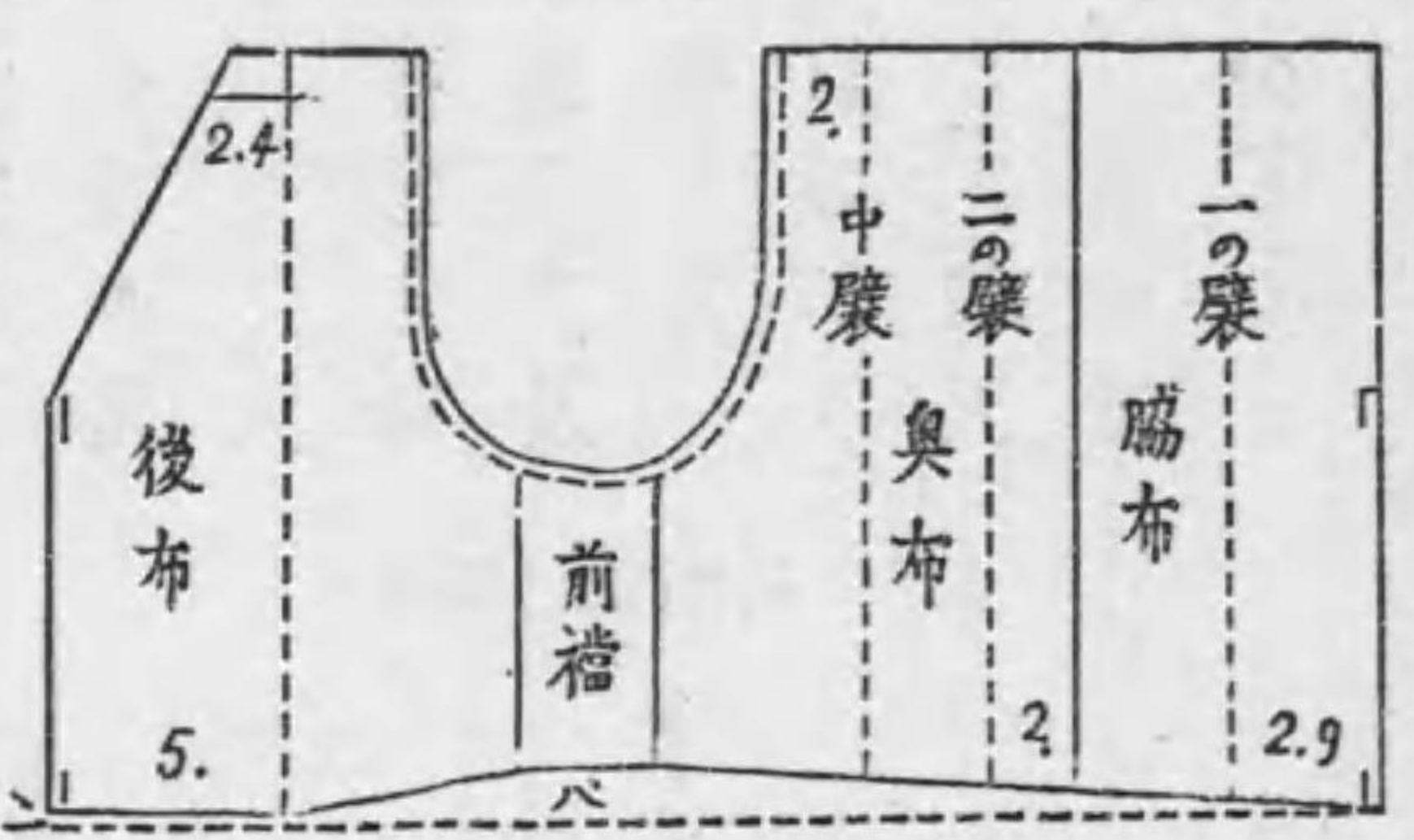
相引 第二百二十一圖



奥布のくり方

標附け方、大人物に同じ。

第二百二十三圖



ル、羅紗等は、半返しにして、縫ひ付ける。

大人襦無し袴

襷取りの異なる處。
 後中央の襷を片返しになすのみ、其他は皆中裁男袴に同じ。

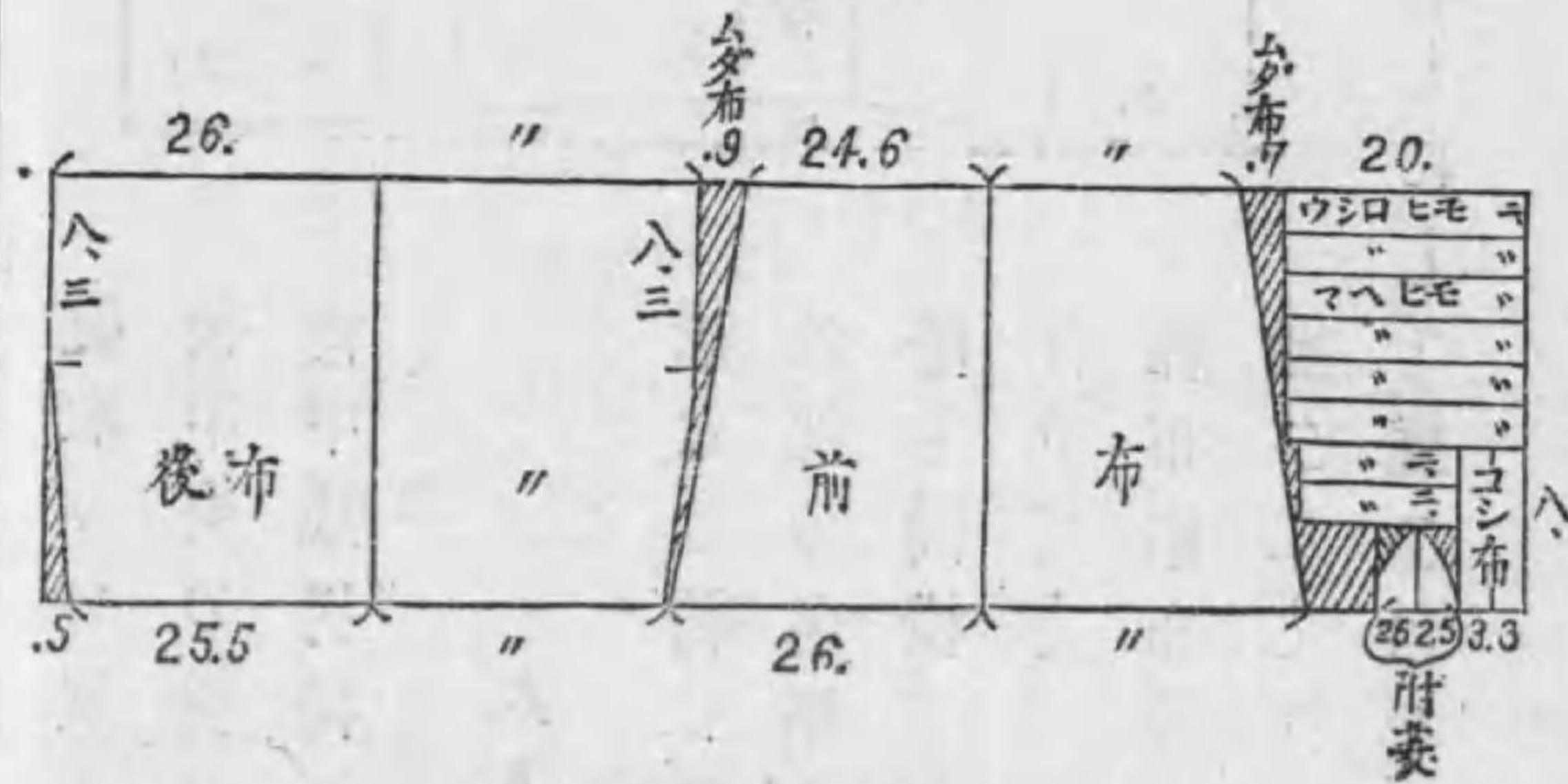
大人襦無し袴

襦なし袴は、普通行燈袴と云ふ。
 各部の名稱、出來上り圖は、普通の襦あり袴と同様。
 仕立て方。

綿布、絹布、及び地薄のセル、羅紗等は、ぐし縫ひにして差支へないが、少し地厚のセル、羅紗等は、半返しにして、縫ひ目を開き、普通縮け附ける所は、纏

裁ち方。
幅二尺長さ
一丈二尺三
寸のセル地
を以つて、大
人襠無し袴
の裁ち方及
び積り方。
裾口の切り
上げ、後五
分、前一寸
四分。

第二百二十四圖



裁交 1.2 { 前布切上 1.4 - ひだ布 .9 = .5
 { 前布切上 1.4 - ひだ布 .7 = .7

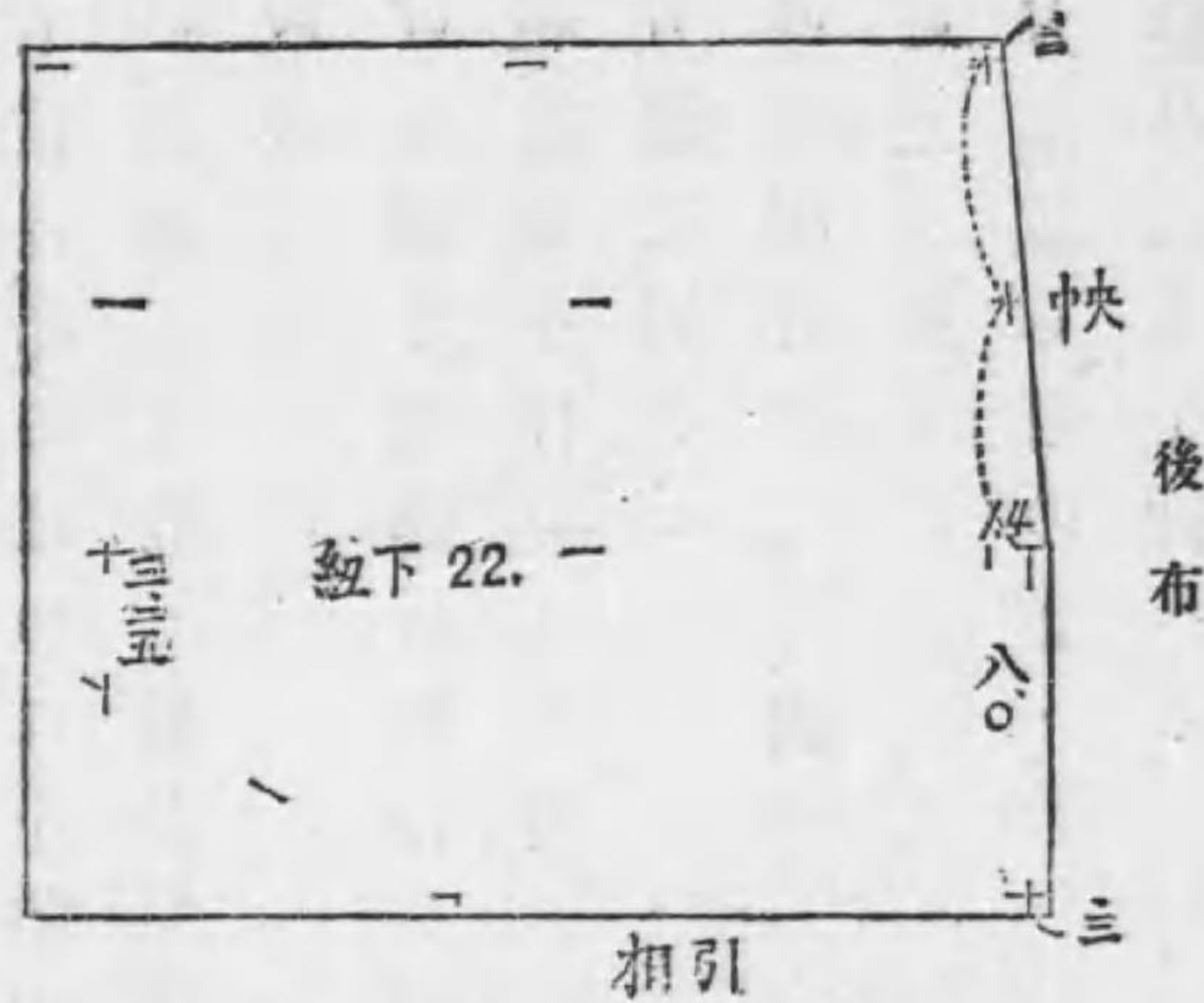
積り方公式 (總尺 - 紐丈 + 裁交) ÷ 布敷 = 裁切後丈

同算式 (123 - 20 + 1.2) ÷ 4 = 26強

備考 後裾に
は切り上げを
付けなくとも
よいが穿いた
時裾から折り
込みの丈が見
えては、體裁が
悪いから、折り
込みの部分だ
けに、切り上げ
を付けて置く、
故に布幅に依
つて、切り上げ

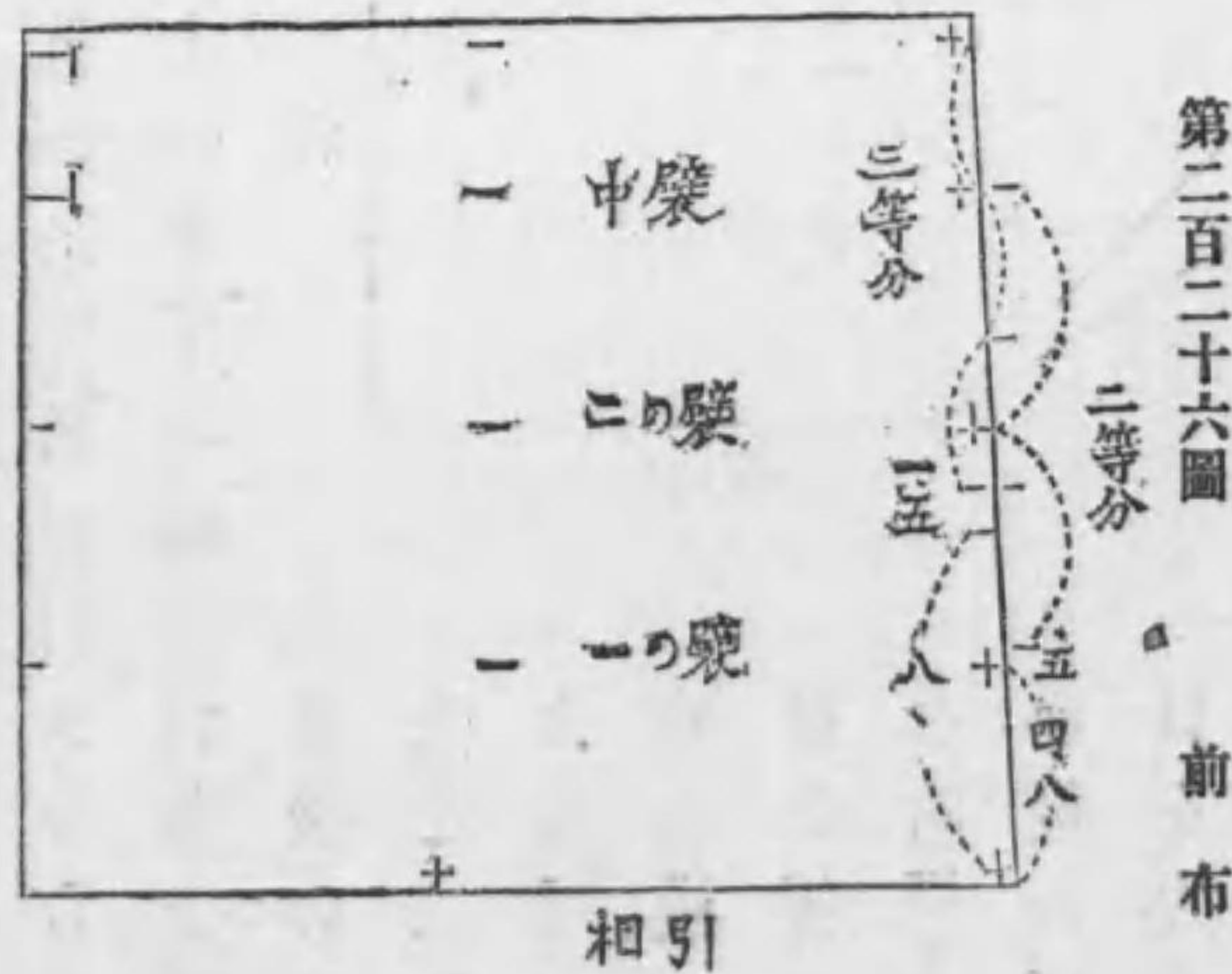
の寸法を加減する。
標附け方

第二百二十五圖



一、相引の縫代.3 二、後幅8 三、中央の縫代.3 四、
裾の拵代.5 五、紐下(裾拵の標より紐下+切上) 六、腰
幅の二分の一 七、投

標附け順序女袴に同じ



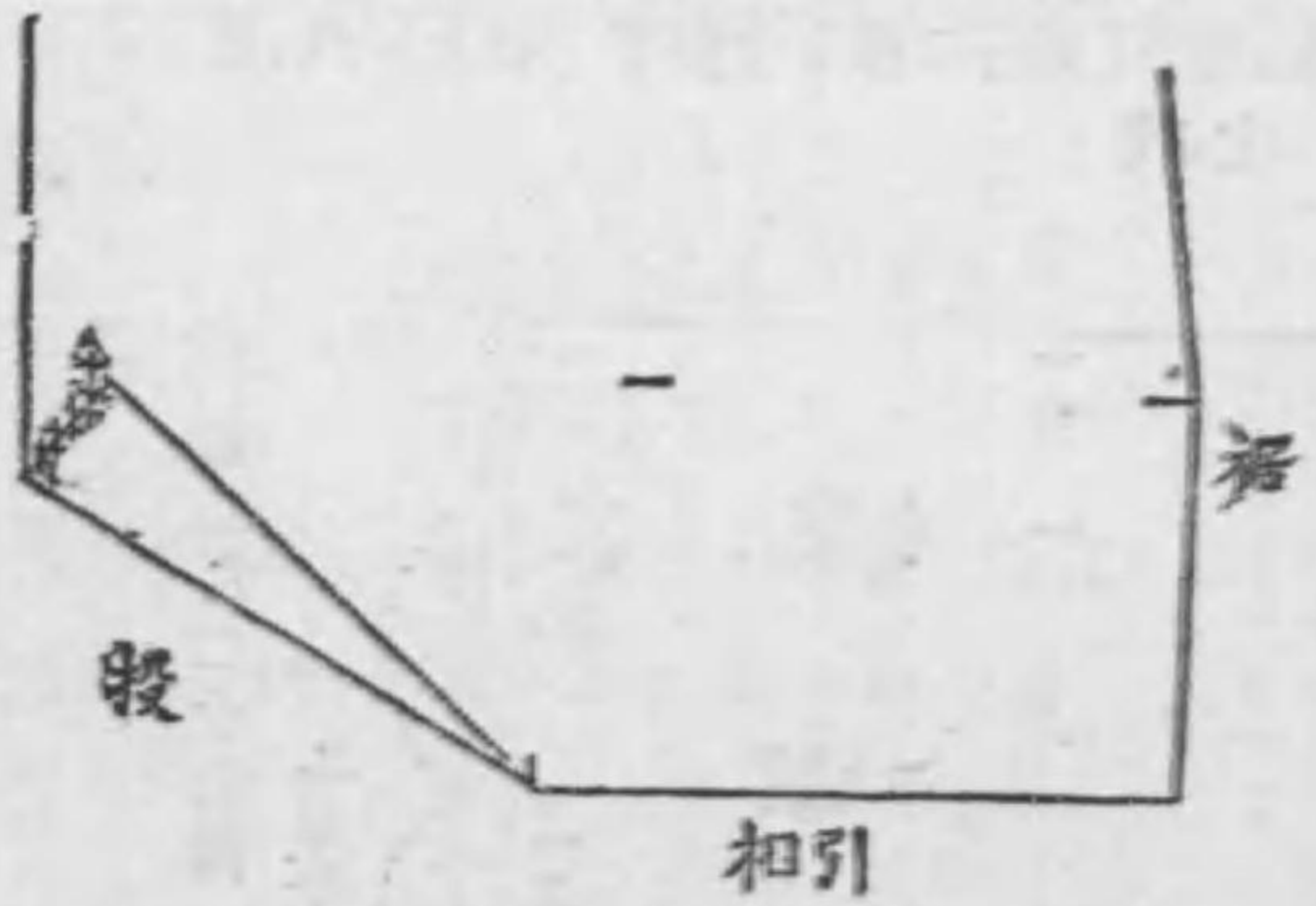
縫ひ方。

(イ) 裁ち目は、布のほつれを防ぐため、同色の糸で、糸を引きつらぬ様に、注意して巻き縫ひにする。(但し上仕立ての時は、別布で、縁を取つてもよい)。

(ロ) 投げを纏る、地薄の時は絹布、綿布を、仕立てる時の方法に同じ。

地厚の場合には、圖の様に三つ折りにして、上の方は裁ち目のまゝ、千鳥縫ひにして押へる。

第二百二十七圖



(ハ) 前後の中央を二枚合せて、女袴の様に縫ひ、折りを附ける。

(ニ) 前後の裾口を、左右とも相引きの縫ひ

代より、二、三寸の間残してまつる。

(ホ) 後襲の取り方。

後襲の取り方
第二百二十八圖

